

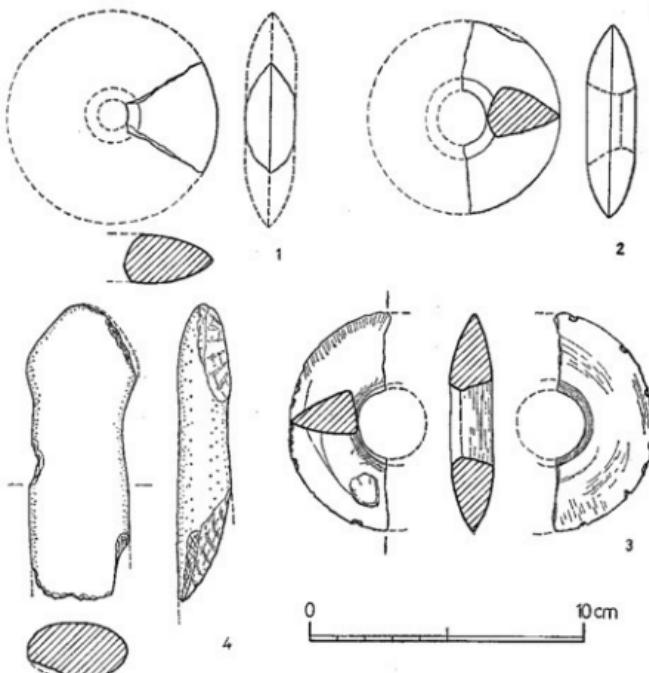
第233図 用木山遺跡出土の扁平片刃石斧実測図

5. 環状石斧 (図234、図版109)

計3個体分を発見したが、いずれも二次的流土の堆積層内から遊離発見した破損品である。3点ともきめ細かい砂岩製であるが、構成物にはそれぞれ個体差がある。全く同質といえるものは存在しない。

最大器厚を中心部にもつ円盤状を呈し、中心部に両面から貫孔された円孔をもち、周辺部に次第に薄くなる始刃状の刃部を

もつ磨製品である。したがって折損部の断面は各辺とも外ふくらみに外彫した二等辺三角形状を呈するが、いずれも左右対称ではなくほぼ同巧の製作手法を示す。最もよく遺存する(3)についてみると、中心部の貫孔は両面から回転穿孔による垂直孔をあけているが、一方の外縁径は3.1cm、他の面の外縁径2.65cmを測り、孔の接合面までの深さも1:2で外縁径の大きい方が深い。また中央部の平滑面径も前者側が4.1cm、後者側は3.4cmと差があり、刃部の砥ぎだしも、径の大きい方が急斜面に砥ぎだされている。中心部円孔内面の貫孔の際の条痕はあまり顕著ではないが、外縁径の小さい側では貫孔後研磨されたらしく今も光沢をもち、外縁径の大きい側にのみ、やや荒い平行条痕が



第234図 用木山遺跡出土の環状石斧・石棒実測図

表36

用木山遺跡出土の環状石斧一覧

(単位 cm)

番号	出土地点	現 状	石 材	推定径	中 心 内 孔 径	外縁部幅	器 厚	備 考
1	R11 遊離	約 3/4 大	砂 岩	7.80	1.15	3.28	1.79	刃部磨耗底あり
2	R7-H1遊離	約 3/4 大	砂 岩	7.10	2.02	2.75	1.72	刃部磨耗底あり
3	R10 遊離	約 3/4 大	砂 岩	7.75	2.47	2.50	1.51	刃口ぼれ多し

見られる。そして両面とも縁部に磨耗痕が見受けられ、この円孔部に柄を通して着装されたものと思われる。刃先部に数多くの不規則な刻文が見られるが、これは使用による刃こぼれの跡と推察される。

#### 6. 打製不定形石器（図235・236、図版110）

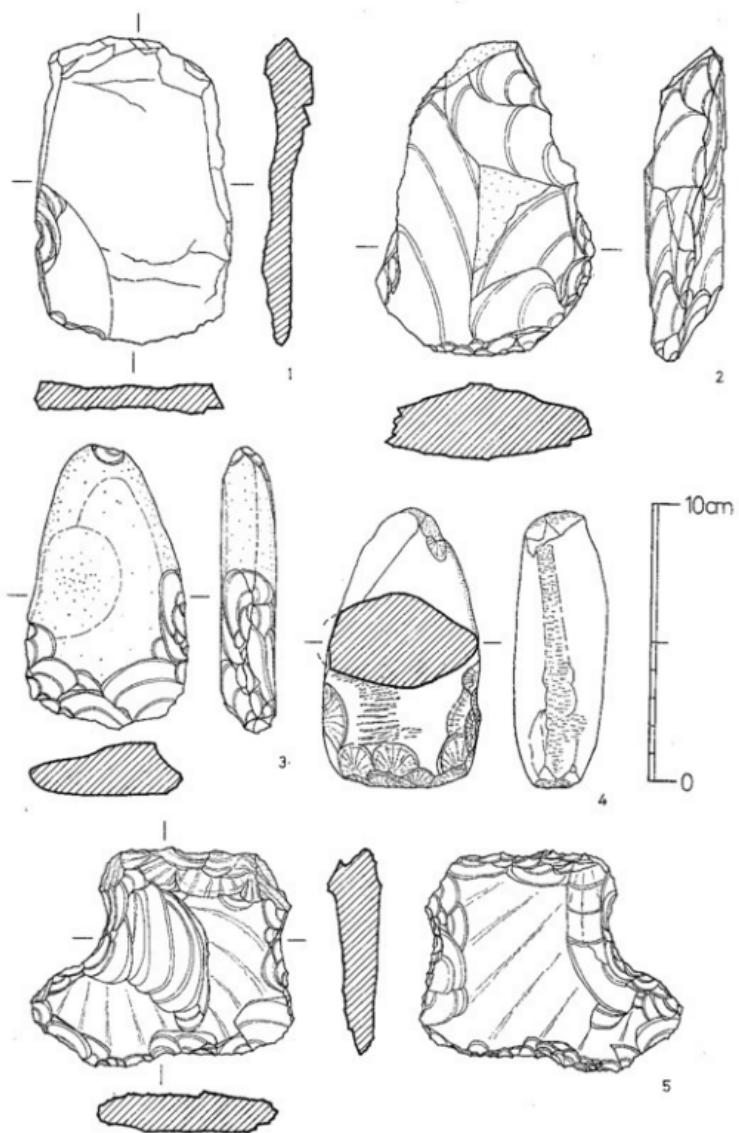
第4住居址支群から第11住居址支群にかけての二次的堆積土層内を中心に、石斧状の不定形打製石器16点を遊離発見した。形状や石材等も一定でなく、機能的にも個体差があるが、いずれも掌に握りしめられる程度の大きさで、一方に刃部を敲打整形していることから、打製不定形石器として一括取りまとめ概述することとした。川石利用のもの2、サヌカイトおよび緑泥片岩製各1のはかは、粘板岩質のものが熱変成により硬質化した、準黒色珪質頁岩が用いられ、後述の第10住居址支群出土の珪質頁岩原石とともに注目された。

(1)扁平な板状の長方形に敲打整形され、刃部は一方から敲打整形された扁平片刃石斧状を呈する。各面とも大削離面を多く残し整形はやや粗雑であるが、刃部は使用による磨耗痕が認められ外彎している。(2)大きく荒割りした整形手法の三角形状の打製石斧である。刃部は両刃状に敲打整形され半円形に大きく外彎させ刃先は鋭い。(3)(4)はともに川原石利用である。掌に握りしめられる程度の手ごろな長楕円形自然石を選び、刃部のみを両面から敲打整形している。(3)は砂岩製でかなり鋭い刃をもつが、(4)は後に叩石として転用されたらしく、打痕が著しく丸味をもっている。(5)サヌカイト製で扁平なつくりである。一方の小口部に大きな抉りが施され、一見石匙状を呈する刃幅の広い整形である。刃部は緩やかな波形を呈し、打製石庖丁と同様の施刃がなされ、表裏両面とも大削離面を多く残している。

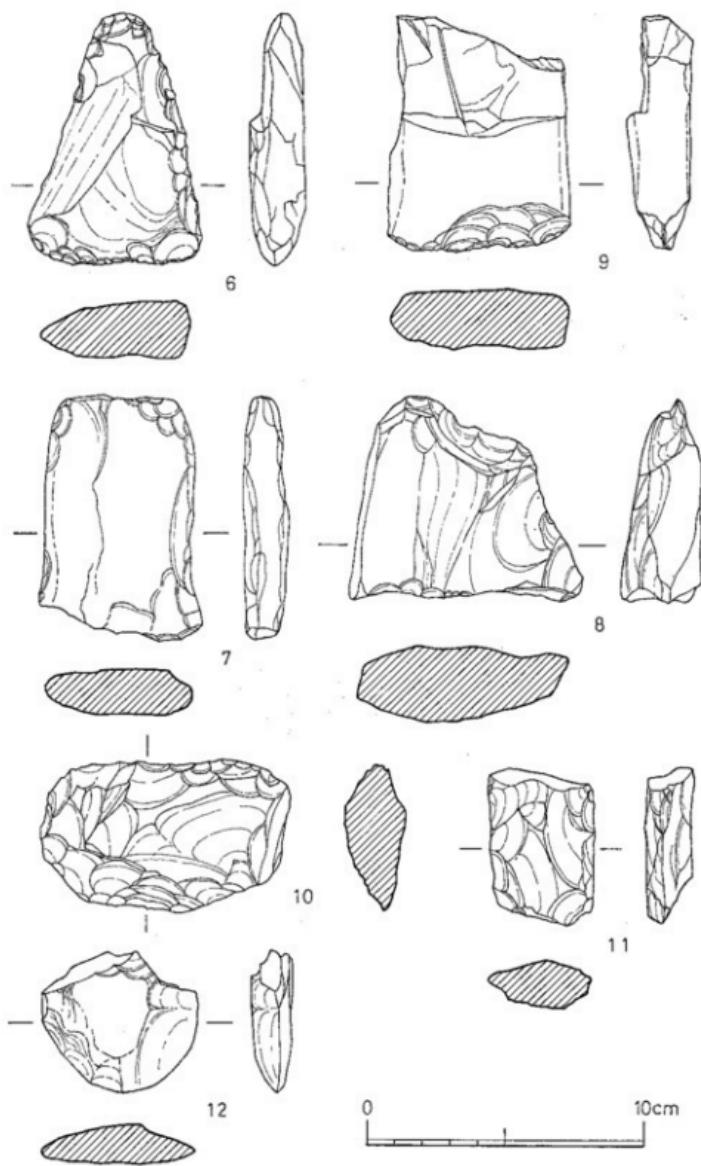
表37 用木山遺跡出土の打製不定形石斧(刀器)一覧

(単位:cm)

番号	出土地点	現状	石材	現存長	現存幅	現存厚	備考
1	R11遊離	完形	粘板岩質	11.10	6.81	1.60	短楕円形扁平片刃石斧状
2	Y82遊離	完形	サヌカイト	11.20	7.78	2.72	不定形石斧
3	R9遊離	完形	砂岩	10.15	5.80	1.88	不整椭円形、川石利用、刃部のみ打痕
4	R9遊離	完形	粘板岩	10.00	5.05	3.39	不整椭円形、川石利用、刃部のみ打痕
5	R11遊離	完形	サヌカイト	7.00	9.45	1.75	不定形、大形石匙形
6	R10遊離	完形	珪質頁岩	9.00	6.24	1.92	三角形状 使用痕あり
7	R7遊離	頭部片	珪質頁岩	8.70	5.85	1.63	長方形、扁平、体側に抉り
8	R9遊離	頭部片	珪質頁岩	7.40	8.40	2.95	不定形
9	R7-H1遊離	刃部片	緑泥片岩	8.15	6.60	2.22	長方形、扁平片刃石斧から転用か?
10	R9遊離	完形	珪質頁岩	8.88	5.20	2.10	梢円形、扁平
11	R7遊離	頭部片	珪質頁岩	5.50	3.78	1.65	長方形
12	R9遊離	刃部片	珪質頁岩	4.85	5.60	1.48	刃部大きく外彎
13	R7遊離	中間部片	砂岩質	5.78	7.10	2.45	長方形



第235図 用木山遺跡出土の不定形石器実測図(1)



第236図 用木山遺跡出土の不定形石器実測図(2)

(6)(7)ともに珪質頁岩製。 (6)は扁平な三角形状を呈する完形品。刃部は両面から細かく敲打整形されている。(7)は長方形を呈するが刃部を欠損しているため不詳である。(8)不定形な珪質頁岩製、折損していく詳細は不明。器表に堆積層序の輪目が顕著に認められ、自然風化による黄褐色化していることから、打製石器製作の原石として持ちこまれたものの、破片残品の可能性もある。(9)扁平で長方形の綠泥片岩製刃部。現存部平および側面とも磨製であるが、刃部は両面から敲打された両刃である。扁平片刃石斧の折損品を、敲打により施された再生利用品の可能性が強い。(10)～(12)は珪質頁岩製。(10)一見して楕円形に整形された打製石庖丁状を呈するが、平面部に大削離面を多く残し、最大器厚も2.1cmと部厚い。(11)幅3.8cm、横断面が長楕円形を呈する長方形で、石槍の基部を思わせるが折損していく詳細は不明。(12)刃部のみが砥ぎだされた扁平な円弧状を呈する刃器であるが、小破片のため詳細は不明である。

#### 7. 磨製石棒（図234、図版109）

第11住居址支群遺構内の埋積土層内から逆離出土した、暗灰黒色を呈する砂岩製磨製石棒1点である。基部を折損失しているが、横断面が長楕円形を呈する扁平なつくりである。頭部は蛇頭形、体部は椭円柱形の左右相対につくられ、現存部全長10.65cm、頭部最大幅3.85cm、体部平均幅3.56cm、器厚1.98cmを測る。

#### 8. 磨製石庖丁（図237・238、図版112）

磨製石庖丁は計26点を発見した。打製石庖丁155点の発見にくらべ、全石庖丁に対する比率は14.4%と低い。完形を保つものはなくすべて折損した破片である。石材は変成されて硬質化した砂岩、粘板岩、泥板岩系のものが頁岩または片岩となったものを主として用いているが、各個体によって構成物に差異が認められ産出地を異なるようである。形態的には隅丸長方形のものが大半を占め、楕円形とか三日月形のものは極めて少ない。断片的な小破片となり詳細が明らかでないものが多く、ここでは幾つかを例にとってその特徴を概述する。

(1)背小口部を欠損するがほぼ完形を保つ。扁平な長方形に整形され、平面と両小口部の研磨はあまり認められず、刃部と背部のみをていねいに研磨したやや荒いつくりである。紐孔は2孔とも両面から回転施穿され、刃部は両面から砥ぎだされているものの表裏で角度が異なる。刃部中央部は使用による凹状の磨滅が認められる。(2)長楕円形に整形されているが、背部に敲打整形痕を多く残し、左右の円孔は上下にかなりのずれをみせる。(4)背部は外縁、刃部は直線状を呈する。全面研磨されているが刃部に刃こぼれがめだつ。(6)隅丸長方形。刃部は磨耗してやや内縁する。約30m離れた第9住居址支群と第11住居址支群で発見された2破片が接合復元され注目された。(7)刃部のみの出土であるが刃部に磨耗痕および擦痕が著しい。(8)刃部がかなり外縁する隅丸長方形。(9)背および刃部とともにやや外縁する隅丸長方形。紐穴はなく両小口部中央に敲打による抉りが施され、打製石庖丁に多くみられる同巧のつくりである。(10)・(11)ともに全面よく研磨され刃部は磨耗している。

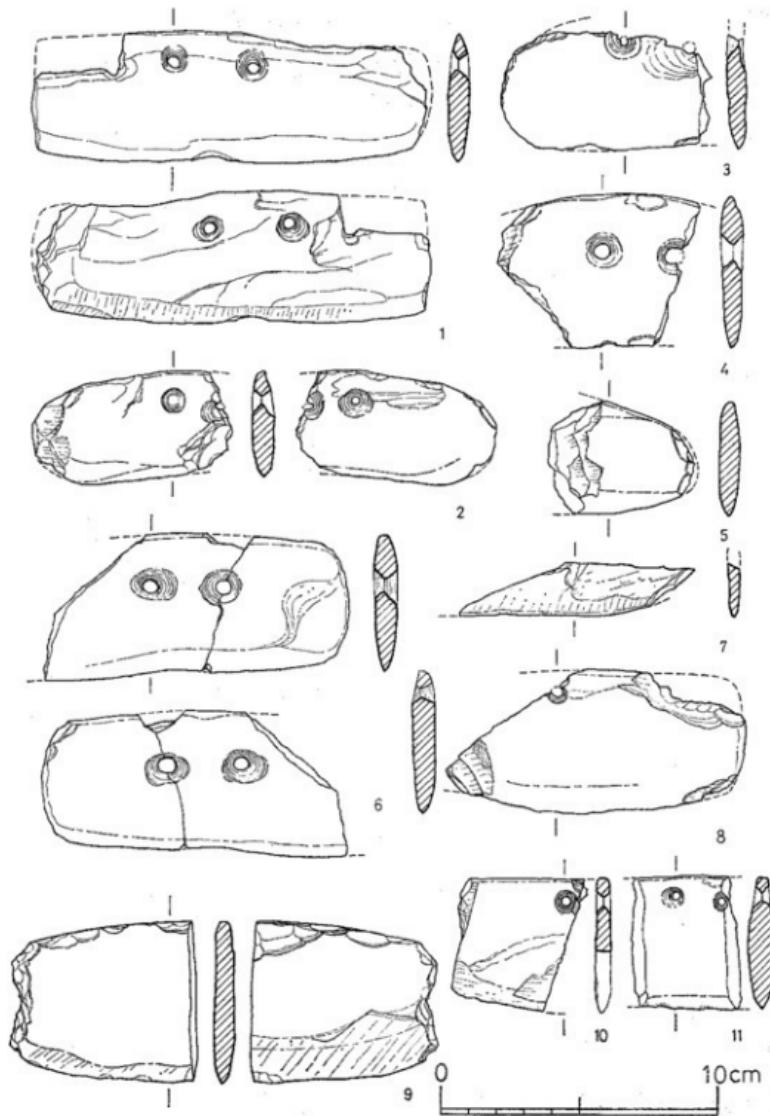
楕円形をした大形品。均整のとれたつくりで全面よく研磨され刃部は鋭い。刃部は両面から砥ぎだされているが表裏で若干の差がある。紐孔も表裏で径および深さにかなり差がありややすれて

表38 用木山遺跡出土の磨製石庖丁一覧

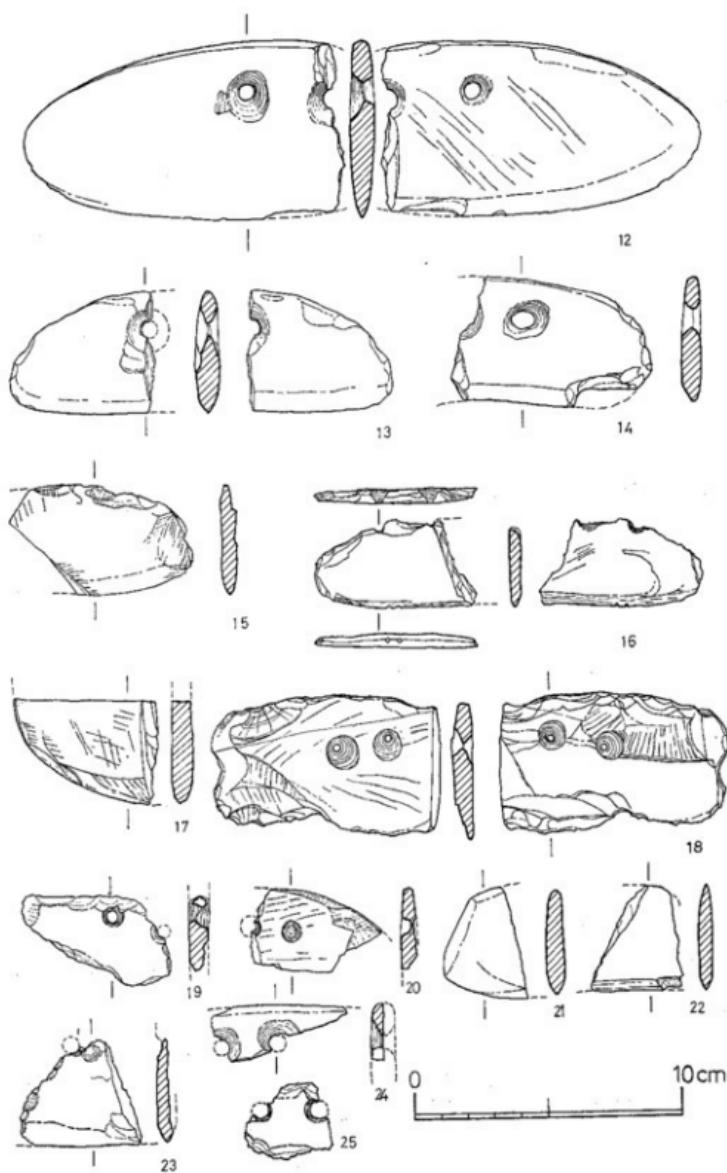
(単位cm)

番号	出土地点	現状	石材	現存部長	現存火薬	最大厚	開孔中心距離	備考
1	R 11遺跡	ほぼ完形	粘板岩	14.22	4.70	0.71	2.85	規則形
2	R 11遺跡	約半大	綠泥片岩	7.18	3.74	0.82	1.65	長楕円形、刃部直線
3	R 9遺跡	約半大	粘板岩	7.30	4.25	0.65	—	短冊形
4	R 7-H2	中間部片	砂岩	7.10	5.46	0.80	2.50	椭円形
5	R 11遺跡	小口断片	綠泥片岩	5.32	4.05	0.75	—	楕円形
6	R 9遺跡	約半大	綠泥片岩	11.08	4.97	0.85	2.65	短冊形、刃部外側 R 11出土片と接合
7	R 10遺跡	刃部断片	粘板岩	8.30	1.90	0.51	—	刃部やや内弯
8	R 11遺跡	約半大	粘板岩	10.66	5.15	0.78	現存一孔	短冊形、刃部外弯
9	R 9遺跡	約半大	泥板岩	6.71	5.80	0.70	—	短冊形、小口抉り
10	R 10遺跡	中間部片	粘板岩	4.55	4.62	0.53	現存一孔	—
11	R 9遺跡	中間部片	粘板岩	3.82	4.80	0.90	1.82	—
12	R 2遺跡	約半大	砂岩	11.72	6.55	0.78	3.05	椭円形大形品
13	R 3遺跡	約半大	砂岩	5.45	4.61	0.90	—	椭円形刃部直線
14	R 3遺跡	約半大	粘板岩	7.50	4.68	0.70	現存一孔	刃部やや内弯
15	R 3遺跡	約半大	粘板岩	6.80	4.10	0.60	—	椭円形小口抉り
16	R 2遺跡	刃部断片	粘板岩	6.10	3.30	1.49	1.90	—
17	R 3遺跡	刃部断片	粘板岩	5.25	3.80	0.80	—	刃部外弯
18	R 3遺跡	約半大	泥板岩	8.60	5.18	0.77	1.92	短冊形、小口抉り
19	R 9遺跡	背部断片	砂岩	5.50	3.25	0.70	現存一孔	—
20	R 9遺跡	背部断片	粘板岩	4.80	3.00	0.70	—	円孔貫通せず
21	R 9遺跡	小口片	綠泥片岩	3.30	4.22	0.75	—	短冊形?
22	R 9遺跡	中間部片	粘板岩	3.42	3.88	0.58	—	—
23	R 9遺跡	刃部断片	粘板岩	4.40	4.00	0.50	—	—
24	R 5遺跡	背部断片	綠泥片岩	5.04	1.95	0.46	2.20	—
25	R 10遺跡	背部断片	粘板岩	3.25	2.65	0.50	2.05	—

いるが、孔の周縁部に使用痕とか磨耗痕は認められない。刃刃部はやや内弯して片刃に近い。紐孔は両面から敲打による貫孔のようである。頭全面よく研磨され刃部はやや内弯している。紐孔は上半部を欠損した後も再加工して使用した痕跡と全体に磨耗痕が認められるほか、刃部の一部に顕著な使用痕がある。頭灰白色を呈する軟質の泥板岩を素材とした半磨製品である。磨製部分は紐孔のみで、背部は細かい敲打整形の後かなりていねいにすりつぶしているが、刃部は打製で極度に磨滅している。使用による磨耗痕は認められない。頭背部に近い断片的な小破片。紐孔は一方から途中で止められ貫通していない。



第237図 用木山遺跡出土の磨製石庖丁実測図(1)



第238図 用木山遺跡出土の磨製石庖丁実測図(2)

## 9. 打製石庖丁 (図239~243, 図版111)

打製石庖丁は計155点を発見した。粘板岩質のものが熱変成を受けて硬質化した、準黑色珪質頁岩製19点のはかはすべてサヌカイト製である。磨製品26点を加えた全出土数181点のうち打製石庖丁が84.6%と大半を占めている。完形もしくはほぼ完形を保つものは30点のみで、そのほかはすでに折損した破片である。各住居址支群内に打製石器を作製または再加工したと推察される遺構を伴うことから、こうした使用中に折損したと思われる石庖丁片についても、より小形の打製石器への再生加工の石材として、本集落内に持ち帰られたことの一端を示すものかも知れない。

発見した打製石庖丁のうち、第9住居址支群第2号住居址床面から一括出土したサヌカイト製の7点については、すでに前述の遺構の出土状況の項 (P.283.図149) で、また第10住居址支群第9号住居址壁面から、珪質頁岩とともに一括出土した珪質頁岩製の3点については、後述の原石および碎片の項 (P.461.276図) にそれぞれ併記しているので、ここではその他の打製石庖丁を中心比較的保存状態の良好な59点を選び実測図示するとともに、個体別の出土地点や計測値等を表示して、幾つかの代表例についての観察と全体的な特徴について概述する。

(1)扁平な隅丸長方形を呈するサヌカイト製である。両平部に大剝離面を多く残すが縁辺部の敲打整形は細かくていねいである。背部は敲打整形後すりつぶしが施され、刃部はやや外轉する。刃部には明瞭な磨滅痕ではなく部分的な刃こぼれ状の剝離痕、また両小口部にはそれぞれ中央部付近を中心に約3cm幅の磨耗痕とかすかな水平擦痕が認められ、この石庖丁が実際に使用されたことを示している。そして両小口部に抉りをもたないものでも、一定の幅の布または皮革様のもので手に着装したと推察される。(2)前記(1)とほぼ同形同巧の隅丸長方形を呈するが、両小口部に敲打による抉りが施されている。本遺跡出土の打製石庖丁のうち約50%弱がこのように両小口部に抉りをもつ。(3)準黑色珪質頁岩製。両小口に抉りをもつ隅丸長方形を呈するが、階段状剝離をみせ整形もやや荒い。全体的に器表の風化が著しく背部と刃部の識別も不明確で、上下辺とも刃部として利用した可能性がある。同質石材を素材とした (17・35・45~47) などにも共通した面が見受けられる。(4)両小口部を製作時に意識的に荒割り面を残したのか、また使用中折損かは明らかでないが、小口両面に直線的な稜をもつ不整長方形を呈する小形品である。これとほぼ同巧の類例を幾つかみることができる。背と刃部の区別はついているが、断面図でもわかるように背部もかなり鋭く、背済し加工は施されていない。また打製石庖丁特有の使用痕は認められずスクレーパーの可能性もある。(5)刃部小口を欠損しているが、折れ口に刃部を再加工した痕跡と器表全体に磨滅痕が認められる。(6)小口部が丸く長楕円形を呈し、刃部両面に顕著な磨滅痕が認められる。(7)前記(6)と同様小口部が丸く整形され抉りをもつ。(22・24)はやや小形の楕円形を呈し、(23・54)は刃部が内轉していわゆる鎌形を呈するが類例は少ない。

本遺跡出土の打製石庖丁は、隅丸長方形、長方形、両小口から背部にかけて丸味をもって外轉するもの、楕円形、刃部が内轉した鎌形のものなど5類形に分けられるが、隅丸長方形および長方形のものが大半を占め、紐孔をもつものは存在せず、両小口部に抉りを施したもののが約半数を占める。概して平部に大剝離面を多く残し、背部および刃部は細かい敲打によって整形されているが、背部は整形後すりつぶしを施して角取りしたものが多い。刃部は直線状またはやや外轉するものが

表39 用木山遺跡出土の打製石庖丁一覧

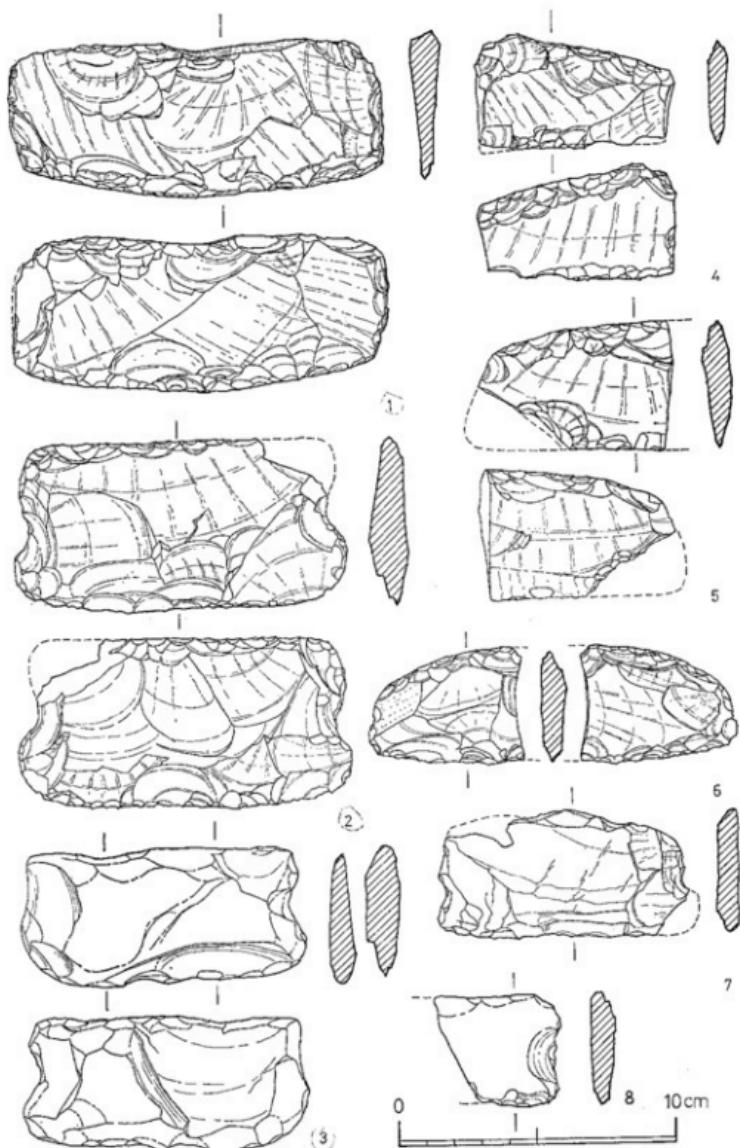
(単位cm)

番号	出土地点	現 状	石 材	現存部長	最 大 幅	最 大 厚	備 考
1	R 3 遺跡	完 形	サヌカイト	13.55	5.52	0.91	短冊形、刃部外弯
2	R1-H1 床	ほぼ完形	サヌカイト	11.95	6.00	1.35	短冊形、小口抉り
3	R 3 遺跡	完 形	珪質頁岩	10.33	4.90	1.22	短冊形、小口抉り
4	R 3 遺跡	中間部片	サヌカイト	7.25	4.16	0.74	短冊形
5	R 3 遺跡	約 1/2 大	サヌカイト	7.06	4.50	0.90	背部外弯、刃部直線
6	R 1 遺跡	約 1/2 大	サヌカイト	5.70	4.30	0.82	三日月形
7	R 3 遺跡	ほぼ完形	粘板岩質	9.00	4.55	0.80	短冊形、小口抉り
8	R 3 遺跡	小 口 片	サヌカイト	4.35	4.10	0.90	短冊形、小口抉り
9	R 7 遺跡	完 形	サヌカイト	8.96	3.95	1.16	短冊形
10	R7-H1 遺跡	小 口 片	サヌカイト	6.30	3.75	0.81	短冊形
11	R 7 遺跡	小 口 片	サヌカイト	3.20	3.69	0.50	橢円形、小口抉り
12	R 5 遺跡	約 1/2 大	サヌカイト	5.40	4.48	0.69	短冊形、小口抉り
13	R7-H1 遺跡	約 1/2 大	サヌカイト	5.55	5.35	1.12	短冊形
14	R7-H2 遺跡	中間部片	サヌカイト	5.70	4.71	0.88	短冊形
15	R7-H2 床	小 口 片	サヌカイト	4.60	4.80	0.75	短冊形、小口抉り
16	R 6 遺跡	約 1/2 大	粘板岩質	8.70	4.71	0.68	短冊形、刃部内弯、小口抉り
17	R7-H2 遺跡	完 形	珪質頁岩	7.22	4.38	0.69	小形短冊形、小口抉り
18	R13-H8 遺跡	完 形	サヌカイト	11.52	4.40	0.98	長橢円形、刃部外弯
19	R4-H6 遺跡	約 1/2 大	サヌカイト	7.88	4.25	0.80	短冊形、小口抉り
20	R4-H13	小 口 片	サヌカイト	2.80	3.79	0.80	橢円形
21	R 9 遺跡	完 形	サヌカイト	13.55	5.38	1.00	短冊形、小口抉り
22	R 9 遺跡	完 形	サヌカイト	8.21	4.15	0.70	橢円形、小形
23	R 9 遺跡	完 形	サヌカイト	11.22	3.11	1.12	鐘形、刃部内弯
24	R 9 遺跡	完 形	サヌカイト	9.78	3.88	0.65	橢円形、刃部内弯
25	R 9 遺跡	約 1/2 大	サヌカイト	6.20	5.00	1.00	短冊形、小口抉り
26	R 9 遺跡	約 1/2 大	サヌカイト	6.30	4.65	1.00	短冊形、小口抉り
27	R 9 遺跡	小 口 片	サヌカイト	3.58	4.30	0.66	短冊形、小口抉り
28	R 9 遺跡	約 1/2 大	サヌカイト	6.08	4.30	0.85	長橢円形
29	R 9 遺跡	約 1/2 大	サヌカイト	5.80	4.54	0.90	短冊形、小口抉り
30	R 9 遺跡	約 1/2 大	サヌカイト	6.34	4.81	0.72	橢円形、刃部外弯
31	R 9 遺跡	中間部片	サヌカイト	7.20	4.28	1.00	短冊形
32	R 9 遺跡	中間部片	サヌカイト	3.72	4.58	0.73	短冊形
33	R 9 遺跡	約 1/2 大	サヌカイト	5.35	3.35	0.96	短冊形、小口抉り

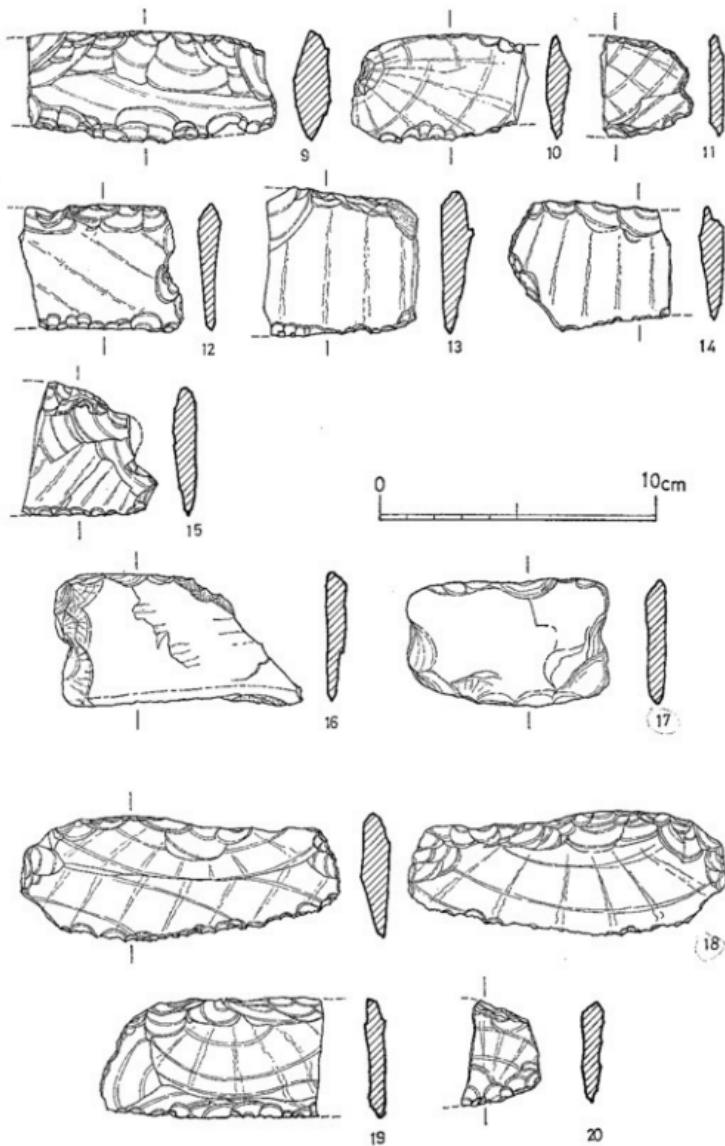
番号	出土地点	現 状	石 材	現存部長	最 大 部 厚	最 大 部 厚	備 考
34	R 9 遺跡	中間部片	サスカイト	3.11	3.98	1.10	短骨形?
35	R 9 遺跡	ほぼ完形	珪質頁岩	9.92	5.00	1.32	短骨形、小口抉り
36	R 10 遺跡	中間部片	サスカイト	6.00	5.45	1.05	短骨形?
37	R 10 遺跡	小 口 片	サスカイト	6.77	4.18	0.72	不定形、刃部外弯
38	R 10 遺跡	ほぼ完形	サスカイト	6.60	3.71	0.62	不定形、刃部外弯
39	R 10 遺跡	小 口 片	サスカイト	4.12	3.04	0.62	長椭円形、刃部や内弯
40	R 10 遺跡	小 口 片	サスカイト	5.30	3.35	0.85	長椭円形、刃部外弯
41	R 10 遺跡	小 口 片	サスカイト	4.30	4.45	1.05	椭円形、刃部外弯
42	R 10 遺跡	小 口 片	サスカイト	3.10	3.90	0.79	短骨形、小口抉り
43	R 10 遺跡	小 口 片	サスカイト	1.75	3.58	0.82	短骨形、小口抉り
44	R 10 遺跡	小 口 片	粘板岩	5.35	4.15	0.85	長椭円形、半磨製
45	R 10 遺跡	約 千 大	珪質頁岩	6.32	4.32	1.00	長椭円形、刃部直線
46	R 10 遺跡	完 形	珪質頁岩	9.10	5.00	1.38	短骨形
47	R 10 遺跡	完 形	珪質頁岩	8.43	4.20	1.15	不定形、刃部外弯
48	R 11 遺跡	小 口 片	サスカイト	5.45	5.30	1.15	短骨形
49	R 11 遺跡	小 口 片	サスカイト	3.40	4.85	0.78	短骨形、小口抉り
50	R 11 遺跡	小 口 片	サスカイト	3.35	4.00	0.86	短骨形、小口抉り
51	R 11 遺跡	小 口 片	サスカイト	3.80	3.82	0.61	椭円形
52	R 11 遺跡	ほぼ完形	珪質頁岩	10.21	4.43	0.82	長椭円形、小口抉り、刃部内弯
53	R 4-H8	約 千 大	サスカイト	6.45	4.20	1.01	短骨形、小口抉り
54	R 4-H13	完 形	サスカイト	8.50	3.35	1.15	鎌形、刃部や内弯
55	R 4-H10	中間部片	サスカイト	3.05	4.75	0.85	短骨形?
56	R 5 遺跡	中間部片	サスカイト	3.25	4.02	0.62	短骨形?
57	R 5 遺跡	小 口 片	サスカイト	5.55	4.92	0.82	短骨形、小口抉り
58	R 5 遺跡	小 口 片	サスカイト	2.50	3.52	0.80	椭円形、小口抉り
59	R 6-H3 遺跡	ほぼ完形	サスカイト	10.22	4.80	0.95	短骨形、刃部や外弯

多く、両面からの敲打の繰り返しで施刃されているが、現状では使用によると思われる磨滅痕とか擦痕を見受けられるもののが多かった。しかし、中には剥離断片をそのまま利用して、簡単な敲打整形と部分的な施刃をした程度のものや、両小口部を切断したのみで施刃したほかは、全く整形加工していないものもかなり存在した。

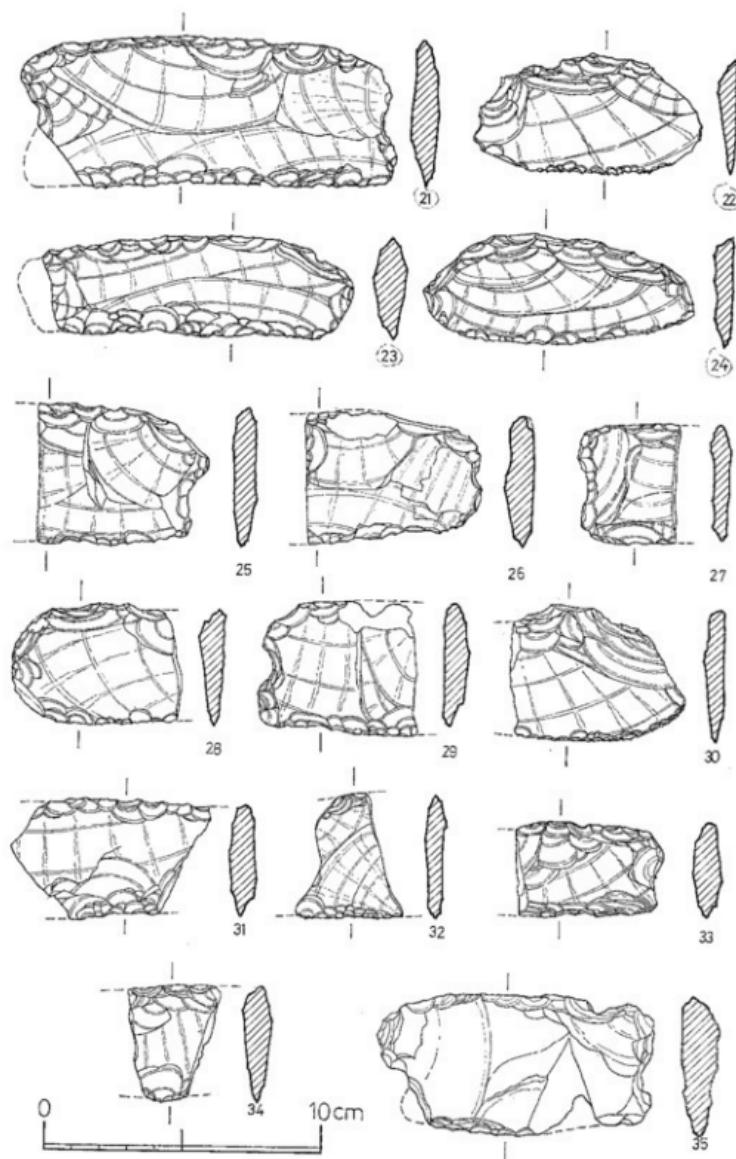
サスカイト製打製石庖丁の形態的な差異を編年の変化としてとらえ、磨製石庖丁を模倣した椭円形状のものから、紐通し孔に代る両小口に抉りをもつ隅丸長方形へ、さらに抉りをもたない長方形とか不整長方形や鎌形へと移行したとの説もある。本遺跡出土の打製石庖丁も各形式のものが検出され、こうした形式的変化の流れとして認められるものも存在するが、全体としてみた場合、各形



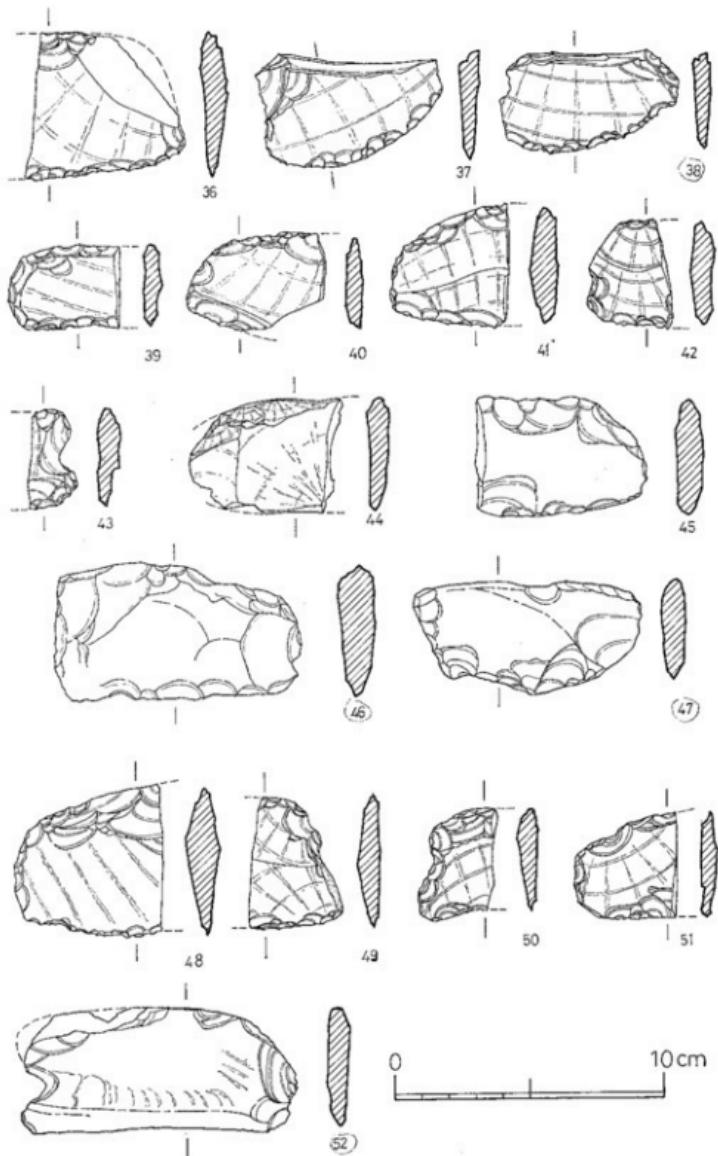
第239図 用木山遺跡出土の打製石庖丁実測図(1)



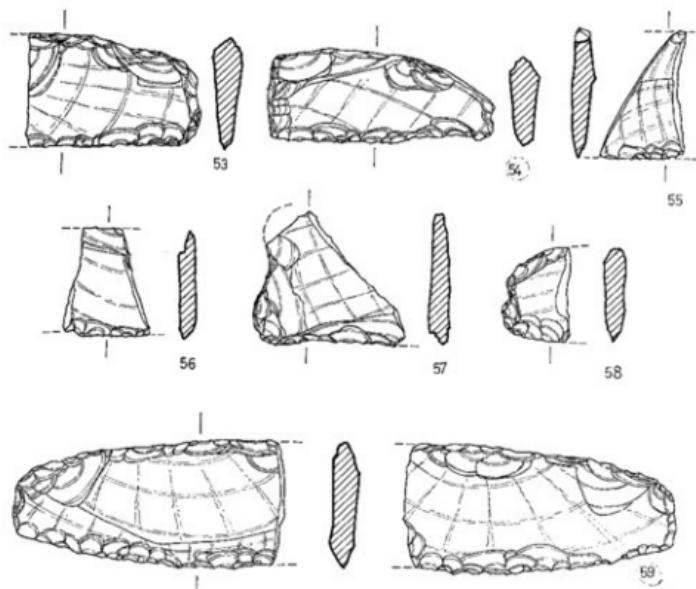
第240図 用木山遺跡出土の打製石庖丁実測図(2)



第241図 用木山遺跡出土の打製石庖丁実測図(3)



第242図 用木山遺跡出土の打製石庖丁実測図(4)



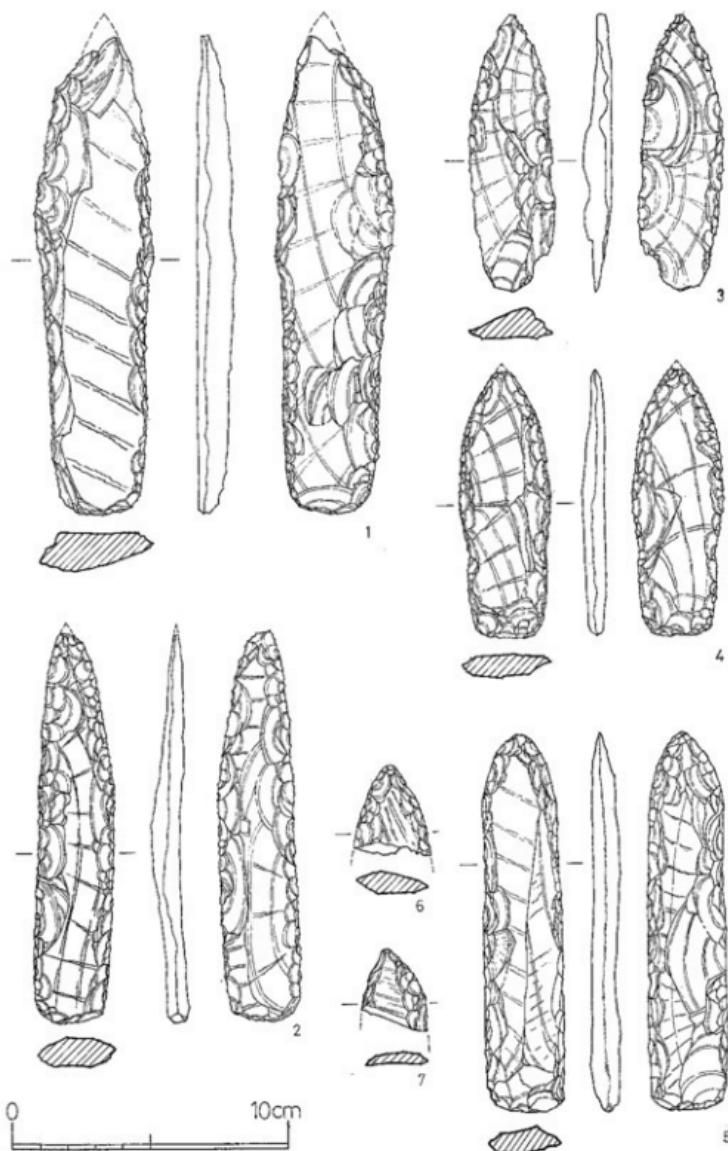
第243図 用木山遺跡出土の打製石庖丁実測図

式のものが同時併存していた可能性も強いのである。本遺跡の伴出土器片にさして時期差が認められないことや、第9住居址支群第2号住居址床面に一括して置かれていた7点の打製石庖丁が、各形式のものを含んでいることなどから、あまり形式にこだわらないで製作され活用されたものと考えられるのである。このことは、本遺跡が弥生時代中期後半に急速に集落規模が拡大され、労働力としての人口も増大していることから推察すると、それに伴って耕地化も進み、収穫具としての石庖丁の需要も必然的に増大したと推察される。基本的な生産工具が鉄器に移行しつつあるこの時期に、しかも各住居址支群単位に打製石器を製作し需給している本集落においては、打製石庖丁の製作は形式もさることながら、次第に機能面が重視され量産されたものと考えられる。

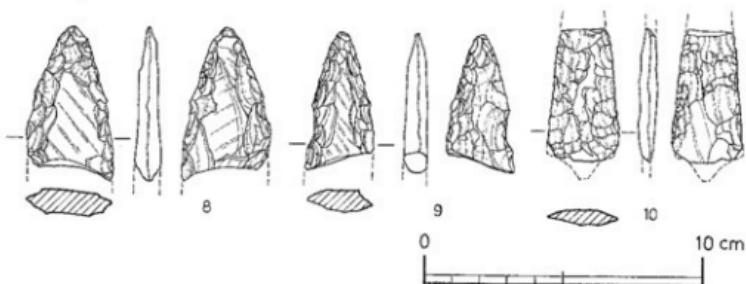
#### 10. 打製石槍 (図244・245、図版110)

10個体分を発見したがすべてサヌカイト製の打製品である。完形を保つもの5点と刃部片4点および基部片1点である。さらに遊離検出した多量のサヌカイト片の中に、石槍断片を想起させるものも何片か検出したが、確実性のないものについてはここでは除外した。完形を保つ5点についても、形態的にもまた大小さまざまである。

(1)全長17.2cmを測り本遺跡出土の石槍中最大である。平部は大削離面をそのまま残す部分が多く整形もやや荒い。側縁部は両面から敲打を繰り返して整形しているが、刃は先端から約5.5cmの間のみに施され、その他両側および基部は敲打整形後すりつぶして角取りしている。刃部に近い基部



第244図 用木山遺跡出土の石検実測図(1)



第245図 用木山遺跡出土の石槍実測図(2)

から約12cmに最大幅をもち、基部になるにつれて漸移的に細まる形を示す。意識してこうした形に整形したかどうかは明らかでないが、逆手に握りしめて短剣として用いた場合機能的に理にかなった形状である。長柄に着装すれば槍となり、直接手に握って用いれば短剣となる。少くとも二つの機能を有する利器である。

(2)上下に若干のかえりをもち左右の整形もやや歪みをみせるが、整形そのものは細かくていねいである。刃は先端から約6cmの間に施され、その他はすりつぶして角取りしている。(3)整形は荒く大剣面を多く残し、刃部および側縁部の整形も若干の敲打加工をした程度で、柄部や基部のすりつぶしも施されていない。(4)全長9.65cmの小形品。整形は比較的細かくていねいである。側縁部のすりつぶしは認められないが、基部から約3cmの両側に敲打整形した浅い抉りが施されている。(5)本遺跡出土の石槍の中で最も均整のとれたつくりである。平部に大剣面をかなり残すものの、側縁部にかけての敲打整形は細かくていねいである。刃部は先端から約3cmの間に施され、両側および基部はすりつぶしにより角取りして丸くおさめている。機能的には前記(1)と同様である。当山陽団地内遺跡で本石槍と類似するものは、四辻台状墓および惣谷遺跡第1地点から各1点出土してい

表40 用木山遺跡出土の石槍一覧

(単位cm)

番号	出土地点	現状	石材	現存部長	最突部幅	最突部厚	備考
1	R12-H2 核穴内	完形	サヌカイト	17.20	4.16	1.40	側面すりつぶし、刃部長約5.5cm
2	R10遺跡	完形	サヌカイト	14.10	2.72	1.00	側面すりつぶし、刃部長約5cm
3	用木山遺跡正	完形	サヌカイト	10.00	3.02	0.90	側面すりつぶし、刃部長約4.7cm
4	R10遺跡	完形	サヌカイト	9.65	3.28	0.86	側面に抉り、刃部長約4.5cm
5	R2-H3	完形	サヌカイト	13.75	2.86	1.05	整形粗雑小形品
6	Y81表採	刃部片	サヌカイト	3.15	2.72	0.80	-
7	R7-H2	刃部片	サヌカイト	3.05	2.35	0.45	-
8	R6-H5	刃部片	サヌカイト	5.50	3.10	0.92	-
9	R5遺跡	刃部片	サヌカイト	4.80	2.60	0.79	-
10	R7-H1	基部片	サヌカイト	4.80	2.50	0.60	石槍の可能性大

る。

(6~9) は刃部片のみの出土である。いずれも同様の形態を示しているが詳細は不明である。即ち基部であるが器壁も薄く、推定長約 8cm~10cm の鋭角二等辺三角形状を呈し、平部に大剣面とか自然面が少なく敲打整形も細かくていねいなうえ、両側縁部に顕著な磨痕が認められ、また基部が有茎であったものを再生加工したような形跡がうかがえることなどから、石槍よりも他の利器の可能性が強い。おそらく破損した有舌尖頭器状のものを採集して、基部を若干整形削離した後部分的に研磨して再生利用したものと推察される。

#### 11. 石鎌 (図245~252, 図版113・114)

本遺跡の発掘調査にともなう石鎌の出土数は、精密とはいえない発掘調査であったにもかかわらず、総計 1328 点と多量であった。出土地点別の出土数については先の表 31 に示したとおりであるが、二次的堆積被土の厚い第 5 住居址支群から第 11 住居址支群部に集中し、その他第 1 住居址支群と複合立地する用木第 1 号墳 (A 1), 第 3 住居址支群と複合立地する岩田第 8 号墳 (E 8) の墳丘盛土中にもかなり遊離包含されていた。また各住居址支群内の特定住居址床面に散在するサスカイト碎片とともに、かなりの石鎌が検出され注目された例も、第 1 住居址支群第 1 号住居址、第 13 住居址支群第 8 号住居址など數株検出された。

出土した石鎌は粘板岩製の磨製石鎌 1 点を除いては、すべてサスカイト製の打製石鎌である。大半の石鎌は両面から敲打を繰り返して二等辺三角形状に整形されているが、概して器厚が薄く軽に対しても丈の長い鋭角三角形の平基および弱回基石鎌が、整形も細かく精巧で刃部もシャープにつくられ、一方幅が広く丈が短かくて、先端部の角度の広いや大形の石鎌は大剣面を多く残し、整形も粗雑なものが多く目についた。

出土点数も膨大であり個々の石鎌についての記述はできないため、ここでは出土地点や出土状況にはあまりこだわらないで、基部を基準として分類した器形別に代表例を幾つか選んで実測図示するとともに、若干の統計処理を試みてその責を果したい。なお用木古墳群第 1 号墳、岩田古墳群第 8 号墳の墳丘盛り土内に遊離包含されていた石鎌および、用木山遺跡山上部出土の石鎌については、参考までに地区別に分割してそれを実測図示したが、本用木山遺跡出土の石鎌と対比して差異は認められない。地形的にみても本来これらの石鎌は本集落に伴うものと考えられることがあって、集計処理のうえでは用木第 1 号墳出土の石鎌は第 1 住居址支群、岩田第 8 号墳出土の石鎌は第 3 住居址支群へというように、それが複合立地していた各住居址支群単位に合算して取り扱った。その点了承を願いたい。

出土した石鎌 1328 点について、基部の形態別に分類したのが表 41 である。それによると平基石鎌が 481 点と最も多くて 36.2% を占め、凹基石鎌 381 点 28.7%, 凸基石鎌 197 点 14.8%, 有茎石鎌 73 点 5.5%, 基部を折損していて形式不明のもの 196 点 14.8% となる。これを形式不明のものを除いた 1132 点でみると、平基石鎌 42.5%, 凹基石鎌 33.7%, 凸基石鎌 17.4%, 有茎石鎌 6.4% となり、基部を欠損しているものについて、形態的に観察すると、凹基石鎌および平基石鎌の基部を欠損したと思われるものが多く、実際にはこの両者の比率が今少し高まるものと考えられる。

表41 用木山遺跡出土の石鎚形式別出土数一覧

出土地点	形 式	平 基	凹 基	凸 基	有 茎	形 式 不 明	計
第1住居址支群	28	16	16	4	11		75
第2住居址支群	22	12	7	0	10		51
第3住居址支群	40	22	15	6	26		109
第4住居址支群	9	6	2	1	5		23
第5住居址支群	29	27	13	6	14		89
第6住居址支群	16	12	7	4	18		57
第7住居址支群	76	69	50	15	16		226
第8住居址支群	2	1	1	0	2		6
第9住居址支群	86	77	31	11	22		227
第10住居址支群	56	49	24	10	17		156
第11住居址支群	72	47	19	7	23		168
第12住居址支群	3	2	2	1	3		11
第13住居址支群	3	4	1	0	0		8
表採その他の地点	39	37	9	8	29		122
計	計	481	381	197	73	196	1328
	%	36.2	28.7	14.8	5.5	14.8	100.0

平基石鎚はすべて二等辺三角形状に整形されているが、刃部となる両斜辺がややふくらみをもって外弯するものが圧倒的多数を占め、斜辺部が直線状またはやや内弯するものは少ない。概して斜辺が直線状に近いものほどつくりは精巧で鋭い。また斜辺部に抉りをもつものを1点検出された。

凹基石鎚は基部が僅かに内弯して基本的には平基石鎚に近いものと、基部を大きく内弯させているものの二種に分類できるが、量的には前者が大半を占めている。両斜辺部の形態はほぼ前述の平基石鎚に類似するが、両側に抉りをもつものが28点検出された。抉りをもつ石鎚は概して基部の内弯も大きいが、形態的には個体差が認められる。第249図を参照されたい。

凸基石鎚は基部が僅かに外弯して、基本的には平基石鎚とはほぼ同様のものと、平面形が蛇頭状の橢円形を示すものとに大別されるが前者の方が圧倒的に多数を占める。基部が僅かに外弯するものは、平基石鎚と類似するかまたは平基石鎚底辺部の両端角を打ち欠いて丸味をもたせた程度であるが、基部が大きく外弯するものは、基部全体を意識的に半円形に丸く外弯させて整形している。両側辺部はほとんどのものがやや外弯し、側辺部が内弯するものとか抉りをもつものは全く見受けられなかった。

有茎石鎚は平基形に茎をつけた形状のもの5点のほかは、すべて平面形が蛇頭形を示す橢円形の凸基石鎚に茎を有する形式である。したがって各石鎚とも細長い感じのものが多く、最長のものは全長5.7cmを測るものもある。

石鎚の各個体別の計測値については、完形を保つもの775点について、形式別に分けて長さ、最

表42 用木山遺跡出土の完形石錐計測値一覧

(単位cm・g)

番号	長さ	最大幅	最大厚	重さ	番号	長さ	最大幅	最大厚	重さ	番号	長さ	最大幅	最大厚	重さ
<b>平基石錐</b>														
(第1住居址支群)														
1	3.71	1.78	0.35	2.4	49	2.58	1.85	0.51	1.9	94	1.79	1.21	0.31	0.6
2	3.35	2.01	0.39	2.4	50	2.27	1.71	0.29	1.2	96	3.34	2.00	0.55	2.9
3	2.98	1.31	0.31	1.0	51	2.24	1.47	0.29	0.9	97	3.28	2.10	0.36	3.1
4	2.81	1.80	0.59	2.2	52	2.20	1.60	0.40	1.1	98	3.26	1.71	0.56	3.1
5	2.71	1.81	0.32	1.7	53	2.05	1.69	0.28	0.8	99	3.25	1.89	0.60	3.1
6	2.51	1.51	0.43	1.1	54	2.02	1.82	0.40	0.9	100	3.20	1.96	0.41	2.1
7	2.44	1.49	0.43	1.1	55	1.99	1.30	0.29	0.7	101	3.18	2.05	0.41	2.5
8	2.35	1.61	0.44	1.2	56	1.98	1.55	0.20	0.6	102	3.12	1.82	0.36	1.8
9	2.30	1.45	0.39	1.0	57	1.96	1.07	0.38	0.7	103	3.10	1.83	0.41	1.8
10	2.25	1.52	0.22	0.9	58	1.92	1.30	0.41	0.8	104	2.95	1.51	0.39	1.9
11	2.16	1.45	0.41	1.1	59	1.80	1.35	0.21	0.6	105	2.81	2.38	0.31	2.5
12	2.15	1.61	0.24	0.8	60	1.78	1.61	0.41	0.9	106	2.80	1.71	0.40	1.2
13	2.11	1.69	0.37	1.0	61	1.50	1.35	0.35	0.7	107	2.68	1.52	0.30	1.3
14	2.09	1.68	0.35	1.4	(第4住居址支群)									
15	1.92	1.30	0.36	0.9	62	3.68	1.39	0.36	1.6	109	2.56	1.61	0.31	1.3
16	1.85	1.11	0.30	0.6	63	3.43	1.62	0.75	2.6	110	2.55	1.15	0.25	0.8
17	1.69	1.65	0.32	0.6	64	2.86	1.95	0.40	2.3	111	2.55	1.79	0.25	1.5
18	1.69	1.30	0.35	0.5	65	2.75	1.61	0.35	1.3	112	2.51	1.93	0.42	1.9
19	1.68	1.38	0.32	0.7	66	2.60	1.88	0.38	1.7	113	2.51	1.43	0.62	1.8
20	1.62	1.21	0.17	0.4	67	2.57	1.92	0.32	1.5	114	2.50	1.56	0.36	1.2
21	1.50	1.61	0.31	0.8	68	2.36	2.00	0.40	1.2	115	2.42	1.71	0.42	1.6
(第2住居址支群)														
22	3.22	1.71	0.72	3.6	(第5住居址支群)									
23	3.01	1.90	0.32	2.1	70	4.12	2.49	0.69	5.6	118	2.30	1.71	0.25	1.3
24	2.75	1.31	0.32	1.3	71	3.39	2.11	0.38	2.8	119	2.29	1.61	0.34	1.1
25	2.71	2.16	0.41	1.8	72	3.15	1.78	0.51	2.2	120	2.28	1.15	0.42	1.1
26	2.65	2.20	0.53	3.4	73	3.06	1.81	0.52	3.2	121	2.25	1.85	0.52	1.9
27	2.60	2.00	0.37	2.0	74	3.02	2.10	0.46	2.2	122	2.25	1.43	0.31	1.0
28	2.47	1.55	0.11	1.1	75	2.84	1.85	0.42	1.9	123	2.22	1.65	0.36	1.2
29	2.46	1.71	0.31	1.2	76	2.68	1.82	0.42	1.9	124	2.21	1.36	0.31	1.0
30	2.45	1.48	0.31	1.3	77	2.42	1.76	0.44	1.5	125	2.19	1.40	0.35	1.1
31	2.40	1.69	0.37	1.4	78	2.21	1.62	0.23	0.8	126	2.18	1.48	0.26	0.9
32	2.30	1.46	0.50	1.6	79	2.11	1.32	0.34	0.9	127	2.14	1.42	0.46	1.2
33	2.29	1.71	0.28	1.2	80	2.10	1.41	0.46	1.1	128	2.11	1.21	0.33	0.9
34	2.27	1.41	0.30	0.9	81	2.01	1.90	0.62	1.9	129	2.09	1.45	0.38	1.1
35	2.25	1.32	0.38	0.9	82	1.96	1.72	0.32	1.0	130	2.06	1.31	0.50	1.1
36	2.21	1.79	0.35	1.2	83	1.78	1.50	0.31	0.9	131	2.06	1.21	0.25	0.7
37	2.05	1.41	0.39	1.2	84	1.55	1.37	0.28	0.6	132	2.05	1.40	0.26	0.8
38	1.94	1.27	0.41	0.8	(第6住居址支群)									
39	1.81	1.15	0.18	0.5	85	3.24	1.81	0.45	2.4	134	2.04	1.82	0.49	1.5
40	1.51	1.72	0.36	0.9	86	2.98	2.10	0.45	2.7	135	1.95	1.54	0.46	1.5
41	1.51	1.49	0.32	0.8	87	2.85	1.61	0.27	1.1	136	1.95	1.29	0.31	0.7
(第3住居址支群)														
42	3.96	2.51	0.58	5.2	89	2.41	1.95	0.48	2.0	138	1.91	1.30	0.25	0.7
43	3.68	2.18	0.32	3.1	90	2.30	1.46	0.32	1.1	139	1.90	1.46	0.25	0.6
44	3.27	2.71	0.53	5.2	91	2.25	1.51	0.30	0.9	140	1.90	1.11	0.29	0.8
45	3.05	1.61	0.39	1.8	92	2.12	1.59	0.40	1.2	141	1.85	1.76	0.34	1.1
46	2.99	2.59	0.55	4.5	93	2.01	1.41	0.45	1.0	142	1.85	1.51	0.28	0.8

番号	長さ	最大幅	最大厚	重さ	番号	長さ	最大幅	最大厚	重さ	番号	長さ	最大幅	最大厚	重さ
143	1.81	1.65	0.45	1.1	193	1.83	1.45	0.30	0.7	243	3.09	2.51	0.45	3.0
144	1.81	1.49	0.32	0.9	194	1.82	1.32	0.32	0.6	244	2.78	1.79	0.51	2.8
145	1.81	1.45	0.33	0.9	195	1.81	1.51	0.30	0.7	245	2.70	1.89	0.52	1.7
146	1.81	1.35	0.34	0.8	196	1.80	1.41	0.45	1.0	246	2.58	2.32	0.30	2.0
147	1.74	1.38	0.35	0.8	197	1.75	1.86	0.30	0.7	247	2.57	1.71	0.30	1.2
148	1.49	1.31	0.37	0.7	198	1.62	1.21	0.23	0.5	248	2.53	1.91	0.35	2.2
149	1.39	1.10	0.31	0.4	199	1.62	1.08	0.25	0.4	249	2.51	1.47	0.34	1.5
( 第 8 住居址支群 )					( 第 10 住居址支群 )					250	2.48	1.42	0.41	1.2
150	2.25	1.29	0.32	1.0	200	3.59	1.85	0.45	2.2	251	2.47	1.77	0.50	1.6
( 第 9 住居址支群 )					201	2.95	2.32	0.60	3.3	252	2.44	1.71	0.28	1.1
151	3.61	1.81	0.56	3.1	202	2.85	1.11	0.36	1.1	253	2.41	1.69	0.41	2.0
152	3.21	1.51	0.51	2.6	203	2.75	1.70	0.44	1.8	254	2.41	1.60	0.42	1.5
153	3.13	2.04	0.50	3.0	204	2.72	1.80	0.33	1.3	255	2.41	1.50	0.24	1.6
154	3.03	1.71	0.52	2.5	205	2.71	2.03	0.37	2.5	256	2.37	1.56	0.55	1.7
155	3.00	1.76	0.58	3.0	206	2.65	1.57	0.40	1.6	257	2.35	1.65	0.51	1.4
156	2.90	1.81	0.50	2.3	207	2.64	2.00	0.41	2.1	258	2.31	1.30	0.36	1.1
157	2.85	1.71	0.40	1.6	208	2.60	1.73	0.35	1.5	259	2.29	1.15	0.40	0.8
158	2.84	1.62	0.52	1.9	209	2.55	1.77	0.45	1.8	260	2.28	1.25	0.41	1.1
159	2.78	1.85	0.48	1.9	210	2.52	1.30	0.42	1.5	261	2.25	1.75	0.35	1.2
160	2.76	1.70	0.45	1.5	211	2.51	1.80	0.40	1.6	262	2.20	1.39	0.29	0.7
161	2.74	1.68	0.43	1.5	212	2.50	1.58	0.30	1.0	263	2.06	1.74	0.32	1.1
162	2.59	1.61	0.47	1.6	213	2.50	1.50	0.43	1.3	264	2.05	1.45	0.32	1.0
163	2.51	1.21	0.19	0.7	214	2.40	1.60	0.50	1.3	265	2.02	1.49	0.41	1.1
164	2.50	1.60	0.38	1.4	215	2.38	1.95	0.32	1.5	266	2.00	1.80	0.41	1.1
165	2.47	1.70	0.41	1.5	216	2.36	1.65	0.25	1.0	267	1.98	1.78	0.38	1.4
166	2.47	1.42	0.32	1.0	217	2.35	1.70	0.40	1.5	268	1.98	1.53	0.50	1.3
167	2.46	1.84	0.37	1.4	218	2.25	1.90	0.30	1.2	269	1.98	1.46	0.29	1.8
168	2.42	1.94	0.40	1.7	219	2.22	1.70	0.38	1.1	270	1.98	1.19	0.25	0.6
169	2.41	1.70	0.41	1.2	220	2.21	1.40	0.34	0.9	271	1.98	1.10	0.31	0.6
170	2.41	1.50	0.25	1.0	221	2.21	1.65	0.32	1.0	272	1.88	1.81	0.30	1.4
171	2.35	1.30	0.36	1.3	222	2.21	1.32	0.29	0.8	273	1.86	1.50	0.31	0.9
172	2.32	1.40	0.30	1.0	223	2.20	1.55	0.28	0.9	274	1.85	1.56	0.32	0.9
173	2.30	2.21	0.31	1.5	224	2.17	1.41	0.33	1.1	275	1.81	1.42	0.39	1.2
174	2.29	1.41	0.32	0.9	225	2.17	1.34	0.45	1.1	276	1.80	1.68	0.38	1.2
175	2.19	1.79	0.42	1.6	226	2.13	1.45	0.26	0.9	277	1.79	1.48	0.37	0.8
176	2.19	1.62	0.31	1.2	227	1.92	1.21	0.37	0.9	278	1.78	1.70	0.26	1.0
177	2.18	1.75	0.28	0.7	228	1.92	1.21	0.31	0.9	279	1.78	1.59	0.45	1.1
178	2.15	2.12	0.51	1.9	229	1.91	1.40	0.57	1.5	280	1.70	1.81	0.30	0.9
179	2.15	1.57	0.35	1.0	230	1.89	1.31	0.21	0.7	281	1.50	1.40	0.29	0.6
180	2.10	2.11	0.32	1.4	231	1.71	1.31	0.21	0.5	282	1.49	1.21	0.28	0.4
181	2.10	1.67	0.46	1.4	232	1.70	1.56	0.32	1.0	283	1.49	1.08	0.28	0.5
182	2.09	1.45	0.30	0.6	233	1.70	1.52	0.31	0.7	284	1.41	1.34	0.35	0.6
183	2.05	1.50	0.35	1.2	234	1.67	1.41	0.32	0.8	285	1.41	1.03	0.36	0.6
184	2.05	1.36	0.29	0.7	235	1.56	1.19	0.20	0.4	286	1.31	1.09	0.27	0.4
185	2.01	1.46	0.32	0.8	236	1.56	0.80	0.18	0.3	( 第 12・13 住居址支群 )				
186	2.00	1.64	0.23	0.9	237	1.52	1.49	0.25	0.5	287	3.04	1.31	0.57	1.7
187	1.98	1.47	0.37	1.2	( 第 11 住居址支群 )					288	2.82	2.00	0.41	2.4
188	1.97	1.45	0.34	1.0	238	4.52	1.89	0.46	4.6	289	2.55	0.95	0.33	0.9
189	1.92	1.41	0.29	0.8	239	4.06	1.62	0.32	2.8	290	1.80	1.41	0.45	1.0
190	1.90	1.42	0.38	0.9	240	3.85	1.65	0.35	2.1	291	1.69	1.31	0.21	0.6
91	1.90	1.31	0.39	0.8	241	3.51	2.05	0.65	4.2	( 表抜 その他の地點 )				
92	1.89	1.32	0.37	0.6	242	3.31	2.15	0.55	3.1	292	2.93	1.59	0.39	1.7

番号	長さ	最大幅	最大厚	重さ	番号	長さ	最大幅	最大厚	重さ	番号	長さ	最大幅	最大厚	重さ
293	2.86	1.61	0.36	1.6	28	1.50	0.98	0.22	0.4	76	2.35	1.81	0.40	1.3
294	2.75	1.42	0.40	1.5						77	2.32	1.62	0.41	0.9
295	2.50	2.38	0.51	2.2	29	2.75	1.79	0.40	2.1	78	2.32	1.56	0.31	1.1
296	2.50	1.69	0.40	1.3	30	2.61	1.80	0.30	1.4	79	2.25	1.56	0.32	0.9
297	2.49	1.89	0.49	2.3	31	2.00	1.63	0.29	0.6	80	2.21	1.61	0.33	1.2
298	2.42	1.71	0.38	1.6						81	2.19	1.65	0.29	0.9
299	2.42	1.66	0.29	1.3	32	3.40	1.57	0.38	2.0	82	2.12	1.60	0.30	1.2
300	2.32	1.75	0.31	1.4	33	3.21	1.69	0.40	1.6	83	2.12	1.45	0.31	0.9
301	2.31	1.56	0.36	1.1	34	3.10	1.65	0.50	2.9	84	2.10	1.77	0.31	1.2
302	2.15	1.80	0.39	1.4	35	3.05	1.90	0.37	2.2	85	2.10	1.41	0.22	0.9
303	2.11	1.46	0.40	1.1	36	2.90	2.00	0.49	2.3	86	2.07	1.71	0.31	1.1
304	2.02	1.16	0.31	0.6	37	2.79	2.09	0.41	2.0	87	2.07	1.21	0.31	0.8
305	2.01	1.87	0.46	1.0	38	2.78	1.90	0.38	1.7	88	2.05	1.71	0.37	0.8
306	1.91	1.63	0.24	0.8	39	2.68	1.73	0.41	1.6	89	2.05	1.49	0.29	0.7
307	1.83	1.57	0.30	1.0	40	2.65	2.00	0.50	1.7	90	2.05	1.49	0.41	0.5
308	1.81	1.82	0.41	1.0	41	2.55	2.11	0.48	2.2	91	2.05	1.21	0.21	0.6
309	1.81	1.31	0.25	0.5	42	2.22	1.48	0.35	1.0	92	2.01	1.43	0.41	1.2
310	1.79	1.42	0.32	0.7	43	2.11	1.42	0.32	0.8	93	1.99	1.52	0.28	0.9
311	1.74	1.11	0.29	0.6	44	2.07	1.70	0.22	0.9	94	1.96	1.62	0.47	1.1
312	1.70	1.11	0.21	0.4	45	2.01	1.30	0.45	1.1	95	1.96	1.50	0.31	0.9
313	1.69	1.41	0.18	0.5	46	1.97	1.49	0.36	0.7	96	1.95	1.55	0.51	1.0
<b>凹基石鑄</b>														
	(第1住居址支群)				48	1.89	1.11	0.25	0.5	98	1.90	1.49	0.24	0.7
1	3.05	1.74	0.55	2.7	49	1.65	1.25	0.27	0.5	99	1.90	1.40	0.20	0.5
2	2.69	1.72	0.31	1.3	50	1.59	1.29	0.31	0.7	100	1.89	1.40	0.32	0.6
3	2.55	1.52	0.30	1.0	51	1.41	1.20	0.25	0.4	101	1.86	1.60	0.39	1.2
4	2.42	1.65	0.32	1.5	52	1.32	1.05	0.25	0.4	102	1.81	1.21	0.31	0.6
5	2.30	1.21	0.24	0.5						103	1.80	1.30	0.36	0.7
6	2.20	1.75	0.35	1.5	53	2.95	1.77	0.52	2.6	104	1.79	1.54	0.28	0.7
7	2.01	1.71	0.48	1.0	54	2.69	1.70	0.41	1.7	105	1.79	1.31	0.38	0.9
8	1.83	1.55	0.31	0.9	55	2.49	1.62	0.35	1.6	106	1.72	1.41	0.38	0.9
9	1.83	1.22	0.25	0.6	56	2.21	1.90	0.32	1.1	107	1.69	1.49	0.28	0.4
10	1.61	1.42	0.37	0.5	57	2.05	1.35	0.26	0.7	108	1.50	1.21	0.39	0.6
	(第2住居址支群)				58	1.95	1.24	0.21	0.6	109	1.43	1.17	0.21	0.4
11	3.14	1.92	0.37	2.3	59	1.88	1.65	0.34	0.9					(第8住居址支群)
12	2.90	1.58	0.51	2.3	60	1.86	1.61	0.27	0.7	110	2.09	1.61	0.36	0.7
13	2.59	1.82	0.40	2.1	61	1.55	1.30	0.30	0.6					(第9住居址支群)
14	2.44	1.75	0.44	1.8						111	4.19	2.02	0.46	2.7
15	2.31	1.47	0.32	0.9	62	3.27	1.72	0.50	2.5	112	3.91	2.21	0.80	3.6
16	2.18	1.85	0.29	1.0	63	3.21	2.05	0.49	2.4	113	3.45	2.10	0.41	2.9
17	2.11	1.41	0.32	0.8	64	2.93	1.75	0.39	2.0	114	3.23	1.60	0.38	1.9
18	1.77	1.54	0.37	1.0	65	2.89	2.02	0.37	1.9	115	3.21	1.92	0.35	1.8
	(第3住居址支群)				66	2.75	1.81	0.29	1.3	116	2.97	2.01	0.58	3.6
19	3.10	1.82	0.25	1.3	67	2.60	1.68	0.31	1.3	117	2.75	1.64	0.22	3.9
20	3.00	1.71	0.34	2.1	68	2.60	1.59	0.23	1.1	118	2.74	1.59	0.29	0.3
21	2.59	1.69	0.40	1.6	69	2.51	1.90	0.32	1.1	119	2.70	2.11	0.49	2.1
22	2.50	1.41	0.35	1.0	70	2.50	1.26	0.38	1.0	120	2.63	1.31	0.30	1.1
23	2.20	1.69	0.31	1.2	71	2.45	1.79	0.35	1.2	121	2.61	1.33	0.36	1.2
24	2.15	1.79	0.35	1.3	72	2.45	1.50	0.37	0.9	122	2.60	1.61	0.32	1.4
25	1.85	1.66	0.32	0.8	73	2.40	1.70	0.34	1.4	123	2.51	1.61	0.38	1.5
26	1.82	1.45	0.21	0.6	74	2.38	1.71	0.32	1.1	124	2.51	1.52	0.30	1.1
27	1.80	0.95	0.15	0.3	75	2.36	1.11	0.22	0.8	125	2.50	1.60	0.35	1.1

番号	長さ	最大幅	最大厚	重さ	番号	長さ	最大幅	最大厚	重さ	番号	長さ	最大幅	最大厚	重さ
126	2.48	1.57	0.50	1.7	177	2.07	1.47	0.31	0.9	227	2.85	1.37	0.36	1.3
127	2.47	1.60	0.39	1.2	178	2.00	1.91	0.48	1.2	228	2.71	2.10	0.49	2.1
128	2.45	1.91	0.45	1.8	179	2.00	1.55	0.33	1.0	229	2.39	1.44	0.31	1.0
129	2.40	1.99	0.45	1.7	180	1.99	1.87	0.23	0.8	230	2.11	1.45	0.25	0.6
130	2.39	1.12	0.32	0.8	181	1.99	1.82	0.43	1.5	231	1.99	1.71	0.51	1.1
131	2.38	1.70	0.40	1.3	182	1.98	1.38	0.25	0.7	232	1.46	1.79	0.32	0.7
132	2.34	1.97	0.35	0.8	183	1.91	1.54	0.38	0.8	(表抜 その他の地点)				
133	2.31	1.69	0.41	1.3	184	1.89	1.31	0.44	0.9	233	3.14	1.61	0.21	1.6
134	2.31	1.68	0.45	1.8	185	1.87	1.62	0.35	0.8	234	2.90	1.91	0.68	3.0
135	2.30	1.61	0.46	1.3	186	1.79	1.31	0.25	0.6	235	2.79	1.41	0.30	1.5
136	2.30	1.61	0.50	1.2	187	1.69	1.26	0.29	0.6	236	2.61	1.83	0.50	2.0
137	2.28	1.45	0.44	1.2	188	1.62	1.61	0.37	0.9	237	2.55	1.56	0.34	1.2
138	2.25	1.87	0.47	1.5	189	1.61	1.41	0.20	0.4	238	2.48	1.26	0.32	1.0
139	2.23	1.81	0.31	1.2	190	1.61	1.31	0.21	0.5	239	2.46	1.90	0.25	1.3
140	2.21	1.86	0.51	2.0	191	1.61	1.29	0.30	0.7	240	2.45	1.61	0.36	1.3
141	2.19	1.35	0.45	1.1	192	1.41	0.98	0.20	0.3	241	2.39	1.70	0.37	1.0
142	2.14	1.27	0.31	0.7	193	1.36	1.21	0.20	0.3	242	2.30	1.14	0.36	1.0
143	2.10	1.75	0.21	0.9	(第 11 住居址 支群)					243	2.29	1.51	0.39	1.3
144	2.06	1.56	0.38	1.2	194	3.52	1.87	0.41	1.8	244	2.17	1.51	0.25	1.0
145	2.05	1.38	0.40	0.7	195	3.38	1.75	0.39	1.7	245	2.10	1.42	0.28	0.8
146	2.03	1.21	0.30	0.7	196	3.03	1.59	0.41	2.2	246	2.00	1.42	0.20	0.5
147	2.02	1.80	0.30	0.8	197	2.86	1.50	0.42	1.2	247	1.89	1.21	0.38	0.9
148	2.00	1.67	0.40	1.3	198	2.81	1.72	0.50	1.6	248	1.88	1.40	0.28	0.8
149	1.98	1.68	0.33	0.8	199	2.76	2.19	0.36	2.0	249	1.81	1.55	0.38	0.9
150	1.97	1.78	0.49	1.1	200	2.70	1.65	0.35	1.4	250	1.81	1.50	0.34	1.1
151	1.91	1.59	0.35	0.9	201	2.67	1.51	0.35	1.2	251	1.80	1.11	0.21	0.5
152	1.88	1.70	0.28	1.0	202	2.65	1.71	0.35	1.6	252	1.61	1.32	0.26	0.6
153	1.85	1.33	0.32	0.9	203	2.62	1.70	0.41	1.7	253	1.59	1.29	0.32	0.6
154	1.81	1.61	0.31	0.7	204	2.60	1.87	0.34	1.6	254	1.54	1.50	0.37	0.8
155	1.81	1.36	0.35	0.8	205	2.51	1.30	0.40	1.2	255	1.51	1.25	0.29	0.5
156	1.68	1.41	0.30	0.8	206	2.50	1.69	0.38	1.2	256	1.46	1.11	0.21	0.3
157	1.45	1.18	0.30	0.7	207	2.43	1.82	0.36	1.4	257	1.39	1.31	0.22	0.5
158	1.32	1.25	0.25	0.4	208	2.41	1.55	0.49	1.6	凸基石 錆				
159	1.30	1.45	0.30	0.7	209	2.31	1.46	0.40	1.3	(第 1 住居址 支群)				
(第 10 住居址 支群)					210	2.31	1.41	0.36	1.2	1	4.67	1.59	0.39	2.7
160	2.74	1.65	0.41	1.2	211	2.30	1.47	0.38	1.2	2	3.81	1.56	0.42	2.9
161	2.62	1.20	0.36	1.3	212	2.27	1.91	0.61	1.7	3	3.61	1.12	0.35	1.6
162	2.61	1.55	0.51	2.3	213	2.20	1.45	0.33	1.3	4	3.51	1.46	0.37	1.9
163	2.58	1.82	0.46	1.9	214	2.15	1.63	0.48	1.4	5	3.32	1.67	0.60	2.6
164	2.51	1.40	0.30	0.8	215	2.14	1.70	0.39	1.0	6	3.18	1.18	0.31	1.2
165	2.40	1.50	0.37	1.0	216	2.08	1.19	0.31	0.9	7	3.11	1.11	0.45	1.3
166	2.31	1.99	0.40	1.2	217	2.05	0.46	0.28	0.8	8	2.70	1.35	0.45	1.5
167	2.31	1.79	0.28	1.0	218	1.94	1.41	0.42	0.8	9	2.63	0.96	0.22	0.6
168	2.29	2.02	0.42	1.4	219	1.92	1.60	0.32	0.6	10	2.17	1.06	0.31	0.7
169	2.29	1.30	0.32	0.8	220	1.82	1.55	0.30	0.8	11	1.85	1.25	0.25	0.6
170	2.28	1.11	0.28	0.6	221	1.81	1.92	0.30	0.8	12	1.55	1.01	0.28	0.5
171	2.24	1.25	0.31	0.8	222	1.80	1.49	0.30	0.6	(第 2 住居址 支群)				
172	2.23	1.20	0.31	0.9	223	1.30	1.40	0.39	0.9	13	4.39	1.63	0.56	4.7
173	2.21	1.74	0.29	1.1	224	1.69	1.41	0.32	0.6	14	3.10	2.04	0.42	2.9
174	2.21	1.45	0.28	0.7	225	1.52	1.52	0.31	0.6	15	3.02	1.91	0.50	2.3
175	2.18	1.80	0.19	0.9	226	1.48	1.36	0.35	0.6	16	2.25	1.69	0.45	1.7
176	2.08	1.39	0.28	0.8	(第12 - 13 住居址 支群)					17	2.13	1.51	0.35	1.1

番号	長さ	最大幅	最大厚	重さ	番号	長さ	最大幅	最大厚	重さ	番号	長さ	最大幅	最大厚	重さ
18	2.00	1.64	0.30	0.9	65	2.16	1.90	0.31	0.9	114	2.35	1.10	0.25	0.7
	(第3住居支群)				66	2.16	1.19	0.32	0.8	115	2.25	1.35	0.31	0.9
19	3.62	1.68	0.52	3.6	67	2.15	1.58	0.33	1.0	116	2.23	1.78	0.36	1.1
20	3.55	2.81	0.57	5.6	68	2.11	1.48	0.29	0.9	117	2.22	1.18	0.32	0.9
21	2.40	2.00	0.21	1.4	69	2.06	1.80	0.42	1.1	118	2.18	1.73	0.45	1.6
22	2.30	1.46	0.40	1.3	70	1.93	1.65	0.42	0.9	119	2.07	1.32	0.36	1.1
23	2.28	1.45	0.30	0.9	71	1.88	1.41	0.33	0.8	120	2.05	1.46	0.28	0.8
24	2.20	0.89	0.25	0.7	72	1.87	1.29	0.30	0.7	121	2.01	1.61	0.46	1.7
25	2.18	1.72	0.39	1.1	73	1.84	1.15	0.29	0.7	122	1.90	1.07	0.31	0.7
26	2.07	1.57	0.25	0.7	74	1.83	1.29	0.21	0.6	123	1.81	1.12	0.31	0.6
27	1.85	1.39	0.34	0.6	75	1.73	1.19	0.31	0.7	124	1.72	1.31	0.31	0.7
28	1.79	1.29	0.22	0.5	76	1.70	1.15	0.25	0.5	125	1.64	1.17	0.31	0.6
	(第4住居支群)				77	1.41	1.08	0.27	0.3	126	1.59	1.16	0.40	0.8
29	3.72	1.20	0.61	2.3	78	1.31	0.90	0.21	0.2	127	1.43	1.22	0.26	0.7
30	2.23	1.41	0.33	1.0										(第11住居支群)
	(第5住居支群)				79	1.71	1.59	0.31	0.8	128	4.35	1.96	0.67	6.2
31	3.67	1.81	0.30	2.1						129	3.06	1.60	0.29	1.7
32	3.05	1.48	0.40	1.7	80	4.20	1.75	0.55	4.5	130	2.95	1.79	0.51	2.0
33	2.90	1.55	0.41	2.3	81	4.10	1.95	0.80	6.3	131	2.94	1.35	0.51	2.1
34	2.59	2.09	0.32	1.8	82	3.10	2.02	0.60	4.2	132	2.48	1.71	0.43	2.0
35	2.29	1.52	0.51	1.6	83	3.06	1.75	0.42	1.8	133	2.40	1.39	0.25	0.9
36	2.27	1.58	0.41	1.2	84	3.05	1.98	0.62	3.5	134	2.31	1.80	0.44	1.8
37	2.09	1.42	0.23	0.9	85	2.89	1.02	0.58	1.5	135	2.24	1.61	0.28	1.0
38	2.05	1.31	0.31	0.8	86	2.65	1.20	0.25	1.2	136	2.19	1.88	0.31	1.0
39	2.00	1.10	0.25	0.5	87	2.60	1.45	0.30	1.2	137	2.00	1.69	0.39	1.1
	(第6住居支群)				88	2.50	1.50	0.28	0.9	138	2.00	1.51	0.38	0.9
40	3.40	1.50	0.40	1.8	89	2.40	2.20	0.39	2.2	139	1.99	1.42	0.30	0.7
41	2.67	1.55	0.38	1.5	90	2.30	1.05	0.30	1.0	140	1.91	1.62	0.31	0.8
42	2.45	1.61	0.45	1.6	91	2.21	2.00	0.41	1.9	141	1.55	1.32	0.31	0.7
43	2.38	1.28	0.41	1.6	92	2.20	0.89	0.30	0.6					(表抜その他の地点)
44	2.00	1.20	0.25	0.7	93	2.12	1.39	0.40	1.1	142	2.51	1.66	0.36	1.5
	(第7住居支群)				94	2.12	1.34	0.36	1.1	143	2.18	1.56	0.29	1.1
45	3.95	2.43	0.70	7.1	95	2.12	1.20	0.35	0.9	144	1.84	1.20	0.25	0.6
46	3.74	1.95	0.48	4.1	96	2.10	1.72	0.40	1.7	145	1.72	1.84	0.35	1.2
47	3.50	2.59	0.71	5.5	97	2.10	1.30	0.31	0.9	146	1.71	1.58	0.21	0.7
48	3.30	1.62	0.61	2.7	98	2.05	1.47	0.34	1.0					有茎石錠
49	3.05	2.12	0.41	2.6	99	2.03	1.20	0.50	1.1					(第1住居支群)
50	3.05	1.56	0.48	2.3	100	2.00	1.50	0.40	-1.1	1	3.98	1.61	0.52	2.8
51	2.71	1.58	0.50	2.2	101	2.00	1.25	0.23	0.8	2	3.19	1.46	0.31	1.4
52	2.68	1.60	0.31	1.5	102	1.92	1.25	0.24	0.7	3	2.45	1.12	0.38	1.0
53	2.58	1.62	0.44	1.8	103	1.90	1.62	0.45	1.3					(第3住居支群)
54	2.55	1.71	0.31	1.3	104	1.90	1.25	0.50	0.9	4	4.20	1.95	0.69	6.2
55	2.51	1.55	0.40	1.2	105	1.85	1.15	0.26	0.6	5	4.11	1.95	0.47	3.4
56	2.51	1.09	0.31	1.1	106	1.80	1.30	0.32	0.9	6	3.55	1.51	0.41	2.5
57	2.36	2.09	0.40	1.6	107	1.72	1.48	0.30	0.9					(第4住居支群)
58	2.33	1.31	0.32	1.1						7	4.19	1.32	0.41	2.2
59	2.32	1.21	0.43	1.1	108	3.58	2.11	0.41	3.0	8	3.20	1.79	0.52	2.0
60	2.27	1.61	0.40	1.2	109	2.95	1.90	0.31	1.8					(第5・6住居支群)
61	2.25	1.97	0.40	1.8	110	2.86	2.28	0.46	2.3	9	5.70	1.89	0.81	8.1
62	2.25	0.92	0.32	0.7	111	2.81	0.75	0.32	0.7	10	4.51	1.60	0.67	4.3
63	2.21	2.11	0.53	1.7	112	2.50	1.61	0.49	1.8	11	3.49	1.11	0.56	2.2
64	2.21	1.46	0.39	1.3	113	2.39	1.21	0.37	0.9	12	3.31	1.32	0.32	1.5

番号	長さ	最大幅	最大厚	重き
13	2.48	1.52	0.35	1.3
14	6.06	2.39	0.40	6.7
15	3.16	1.55	0.31	1.4
16	2.54	1.25	0.31	1.0
17	2.45	1.11	0.29	0.7
( 第 7 住居址支群 )				
18	3.91	1.40	0.37	2.0
19	3.87	1.47	0.32	1.6
20	3.65	1.52	0.66	3.2
21	3.61	1.54	0.61	2.9
22	3.31	1.50	0.63	2.6
23	3.28	1.60	0.32	1.6
24	3.25	1.69	0.51	2.9
25	3.25	1.32	0.30	1.3
26	3.16	1.59	0.49	1.9
27	2.78	1.78	0.50	1.7
28	1.85	0.95	0.22	0.5
( 第 9 住居址支群 )				
29	5.24	1.71	0.56	4.1
30	4.60	1.65	0.40	3.2
31	4.02	1.50	0.49	2.0
32	3.72	1.90	0.52	2.5
33	3.40	1.75	0.31	2.0
34	3.22	1.46	0.40	1.6
35	3.19	1.48	0.30	1.5
36	2.89	1.21	0.32	1.1
37	2.50	1.00	0.41	0.8
38	2.23	1.48	0.45	1.2
39	2.05	1.00	0.24	0.5
( 第 10 住居址支群 )				
40	2.98	1.23	0.46	1.2
41	2.95	1.20	0.32	1.4
42	2.70	1.35	0.30	1.0
43	2.37	0.97	0.25	0.6
44	2.35	1.16	0.37	0.8
45	2.11	1.01	0.30	0.6
46	2.11	0.95	0.38	0.7
47	2.10	1.31	0.37	0.8
( 第 11 住居址支群 )				
48	3.72	1.40	0.48	2.2
49	3.49	1.86	0.25	1.9
50	2.85	1.11	0.51	1.6
51	2.28	0.99	0.31	0.7
52	2.05	1.36	0.31	1.0
( 表掲 その他の地点 )				
53	3.60	1.46	0.31	1.7
54	3.43	1.18	0.50	1.8
55	3.12	1.35	0.45	1.8
56	2.87	0.90	0.35	1.0
57	2.67	1.09	0.40	1.1
58	2.54	1.30	0.25	1.1
59	2.23	1.31	0.31	1.0

大幅、最大器厚、重量を表42に表示し、各形式別計測値の集約を表43、長さと幅の相関表を表44、長さと重さの相関表を表45にそれぞれ表示した。

石鐵の長さで最大は有基石鐵の 6.06 cm、最小は凹基石鐵の 1.30cmである。しかし各形式別の長さを比較すると有基石鐵を除いてはいずれも 1.5 cm 以上 3 cm 未満に集中し、有基石鐵では 2 cm 以上 2.5 cm 未満と 3 cm 以上 3.5 cm 未満の 2か所に集中している。したがって 3 cm を基準としてその比率を計算すると、平基石鐵では 3 cm 未満 88.2%，3 cm 以上 11.8%，凹基石鐵 3 cm 未満 92.6%，3 cm 以上 7.4%，凸基石鐵 3 cm 未満 77.4%，3 cm 以上 22.6%，有基石鐵 3 cm 未満 42.4%，3 cm 以上 57.6%となり、有基石鐵を除くはかはいずれもほぼ類似した傾向を示している。

石鐵の幅で最大は凸基石鐵の 2.81cm、最小は凹基石鐵の 0.46 cm である。しかし各形式別の石鐵幅はほぼ 1 cm 台に集中している。すなわち平基石鐵では 1.25cm 以上 2 cm 未満に集中して 80.5%，凹基石鐵は 84.1%を占めるが、凸基石鐵は 1 cm 以上 2 cm 未満に集中して 86.3%，有基石鐵は 1 cm 以上 1.5 cm 未満に集中して 78.0%となり、長さの割に幅が小さい傾向をみせている。そしてこのことは石鐵の各形式別の長さと幅の相関グラフにもよく表われている。すなわち平基石鐵および凹基石鐵はともに長さ約 2 cm、幅約 1.5 cm を中心に、長さと幅の比率が 1 対 1 ~ 2 対 1 の範囲に集中しているが、凸基石鐵では前者とはほぼ類似した傾向は示すものの、分布数値にはばらつきをみせ、長さと幅の比率 3 対 1 の範囲にもかなりの分布を示す。さらに有基石鐵では形態的および機能的な特性もさることながら、分布の中心は 2 対 1 ~ 3 対 1 の範囲に完全に移行しているのである。凸基石鐵については先の長さの計測値を集約する過程で、分布密度が 2 か所に分散し、また形状も平基に近い三角形のものと、機能的にも平基石鐵や凹基石鐵に近いものと、有基石鐵に近いものの二形式に細分できると思われる。

石鐵の重さは最大は有基石鐵の 8.18 g、最小は凸基石鐵の 0.2 g を測る。概して平基石鐵および凹基石鐵は軽量のものが多く、0.5 g 以上 2 g 未満に集中し、平基石鐵で 81.5%，凹基石鐵では 84.8%を占め、凸基石鐵では 0.5 g 以上 2 g 未満が 78.8%を示すが、2 g 以上 3 g 未満も 11.6%と比較的の比率が高くなり、有基石鐵では 2 g 未満 62.7%に対し、2 g 以上が 37.3%

表43 用木山遺跡出土の完形石鎚計測値集約一覧

## ●石鎚の長さ形式別集約表

形式	長さ				cm	計
	1	2	3	4		
平基石鎚	14	82	113	67	26 37 (88.2%)	0 0 (0%)
	276	(88.2%)	37 (11.8%)			313
凹基石鎚	20	75	89	54	16 19 (92.6%)	0 0 (0%)
	238	(92.6%)	19 (7.4%)			257
凸基石鎚	3	29	59	22	15 113 (77.4%)	0 0 (0%)
	113	(77.4%)	33 (22.6%)			146
有茎石鎚	0	1	13	11	16 25 (42.4%)	1 3 (5.1%)
	1	13	11	16 31 (52.5%)	2	1 3 (0.4%)
計	37	187	274	154	73 652 (84.1%)	4 120 (15.5%)
						3 (0.4%)
						775

## ●石鎚の幅形式別集約表

形式	幅				cm	計
	0	0.5	1.0	1.5		
平基石鎚	0	0	0	2	28 2 (0.6%)	94 280 (89.5%)
	2	(0.6%)			59	59 (9.9%)
凹基石鎚	0	1	0	3	23 4 (1.6%)	74 239 (93.0%)
	1	(1.6%)			46	46 (5.4%)
凸基石鎚	0	0	0	6	30 6 (4.1%)	36 126 (86.3%)
	0	(4.1%)			43	17 17 (9.6%)
有茎石鎚	0	0	0	5	13 5 (8.5%)	19 54 (91.5%)
	0	(8.5%)			8	8 0 (0%)
計	0	1	0	16	94 17 (2.2%)	223 699 (90.2%)
					252	130 59 (7.6%)
					130	
					46	
					7	
					5	
					1	
						775

## ●石鎚の重さ形式別集約表

形式	重さ				kg	計
	0	1	2	3		
平基石鎚	7	96	102	57	22 103 (32.9%)	11 33 (10.5%)
	96	(32.9%)	102 159 (5.08%)	57 33 (10.5%)	0	18 (5.8%)
凹基石鎚	11	105	82	31	19 116 (45.1%)	6 25 (9.7%)
	105	(45.1%)	82 113 (44.0%)	31 25 (9.7%)	6	3 (1.2%)
凸基石鎚	2	55	33	27	11 57 (39.1%)	6 60 (41.1%)
	55	(39.1%)	33 17 (11.6%)	27 17 (11.6%)	6	4 (2.2%)
有茎石鎚	0	10	15	12	7 10 (16.9%)	7 27 (45.8%)
	10	(16.9%)	15 14 (23.7%)	12 8 (13.6%)	7	2 (1%)
計	20	266	232	127	59 286 (36.9%)	30 359 (46.3%)
					17 89 (11.5%)	4 41 (5.3%)
					4	
					2	
					1	
						775

表44 用木山遺跡出土石鎌の長さと幅の関係

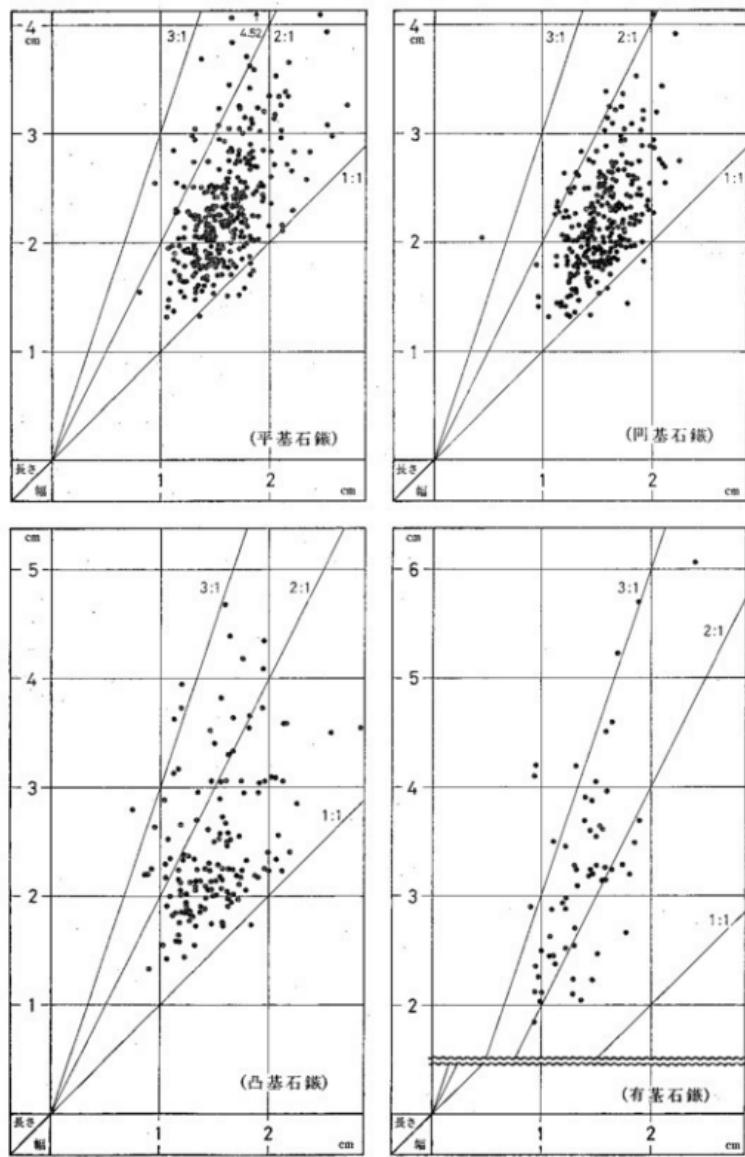
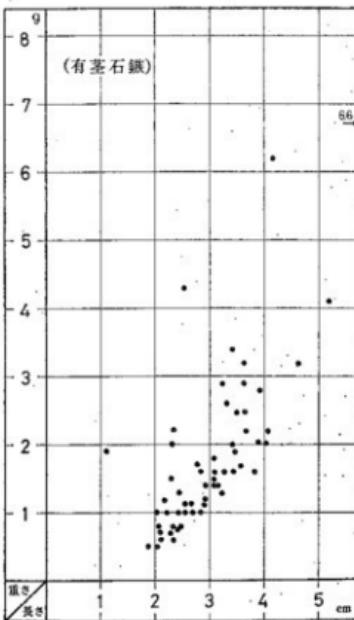
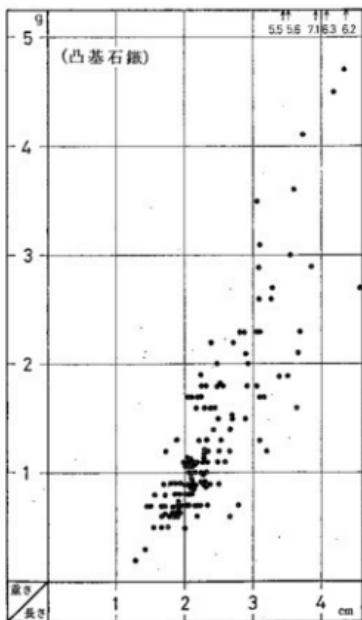
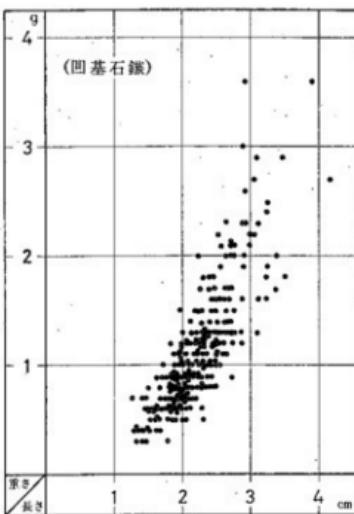
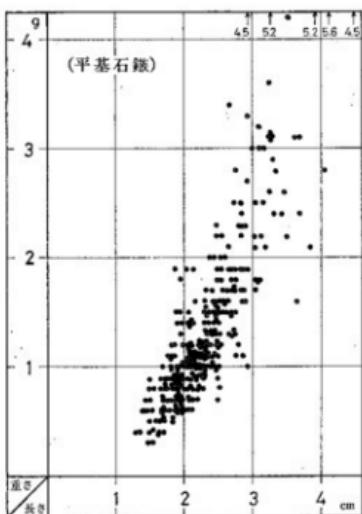
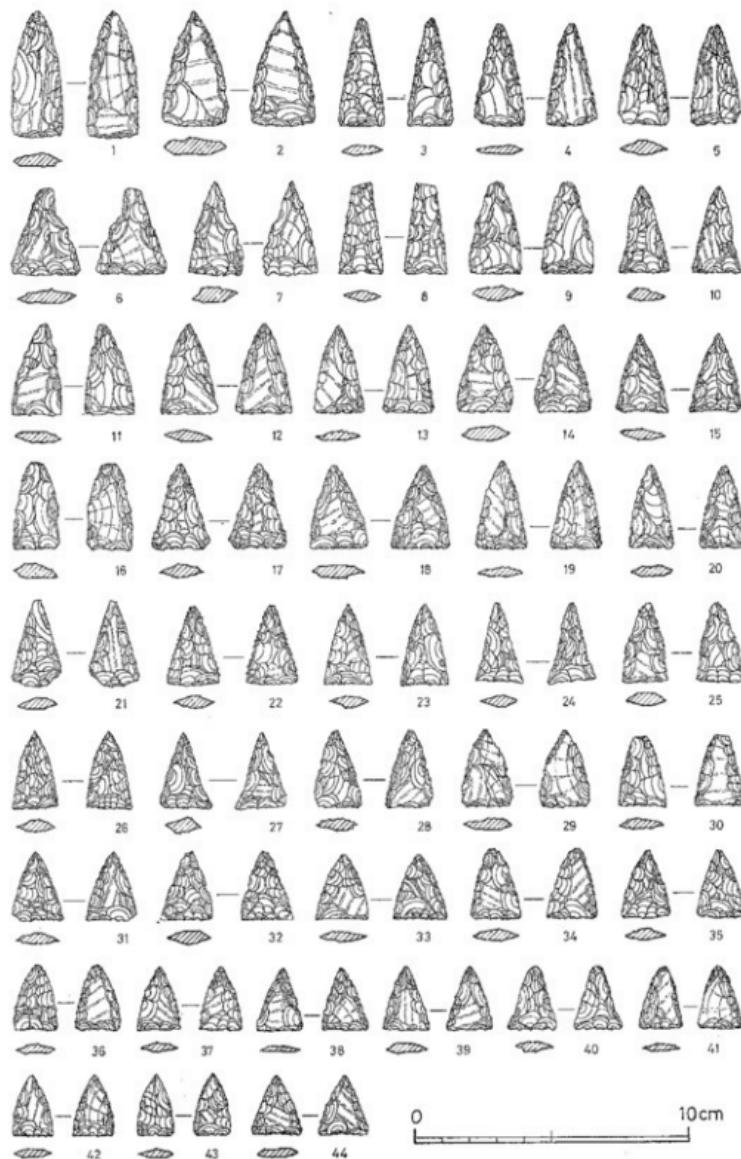
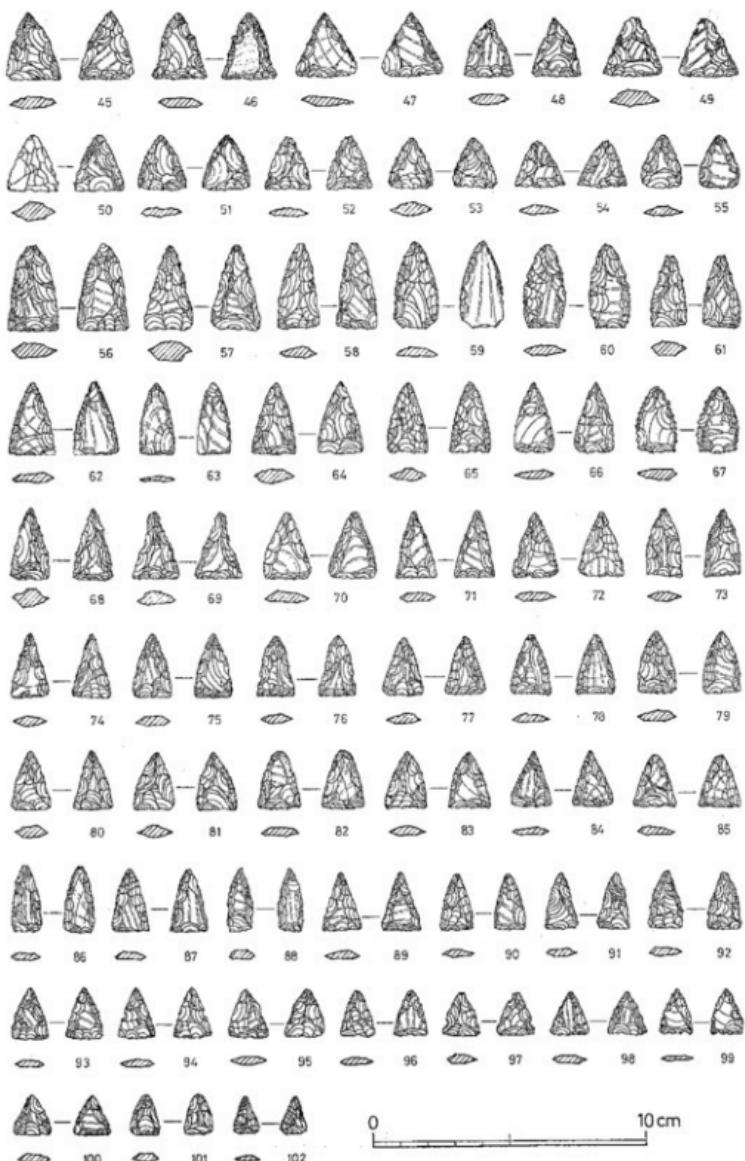


表45 用木山遺跡出土石鎌の長さと重さの関係

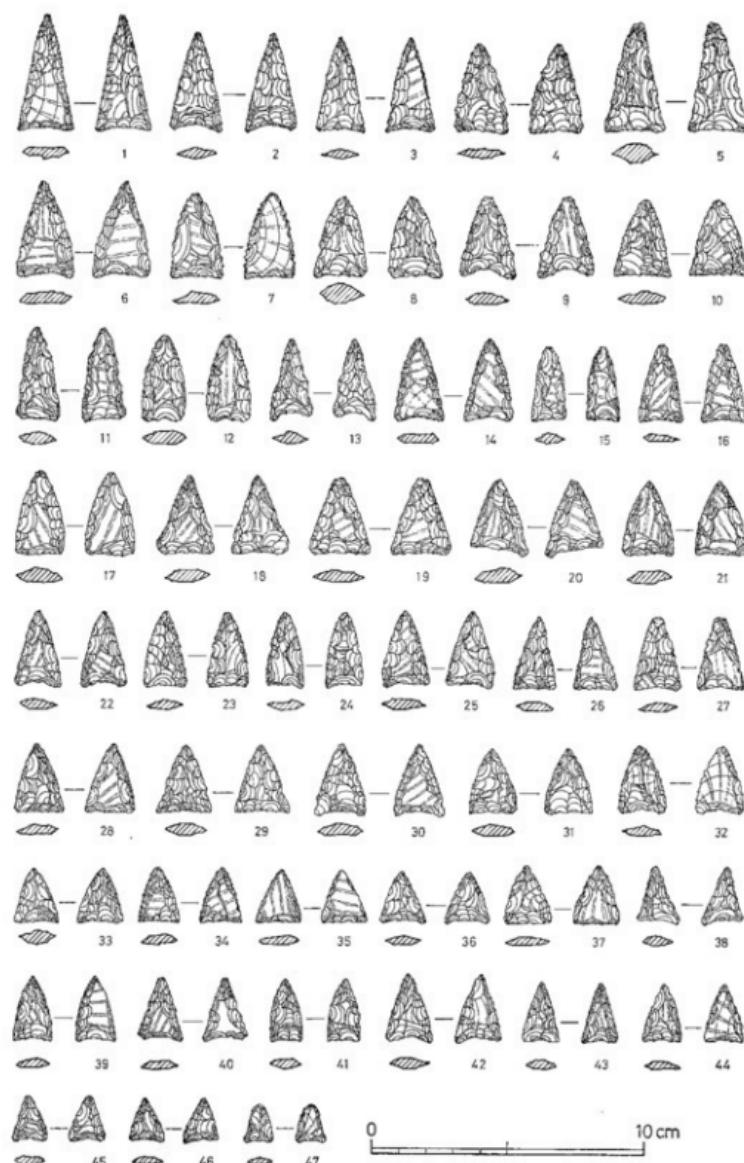




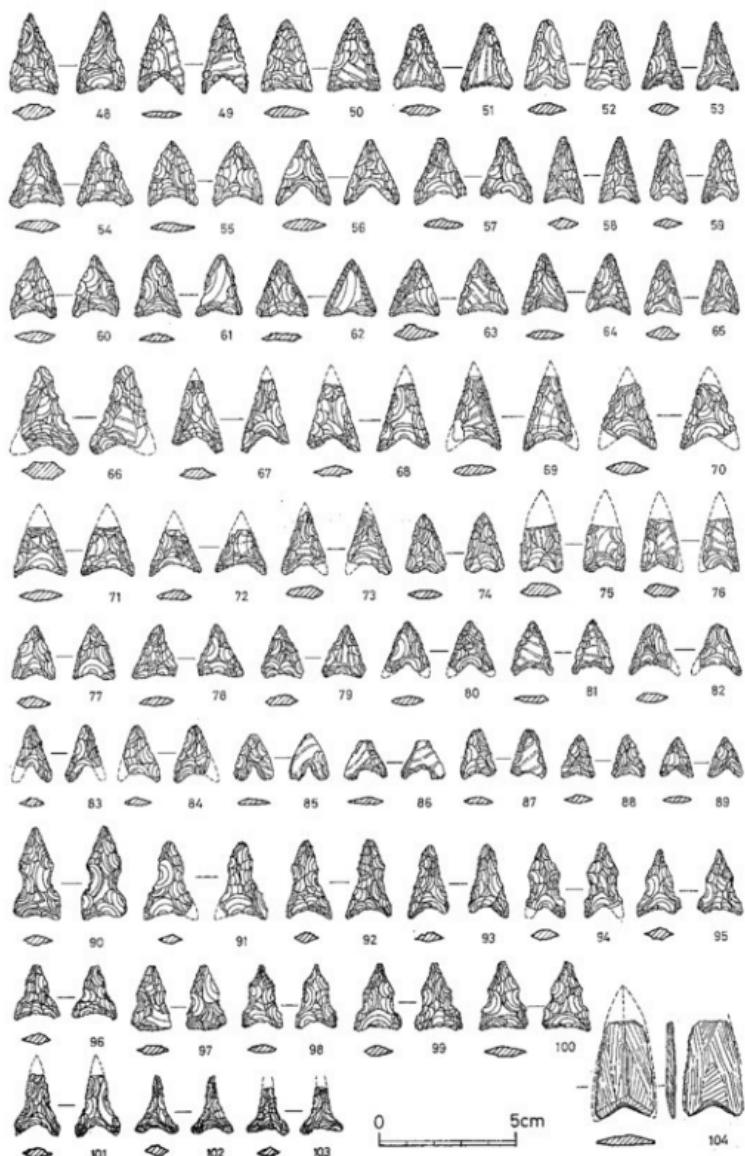
第246図 用木山遺跡出土の平基石錐実測図(1)



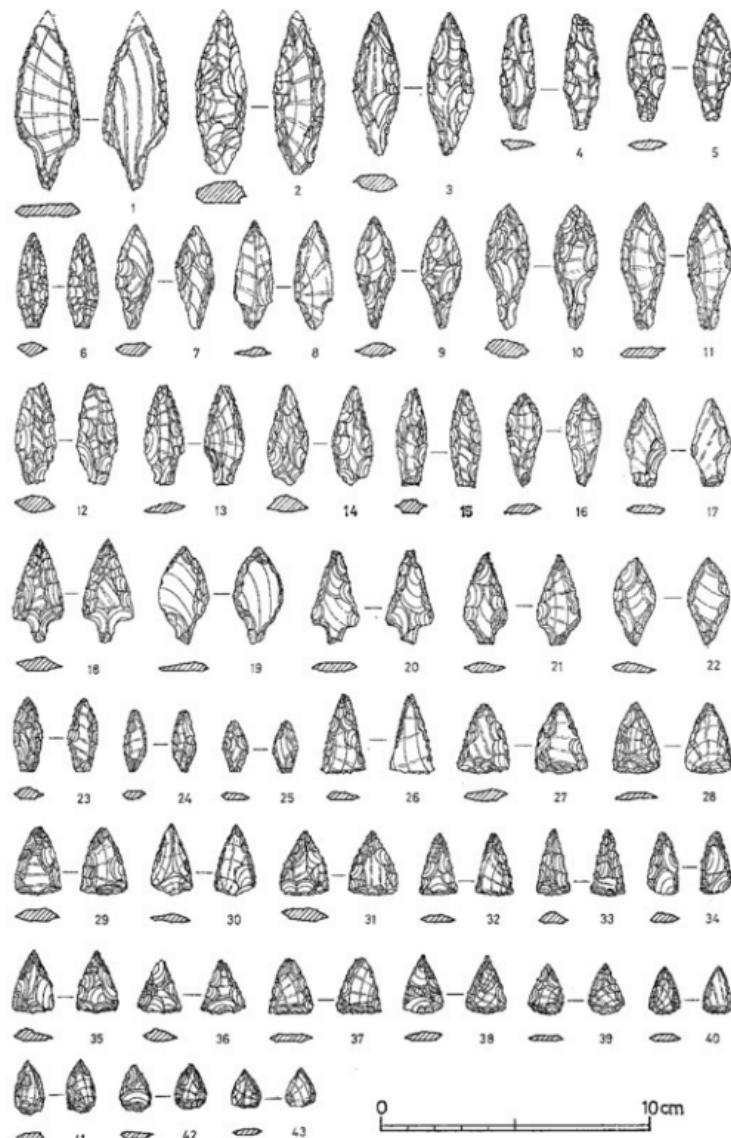
第247図 用木山遺跡出土の平基石錐実測図(2)



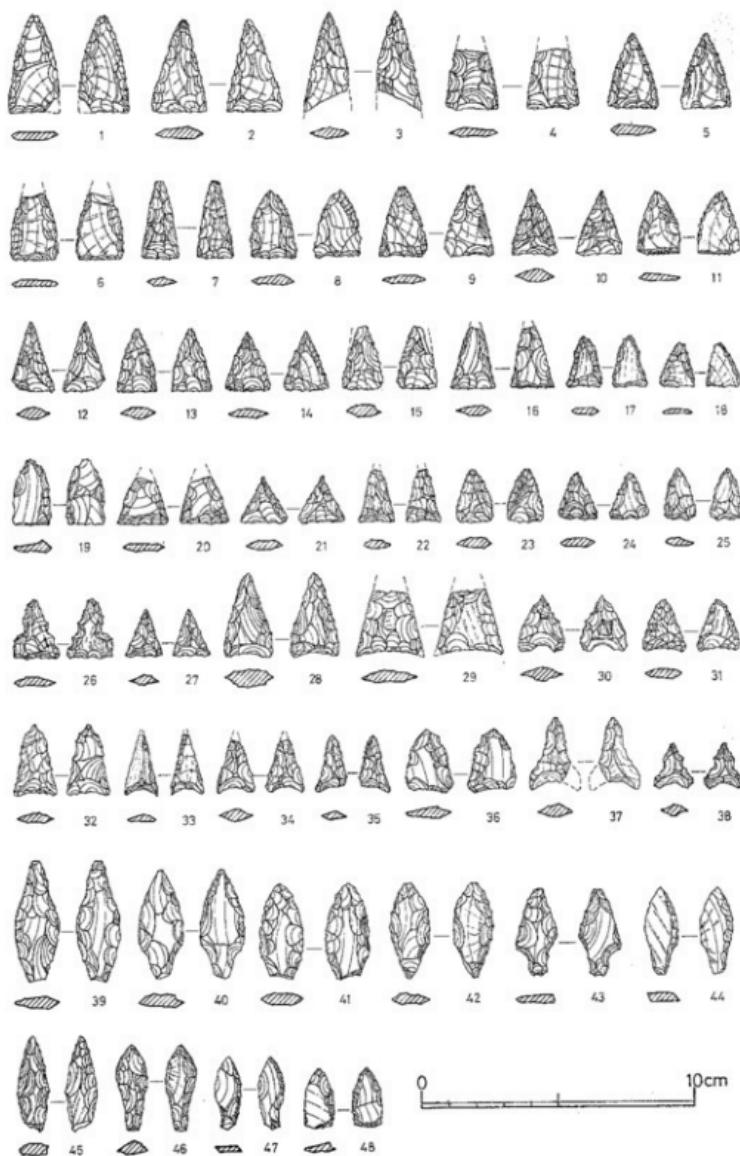
第248図 用木山遺跡出土の凹基石器実測図(1)



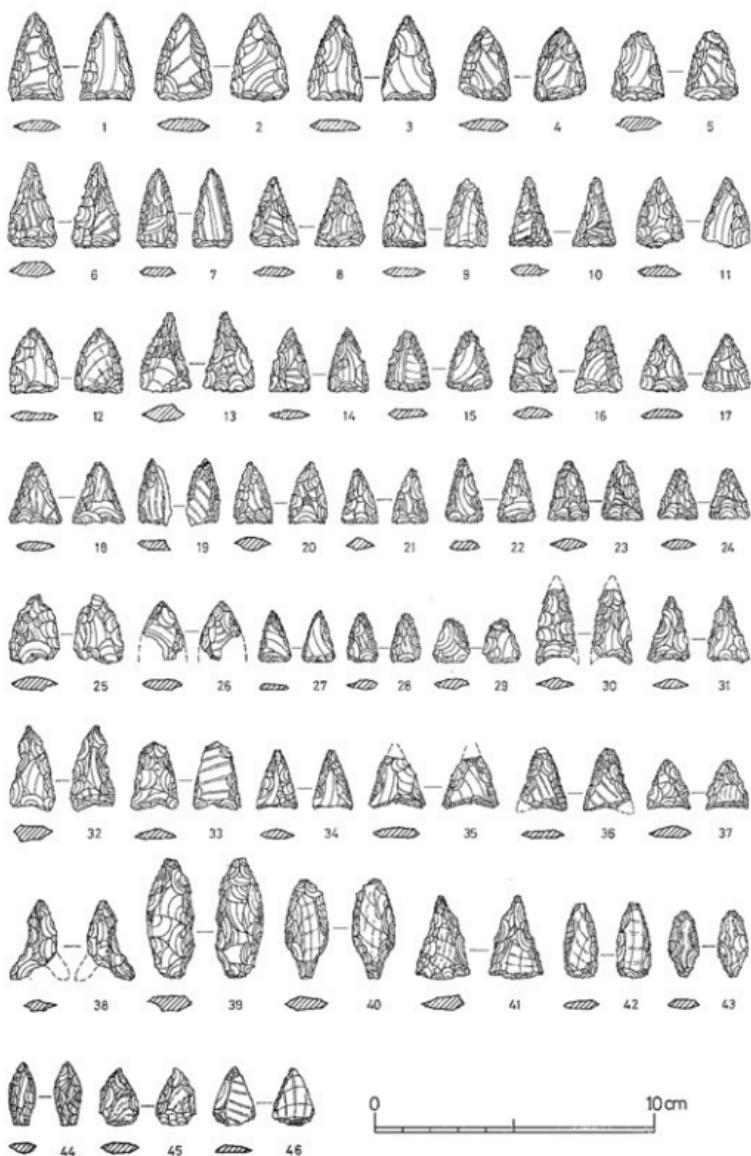
第249図 用木山遺跡出土の凹基石歯実測図(2)



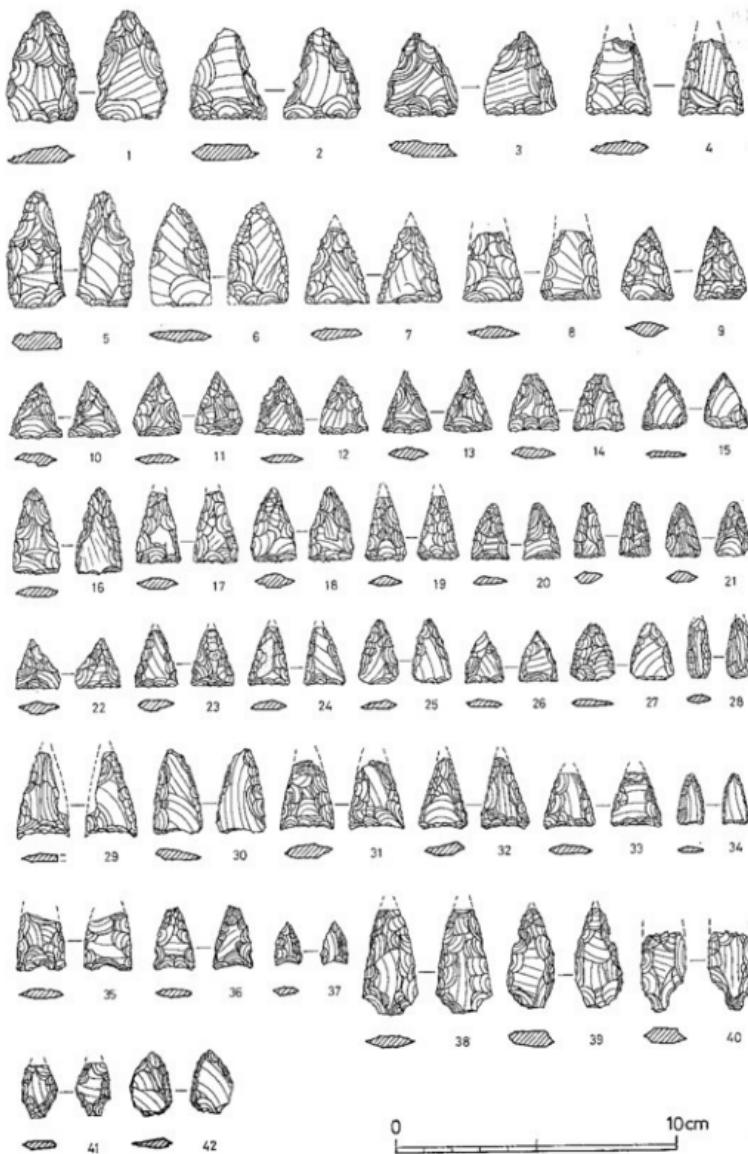
第250図 用木山遺跡出土の凸基・有茎石器実測図



第251図 用木第1号墳墳丘内出土の石器実測図



第252図 用木山遺跡山上部出土の石器実測図



第253図 岩田第8号墳墳丘内出土の石鏃実測図

表46

用木山遺跡出土の石鎚破損部位別個体数一覧

破損部位		個体数	百分比
1	△	先端部を欠損するもの	410
2	△	基部の一隅を欠損するもの	166
3	△	基部の両隅を欠損するもの	4
4	△	基部を欠損しているもの	91
5	△	先端部と基部の一隅を欠損するもの	34
6	△	中間部のみ遺存するもの	16
7	△	縦に割れて一方を欠損するもの	13
8	△	その他の鎌身の一部を欠損するもの	6
計		740	(100%)

とさらに増大する。このことは石鎚の長さと重さの相関グラフを見ても明白である。平基石鎚および凹基石鎚はともに、長さ約2cm、重さ約1gを中心として、ほとんど同様の分布状況を示しているが、凸基石鎚で類似はするもののやばらつきがみられ、有茎石鎚ではさらにその開きは大きくなっている。

次に折損出土の石鎚について若干ふれてみたい。用木山遺跡出土の石鎚1328点について、完形に近いものも含めて厳密に観察すると、部分的に欠損していたり、大きく折損して断片的な破片となっている石鎚が多く目につき全出土石鎚の55.7%におよぶ740点を検出した。これらの破損石鎚について欠損部位別に集計したのが表46である。石鎚先端部を欠失しているものが最も多く410点と55.4%を占め、次いで基部隅角の一端を欠くもの166点22.4%である。発射された石鎚にとって最も衝撃が大きく、折損しやすい先端部および基部隅角を欠損しているものを合計すると614点となり、全破損石鎚の83%を占める。

集落址内に多量の折損石鎚が出土することについては幾つかの推論が成り立つ。本遺跡の場合は、各住居址支群単位で打製石器の製作および再生加工が行なわれていることから、その過程での折損品の可能性とか、また射とめた獣物とともに集落内に持ち帰った可能性もその一端である。しかし、出土した折損石鎚を観察すると、先端部を強い衝撃によって基部の方向に向けて剝離した状態を示すものや、完形を保つものの中にも使用痕を残す石鎚や、先端部が折損した石鎚を再生加工して刃をつくりなおした形状のものもかなり見受けられる。破損石鎚の量が多いうえにその多くが使用痕を有することなどから併せ考えて狩りなどに由来して一度発射したものと、矢柄とともに回収して持ち帰り、点検整備しながらして、破損品は交換したり補修作業が行なわれたと推察され、そのためもあってこうした破損石鎚が多量に検出されるものと思われる。

なお本遺跡出土の石鎚の中にただ1点のみであったが、粘板岩製の磨製石鎚が検出され注目された。第249図104がそれである。準黒色を呈する軟質の粘板岩で製作られ、先端部を欠損している

が、全面よく研磨された四基二等辺三角形の石歯である。器壁は薄く平部の一面には縦方向に中心鋸が認められるが、裏面には鋸ではなく扁平なつくりである。現存長3.4cm、基部幅2.2cm、器厚0.32cmを測り、原形推定長約4.7cm程度と思われる。器表面に擦痕と刃部に細かい刃こぼれ状の打ち欠けが多く、基部中央部の磨滅が著しい。

#### 12. 石匙（図254、図版114）

石匙は4点出土した。いずれもサヌカイト製打製石匙で、頂部につまみをもつ横長の形である。  
(1)平部の一面は大削離面をほとんどそのまま残し、あまり加工されていない。他の一面から敲打調整により整形されている。刃部は直線状を示し、つまみは背部の一方にやや片寄せてつけられ、頂部を左右に拡張している。(2)原石を剥離した際の適当な剝片を選んで、あまり加工を加えないで整形利用した程度の荒いつくりである。表裏両面とも大削離面をほとんどそのまま残す三角形状を呈し、施刃の調整もあまり行なわれていない。(3)平部の一面は大削離面をほとんど残し、敲打整形は頂部のつまみ周辺部のほかは、ほとんど一方からのみ施され、刃部も片刃状に角度をもち外彫している。全体的に均整のとれたつくりである。(4)刃幅2.64cmの小形品である。頂部は折損していく不詳であるが、現存部の敲打整形は表裏両面から施されている。

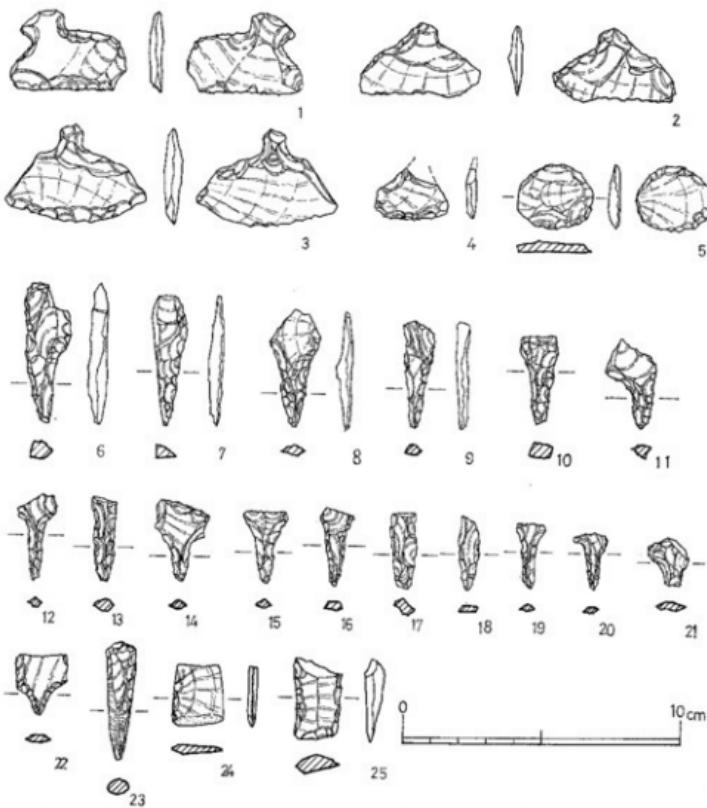
#### 13. 小形打製円形刃器（図254、図版114）

長径2.74cm、短径2.35cmの扁平な扁円形を呈するサヌカイト製打製石器（図254-5）1点である。平部の一方は大削離面をそのまま残し、主として他の一面から敲打整形されている。外縁部全体に施刃されているが、施刃は一方から強く、大削離面を残す面からは裏打をする程度で、一見して片刃状を呈している。具体的な使途については明らかでないが、概略的には前述の石匙と類似した特性をもつことから、集計処理のうえでは石匙として取り扱った。

#### 14. 石錐（図254、図版114）

総計20点を発見した。図の粘板岩製半磨製品1点のほかは、すべてサヌカイト製打製品である。整形精度や形状などの個体差や、すでに折損していく詳細の明らかでないものも多く一概にはいえないが、A：幅広の頭部に細い錐部がつき頭部と錐部の区別が明瞭なもの（11・12・14）。B：頭部が幅広に拡張しているものの太い錐部がつき、頭部と錐部の区別が明瞭でないもの（8～10）。C：頭部の拡張はあまりなく、先端部になるにつれ漸移的に細まる棒状のもの（13・17・18）の3類型に大別される。

整形手法は適当な形状を示す剝離片を選んで、あまり加工を施すことなく荒い整形のまま利用したもの（6・7・9）から、細かい敲打調整を繰り返していねいなつくりのもの（12～14）がある。概してA形のものが整形はていねいで、B形が荒いようである。また石匙の折損品を石匙のつまみの部分をそのまま頭部に利用して再生加工したものいや、平基石錐と類似した形状を呈するものもあり注目された。粘板岩製の半磨製石錐は、錐部横断面は梢円形、平面形は縦長の二等辺三角形をした均整のとれた棒状石錐である。器表全面を研磨整形した後、頭部を敲打製形してやや



第254図 用木山遺跡出土の石匙・石錐等実測図

扁平にしたつくりである。そのため錐先から約3分の1ぐらいまでは全面研磨され、敲打整形された頭部にも側縁部等に研磨痕を部分的にとどめている。

#### 15. 打製錐先状刃器 (図254)

頭部を折損していて全形は明らかでないが、器厚が薄く扁平な長方形を呈し、小口の一方に施刃を施した蟹足状の小形石器2点を検出した。

④部は両面とも火刷離面を多く残すが、細かな敲打整形後刃部および両側縁部は研磨調整されている。刃部は両面から砥ぎだされているが、一方からが強く片刃状を呈して鋭い。箇頭部は器厚0.63cmとやや部厚く、形状もやや荒いが、両側辺および刃部の敲打調整は細かく鋭い。ともに形式的には超小形の扁平片刃石斧の形状を示し、現況でも錐あるいは錐先としての機能を充分に果す形態の刃を有するが実際の用途については明らかでない。これと類似するものは隣接する惣谷遺跡第

表47 用木山遺跡出土の打製石匙一覧

(単位cm)

番号	出土地点	現 状	石 材	現存部幅	現存部高	現存部厚	備 考
1	R 3 遺跡	完 形	サスカイト	4.15	2.85	0.50	有茎石匙
2	R 11 遺跡	完 形	サスカイト	4.40	2.60	0.40	有茎石匙
3	R 11 遺跡	完 形	サスカイト	5.04	3.52	0.63	有茎石匙
4	R 9 遺跡	茎部欠損	サスカイト	2.64	1.80	0.37	有茎石匙茎部欠損
5	Y 82 遺跡	完 形	サスカイト	2.74	2.30	0.40	不整梢円形

表48 用木山遺跡出土の打製石錐一覧

(単位cm)

番号	出土地点	現 状	石 材	現存部長	最 大 幅	最 大 厚	備 考
6	R 10 遺跡	ほぼ完形	サスカイト	5.05	1.70	0.60	頭部拵大不定形
7	Y 82 遺跡	完 形	サスカイト	4.65	1.20	0.49	棒状形
8	Y 82 遺跡	完 形	サスカイト	4.20	1.80	0.52	頭部拵大扁菱形
9	R 13-H 8	完 形	サスカイト	3.82	1.10	0.42	棒状形
10	R 9 遺跡	完 形	サスカイト	3.15	1.40	0.55	頭部拵大二等辺三角形
11	R 9 遺跡	完 形	サスカイト	3.05	1.70	0.57	頭部拵大やや不整形
12	R 2 遺跡	完 形	サスカイト	2.96	1.35	0.30	頭部拵大錐部細身
13	R 10 遺跡	完 形	サスカイト	3.00	0.90	0.42	棒状形頭部欠損?
14	R 9 遺跡	完 形	サスカイト	2.95	1.90	0.32	頭部拵大錐部再製?
15	R 3 遺跡	完 形	サスカイト	2.60	1.59	0.42	頭部拵大二等辺三角形
16	R 1 遺跡	完 形	サスカイト	2.74	1.18	0.31	頭部やや拵大
17	R 2 遺跡	錐 部 片	サスカイト	2.70	0.90	0.68	棒状形頭部欠損?
18	R 9 遺跡	刃 部 片	サスカイト	2.65	0.75	0.24	薄形、頭部折損か?
19	R 9 遺跡	完 形	サスカイト	2.28	1.02	0.23	小形品、頭部拵大二等辺三角形
20	R 1 遺跡	刃 部 片	サスカイト	2.00	1.20	0.22	小形品、頭部拵大欠損か?
21	R 5 遺跡	頭 部 片	サスカイト	1.70	1.45	0.35	錐部折損頭部拵大
22	Y 82 遺跡	頭 部 片	サスカイト	2.10	1.80	0.23	頭部拵大扁平、錐部再製か?
23	R 7 遺跡	完 形	サスカイト	4.20	1.08	0.50	棒状形、均整良好

表49 用木山遺跡出土打製石鑿状刃器一覧

(単位cm)

番号	出土地点	現 状	石 材	現存部長	最 大 幅	最 大 厚	備 考
24	R 1 遺跡	完 形	サスカイト	2.18	1.85	0.31	台形、刃部のみ研磨
25	R 1 遺跡	完形か?	サスカイト	2.35	1.70	0.63	長方形、頭部折損か

2地点からも1点出土している。

#### 16. 石錘 (図255・256、図版112)

石錘は計17個を発見した。扁球形の素材に鉢巻状に一周する浅い溝を続らしたもの（1～3など）7個、扁球形の素材の側面に研磨あるいは敲打を加えた程度のもの（5など）4個、扁平な楕円形の素材の短辺に打撃を加えて抉りを入れたもの（7～10など）6個である。石材および計測値については表50に示したとおりである。石材は大半が砂岩を用い、なかに花崗岩および砂礫岩各1点が存在する。また大きさは小さいものが長径3.65cm、大きいものでは推定長径約10cmまでさまざま、いずれも川原などで採集した適当な大きさと形状の自然石を利用して、若干の加工を施した程度である。

(1)約2分の1大に半裁されているが、断面径7.96cm×6.64cm、推定長約10cmの本遺跡発見の石錘中最大のものである。体部中央に縦長方向に敲打によって施された、幅約1.7cmの浅い回溝1条が続る。(2～4)大小の差はあるが前記(1)とほぼ同巧のつくりである。ただし(4)の体部の凹溝はあまり強くなく、溝としては認められない程度である。(5)体部を横巻きに回溝を続らすが、側縁部のみに抉状に凹部が認められ、平部では鉢巻状の研磨痕が認められる程度である。(6)全長3.74cmの小形品、回溝は体側縁部を絞る形に施されている。(22・23)は体部から側縁にかけてほぼ中央部を鉢巻状に回溝を続らしている。

(7・8)扁平な不整円形の石材を利用しているが、短辺部の敲打抉りは荒く大きい。(9・24・25)は長楕円形の川石利用であるが、両短辺小口部の敲打抉りは弱く小さい。なかでも(24)は敲打抉りを施した後にその抉り面を研磨整形した形跡が認められる。(10)長径4.8cmの小形品である。整形手法は前述の(9)とほぼ同巧である。

#### 17. 円錐 (図255)

前述の石錘のほかにも、親指先大から鶏卵大程度の円錐21個が検出され注目された。いずれも扁球形あるいは楕円球形をした、比較的均整のとれた丸味のある自然川原石である。本遺跡の立地する丘陵地は花崗岩地質の単質地形で、こうした川原石は存在するはずがなく、明らかに何らかの目的をもって本集落址内に持ち込まれたものである。これらの円錐の中には短辺小口部に打痕や磨耗痕を顕著に残すものもあり、叩き石とか擂り石、あるいは回溝はもたないが石錘として利用されたと思われるものも幾つか見受けられるが、その実際の使途については明らかでない。出土例のうち幾つかを選び図255(11・12)に実測図示し、材質とか計測値等については表51に示したので参照願いたい。

#### 18. 叩石・槌石等 (図256～267、図版117・118)

本遺跡の発掘調査にともない、川原などから適当な大きさ形状の自然石を採集してきて、自然石のままかあるいは若干の整形加工を施した程度で、いわゆる叩く・搗く・擂るといった用途に供されたと考えられる、敲打痕とか磨耗痕などの使用痕が認められるものを83点検出した。それに使用

表50 用木山遺跡出土の石錘一覧

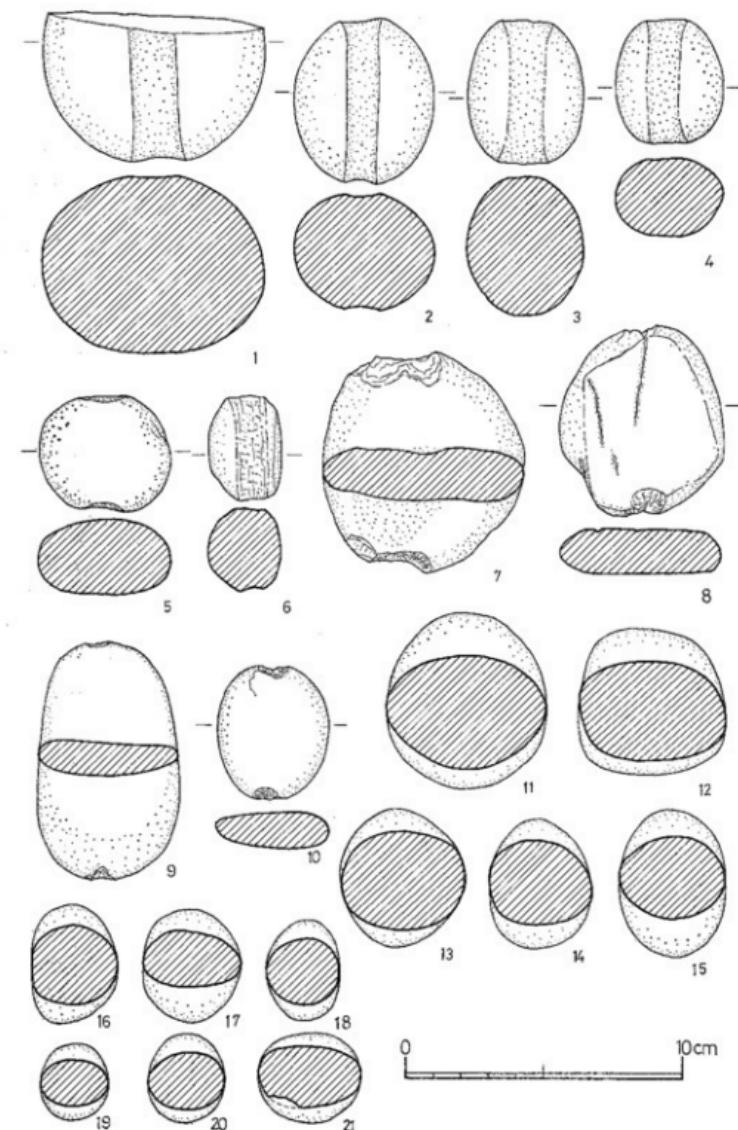
(単位cm)

番号	出土地点	現状	石材	現存長	最大幅	最大厚	備考
1	R 5 遺跡	約土大	花崗岩	5.10	7.96	6.46	体平に溝
2	R 11 遺跡	完形	砂岩	5.90	5.00	4.05	体平に溝
3	R 7 遺跡	完形	珪質頁岩	5.22	4.12	5.00	体側に溝
4	R 6 遺跡	完形	砂岩	4.50	3.90	2.86	体平に溝
5	R 9 遺跡	完形	砂岩	4.80	4.10	2.65	体側に抉り
6	R 9 遺跡	完形	砂岩	3.74	3.01	2.65	体側に溝
7	R 9 遺跡	完形	砂岩	7.85	7.29	1.70	扁平、小口に打ち欠き
8	R 2 遺跡	完形	砂岩	6.79	5.95	1.70	扁平、小口に打ち欠き
9	R 9 遺跡	完形	砂岩	8.55	5.17	1.62	梢円形、小口に打ち欠き
10	R 7 遺跡	完形	砂岩	4.81	4.10	1.24	梢円形、小口に打ち欠き
21	R 11 遺跡	完形	砂岩	3.65	3.20	2.30	体側に溝
22	R 4-H10	ほぼ完形	砂岩	7.28	5.58	4.10	体平に溝
23	R 3 遺跡	完形	砂岩	6.90	5.30	5.45	体平に溝
24	R 8-H8	完形	砂岩	9.07	4.20	1.50	扁平、小口に打ち欠き
25	R 3 遺跡	完形	砂岩	7.90	4.35	1.80	扁平、小口に打ち欠き
26	R 7-H2	完形	砂岩	5.20	4.98	4.20	体側に溝
27	R 10 遺跡	完形	砂岩	4.81	4.18	3.20	体側に溝

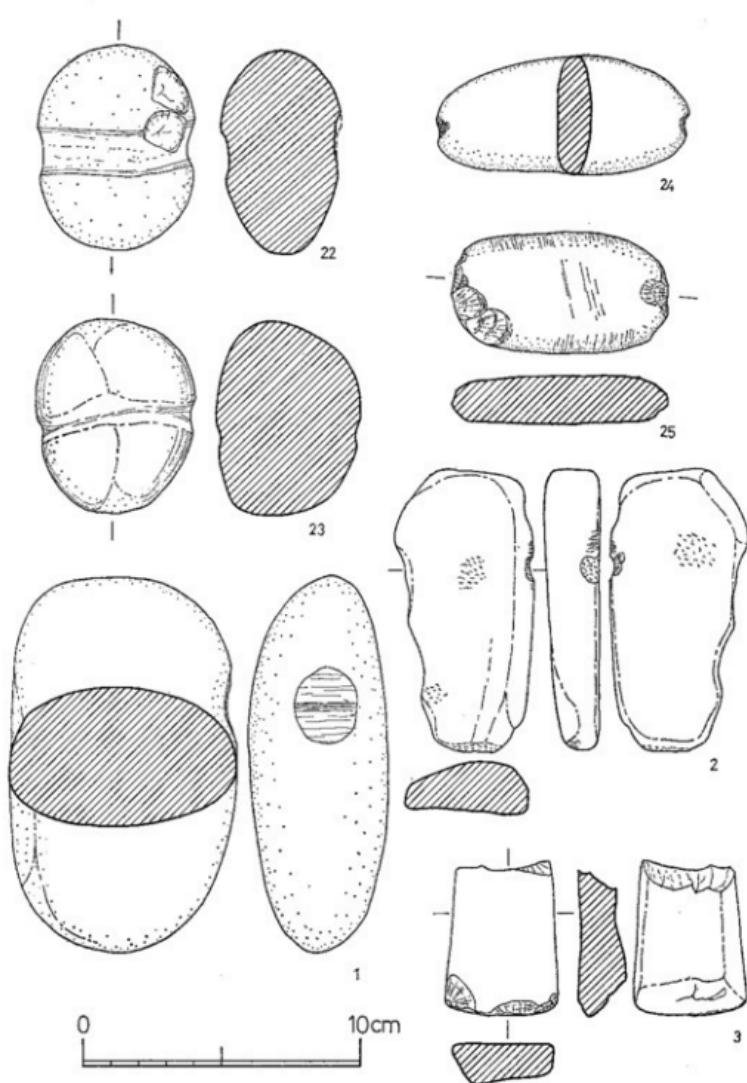
表51 用木山遺跡出土の円礫一覧

(単位cm)

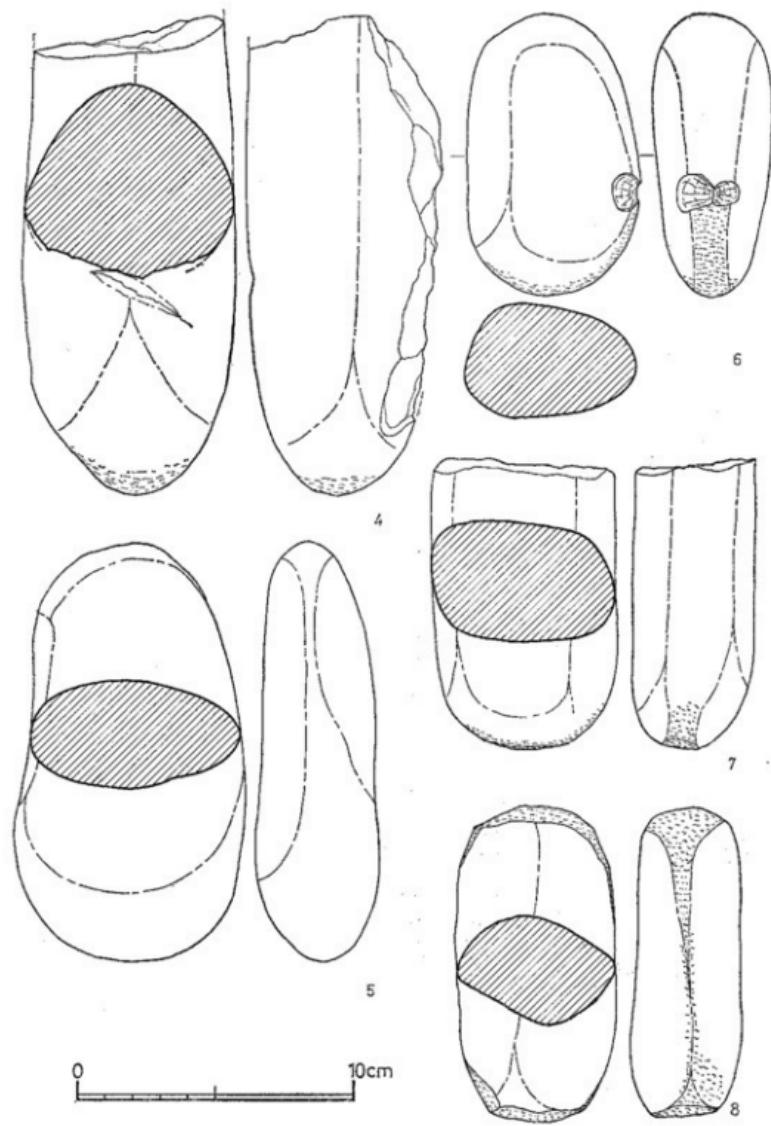
番号	出土地点	現状	石材	現存長	最大幅	最大厚	備考
11	R 11 遺跡	完形	砂岩	6.24	5.80	4.05	小口に磨耗痕
12	R 10 遺跡	完形	砂岩	5.18	5.10	3.52	—
13	R 11 遺跡	完形	砂岩	4.80	4.50	3.60	小口に打痕
14	R 9 遺跡	完形	砂岩	4.52	3.72	3.00	—
15	R 10 遺跡	完形	砂岩	5.21	3.80	3.00	小口に磨耗痕
16	R 2 遺跡	完形	砂岩	4.13	3.05	2.92	—
17	R 11 遺跡	完形	砂岩	4.05	3.55	2.05	小口に磨耗痕
18	R 10 遺跡	完形	砂岩	3.60	2.60	2.40	—
19	R 11 遺跡	完形	砂岩	2.71	2.36	1.62	—
20	R 11 遺跡	完形	砂岩	3.15	2.80	1.95	—
28	R 11 遺跡	完形	花崗岩	4.40	3.85	3.00	—
29	R 10 遺跡	完形	砂岩	4.30	3.90	2.40	—



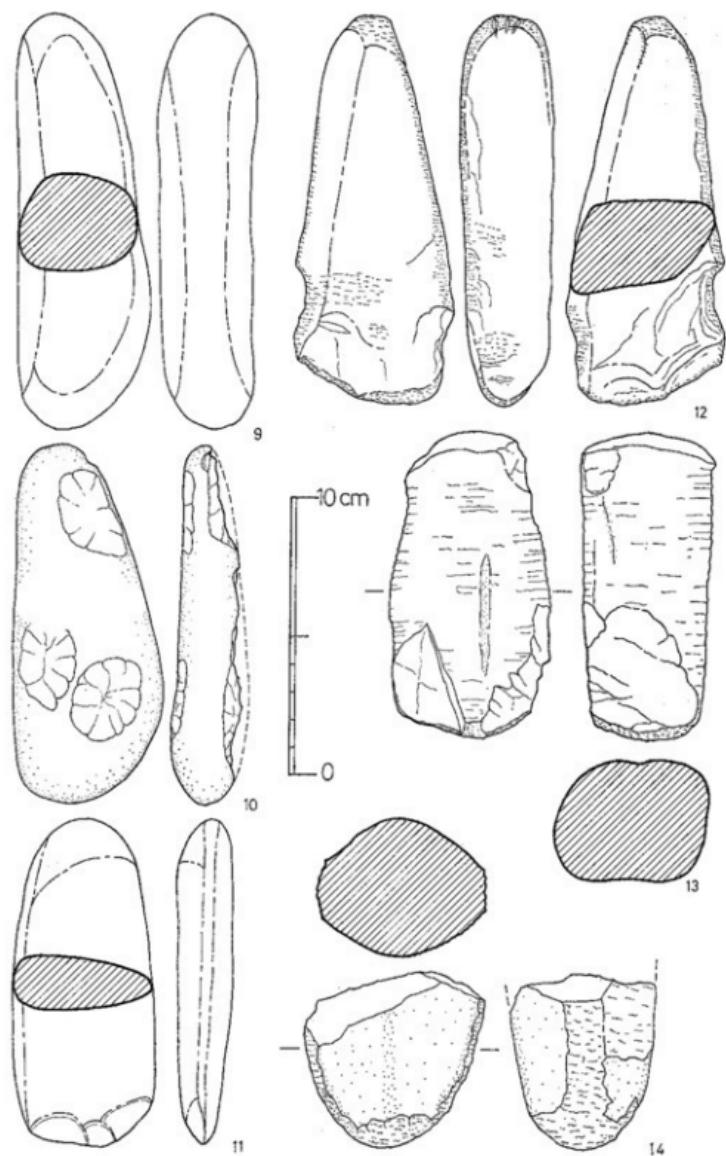
第255図 用木山遺跡出土の石錘・円礫実測図



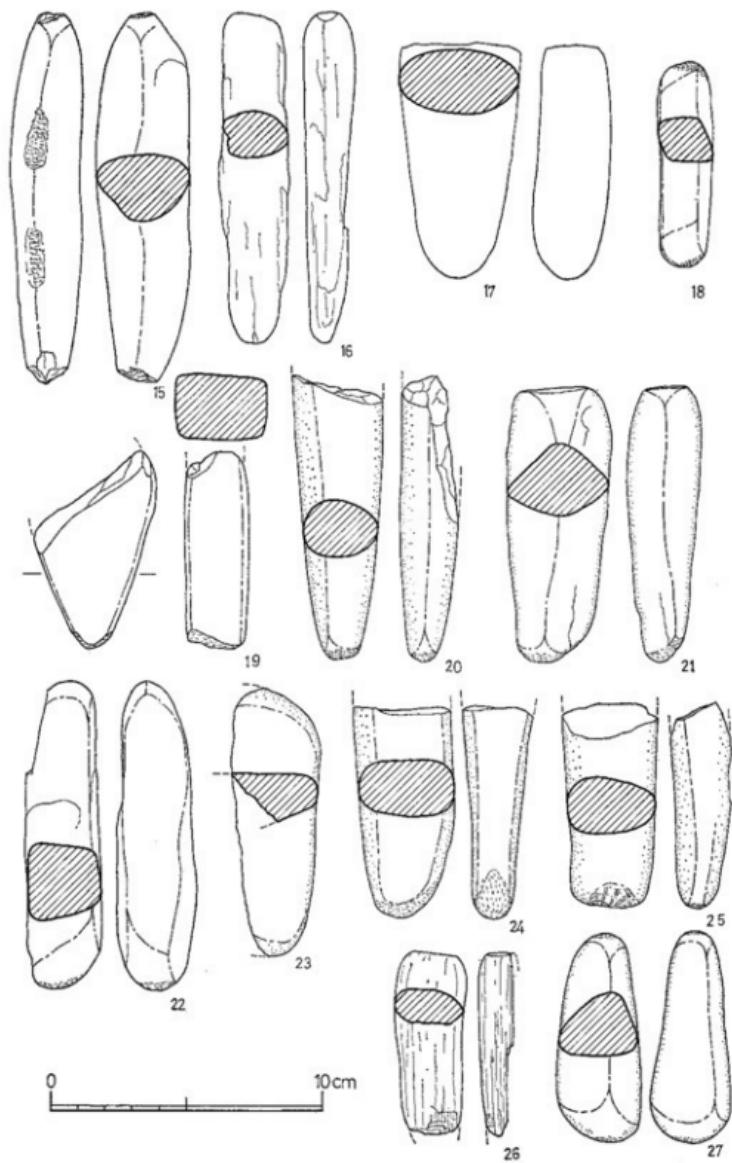
第256図 用木山遺跡出土の石錐・叩き石等実測図(1)



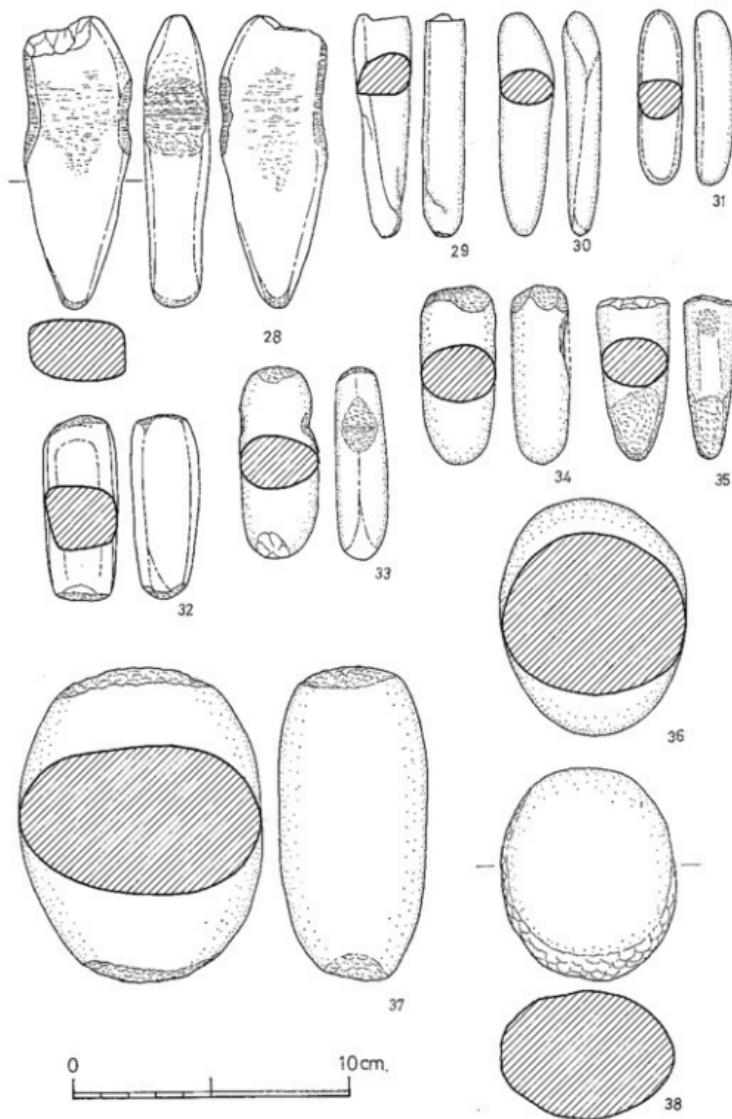
第257図 用木山遺跡出土の叩き石・槌石等実測図(2)



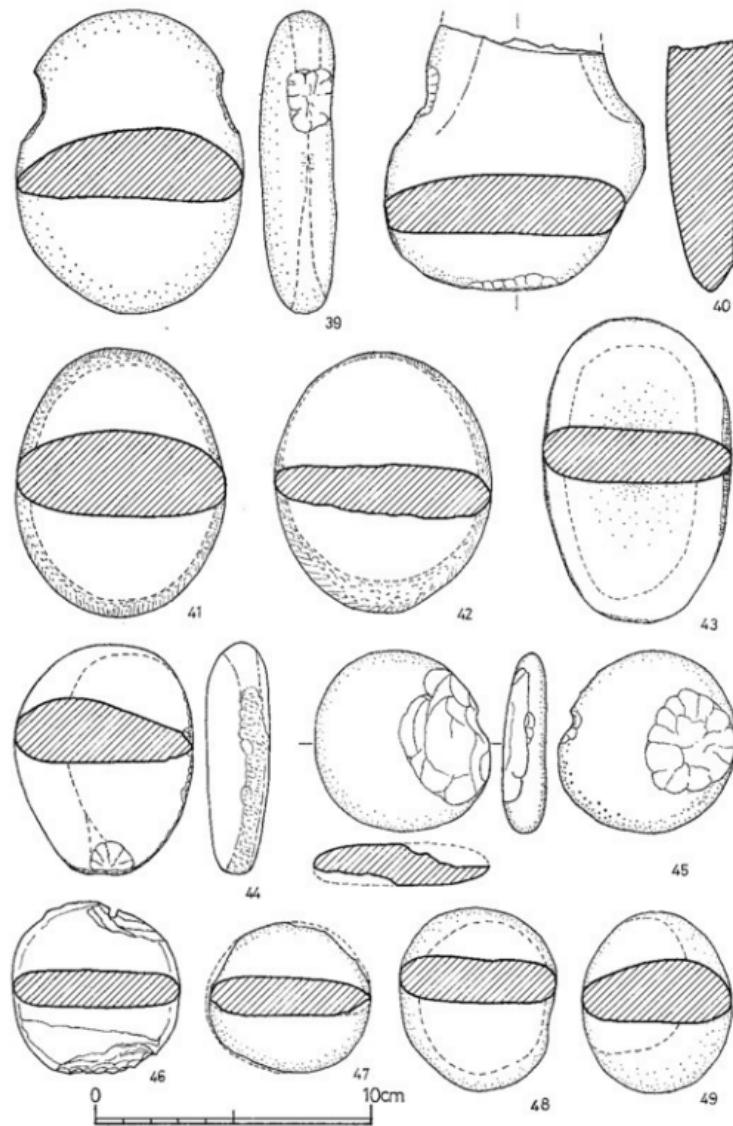
第256図 用木山遺跡出土の叩き石・槌石等実測図(3)



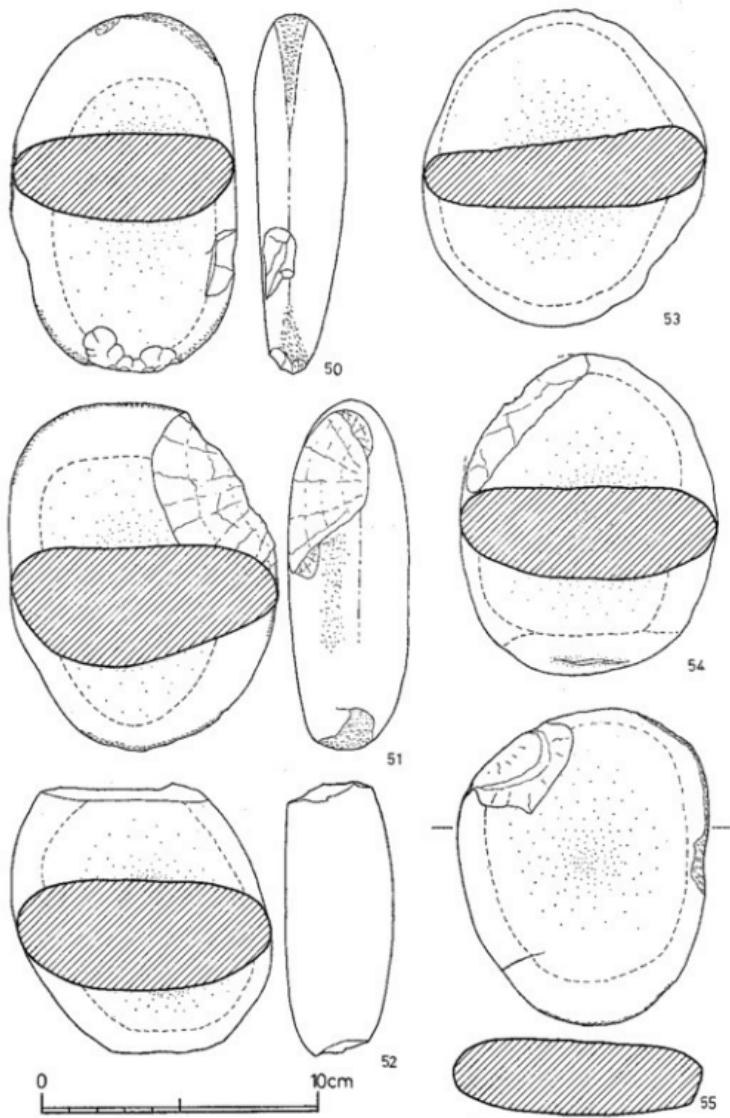
第259図 用木山遺跡出土の叩き石・槌石等実測図(4)



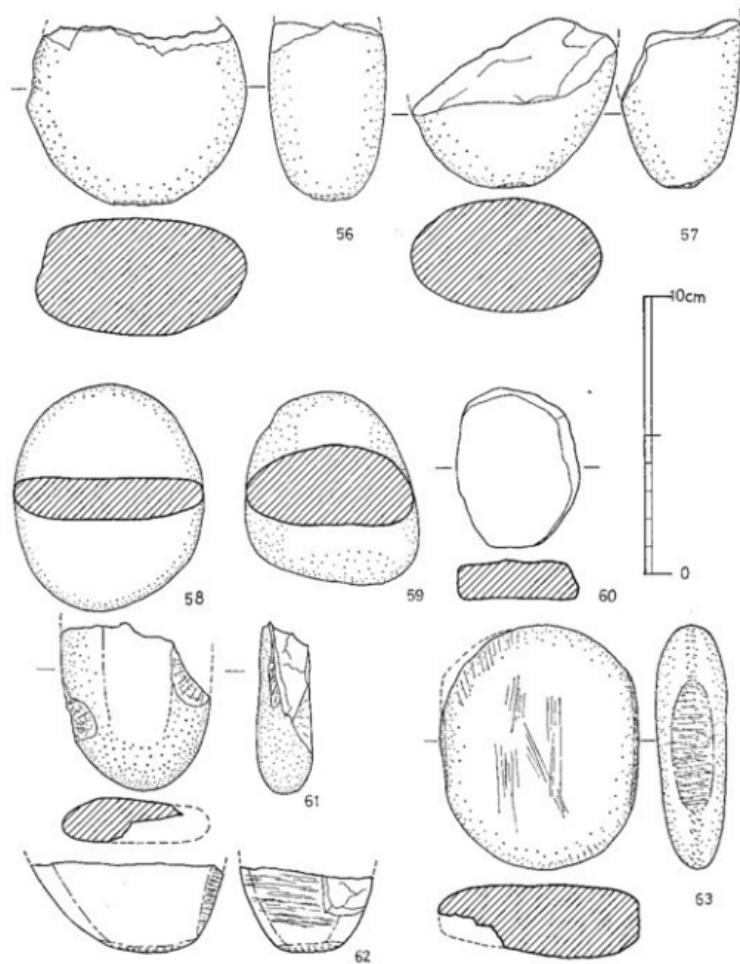
第260図 用木山遺跡出土の叩き石・槌石等実測図(5)



第261図 用木山遺跡出土の叩き石・槌石等実測図(6)



第262図 用木山遺跡出土の叩き石・槌石等実測図(7)



第263図 用木山遺跡出土の叩き石・権石等実測図(8)

痕の不明確なものを加えると約100点におよぶ。これらの石材は大半のものが砂岩質の石が用いられ、個々の具体的な用途については明らかでないが、形態的にみて、A：丸味をもった長椭円柱状のもの、B：細長い小形品で乳棒状のもの、C：扁平な扁円形または楕円形のもの、D：不定形のものの4形態に大別できる。出土点数も多く個々の特徴について記述できないが、できるだけ多く実測図示するとともに、各形態別にまとめて概述する。

椭円柱状のもの (1~14.28, 89~92)

横断面が楕円形または扁円形を呈し、片手に握りしめられる程度の太さで、平面形が丸味をもった長楕円形の川石である。中心部の横断面径が  $4\text{ cm} \times 6\text{ cm}$ 、長さ  $13\text{ cm} \sim 15\text{ cm}$  大きなものが大半を占めるが、中には長さが約  $10\text{ cm}$  内外のやや小形のもの(6)から、推定長約  $20\text{ cm}$  の片手だけでは使いこなせないほどの大形のもの(4)もある。小口先端部に敲打痕を顯著に残すものが多く、柄あるいは杵として用いられたものと考えられる。(1・2・12・28)の体側面には敲打によって施された抉りがあり、柄に着装して用いられたことを示すものもある。また(11)の小口部一端には敲打整形による施刃が行なわれ、石斧としての機能を果した形跡もある。さらに前述した蛤刃石斧の折損品の中に、折損小口面に著しい敲打痕の認められるもの多かった。それらも本形態の川石と同様に叩き石とか槌石として転用、再生利用されたものと考えられる。

#### 乳棒状のもの (15~35)

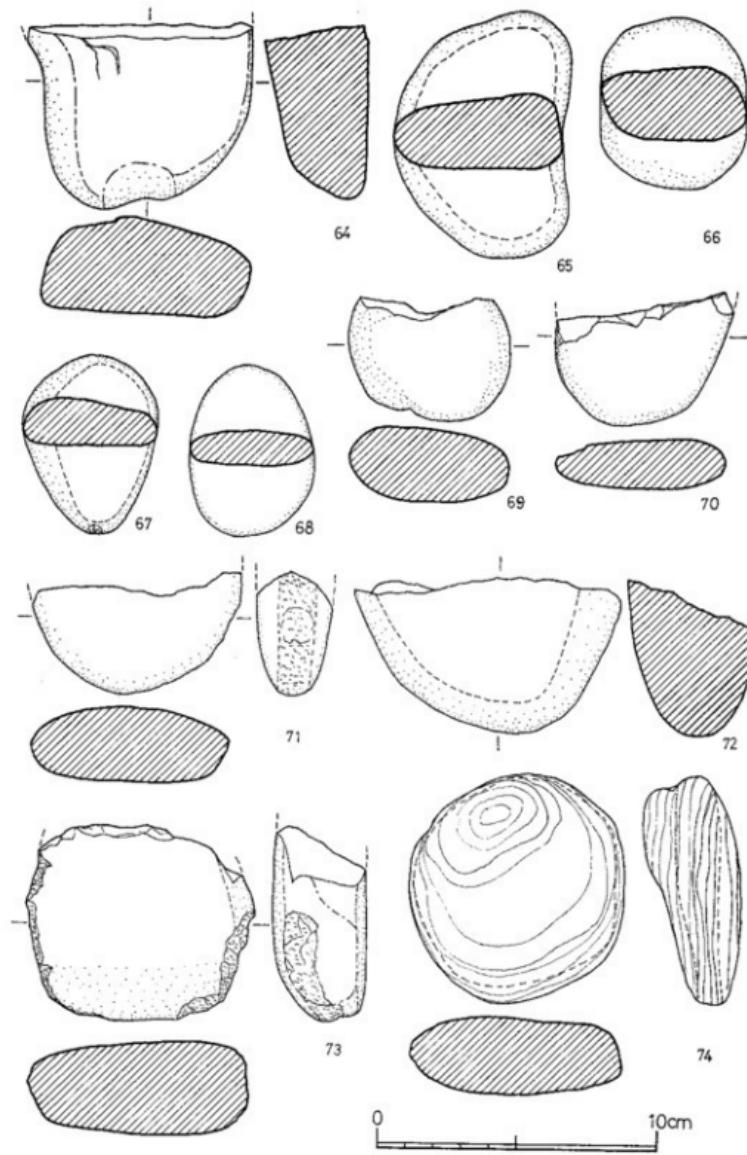
乳棒状の細長い川原石を意識的に選んで採集して、本集落址内に搬入利用したらしく、類似する形態の石が21個検出された。横断面が楕円形を呈し、両端部での太さの差があまり認められないものが多く、長さ  $6.5\text{ cm}$ 、横断面径  $1.3\text{ cm} \times 1.5\text{ cm}$  の親指大のものから、長さ  $13.5\text{ cm}$ 、横断面径  $2.5\text{ cm} \sim 3.3\text{ cm}$  大きなものまで、大きさにはかなりのばらつきをみせる。大半のものがほとんど加工痕をもたない自然石のままで利用されたらしく、先端部の小口面に敲打痕とか擦痕や磨耗痕などの使用痕を残す。使用痕の形状から推してあまり強い衝撃を受けない、槌とか杵的な用途に供されたものと考えられる。また使用痕は一端小口部だけでなく、上下両端部に認められるもの(15・18・32・33)などがあり、(33)は側面部に打撃を加えて抉りを施し、(59)の側面部には中央部を約  $2.5\text{ cm}$  残してその上下に擦痕を施して、木柄に着装して使用したこと示すものもある。なお(59)は柱状石斧の折損品を再生利用したものと思われる。

#### 扁平な楕円形状のもの (36~74)

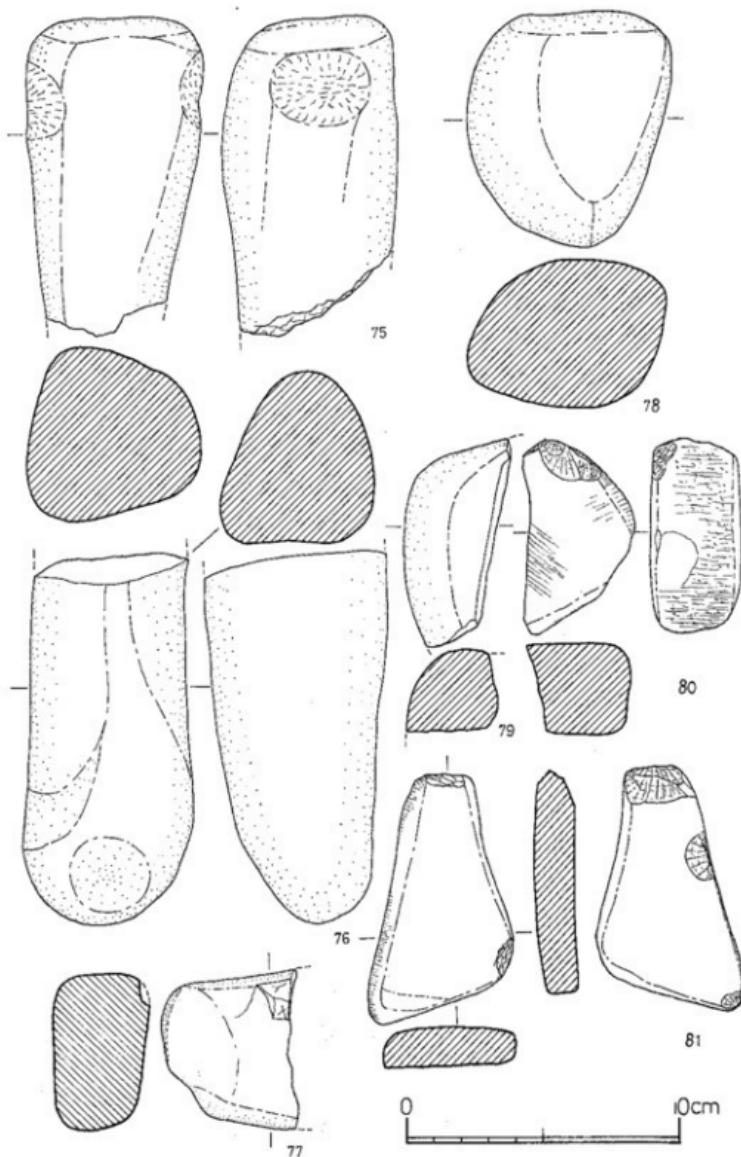
扁平な楕円形状の川石を石器として利用したもので、39個と最も多量である。径  $4.5\text{ cm} \times 6\text{ cm}$ 、器厚  $1.3\text{ cm}$  の小形のものから、径  $9.5\text{ cm} \times 12.5\text{ cm}$ 、器厚  $4.3\text{ cm}$  の大形のものまで大きさに個体差はあるが、いずれも比較的均整のとれた石を選んで使用している。上下の両端小口部や側縁部に、使用による敲打痕や磨耗痕が認められるもの多く、叩き石あるいは擂り石として用いたと思われる。中でも(4)の上下両端部の敲打痕、(44~46)の強い敲打衝撃によると考えられる打ち欠き痕、(41・42)の掘りによると思われる磨耗痕などが顯著である。また(50~55)は側縁部の磨滅痕とか打痕のほかに、擂り石などの台石としても用いたらしく、平部中央部にも磨滅痕が円形に認められ、水平面に近い形状をみせている。さらに(39・40・50)では掌に握りしめ易くするためか、柄に着装するためかは明らかでないが、側縁部の左右に打撃を加えて加工した抉りが施されている。特に(50)は均整のとれた整形である。

#### 不定形なもの (75~88)

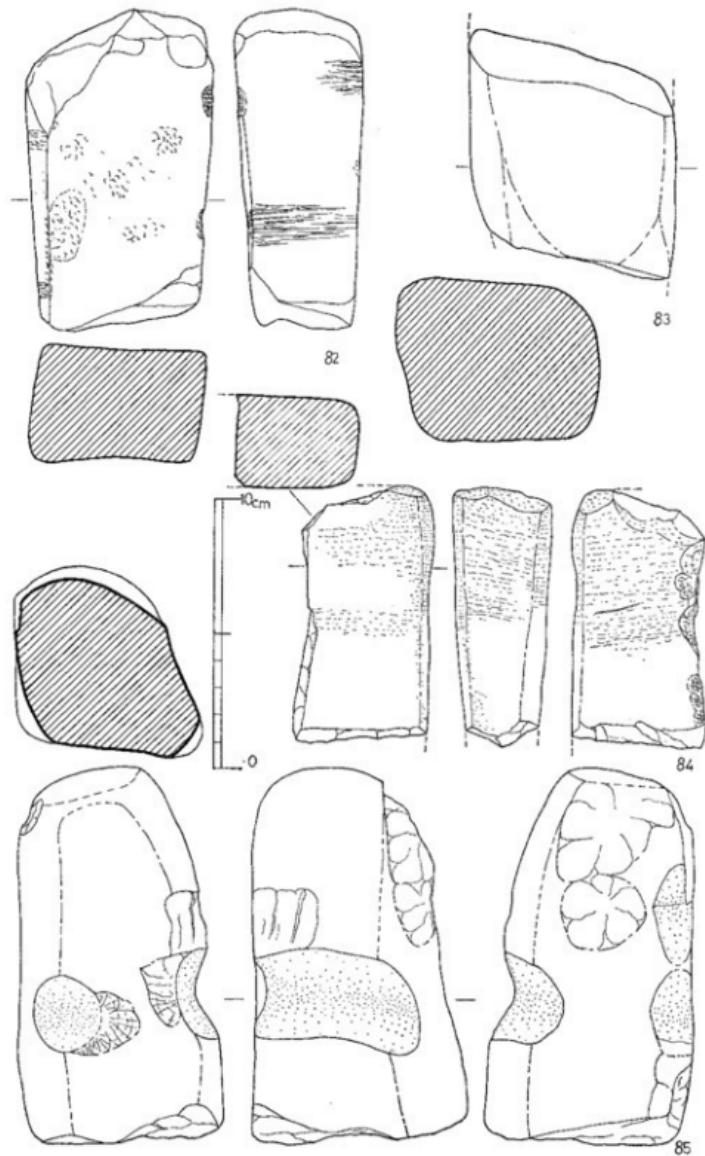
上記の各形態の川石のほか、一部砥石などの破損品を転用したり山石を含めて、使用による打痕や磨滅痕の認められる不定形な石材14個を検出した。おそらく前述の川原石などとともに、叩き石とか擂り石またはそれらの台石などとして利用されたものと考えられるものの、実際の使途については明らかでない。図の側面の横方向に、幅約  $3\text{ cm}$ 、深さ約  $1\text{ cm}$  の凹溝1条と、それに対応する裏



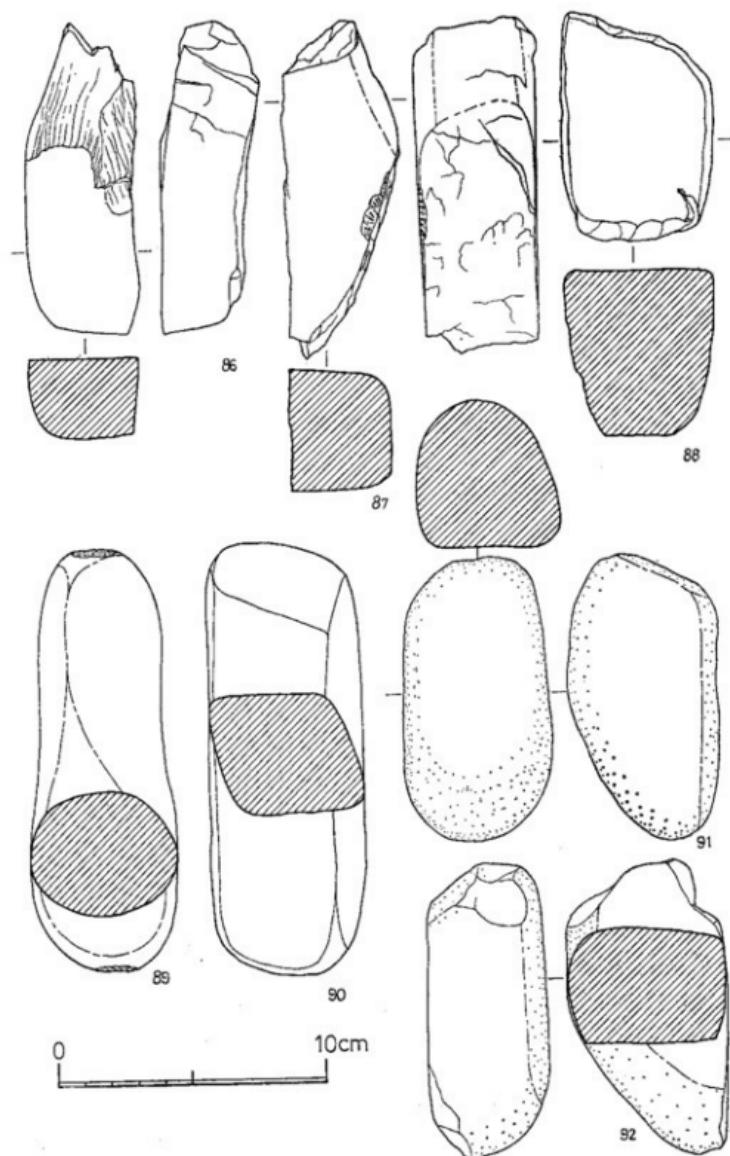
第264図 用木山遺跡出土の叩き石・槌石等実測図(9)



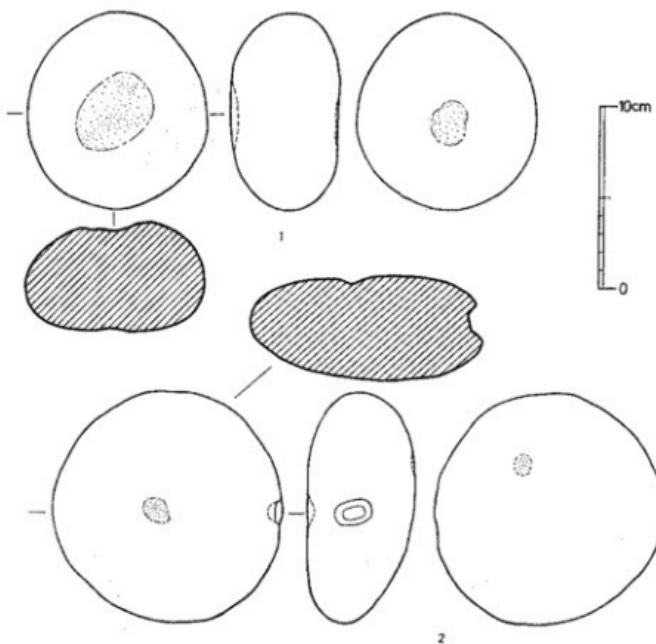
第265図 用木山遺跡出土の叩き石・槌石等実測図(10)



第266図 用木山遺跡出土の叩き石・槌石等実測図(1)



第267図 用木山遺跡出土の叩き石・槌石等実測図(2)



第268図 用木山遺跡出土の凹石実測図

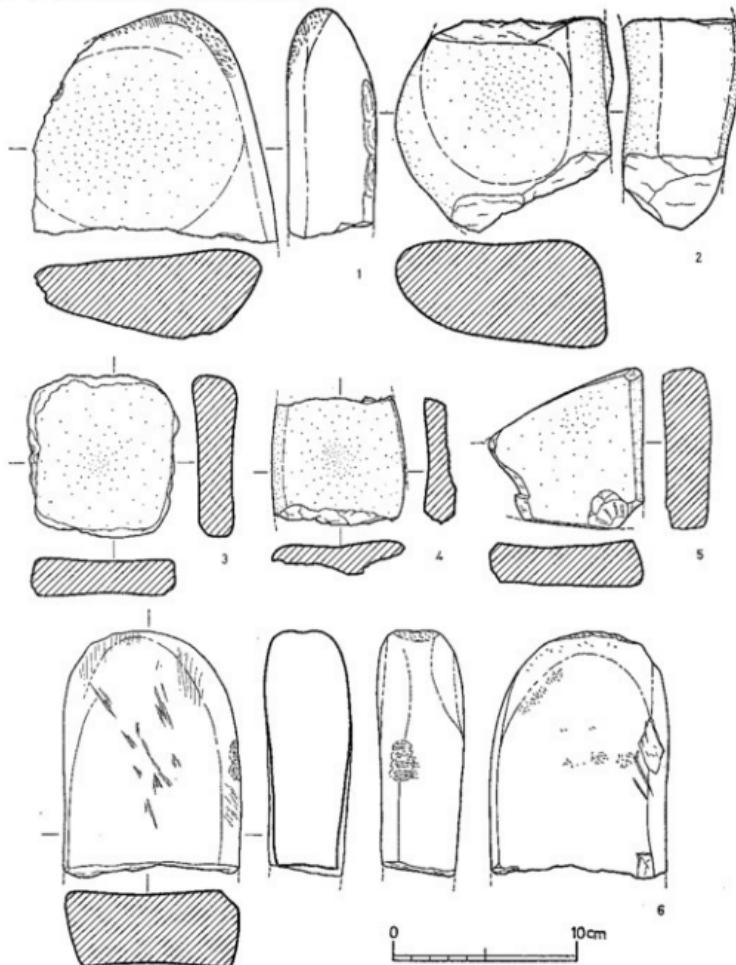
側縁部に抉りが施され、紐状のものを巻きつけた形状を示し注目されたが、それ以上のことは明らかにできなかった。

#### 18. 凹石(図268)

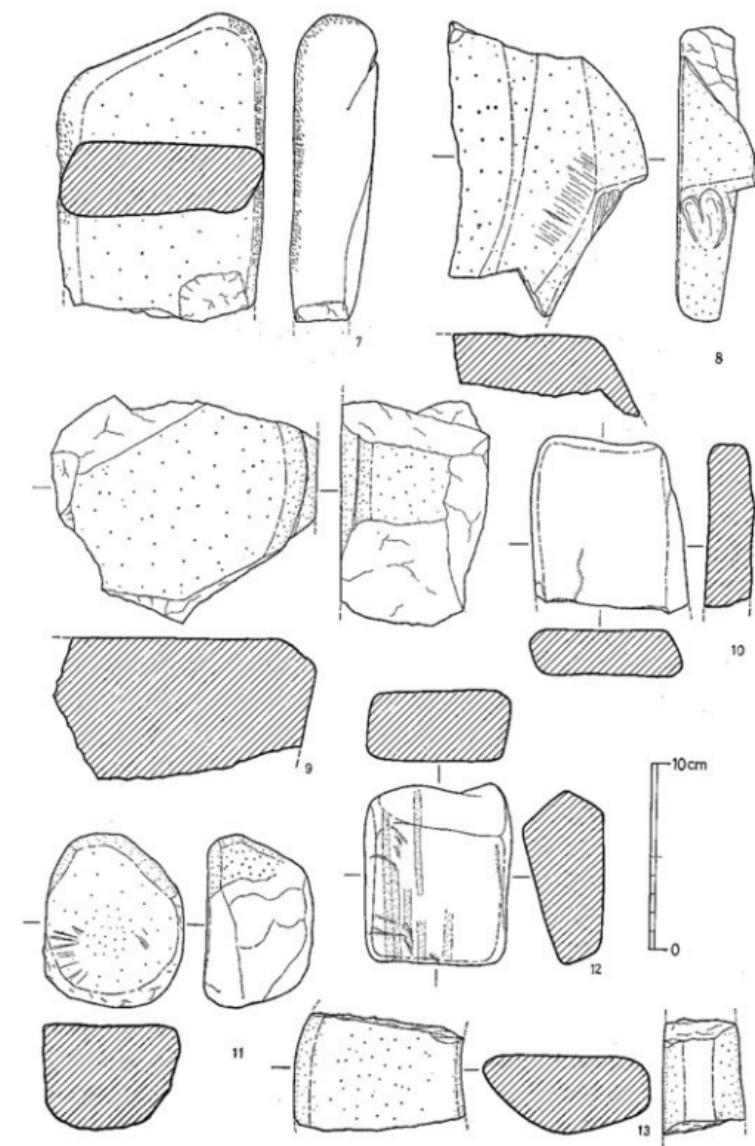
平面が円形でやや扁平な川石の平部中央に浅いくぼみをもつ石である。本遺跡からは2個発見された。(1)長径10.7cm、短径9.9cm、器厚5.8cmの花崗岩である。やや扁平な楕円球体を呈し、両面に平らな面をもつが、くぼみは一方の面にだけ施されている。くぼみは径2.61cm×3.75cm、深さ約0.5cmの浅い凹面状に敲打調整され、掌に握りしめる場合、親指の指頭をこのくぼみに当てるとき、ちょうど持ち易く安定するようにつくられているようである。器表の風化が著しくて使用痕は判然としないが、側縁部全体に打痕および擦痕が認められ、叩き石または磨石などとして用いられたものと推察される。(2)径12.4cm×12.7cm、器厚5.8cmの扁平な円形を呈する硬質砂岩で、二次的な火力を受けて酸化変色している。両面とも平らな面をもち、くぼみは平面の一方と、側縁部中心線上に1か所の計2か所に施されている。平面部のくぼみは径1.6cm、深さ約0.4cmと前者に較べて小さく浅い。一方側縁部のくぼみは、径1.4cm×2.0cm、深さ0.6cmとやや深い。整形手法および手に持つ感じとか使用痕については、前者とほぼ同様感である。

本遺跡において発見した凹石2個は、両者とも、くぼみに手をかけてものを叩き拂りつぶす、いわゆる叩き石とか磨石の一種と考えられる。またこのくぼみについて別の見方をすれば、堅い木の実などを割るために合石として用いられ、その際にいた傷が集積した結果生じたものとの考えもありたつ。さらに石器製作の工具として用いた説もあるが、本遺跡からの出土例では明確にすることはできなかった。

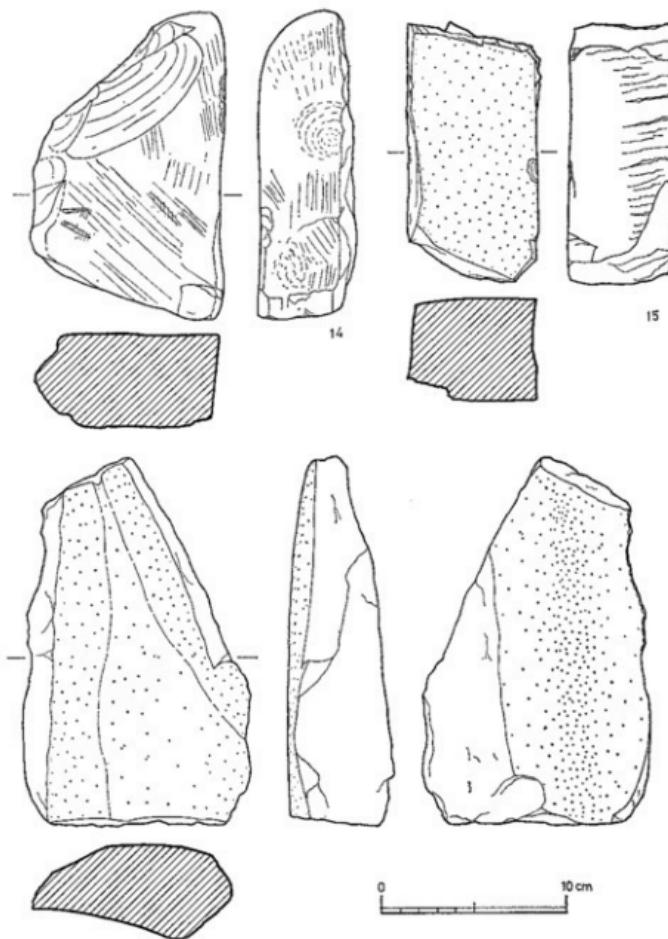
20. 大形砥石・台石 (図269~271, 図版119)



第269図 用木山遺跡出土の大形砥石・台石等実測図(1)



第270図 用木山遺跡出土の大形砥石・台石等実測図(2)



第271図 用木山遺跡出土の大形砥石・台石等実測図(3)

本遺跡の発掘調査にともない、石質や形状には大きく個体差を示すものの、一面または数面がよく研磨されて、凹面状を呈する石を数多く発見した。おそらく磨製石器の研磨とか刃の底ぎだしに用いられた砥石と推察されるが、すべてが折損しているうえに、折損部付近に打痕を残すものが受けられるところから、作業台等の台石としても用いられ、強い衝撃を受けて破損したものと考えられる。

これらの石材は若干の花崗岩などの火成岩を含むが、大半は軟質砂岩とか硬質砂岩・粘板岩が用いられ、一部に山礫を思わせるものが見受けられるものの、そのほとんどは川原などで適当な形状

と同質の自然石を選んで採集し、これといった加工を施すことなく使用したものと思われる。

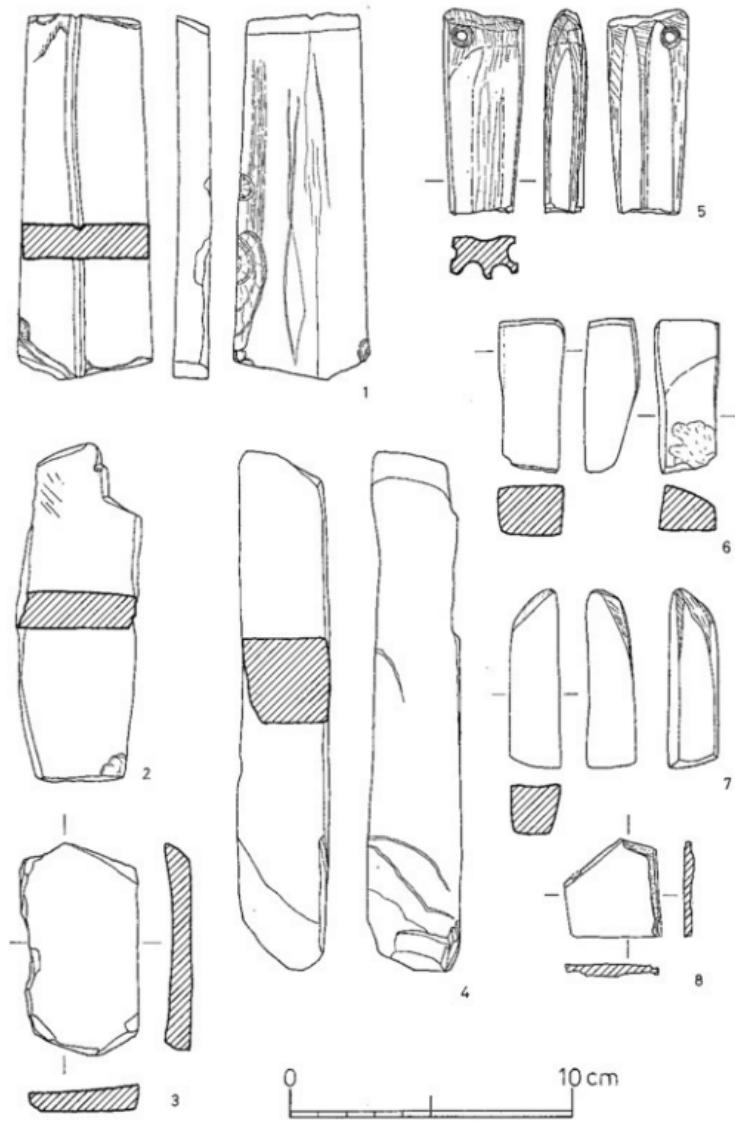
2・3例にとって概述すると、(1)は扁平な楕円形を呈する硬質砂岩で、平面部の一面のみを砥石として用い、裏面は打撃を受ける台石として利用されたらしく、多くの打痕剥離をみせ、約2分の1大に折損している。現存部長12.3cm、最大部幅13.0cm、最大部厚4.7cmを測る。(2)扁平な長楕円形を呈する砂岩であるが、両平面および側面の一方を砥石として研磨され、特に平面部中央はよく磨滅していて、深さ約0.3mの浅い凹面状となっている。約半分に折損しているが、現存長13.3cm、最大部幅9.6cm、最大部厚4.2cmを測る。(3)不定形な軟質砂岩である。平面の一面は荒砥に用い、幅約7.7cm、長さ17.7cmの、横断面が浅い拋物線状を示す凹面となり、他の一面は粘板岩質のきめの細かい製品の仕上げ砥として用いられたらしく、滑らかな面と光沢をみせている。(2・4)は研磨面が凹レンズ状に中央部がくぼみ注目された。

## 21. 小形砥石(図272~275、図版119)

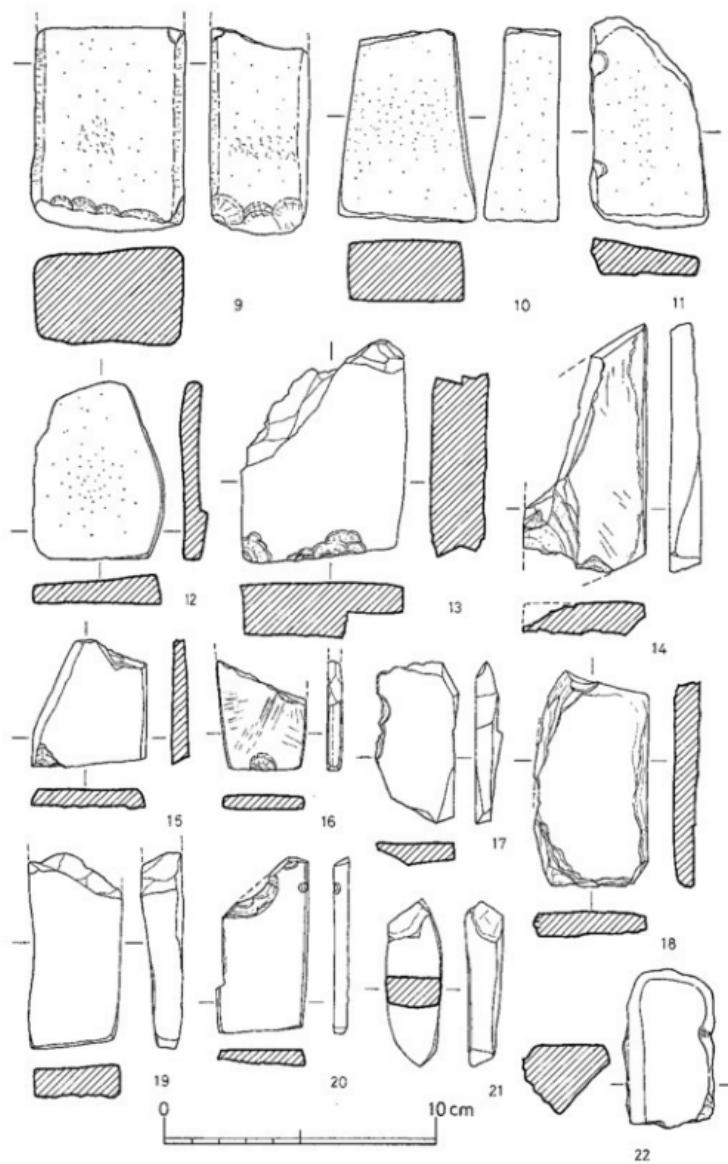
先に述べた地面などに固定して用いたと思われるものに較べて、片手に持つて使用したと思われる小形の砥石を約40個発見した。前者は川原などで採集した丸味の強い自然石を多く用いているのに対して、この小形砥石は石質の素材を選んで切りだしたらしく、長方形をしたもののが大部分を占めている。

大きさや形状は使用することによってどんどん消耗する性質の器具であるため、各々に個体差があってまちまちとなっているが、大別して角柱形のものと、扁平な長方形板状のものとに大別できる。角柱形のものでは長さ18.2cm、幅3.2cm×3.4cmのもの(4)から、長さ6.2cm、幅1.7cm×1.8cmの小形のもの(7)、板状のものでは長さ12.9cm、幅4.7cm、器厚1.2cmのものから、長さ5.15cm、幅1.6cm、器厚0.6cmの超小形のものまで存在する。石質はこれら的小形砥石が仕上砥石として用いられたのか、きめの細かい泥板岩・粘板岩が主として利用され、なかに滑石や砂岩質のものも若干見受けられる。4面ともよく研磨されているものが多く、いずれも小さくまた薄く変形するまでよく使いこまれ、常に大切な必需品として携帯されたらしい。

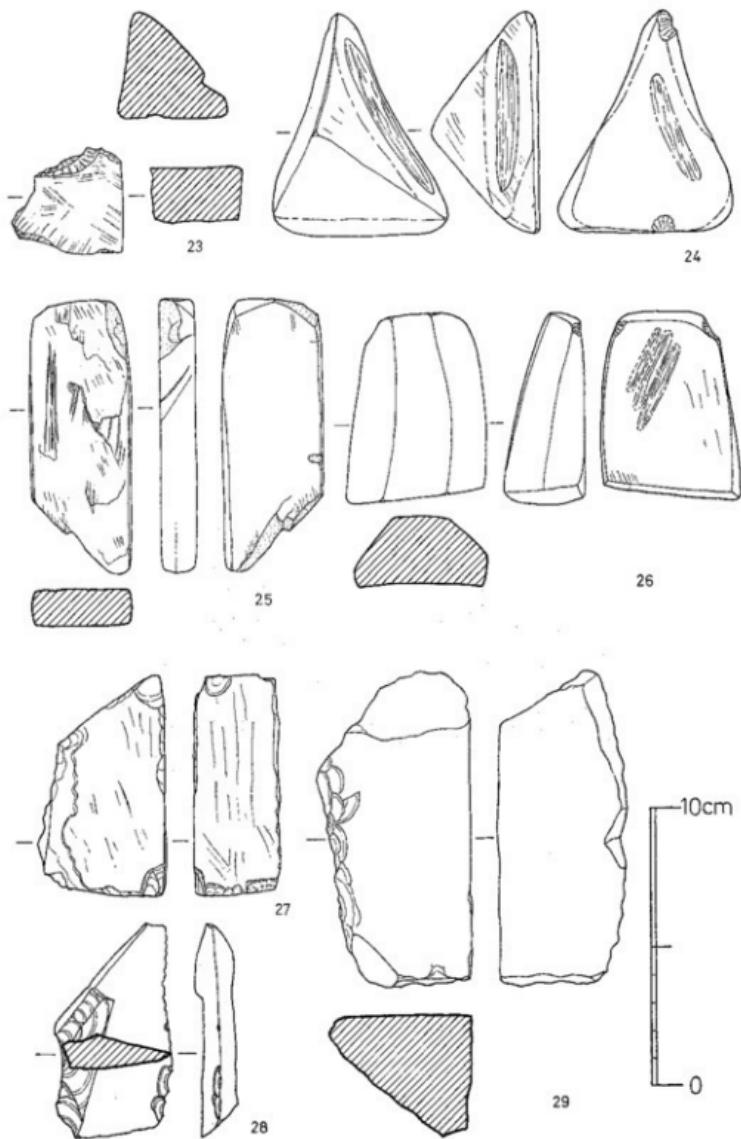
こうした小形砥石の中で特に注目されるのは(5)の砥石である。長さ7.2cm、幅2.85cm、厚さ1.45cmのやや扁平な直方体を呈する軟質泥板岩製であるが、平面部に2条、両側面部に各1条の計4条の、横断面が半円形を示す溝状凹面を顕著に残し、他の一平面は中心部でややくぼんだカーブの緩い凹面状を呈している。一見して管玉などの円筒状のものか、現代用いている彫刻刀の丸鑿を抜いた跡を想起させる形状をみせている。私たちが知るかぎりでは弥生時代の利器としての石器類の中に、このような磨耗痕を示すものは存在しない。木地師の用いる民具の中に、鑿を抜いた砥石にこれと酷似する砥石が存在することから、現在ではすでに消滅していて検出することができないが、当時こうした磨耗痕を砥石に残すような、鉄器の鑿が当地域にも普及していたことを示す、一資料となるものと考えられる。なおこの砥石には縦などを通して携行を便利にしたらしく、片隅部に小円孔が貫孔され、それも磨製石底丁に見られる円孔と同様の回転旋孔が施されて興味深い。またこれはど明瞭ではないまでもその他の砥石の中にも、(1)の平面中心部に縦方向の直線状に、横断面がV字状を呈する深い研磨溝と、(24・25)の研磨面に横断面が円弧状を示す溝状痕が認められ注目された。



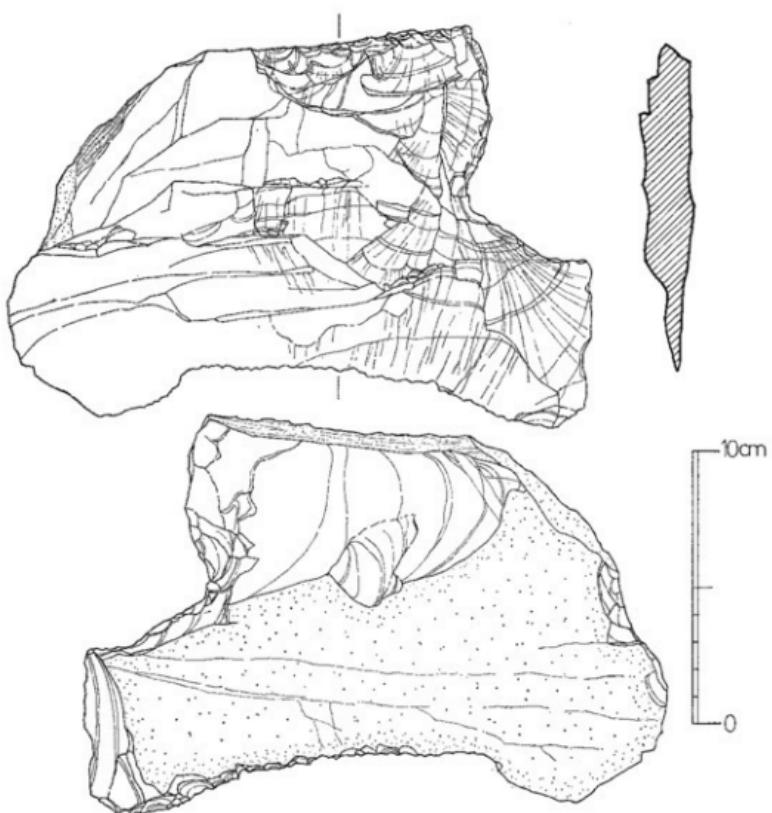
第272図 用木山遺跡出土の砥石実測図(1)



第273図 用木山遺跡出土の砥石実測図(2)



第274図 用木山遺跡出土の砥石実測図(3)



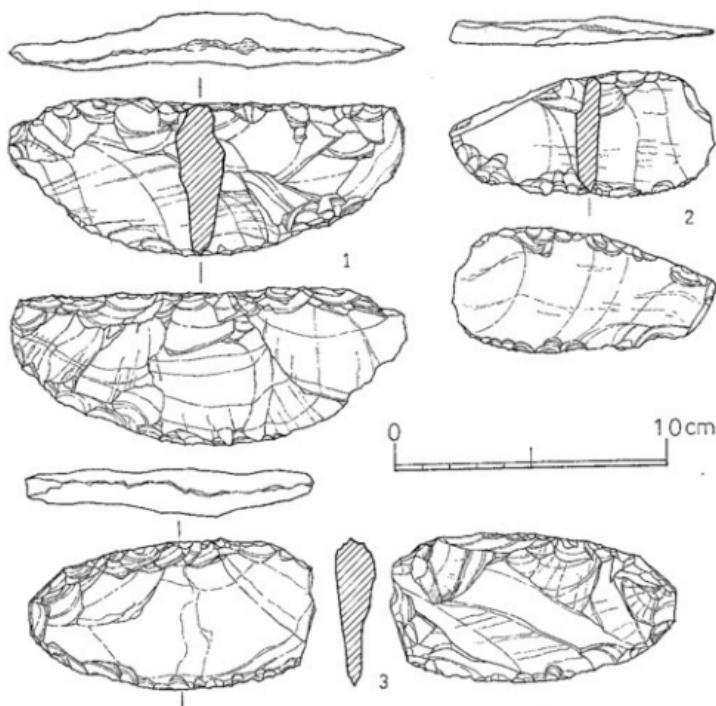
第275図 用木山遺跡出土の珪質頁岩原石実測図

## 22. 石器原石と剝片について（図275～278、図版115・116）

以上の石器類のはか本遺跡の発掘調査にともなって、数は少ないが打製石器の原石と推察される、準黒色珪質頁岩1とサスカイト3が、それぞれを原材料とする打製石庖丁とともに一括出土して注目された。また各住居址支群内において、これらの原石または使用中に折損したものを再生加工した、打製石器の工房址と思われる遺構も検出され、多量のサスカイト剝離片や、打製石器の破損品とか未製品が発見されたことも、すでに何回か繰り返して述べてきたとおりである。これらの原石とか剝片や未製品などの出土地点や量については、先の表32に示しているので、ここでは一括出土の原石と幾つかの打製石器の未整品および破損品について概述する。

### 珪質頁岩原石と打製石庖丁（図275・276）

第10住居址支群第9号住居址壁面部から、準黒色珪質頁岩の原石1個と、同質石材製の打製石庖



第276図 用木山遺跡出土の珪石質岩製打製庖丁実測図

丁3個が重なり合うようにして一括出土した。

この石材は図示したように扁平板状の不定形な形状を示し、現存長21.3cm、最大部幅13.7cm、最大部厚1.9cm、重量589gを測る。表面は風化されて暗灰褐色をして、堆積層序の細かい縞目をみせているが、内部は準黒色の硬く緻密な形状を示し、粘板岩質のものが強い熱変成を受けて硬質化した準黒色珪質頁岩と推定される。一面は自然面を多く残しているが、他の一面は打撃を加えた大剝離面が顕著である。図示した形で下方の内弯した外縁部には敲打による鋭利な刃部状をみせ、背部は風化のため自然面か剝離面かは明確でないが非調整刃理面、角張った側の小口部は切断状の剝離面となっている。刃部状部を有することから、あるいは大形刃器としての可能性も否定できないが、この石材を素材とした打製石庖丁や不定形の打製石器（刃器）が幾つか検出され、さらには後述のサヌカイト原石等と併せて考へて、こうした打製石器製作の原材料石材として、本集落址内に持ち運ばれたものと考えられ、器表面に見られる剝離面は、打製石器製作を目的として、截断採取した痕跡面と推察される。

一括出土した打製石庖丁3個は、大きさや形状に個体差はあるものの、いずれも横長剝片を用いた梢円形状を示している。(1)を例にとってその概要を示すと、大きく大剝離面を残した整形技法

は、サスカイト製品などにも一般的にみられるものであるが、剝片の正面側には主剝離と同じ方向の剝離面がみられるものの、刃部に近い下方ではそれと直交する左側からの剝離面があり、サスカイトを素材とする類品に比して若干異なっている。これはサスカイトと遡い節理性に富んだこの石材に応じた整形手法にすぎないとと思われる。刃部は大きく外彎し、施刃は両面から敲打を繰り返して調整されているが、中央部付近に磨耗のためか部厚く刃部が鈍くなっている。また背部は細かい敲打剝離のつみ重ねによる背つしが施されている。

本遺跡出土の石器類の中で、この珪質頁岩を素材としたものは、打製石庖丁および石斧状の打製不定形石器に限定され、量的にもあまり多くはなかった。

#### サスカイト原石と打製石庖丁（図277）

第4住居址支群第13号住居址床面から、3個一直ねにした形状で発見されたサスカイト原石と、その近くの同住居址床面出土のサスカイト製打製石庖丁1個である。石庖丁には明瞭な使用痕が認められ、この原石とは直接的な関係はないかも知れないが、便宜上一括して概述する。

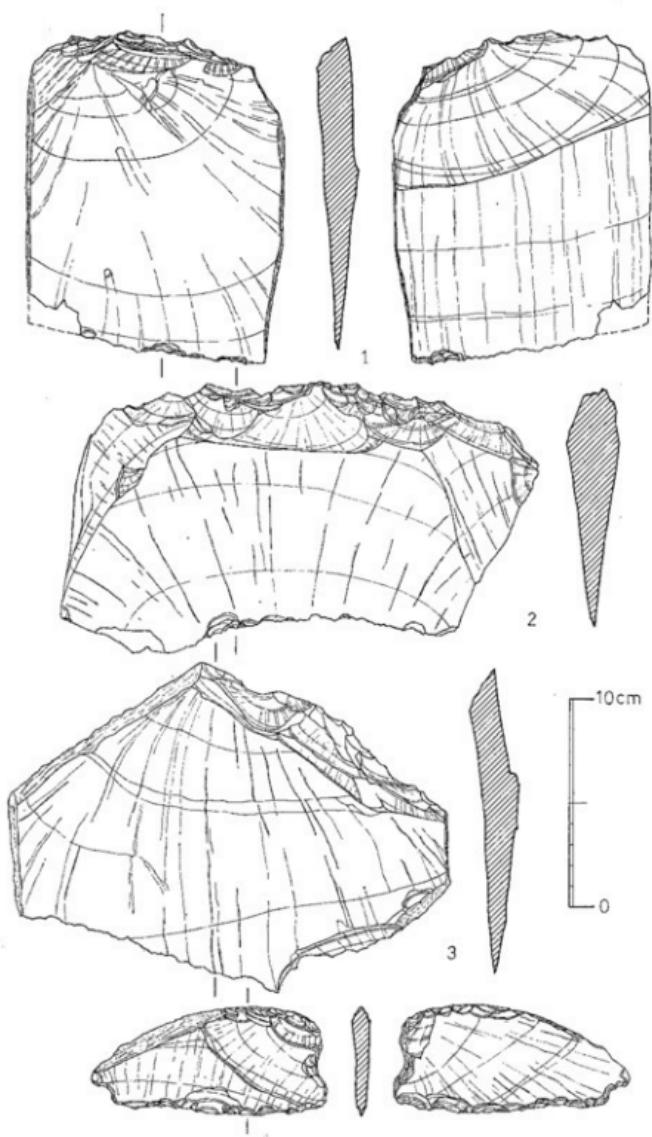
サスカイト原石は、いずれも平面部に荒削りされたのみの大剝離面をみせ、一方の側縁部が部厚く敲打痕も著しくて、その対辺部は薄く鋭利な縱断面が三角形状をなす扁平な板状を呈し、産出地の露頭部から切り出し採集されたと思われる形状を示している。各個体別の計測値は、(1)長さ15cm、幅12.4cm、最大部厚1.6cm、重さ490g、(2)長さ22cm、幅12.2cm、最大部厚2.5cm、重さ720g、(3)長さ21cm、幅14.5cm、最大部厚1.9cm、重さ585gである。このようなサスカイト原石は勝町の御津郡御津町宇垣原遺跡でも大量に発見され、ともに打製石器製作時に生じたと思われる、断片的なサスカイト小剝片を多量に伴出することから、打製石器製作の原材料として採石搬送された、一單位を示す大きさと形状ではないかと推察される。現在サスカイト石製品について、京都大学原子力実験所の東村武信氏を中心に、石材の科学分析をもとに産出地の同定研究が進められているが、本遺跡出土のサスカイトについても資料提供をしているので、今後の研究成果が期待される。

同住居址床面出土のサスカイト製打製石器は、不整橢円形状を呈する荒いつくりのやや小形品である。平面部に大剝離面を多く残し、背部のつみしや施刃とともにやや粗雑であるが、両小口面に敲打による抉りをもち、本遺跡出土の他の類例とほぼ同巧のものである。長さ11.3cm、最大部幅5.2cm、最大部厚0.75cmを測る。

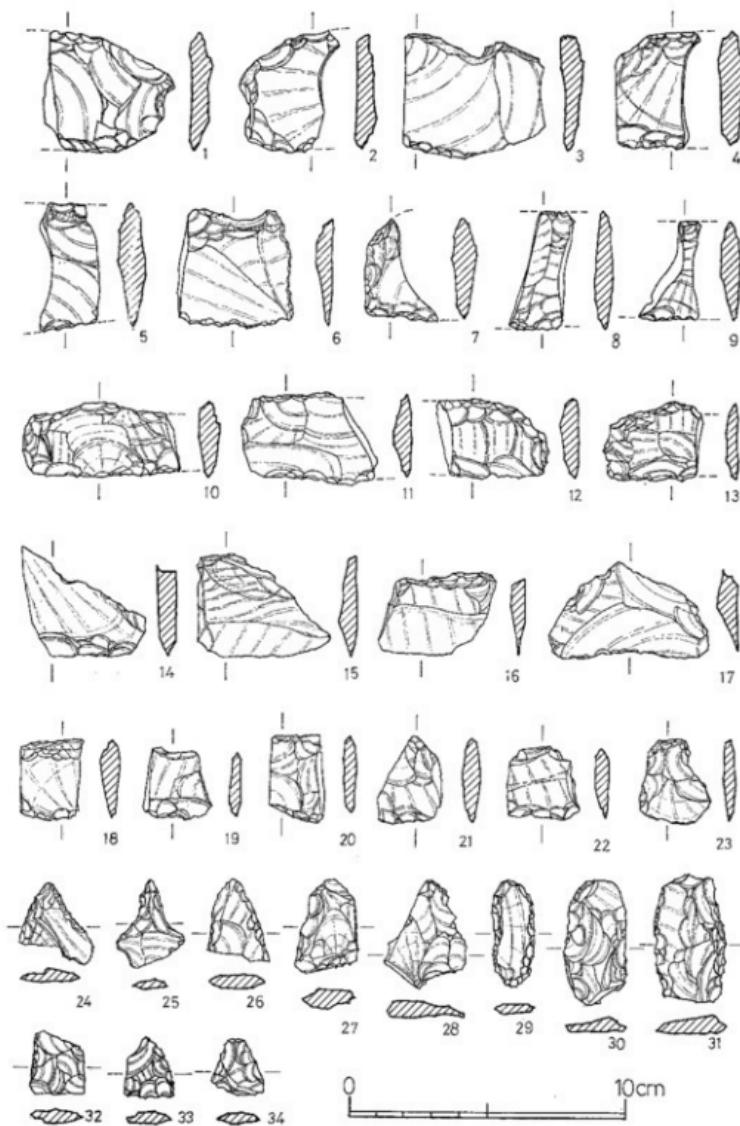
#### 折損品・未整品などについて（図278）

サスカイト製打製石器の折損品や未製品および剝離破片の出土も多量である。石庖丁または石槍状を呈するもの388点、石鎌または石錐状を呈するもの133点、その他破砕片約40kgである。石器の部分片と思われるものの中には、明らかに使用による磨耗痕を示すものが多く、石庖丁とか石槍の折損したものを持ち帰ったと思われるものが多いが、製作の過程で失敗したものなどの未製品とか、かなりの大きさを保っていても剝離片のままで、加工の手を加えられていないものも見受けられた。今回はこうした小破片について、個々にわたって検討を試みることができなかつたため、その幾つかを実測図示して感じこととの2・3を概述したい。

これらの多くの折損品については、単に壊れたから取り替えるとか捨てたとするよりも、さらにより小形の石器に再生加工を施そうとする、積極的な意志が働いたものと考えられる。また不定形



第277図 用木山遺跡一括出土のサヌカイト原石と打製石庖丁実測図



第278図 用木山遺跡出土の打製石器折損品および未製品実測図

であったり折損品であっても、これらの石材の中には、そのまま石匙とか石庖丁としての機能を充分果し得るものも含まれ、始祖石斧の折損品をそのまま櫛や叩き石として転用したと同様の再利用も考えられる。さらに実測図(24・25・28)などは、剥離片の一方で三角形状に張り出した部分を敲打整形して石歯状につくりだし、他の一端につまみ状に大削面を残している。このような小形品を敲打整形する場合、当初からその形状に合った大きさの石だけで整形するのではなくて、ある一定の整形段階までは、手に持ち易い部分をそのまま残してつくり、後で狭い溝状部などに挟んで衝撃を与えて折断し、最後の整形調整を施すなどの、整作手法の一端が伺え興味深かった。

以上のように、集落址内に原石・折損品・未製品・多量の剥離細片が検出され、それも特定の住居址床面に集中して発見されることは、取りも直さず本集落に居を構える人々が、何らかの手段によって打製石器の原材料であるサヌカイトや珪質頁岩の原石を入手し、本集落内において打製石器の製作を行なったことを物語るものである。

#### 第4節 その他の遺物

本遺跡の出土遺物として、上記の弥生式土器および石器類のほか、かなりの量のドングリや桃の実などの炭化果実と、火災に遭って焼け落ちた住居址の炭化木材などの植物遺物をはじめ、古墳時代後期の須恵器から奈良・平安時代へかけての土器片とか、時代の判然としない鉄器片や玉類も発見採取した。

炭化果実類(図版120)の大半は、本遺跡地内において流土堆積した二次的埋土中から遊離発見したが、第7住居址支群第14号住居址の床面に、多量の炭化ドングリが一括して密着出土して注目された。このような例は本遺跡の東に隣接する愛宕山遺跡第2地点第14号住居址床面でも検出され、食糧として供する目的で採集し持ち込まれていることを示し、稲作が主要な作物としてかなり発達し、普及している時代であるとはいえ、まだ食糧の重要な供給源として、このような木の実などの山の幸にも大きく依存していることを物語っている。

また住居址の炭化木材については、本遺跡の場合は、第7住居址支群第1号住居址、第8住居址支群第10号住居址、第9住居址支群第7号住居址、第12住居址支群第1号住居址の4棟で検出された。いずれも焼け落ちた後はそのまま廃棄された形状で、炭化木材も床面上に密着出土したが、なかでも第9住居址支群第7号住居址と第12住居址支群第1号住居址の2棟では、その遺存度はかなり良好であった。このように火災により焼け落ちた住居址は、当山陽園地開発事業用地内所在の集落遺跡では、本遺跡のほかに惣園遺跡第1地点第8号住居址、新宅山遺跡第1号住居址、門前池西遺跡第2地点第25号住居址などが知られている。

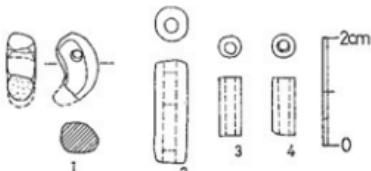
これらの炭化果実や住居址用材の植物遺物については、用地内出土の他遺跡出土のものとともに現在科学分析を依頼しているので、その結果は本発掘調査概報第5集「愛宕山・さくら山遺跡」に、稿を改めて報告したい。

そのほかの須恵器片等土器片や鉄器および玉類は、いずれも二次的流土堆積層内の、それも比較的浅い層序からの遊離出土であり、直接住居址床面から密着出土するなど、集落遺構面と共に伴關係

を示すものは存在しなかった。本遺跡地内には複合立地する用木古墳群第1・2号墳、横穴式石室を内部主体とする岩田古墳群第8・9・11・12・13号墳、それに古墳時代後期の岩田土墳墓群や、奈良・平安時代火葬墓などの存在が知られ、なかでも岩田古墳群は石材採取の目的で、石室床面も含めてすでに大きく破壊されていて、それらにともなう遺物類がかなり遊離発見された。特に鉄器は銹化が著しく判然としないものが多いが、鐵鎌、刀子、馬具、鉄釘など、岩田古墳群出土のものと酷似する遺物が目立ち、それも損壊された岩田古墳群の下方斜面近辺にあたる、第7～9住居址支群などの、表土下包含層に集中して遊離発見された。

本集落址は伴出する弥生式土器の編年観からみて、弥生時代後期初頭の段階で終結していく、後期後半から古式土師器の出土例はみられない。したがってこれらの須恵器片をはじめ、古墳時代後期以降の土器や鉄器などは、本集落址との直接的な関係はないものと考えられる。なお集落址遺構面に比較的近い部分で発見された、第12住居址支群第2号住居址周辺の土器片や、第7住居址支群第3号住居址周辺出土のふいご火口や鉄製鍛などについては、すでにそれぞれの遺構出土状況の項で述べ、岩田古墳群ならびに岩田土墳墓群関係については、本発掘調査概報第6集に報告しているので割愛して、ここでは玉類についてのみ概述しておきたい。

出土玉類は、ガラス製勾玉1点と碧玉製管玉3点であるが、本遺跡の住居址遺構との伴出関係は明らかでない。勾玉および管玉(1・2)は第5住居址支群、管玉(3)は第10住居址支群の出土で、ともに現地表下の比較的浅い埋土中から発見された。勾玉は紺色を呈する小形品で頭部のみの折損である。現存長1.1cm、同幅0.7cm、器厚0.55cm、紐とおし孔はC字形に置いた上方からの一方穿ちである。管玉(1)は青灰色を呈し、長さ1.9cm、径0.6cm、紐とおし孔径0.2cmのやや太形。(2)は灰白色を呈し長さ1.05cm径0.4cm。(3)は濃緑色を呈し、長さ1.05cm、径0.4cmを測る。細くて小形品である。



第279図 用木山遺跡出土の玉類実測図

## 第6章 まとめにかえて

用木山遺跡の発掘調査は、私たちに数多くの知見と問題を提起した。しかし、今ここでそのすべてを整理し記述する余裕もないため、本稿では用木山遺跡についての総括と、引き続いて発掘調査を実施して懇意・愛宕山・さくら山遺跡などの同時代集落遺跡の調査を通してその間に感じたこととか幾つかの特徴を列記して本報告のまとめにかえたい。

### 第1節 用木山遺跡の概括

用木山遺跡は、岡山県赤磐郡山陽町河本字野山65番地の、用木山と呼ばれる丘陵頂を中心として立地する、弥生時代中期後半を盛期とした集落遺跡である。

表52

用木山遺跡住居址支群単位遺構検出数一覧

住居址支群	住居址					ピット	計	備考
	円形穴	楕円形穴	長方形建物	不詳	小計			
第1住居址支群	2	0	0	1	3	2	5	
第2住居址支群	2	2	2	1	7	2	9	
第3住居址支群	3	2	6	3	14	1	15	
第4住居址支群	4	3	3	3	13	1	14	土器漬り 1
第5住居址支群	2	3	0	4	9	2	11	土器漬り 1
第6住居址支群	1	1	2	4	8	1	9	土器漬り 1
第7住居址支群	2	5	5	3	15	1	16	土器漬り 2
第8住居址支群	2	4	4	1	11	2	13	土器漬り 2
第9住居址支群	3	3	0	3	9	0	9	
第10住居址支群	3	3	0	3	9	2	11	
第11住居址支群	2	3	1	2	8	3	11	
第12住居址支群	2	2	1	3	8	0	8	
第13住居址支群	3	4	1	2	10	3	13	
計	31	35	25	33	124	20	144	

北から南へ貫流する小河川・砂川流域に拓けた、面積約20km<sup>2</sup>の埋積平地の一角に、西から東へ大きく張りだした方約1kmの低丘陵群がある。本遺跡が所在する用木山はこの丘陵群のほぼ中央部にあって、標高92mと最高位を占める主丘であるが、遺跡は用木山から東と南東に分岐してのびる幅狭な丘陵尾根支脈上と、それに抱きかかえられる形の南面する谷懐状急斜面に広がり、遺跡範囲は東西約200m、南北約80mにおよび、その上下比高は約30mを測る。したがって眼下の埋積平地との最大比高約70m、水田化可能な谷水田との比高約40m、眺望視野は広いが水稻耕作を営なむための居住地としては適地とは言えない立地を示し、一見して高地性集落を想起させるほどである。さらに本遺跡の中心部ともいえる最も遺構が集中する谷懐状の傾斜面は、平均斜度が30度を越えるほどの急斜面で、常識的にはそこに集落が営なまれたとは考えもつかないほどの地形である。

発掘調査の結果、集落立地が条件のよくない急斜面に位置するうえに、風化侵蝕され易い花崗岩地質で形成されているためか、各遺構の遺存度は低かった。住居址を例にとると、地形の高い側の直接地山生き土を掘り込んだ部分だけを遺存し、地形の低い側の大半は床面も含めてすでに流失していた。したがって伴出遺物も、土器片総重量約4,300kg、石器類1,864点と豊富な割には、流土による影響を強く受け、ほとんどが不規則な二次堆積土層内から遊離発見される状況で、層序的にも大きく乱れ、たとえ住居址床面等に密着出土しても、各遺構との同時性を明確にできない状況であ

表53

## 用木山遺跡検出遺構一覧

支群号	遺構番号	形 式	遺存度	現存面積 (m <sup>2</sup> )	柱高 (m)	柱穴数	床面施設	備 考
1	H 1	堅穴・円形	約50%	推 径 7.4	0.44	18	溝遺構 2条	用木第1号墳築成により切り断、床面P 1と複合、同一立地跡で替え1回以上、床面にサヌカイト砂片多く打製石器工房址と推察、打製石泡丁、石鏡、土器片等かなり出土。
	P 1	ピット・長方形	完 存	2.88×1.34	0.76	—	な し	H 1 床面に立地、素掘り土壌、付帯施設なし。
	H 2	堅穴・円形	約40%	推 径 8.5	0.36	22	溝遺構 2条	隅丸方形住居址と複合か？ 床面密着土器片有り。
	H 3	不詳	柱穴痕のみ	不 詳	不詳	28	不 詳	すでに削平され柱穴痕が遺存するのみで詳細不明。
2	P 2	ピット・不定形	ほぼ完存	4.7×2.5	0.35	—	な し	不定形な素掘り土壌。
	H 1	不詳	柱穴痕のみ	不 詳	不詳	40	不 詳	床面消失、約7~9mの範囲に柱穴痕40本分が散在、詳細不明。
	H 2	堅穴・円形	約15%	推径約 4.0	0.13	3	不 詳	地形の高い側に僅かに痕跡をとどめる程度。
	H 3	棚田状整地面	?	約 13×2.8	0.3	約100	不 詳	柵列状柱穴群と複合する棚田状削平整地面、長方形プランの建て物の可能性あり、通鑑出土の石鏡約40本を発見注目された。
3	P 1	ピット・長方形	ほぼ完存	1.67×0.81	0.92	1	な し	H 3 と複合、P 2 と一緒に切り合う、土器片の埋積多く、底面中央に浅い柱穴痕1あり。
	P 2	ピット・長方形	ほぼ完存	1.15×0.46	0.87	—	な し	P 1 と 1部で切り合う素掘り土壌。
	H 4	棚田状整地面	?	6.65×1.7	0.38	20	壁 带 溝	柵列状柱穴群と複合する棚田状削平整地面、長方形プランの建て物と推定されるも詳細不明。
	H 5	堅穴・隅丸方形	約30%	1辺長 4.7	0.2	11	壁 带 溝	周辺部も含めて約30本分の柱穴痕が散在。3棟以上の住居址複合が考えられるも詳細不明。
4	H 6	堅穴・円形	約40%	推 径 5.7	0.76	10	壁帯溝 3条	同一立地でほぼ同形同大の堅穴式住居址3回以上が建て替えか？
	H 7	堅穴・隅丸方形	約25%	1辺長 4.5	0.2	4	壁 带 溝	遺存度悪く詳細不明。
	H 1	棚田状整地面	?	8.7×2.2	0.9	13	壁 带 溝	棚田状削平整地面、1間×3間程度の長方形プランの建て物か？ H 2・H 3により切られている。
	H 2	堅穴・隅丸方形	約20%	不 詳	0.8	7	不 詳	隅丸方形住居址状の掘りこみおよび床面の一部を遺存するのみで詳細不明。
5	H 3	堅穴・円形	約40%	推 径 6.9	0.7	8	壁帶溝条 1 中央ピット1	H 1 を切り、H 4・5 に切られている。
	H 4	堅穴・円形	?	推径約 6.0	0.35	9	な し	長方形プランの建て物と複合か？
	H 5	堅穴・隅丸方形	約30%	1辺推長4.3	0.25	10	溝 遺 槽	棚田状宅造面とセットまたは複合。
	H 6	不 詳	柱穴痕のみ	不 詳	不詳	12	な し	棚田状整地面と柱穴痕を残すのみである。
6	H 7	棚田状整地面	?	8.5×2.2	不詳	17	部分的に溝 遺構	棚田状整地面と柱穴痕から1~2回連て替えられた長方形プランの建て物址と推定される。
	H 8	堅穴・円形	約70%	径 6.2	0.4	30	壁 带 溝 2条 中央ピット1	2段掘りこみ、比較的整然、2棟の複合、床面にサヌカイト砂片密集2か所を検出。
	P 1	ピット・隅丸長方形	約50%	2.3×1.4	0.4	—	な し	素掘り土壌H 8 と切り合ひ複合する。
	H 9	不 詳	柱穴痕のみ	不 詳	不詳	7	不 詳	岩田第8号墳と複合、削平した古墳整地面に柱穴痕2ブロック検出、少くとも2棟以上存在していたと推察される。
7	H 10	不 詳	柱穴痕のみ	不 詳	不詳	4	不 詳	約20cmの段差で階段状に接続する棚田状整地面、共に長方形プランの建て物と推察されるが、同時に併存のスペースはない。
	H 11	棚田状整地面	不詳	11.0×1.2	不詳	21	不 詳	同 上
	H 12	棚田状整地面	不詳	7.5×1.2	0.2	6	な し	
	H 13	棚田状整地面	不詳	7.6×0.75	0.35	1	不 詳	
8	H 14	棚田状整地面	約60%	6.3×2.2	0.15	11	な し	

支群番号	追跡番号	形 式	遺存度	現存部塊		現存柱穴数	床面施設	備 考
				床面(m)	壁高(m)			
	H 1	堅穴・円形?	柱穴底のみ	不詳	不詳	10	不詳	H 2 と切り合い床面流失詳細不明。
	H 2	堅穴・円形	約50%	推 径 5.1	0.53	6	壁帶溝 2条	拡幅改築された 2 棟の複合。
	H 3	堅穴・不詳	柱穴底のみ	不詳	不詳	16	不詳	床面流失。3.5m × 3.5m の範囲に柱穴 16 が集中。
	P 1	ピット・隅丸長方形	約60%	2.07 × 1.05	0.47	—	なし	H 3 と一部で複合。素掘り土壌。
	H 4	不詳	柱穴底のみ	不詳	不詳	12	不詳	床面流失柱穴により痕跡を止める程度。H 5・6 と複合。
	H 5	堅穴・隅丸方形?	柱穴底のみ 床面の一部と溝穴	推 長 1. 迂 約 4.0	0.6	6	壁 帯 溝	棚田状整地面に溝の一郎と柱穴が遺存し、宅地面と隅丸方形住居址の存在が推定される程度。
4	H 6	堅穴・円形	約50%	推 径 5.4	0.6	8	壁 帯 溝	H 5・H 7 と複合。
	H 7	棚田状整地面	不詳	5.70 × 1.0	0.6	11	溝 遺 構	長方形プランの建て物か。
	H 8	堅穴・隅丸方形	約20%	1 迂推長 3.8	0.5	1	壁 帯 溝	H 8 ~ H 13 一帯にかけて土器留り、総重量 170kg。H 9・H 11 により切られてい。
	H 9	堅穴・隅丸方形	約30%	1 迂推長 4.0	0.62	9	壁帶溝 3条	H 10・H 11 と複合。床面溝遺構の形状等から、少くとも 2 回以上の建て替えと推察される。
	H 10	堅穴・円形	約60%	推 径 4.3	0.4	10	壁帶溝、中 央ビット、 焼土面各 1	H 8 ~ H 11 の範囲では常時 1 棟のみ、2 棟併存不可。土器片のはか、打製石廻丁 1、石錐 1 発見。
	H 11	堅穴・長方形	約80%	1.9 × 1.39	0.3	3	壁 帯 溝	貯蔵穴の可能性大。
	H 12	棚田状整地面	不詳	6.0 × 0.6	0.4	—	不詳	H 13 と複合、現状では不詳。
	H 13	棚田状整地面	約50%	5.8 × 2.4	0.1	11	溝 遺 構	長方形プランの建て物か。床面にサヌカイト原石 3 個と多数の打製石器、サヌカイト碎片検出。工房址?
	H 1	棚田状整地面	柱穴底のみ	6.5 × 3.2	0.8	7	不詳	H 2 が切断、円形住居址か。
	H 2	堅穴・円形	約50%	推径約 7.0	0.5	40	壁帶溝 2条	同一立地 3 棟以上の複合と推察される。土器片、石器類の出土多し。
	H 3	棚田状整地面	不詳	22.0 ~ 約 2.0	不詳	90	不詳	等高線に沿う長さ約 22m の棚田状整地面に約 90 本の柱穴群、その間に住居址状の掘りこみ跡か所が認められ H 3 ~ H 6 とした。H 3 を中心に土器留り、総重量約 73kg。
5	H 6							
	P 1	ピット・隅丸長方形	約60%	1.67 × 1.37	0.44	—	なし	素掘り土壌。
	P 2	ピット・楕円形	ほぼ完形	2.1 × 1.35	0.8	—	なし	素掘り土壌、2 ピットの複合か。
	H 7	堅穴・隅丸方形	約30%	1 迂長約 3.0	0.7	5	なし	
	H 8	堅穴・隅丸方形	約10%	1 迂長約 2.8	0.16	—	なし	H 7 ~ H 9 の 3 棟は階段状に切り合い複合、同時併存は不可能である。
	H 9	堅穴・隅丸方形	約20%	1 迂長約 4.2	0.41	2	壁 帯 溝	
	H 1	堅穴・隅丸方形	約35%	1 迂長 4.6	0.8	1	壁 帯 溝	流失著しく詳細不明。
	H 2	棚田状整地面	約40%	9.97 × 3.35	0.67	22	壁 帯 溝	長方形の建て物か。
	H 3	棚田状整地面	約40%	10.0 × 4.0	—	34	溝 遺 構	長方形の建て物か。
6	P 1	ピット・不定梢円形	約60%	2.18 × 1.6	0.32	—	なし	素掘り土壌、2 段掘りこみ。
	H 4	不詳	柱穴底のみ	6.0 × 3.0	0.42	6	不詳	流失著しく詳細不明。
	H 5	不詳	柱穴底のみ	4.0 × 2.0	0.2	3	不詳	掘りこみの一部と柱穴底のみ、詳細不明。
	H 6	堅穴・円形?	約40%	推 径 6.14	0.2	37	不詳	H 6 ~ H 8 は隣接状に複合、該回にわたる建て替えと推察。
	H 7	棚田状整地面	約40%	11.0 × 2.8	0.2	32	不詳	整地替えを伴う何回かの建て替え、詳細不明。

文群番号	遺構番号	形 式	遺存度	現存部規 模 床 面 高 (m)	現 住穴数	床面施設	備 考
6	H 8	棚田状整地面	約40%	6.0 × 2.0	0.4	23	不 詳
	H 1	堅 穴・円 形	約70%	推 径 8.27	0.8	56	壁帶溝3条 中央ビット2, 地土面 1
	H 2	堅 穴・不 詳	柱穴痕のみ	7.0 × 3.0	0.2	8	不 詳
	H 3	棚田状整地面	約40%	10.3 × 2.1	0.35	12	な し
	H 4	堅穴・隅丸方形	約30%	10.9 × 2.3	0.5	18	壁 带 溝
	H 5	堅穴・隅丸方形	約60%	1辺長 3.3	0.05	7	壁 带 溝
	H 6	堅穴・隅丸方形	約26%	不 詳	0.3	4	な し
	H 7	棚田状整地面	不詳	7.4 × 1.0	0.3	10	壁 带 溝
7	H 8	棚田状整地面	不詳	5.05 × 0.65	0.3	3	な し
	H 9	堅 穴・円 形 ?	約25%	2.2 × 1.3	0.15	15	不 詳
	H 10	棚田状整地面	不詳	7.8 × 1.65	1.1	12	溝 通 橋
	P 1	ビット・橢円形 柱	ほぼ完 存	1.08 × 0.78	0.32	—	な し
	H 11	棚田状整地面	不詳	13.0 × 1.7	0.4	—	な し
	H 12	堅穴・隅丸方形	約50%	1辺長 3.47	0.3	2	壁 带 溝
	H 13	棚田状整地面	不詳	5.3 × 1.0	0.5	11	不 詳
	H 14	棚田状整地面	不詳	15.0 × 3.4	0.7	20	溝 通 橋
	H 15	堅穴・隅丸方形	約50%	1辺長 2.18	0.2	3	壁 带 溝
	H 1	棚田状整地面	不詳	8.0 × 1.6	1.0	2	な し
	H 2	棚田状整地面	不詳	3.6 × 0.6	0.7	3	溝 通 橋
	H 3	棚田状整地面	約50%	11.5 × 2.6	0.7	23	溝 通 橋
	P 1	ビット・隅丸形 方形	約50%	0.67 × 0.71	0.2	—	な し
	H 4	4本柱特殊建物	完存	約4.5 × 4.5	—	4	な し
	P 2	ビット・長方形	完存	1.7 × 0.95	0.8	—	な し
8	H 5	堅 穴・隅丸方形	約35%	1辺長 3.15	0.03	9	壁 带 溝
	H 6	棚田状整地面	約50%	11.0 × 3.8	0.8	35	溝 通 橋
	H 7	堅 穴・隅丸方形	約30%	1辺長 1.95	0.18	2	な し
	H 8	堅 穴・隅丸方形	約40%	1辺長 3.1	0.3	—	な し
	H 9	堅 穴・円 形 ?	約15%	推 径 3.05	0.18	—	な し
	H 10	堅 穴・円 形	約50%	推 径 3.1	0.2	—	な し
	H 11	堅 穴・隅丸方形	約40%	1辺長 4.3	0.42	4	壁 带 溝
	H 1	堅 穴・円 形	約20%	推 径 4.2	0.4	5	不 詳
9	H 2	棚田状整地面	不詳	12.0 × 4.5	1.2	60	溝 通 橋

支群 番号	遺構 番号	形 式	遺存度	現存部規様		現 存 柱 穴 数	面 床 施 設	備 考
				床 面 (m)	壁 高 (m)			
9	H 3	堅穴・隅丸方形	約60%	1辺長3.86	0.3	3	なし	H 2・H 4と切り合ひ複合。
	H 4	堅穴・隅丸方形	約75%	3.75×4.0	0.33	15	なし	H 2・H 3と複合。他に円形住居との複合の可能性あり。
	H 5	不詳	不詳	3.5×1.5	不詳	10	不詳	流失著しく詳細不明。長方形建物か。
	H 6	堅穴・隅丸方形	不詳	3.75×2.2	0.25	7	溝遣構	流失著しく詳細不明。
	H 7	堅穴・円形	約70%	推 経 3.8	0.6	15	壁带溝2条 中央ピット1	H 8と複合。火災焼失のためか、炭化木材を多量に検出。2棟の重複立地。
	H 8	不詳	柱穴痕のみ	6.0×6.5	不詳	H 9と 合せて 約100 本	溝遣構1条 中央ピット状 態2 塗土面1	H 6・7・9と切り合ひ複合。数次にわたる堅穴式住居址の建て替えと推察。
10	H 9	堅穴・円形	約60%	推 経 8.0	不詳	約60	壁带溝2条 中央ピット1	大型円形住居址。造成面掘りこみ深さは2.5m。埋積土中に土器片、石器類多し。床面にサヌカイト碎片を多量に検出。工房跡か。
	H 1	削平整地面	不詳	18.0×3.2	0.9	11	なし	単なる宅地造成面の可能性もある。
	P 1	ピット・隅丸長方形	完存	2.29×1.44	0.36	なし	なし	素掘り土壤。
	P 2	ピット・槽円形	完存	1.92×1.17	0.43	なし	なし	素掘り土壤。
	H 2	堅穴・隅丸方形	約50%	1辺長4.06	0.29	5	なし	H 3と切り合ひ複合。2重掘り方更に1棟の複合か。
	H 3	堅穴・隅丸方形	約30%	1辺長約4.00	0.16	3	なし	東北隅部のみ遺存詳細不明。
	H 4	不詳	柱穴痕のみ	10.0×3.2	—	9	不詳	流失著しく詳細不明。
	H 5	堅穴・円形	約20%	推 経 6.0	0.2	21	壁带溝 塗土面1	流失著しく詳細不明。
	H 6	堅穴・隅丸方形	約50%	1辺長 1.5	0.6	2	壁带溝	H 5と切り合ひ複合。貯藏穴の可能性あり。
	H 7	堅穴・円形?	不詳	8.0×3.0	不詳	12	溝遣構	流失著しくやっとその痕跡を知る程度。
11	H 8	柱穴痕のみ	6.5×4.0	不詳	8	不詳	不詳	掘りこみ壁の一部および柱穴痕から推察できる程度。
	H 9	堅穴・円形?	約60%	推 継 6.0	不詳	16	不詳	大型円形住居址。同一立地で数回の建て替えが繰り返されている。サヌカイト碎片多量検出。
	H 1	堅穴・隅丸方形	約70%	3.2×4.04	0.6	15	壁带溝	H 2と複合。他に整地替えを伴う建て替えか。
	H 2	棚田状整地面	約50%	6.3×3.0	0.1	9	不詳	流失著しく詳細不明。
	H 3	棚田状整地面	約50%	9.6×2.55	0.4	27	壁带溝	長方形の建物か。H 1・H 4と一部で複合。
	H 4	堅穴・隅丸方形	約60%	4.18×3.99	0.25	18	壁带溝、中央ピット	4隅4本柱の構成。他は複合住居址の柱穴か。
	H 5	堅穴・円形	約60%	推 継 5.7	0.15	約30	壁带溝	柱穴痕数からみて数棟の複合と推察。
	H 6	不詳	柱穴痕のみ	10.0×5.0	不詳	約50	—	4か所の掘りこみ壁状痕跡あるも詳細不明。柱穴数および配置状況から数棟の複合と推察。
	H 7	堅穴・隅丸方形	約30%	1辺長 3.1	0.3	14	なし	その他整地面および柱穴痕あり。複合住居か。
	P 1	ピット、長方形	約90%	2.05×0.73	0.47	—	なし	十文字形に互に切り合う長方形の素掘り土壤。古墳時代の後期の土壤基と類似するが、伴出遺物もなく時期不明。
12	P 2	ピット、長方形	約50%	1.47×0.84	0.46	—	なし	
	P 3	ピット、長方形	約90%	2.06×0.7	0.33	—	なし	
12	H 8	堅穴・円形	約70%	推 継 6.0	0.7	54	中央ピット1	大型円形住居。サヌカイト碎片多量。打製石器工房址か。2~3回の建て替え複合と推察。
	H 1	堅穴・隅丸方形	完存	4.5×3.8	0.1	6	壁带溝 中央ピット	4隅4本柱構造。中央部に炉址。火災焼失のため床面に炭化木材多量。土器片、砥石、石器あり。

支群番号	遺構番号	形 式	遺存度	現存部規模		現存柱穴数	床面施設	備考
				床面(m)	壁高(m)			
12	H 2	長方形建物	柱穴のみ	2間×4間 (5.6×9.1)	—	11	—	H 1より後出、本遺構周辺のみに平安時代土器片検出あるいは平安時代建物か。 またH 1・H 2周辺約9m×12mの範囲に約50本の柱穴が分布、他に数棟存在の可能性大。
	H 3	棚田状整地面	不詳	8.7×4.0	0.52	約30	なし	長方形建物の複合か。
	H 4	棚田状整地面	不詳	7.0×2.5	0.44	5	なし	整地面の流失著しく詳細不明、長方形建物か。
	H 5	豊穴・円形	約15%	推定約 5.0	0.34	3	壁帶溝	床面流失著しく詳細不明。
	H 6	豊穴・円形	約20%	推定約 5.0	0.19	3	壁帶溝2条	3棟の同一立地複合か。
	H 7	棚田状整地面	不詳	4.5×1.2	0.14	4	溝遺構	各遺構から住居址の存在を知る程度である。
	H 8	豊穴・隅丸方形?	約15%	1辺長 3.5	0.2	2	壁帶溝	流失著しくやっとそれとわかる程度の遺存。
	H 1	豊穴・円形	約40%	推定約 6.0	0.4	7	なし	床面流失詳細不明。
13	P 1	ピット・楕円形	完存	0.75×0.34	0.13	1	なし	底面中央に柱穴1。
	P 2	ピット・楕円形	完存	0.82×0.63	1.4	—	なし	H 1床面に立地、素掘り土壤。
	H 2	豊穴・隅丸方形	約50%	1辺長 5.6	0.36	10	壁帶溝1 焼土面1	床面密着土器片若干。
	H 3	棚田状整地面	不詳	7.0×2.0	0.52	10	なし	長方形の建物か。
	H 4	豊穴・隅丸方形	約30%	1辺長約4.0	0.4	4	壁帶溝	H 5と切り合い複合。
	H 5	豊穴・円形	約40%	推定約 7.0	0.18	14	壁帶溝	周辺丘陵上5m×7mに柱穴8、住居址存在か。
	P 3	ピット・円形	完存	0.76×0.76	0.53	—	なし	素掘り土壤。
	H 6	豊穴・隅丸方形	約40%	1辺長3.91	0.36	5	壁帶溝	柱穴4個各1と中央部1計5本構造。
	H 7	不詳	柱穴痕のみ	不詳	不詳	6	焼土面	5m×5mの範囲に柱穴痕5本から住居址と推定。
	H 8	豊穴・円形	約70%	推定 7.22	0.18	11	壁帶溝 中央ピット1	床面遺存度良好、サスカイト碎片が集中する床面および石錐8、石錐1等発見、打製石器工房址か。
	H 9	豊穴・隅丸方形?	約30%	4.1×3.7	0.21	11	壁帶溝 焼土面	北西隅部のみ遺存詳細不明。
	H 10	不詳	柱穴痕のみ	不詳	不詳	7	不詳	流失著しく柱穴痕のみ、詳細不明。

る。したがって個々の遺構の年代区分も明らかにできない場合が多く、全体として弥生時代中期後半を盛期とした、比較的限られた時代の集落址と推定できる程度である。

個々の遺構の保存度が低いとはいえ、集落の構成に大きな特徴をみせるとともに、住居を建てて敷地のスペースを確保するため、大規模な宅地造成が施されていた。遺構が集中する谷傾状の急斜面部が最も象徴的であるが、丘陵斜面を等高線走向に沿って掘りこみ、棚田状平坦面を階段状に幾段も連続して造成している。そして各段ごとに数棟単位のまとまりのある住居支群が構成され、さらにそれがいくつか集まって、用木山を中心とした大規模な村落を形成しているのである。住居支群の造成規模は、最も顕著な第7住居支群を例にとると、宅地造成のための丘陵斜面の掘り込みの深さは、現存地山生き土層だけでも最深部で約2.7m、造成面長約45m、造成面の現存最大幅部約9mを測り、検出住居棟数は15棟である。本遺跡の場合、今次発掘調査を実施した範囲内で、こうした住居支群が13支群検出され、表52に示したように住居址等の建物址124棟、ピット状遺構

20、計144遺構を発見した。個々の遺構の形式とか計測値などについては表53に示したとおりであるが、なかには互いに切り合っていたり、近接していて実際には同時併存不可能のものもかなりある。そうした点を考慮に入れて本遺跡の住居棟数を推察すると、各住居支群の構成棟数は4～6棟、全体で最盛時60棟～70棟程度で形成された集落であったろうと考えられる。

## 第2節 遺跡の特徴と問題点

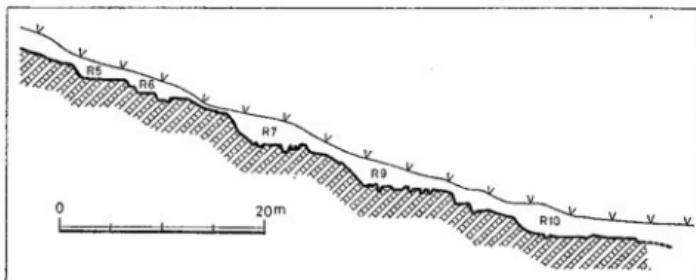
### 1. 集落の構成

本遺跡の特徴のまず第1は、先述もしたように、集落が平均傾斜度30度を越えるほどの急斜面に立地することもあるてか、丘陵斜面を等高線走向に沿って大きく掘り込み、地形の低い側に埋めだして、階段状のテラスを何段も造成して、各段ごとに数棟単位のまとまりをもった住居支群を構成し、それがいくつか集まって村を形成するという生活が営なまれていることである。

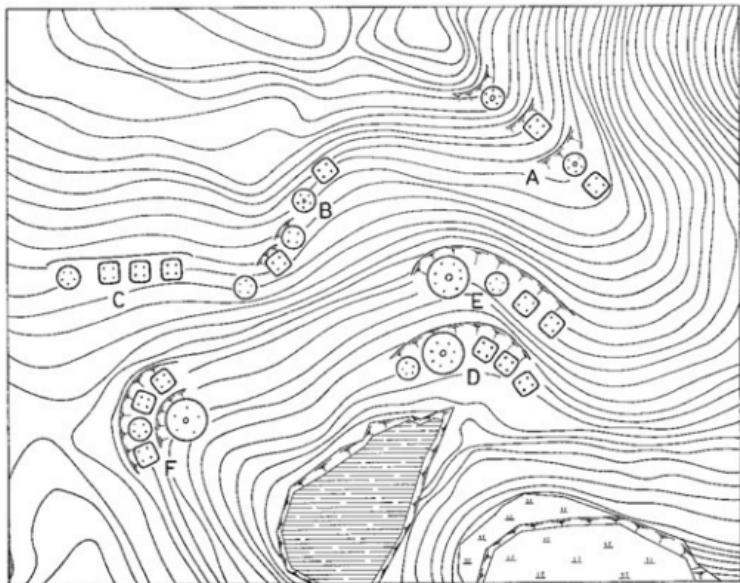
これらの住居支群単位の宅地造成面は、原則として竪穴式住居址1棟を建てられる程度の、帯状に細長い棚田状平坦面を呈する場合を普通とするが、その立地する場所の地形的条件によって、いくつかの類型に分類することができる。すなわち第281図の模式図に示したのがそれである。

Ⓐ型、幅員の狭い尾根稜線上に尾根走向に沿って直列状に並ぶ住居支群である。尾根幅が狭く、比較的緩傾斜の尾根稜線上に立地する場合は、その稜線の等高線走向に沿って尾根部を掘り込み、その下方を削平整地して住居を1～2棟建てられる程度の平坦面を造成している。したがって宅地造成のための丘陵尾根部の掘り込み線は多くの場合は外縁して、いわゆる竪穴式住居の掘り込み壁面とは逆のカーブを示す。これを数メートルごとの距離をおいて何回か繰り返して造成面をつくり、尾根稜線上に直列に縦1列に連なる形状の住居支群を構成する。本遺跡第12住居支群、惣団遺跡第1地点第4～10号住居址がこれにあたる。

Ⓑ型、丘陵尾根からその側斜面にかけて、等高線が斜方向に平行して走る比較的緩斜面に多く見受けられる類型で、個々の住居が段差を示しながら放射状に1列に連なる住居支群である。宅地造成は原則として1棟単位で行われ、丘陵斜面への掘り込み線も建てようとする住居の形状に合せ



第280図 用木山遺跡第6～10住居支群断面図



第281図 用木山遺跡住居址支群構成模式図

て、円弧状あるいは直線的な範囲を呈する場合が多い。本遺跡第3・6・13住居址支群などがこれにあたる。

◎型、舌状にのびた丘陵上平坦面から側斜面に臨もうとする肩部とか、尾根走向などに沿って等高線が直線状に平行して走る比較的急傾斜面に多く見受けられる類形である。丘陵斜面を等高線の走向に沿って直線状に長く掘り込み、下方を埋めだした帶状の細長い棚田状平坦面を造成して、住居も横1列に連なるように住居支群を構成する。本遺跡第2・3・8住居址支群、愛宕山遺跡第2地点第1・2住居址支群、さくら山遺跡第2地点第7・8住居址支群などがそれである。

◎型、谷頭部や谷底状斜面など等高線が内縦して走るところでは、等高線走向に沿って円弧状に大きく掘り込み、住居も弓状に連なって住居支群を構成している。本遺跡第9住居址支群、惣谷遺跡第2地点第3住居址支群などがそれにあたる。そのほかに、◎型と◎型を組み合せた巴形となる住居址の配列をみせる◎型と、◎型が上下2段に結合した形状で、下段部を中心となる大形住居1棟が位置する◎型がある◎型は本遺跡第7住居址支群、◎型は本遺跡第10・11住居址支群がこれにあたる。

各住居支群の形状は以上のように6類型に分類されるものの、基本的には宅地造成が1棟単位で行われながらも、まとまりのある住居支群を構成する◎～◎型と、住居支群全体を同一削平整地面上に包括する◎～◎型の2つに大別される。

本遺跡の場合、発掘調査を実施した範囲内において計13住居址支群を検出したが、なかでも最も

遺構密度の高い第1～10住居址支群の集中する谷側斜面部では、水平距離約80m、比高約25mの間に9段ものテラスが階段のように連続して造成され、まるで段々畑を想起させるほどである。

このような階段状に造成された平坦面に営まれた住居支群は、そのスペースからみて平均4棟～6棟で単位グループを構成していたと推察されるが、各住居支群でそれぞれ共通点をもっている。各住居支群は比較的小形の、一辯4.2m～5m程度の隅丸方形あるいは径5m前後の円形住居址群と、径6m以上の規模の大きい円形住居址1棟との組み合せで構成されるものが多い。そしてまた大形住居址の床面からは申し合せたように、多量のサヌカイト屑碎片や打製石器の半製品とか使用中の折損品が検出され、各住居址支群ごとに打製石器の製作および再生加工が行われたことを示し、さらに大半の住居址支群が食糧貯蔵穴と思われるピット状遺構を保有しているなど、各住居支群単位でのある程度の自立性をみせている。しかし一方では、倉庫と想定される高床式住居址は、やや小高い尾根支脈部に立地する第8住居址支群内の造成面と、時代が明らかでないが同じく第12住居址支群内の整地面に、それぞれ1棟づつの計2棟を検出するのみで、本集落遺跡を形成する共同体全体の共有物としての色彩が強い。

このような4棟～6棟程度で構成される住居址支群は、今後の検討を要することはあるが、その規模とか配置状況などからみて、一応共同体の中における最小の社会的な単位集団、すなわち血縁で結ばれた家族集団を示し、こうした単位集団が幾つか集まって、さらに大きいムラ＝農業共同体を形成していると考えられるのである。

話は少し余談になるが、当山陽住宅団地開発事業用地内に所在する弥生時代の集落遺跡地内から、発掘調査を実施した限りでは、集落址と直接結びつくと思われる墓壙は発掘されなかった。しかし、本遺跡の東に隣接する愛宕山丘陵頂には、約300基の土壙墓群で構成される愛宕山土壙墓遺跡と、さらに谷一つ北に隔てた四辻丘陵頂には、72基の土壙墓からなる四辻土壙墓遺跡が発見され、ともに伴出遺物の編年観からみて、本遺跡とほぼその年代を一にし併存した可能性が強い。このことから直ちに本集落址の墓域と断定することはできないまでも、当丘陵群内に居住地を求めた人々は、その当初から居住区と墓域とを意識して区別していたと考えられる。

これら二つの土壙墓遺跡は、一見して比較的平坦な丘陵頂を共同体の墓域として選び、その地に無秩序に集中して墓壙を掘って埋葬しているようにみえるが、その分布の状況や墓壙の配列を細かく観察すると、平均して6基ないし8基程度、多くても20基以内でまとまりをもった小グループに分けることができる。

ちょうど本集落遺跡の住居群が、4棟～6棟単位での住居址支群に分けられ、それが幾つか集まってムラを形成しているのと同様に、墓群もまたそれと対応する形態を示すのである。このことは、共同体の共通の墓域と定められた丘陵頂部に死者を葬る場合にも、無秩序にその地に埋葬するというのではなくて、墓域の中にも単位集団ごとの一定の区画を保有し、家族墓的な葬送が意識して行われたことを物語るものと考えられるのである。

## 2. 個々の遺構の特徴と問題点

次に本遺跡内の個々の遺構が示す特徴と、その問題点のいくつかを取りあげ列記してみたい。

## 広 場

本遺跡の発掘調査の結果、最も平坦な場所である用木山丘陵頂には住居址は存在しなかった。住居址はすべてその南側斜面と、丘陵頂から東と南西に派生している丘陵尾根支脈上で発見された。用木山丘陵頂部は発掘調査を実施する前の現状では、北東端部に径約30m、高さ約3mの用木古墳群第1号墳が築造されてはいるものの、そのほかに幅員約20m、長さ約80mのなだらかな亀甲状平坦面となり、時代は不明ながら人為的に削平整地を施した形跡すら感じられるほどである。このように丘陵頂に近い側斜面や尾根支脈上に住居址が数多く発見されながら、丘陵頂の平坦面に住居址が発見されない例は、当山陽住宅団地開発事業用地内所在の集落遺跡のなかにも、本遺跡のほかにさくら山遺跡第1地点、愛宕山遺跡第2地点、門前池西方遺跡第2地点などでもみられ注目された。

このように遺構の検出されない丘陵頂の平坦部の利用について、はじめは祭祀・集会・共同作業など、共同体構成員が集まる広場、あるいは焼烟などの可能性が強いと想定していた。しかし調査の結果、丘陵頂に築造された用木第1号墳の盛り土に、多量の弥生式土器片や石器類を包含する有機土が用いられ、墳丘下に少くとも3棟以上の竪穴式住居址が存在していたことが明らかとなつた。丘陵尾根上に築造される古墳の多くが、その墳丘盛り土をさして遠くない周辺部から採土されていることから考えれば、用木第1号墳の墳丘盛り土は、用木山丘陵頂を削平採土した可能性が強く、丘陵頂部が人為的に削平整地されたように見えるのも、この古墳築造時のことと推察されるのである。また用木山丘陵頂に近い、南西に分出する尾根支脈上に立地する、横穴式石室を内部主体とした岩田第8号墳においても、墳丘盛り土内に弥生式土器片や石器類を包含する有機土層で覆われていたと推察される。一方現在住居址などの遺構が集中する側斜面部の、各遺構の遺存状態や二次的埋積土の状況をみても、当該地が風化侵蝕されやすい花崗岩地質で形成されているのと相俟って、遺構面を含む表土層の流失が著しい。したがって本遺跡の丘陵頂平坦部に、現在住居址などの遺構や有機土層が検出されないからといって、その地が空白地的なものでは決してなく、「広場的」な可能性は残しながらも、本集落遺跡の居住区としての重要な一区画を占めていたと理解した方がより妥当と思われる。

なお、本遺跡の発掘調査では、住居址群内に広場的な削平整地面とか広がりのスペースを検出することができなかった。強いてあげるとすれば、地形の高い東にのびる丘陵尾根支脈稜線上に位置する、第12住居址支群第1号住居址周辺部に、尾根支脈稜線部を削平して、約15m四方の平坦面が認められる程度である。しかしこの平坦面には第12住居址支群第1～3号住居址が、整地面のほぼ全域にわたって広がっていて、広場として活用されたという積極的な根拠は何も示さない。一方緩下降する丘陵尾根支脈上に立地する惣岡遺跡第1地点、さくら山遺跡第2地点では、ともにその集落内のほぼ中央部にあたる尾根稜線上に、前者は約12m×16m、後者は約15m×20mの広さの削平整地面がつくりだされていて注目されたが、本遺跡ではこうした整地面を確認することはできなかつた。

## 柱穴群

本遺跡の発掘調査中に、第2住居址支群および第5住居址支群の2か所において、等高線走向に沿って帯状に連なる多数の柱穴群が発見されて注目された。これらの柱穴群は、ともにそれぞれの住居址支群内に所在する住居址の柱穴と複合するものも含めて、第2住居址支群では長さ約16m、幅約5m、比高約2mほどの傾斜面に約150本分、第5住居址支群では約22mの間に約90本分の柱穴痕が密集遺存していた。各柱穴痕ともほぼ垂直に掘り込まれ、平面形も整った円形を示すものの、規則的な配列はみせず、いわゆる住居址等の建造物の柱穴ではなく、柵列または杭列を想起させる形状を呈していた。

第2住居址支群内の柱穴群を検出した時点では、発掘調査を丘陵頂部から開始して間もない頃である。柱穴群は用木山丘陵頂平坦部から南面する急斜面に臨もうとする肩部において発見され、柱穴群の南斜面は勾配30度を越えるほどの急斜面で、その下方には住居址等の遺構は存在しないと考えられていたことや、柱穴群周辺部だけで47本の石礫が発見されたことなどから、丘陵頂平坦部を中心として所在する集落を、外敵などから護る目的での防禦柵と理解していた。

しかし、その後発掘調査が進むにつれて、南側斜面中腹に位置する第5住居址支群の柱穴群や、急傾斜面を大きく掘り込んで宅地造成を施した、住居支群単位での棚田状造成面が次々に発見され、さらには近在のさくら山遺跡においても同様に柱穴群が検出されるなど、この柱穴群は防禦柵とするよりも、宅地造成時に埋めだした土砂流の崩落を防ぐために施された、「しがらみ」の杭列としたほうがより妥当と考えられる。そのために現存整地面の遺存幅が1.2m～2.0mと狭い第5住居址支群に、345kgにもおよぶ土器片の残渣が認められるものと推察されるのである。

#### 長方形長屋状住居址

本遺跡のように集落立地を急斜面部に求める場合、地形の高い側の丘陵斜面を大きく掘り込み、地形の低い側の斜面に埋めだして削平整地をしても、通常見受けられる隅丸方形堅穴式住居址とか、円形の堅穴式住居址を建てるだけの幅員を確保するのはなかなか困難であると思われる。そのせいか本遺跡の場合でも、遺構面がかなり流失していく具体的な全貌を明らかにすることはできなかつたが、丘陵斜面を等高線走向に沿って直線状に掘り込み、その下方の削平整地面幅が2m前後と、幅員が極めて狭くて細長い感じの造成面で、壁帶溝とか柱穴痕も丘陵斜面の掘り込み壁面に平行して、直線上に並ぶ遺構面がかなり検出された。

これらの幅員の狭い長方形整地面は、立地部の地形的条件や、傾斜面の上下に接する遺構面などとの関係から推考して、もともと当初から幅員の狭い長方形に意識的に造成されているらしく、柱穴の配置も2本×4本ないしは2本×6本程度の長方形プランか、あるいは、4本ないしは6本程度が直列状に1列だけ検出され、いわゆる定形化した隅丸方形とか円形住居址の形状を示さない場合が多い。このような例は当山陽住宅団地開発事業用地内所在の惣園・さくら山・愛宕山遺跡などの集落遺跡においても検出され、また最近岡山県教育委員会が発掘調査を終了した、中国総貿易車道建設用地内所在の真庭郡落合町藤田・須内遺跡、上房郡北房町下呂部・桃山遺跡、阿哲郡神郷町下神代・新市谷遺跡などにおいても類例を増している。

これらの長方形プランを呈する遺構面は、堅穴・平地・高床などの形態は明らかでないまでも、

1間×数間（ $2m \times 6m \sim 2m \times 9m$ ）程度、または長軸中心線上に縦1列に並ぶ柱列によって建てられた、長方形長屋状の住居址であったと推測される。そして整地面上に遺存する溝道構や焼土面、あるいは伴出遺物の出土状況などから推して、その多くは堅穴式または平地式の建て物と考えられる。本遺跡のように急傾斜面に数多くの住居が密集して営なまれる場合、その地形的条件に大きく制約されて、こうした細長い長屋状の住居が生れるのも、また当然のことと思われるのである。

#### 排水施設と屋根の軒先構造

本遺跡の発掘調査において、残念ながら明らかにできなかったことが幾つかある。その一つは雨水や生活用水の排水施設と、今一つは丘陵斜面に大きく掘り込んだ宅地造成時の掘り込み壁面と、住居の屋根の軒先との関係である。

雨水などの排水施設については、特に住居支群が集中的に営まれた谷筋状急斜面部では特に必要であったはずである。現に私たちが発掘調査中にも、一夕立に見舞われれば、折角発掘してきれいに露呈させていた住居址床面などの遺構面も、深さ30cm以上の流水溝によって幾条も無残に痛められ、私たちを大いに悩ませた。また最も多く流水の集まる谷筋部に位置する第7・9・10住居址支群では、集落を廃絶後かなり早い時期に平均1.5m以上も埋没され、その後は比較的に遺構面は安定しているにもかかわらず、各住居址支群とも谷筋にあたる中央部付近は、大きく押し流されて遺構面も大半はすでに消滅していたほどである。

当該地に居を構え生活を営んだ当時の人々にとっても、この雨水等の流水の排水については大きな関心事であったに違いない。これだけ大規模な宅地造成工事を施した集落を構成した人々であってみれば、当然各住居支群の段ごとに、しっかりととした排水施設を整備していたはずである。各住居址支群の宅地造成の掘り込みの深さや規模から考えると、排水施設は丘陵斜面に掘り込んだ壁面の上縁部と、整地面となる下段部との二重の排水溝が最低限必要であったと考えられる。そしてそのことは最大深2.7mも深く掘り込まれた法面状の掘り込み壁面が、発掘調査時においても、あまり乱れていたことからもうなづけるのである。

しかし発掘調査の結果では、宅地造成面の掘り込み壁面に接して、部分的に遺存する壁帶溝状の溝道構のほかには、残念ながら肝心な壁面掘り込み上縁部外方の防排水施設は何も検出することができなかった。等高線走向に沿って溝を掘り左右へ流水を振り分けて排水したのか、あるいは土塁状に土手を築いて流水の浸入を防いだのか、はたまた自然の成りゆきにまかせたものなのか、調査の段階では何も知る由もなかったのである。おそらく何らかの手だけでは講じてあったものが、その後の風化や流土によって、押し流され消滅したものと思われるが、今にしても挿しまれることの一つである。

いま一つの疑問は、住居支群の宅地造成面の掘り込み壁と、住居の屋根の軒先との関係である。多くの場合、宅地造成時の掘り込み壁面と住居址の壁帶溝があまりにも密接しているのである。場合によっては宅地造成時の法面状の掘り込み壁面が、床面からの比高約60cm～70cmぐらいの高さから、角度を変えて垂直に近い壁面となり、そのまま堅穴式住居址の壁面となっている。当初は宅地

造成の掘り込み壁に近い壁帶溝状の溝遺構は、屋根軒先の外縁に繞らされた排水溝の可能性も考えてみたが、大抵の場合、柱穴との間隔の関係から、それらは住居址の壁帶址と推定され、そうすると住居址の屋根軒先は、法面状の丘陵斜面掘り込み壁の中間部に接する形となるのである。それがどのようにおさめられ、法面と屋根との雨水などの排水がどのように工夫されていたのか興味をひかれたものの、これらについては何も明らかにすることことができなかったのである。

### 3. 土器および遺跡の年代

本遺跡の発掘調査に伴う出土土器類は、今までにも何回か繰り返して述べてきたとおり、丘陵傾斜面を大きく掘り込み、階段状の大規模な宅地造成を施しているうえに、遺跡が流土の埋積しやすい谷傾状の傾斜面に立地していることもある。しかし、これらの土器類の大半は、本遺跡において生活が営れていた過程での、住居の建て替えや改造に伴う整地替えとか、その後の遺構面をも含めての風化流動によって、二次移動をした流土の埋積土層内から遺物が発見されたものである。そのため、ほとんどの土器は断片的な破片となり、埋積土層も天体が混同しているため、順序的な明確とか、個々の遺構との直接的な共伴関係については、幾つかの例を除いては明らかにすることはできなかった。したがって、本遺跡において集落が営れた年代についても、個々の遺構について明らかにすることはできない。むしろ出土した土器片を総合的にとらえて、その編年観をもとに全体としてその年代を理解した方がより妥当と思われる。

さいわい本遺跡の場合は、用木山丘陵頂およびそこから派生する2木の丘陵尾根支脈稜線上と、それに囲まれた形の谷傾状側斜面一帯に広がる集落遺跡である。したがって、後世に同一立地に複数の古墳関係等の遺物の混入を除いては、他地点の遺跡から遺物類の流入や混入はまずあり得ない。いくら土器片等の遺物類が風化流動していても、当該遺跡範囲内から出土したものは、すべて本遺跡に伴う遺物と理解して差支えない。各住居址支群単位での出土土器については、あまり編年観や形式にこだわらないで極力実測図式を試みたが、第4住居址支群および第8住居址支群の土器溜り出土の土器類が、弥生時代中期終末のほぼ单一形式で占められていたほかは各住居址支群間ににおける出土土器の形式的な変化は、土器溜りおよび埋土中の遺物土器片を含めてあまりみられない。すなわち、例外的な第3住居址支群の南尾根上および第4住居址支群土器溜り内出土の、2片の弥生時代前期後半と思われる土器片を除いては、弥生時代中期中葉から後期初頭にかけての土器片で占められ、本遺跡が集落として営れたもの、それと併行する弥生時代中期中葉から後期初頭にかけての、ある限定期間であったと推定される。

当山陽住宅団地開発事業用地内所在の弥生時代遺跡の土器編年については、私たちと併行して発掘調査を実施した岡山県教育委員会が、門前池西方遺跡出土の土器について、すでに門前池I類～同V類に形式分類しているので、本遺跡出土の土器についてもそれを準用して、用木山I類～同IV類に4分類して概括することにした。出土土器の形式分類については、その遺跡ごとに新たな地名を冠して形式設定することは、より煩雑化することにつながらり、あまり好ましいことではない。また当山陽町においては、南方前池遺跡や山陽小学校遺跡などの弥生時代前期の遺跡とか、便木山遺

跡や愛宕山方形台状墓群などの、古式土師式土器を出土する遺跡も知られていて、本来ならば町内の埋積平地を中心とする単位地域全体の、弥生式土器から土師式土器にいたる、いわゆる山陽式ともいるべき一貫した形式分類の設定が可能な地域である。しかし今回は残念ながらそうした分類作業にまでは手が回らないため、上記のごとく用木山Ⅰ類～Ⅳ類と暫定的に分類呼称してその責を果したい。

各類形についてその特徴を概述すると、用木山Ⅰ類とは、従来埴池式と呼ばれているものによく類似する土器である。第12・13住居址支群を除く、ほとんどの住居址支群にみられるが、いずれも断片的な小破片となって、出土量も少なく散在的である。そのため詳細にわたっての特徴は把握し得なかったが、壺形土器の口縁部は大きく外反して、口縁端部に刻文や棒状浮文とか円形浮文をもつもの、口縁部上面に櫛描斜行沈線文を施したものも見受けられ、頸部外表に爪形文を配した突帯数条を繞らすものが多い。壺形土器については判然としなかったが、くの字形に外反する口縁部を上下に拡張し、壺形土器と同様端面に棒状浮文、頸くびれ部に突帯1条を繞らすものも見受けられる。高环形土器は、浅い椀状を示す坏部の口縁部を肥厚して、端面をやや丸みのある逆三角形状におさめ幅の狭い水平面に整え、脚端部の拡張や脚鉢部の施文はあまりみられないものが多い。

用木山Ⅱ類とは、従来前山Ⅱ式と呼ばれるものに類似する。本遺跡においてはこの時期に爆発的といつてもよいほど、同形式の土器片が増大する。壺形土器の口縁部を上下に拡張し、口縁端面に凹線文が施される。頸部に突帯を繞らすものも見られるが、多くは凹線文に変っている。壺形土器の口縁部も上下に拡張して、口縁端面に浅い凹線文を施している。口縁端になるにつれて肥厚し、内面のへら削りは器胴部下半にとどまる。高环形土器の口縁部は外面に棱をもって、やや内傾あるいは直立して折り曲がり、外表面に数条の浅い凹線文が施され、脚部には三角形透しや小円孔が施され、裏に貫通する部分が広い。

用木山Ⅲ類とは、従来仁伍式と呼ばれるものに類似する。量的には前記Ⅱ類と同様多量を占める。壺形土器では前者と大した変化はみられないが、壺形土器・台付鉢形土器などでは口縁部が薄く、口縁端部の上下の拡張が顕著で、口縁端面の凹線文が浅くおぼろとなる。高环形土器の口縁部は直立またはやや外傾するものが多くなり、口縁部外面の凹線文が退化しておぼろとなり、その上・下端部が肥厚するものも見受けられる。こうしたものには櫛描き波状文を施したものもある。脚部の三角形透しや小円孔が退化して、ほとんどのものが裏面まで貫通しなくなる。

用木山Ⅳ類とは、従来白江Ⅰ式とか雄町7類などと呼ばれているものに類似し、後期初頭の土器である。各住居址支群とも出土をみるが、前記Ⅱ・Ⅲ類ほどの量はみられない。胎土は前記Ⅱ・Ⅲ類にくらべ粗くなる。壺形土器の口縁端部の拡張は退化し、特に下方への拡張はみられなくなる。器壁はやや厚くなり、頸部から肩へゆるやかなカーブで移動し、肩部外表にへらまたは員などによる押型文が施される。内面のへら削りが頸部付近にまで施されるようになる。壺形土器も壺形土器とほぼ同様の変化をみせる。高环形土器の坏部は外反するようになり、脚部の三角形透しや小円孔はますます退化して浅くなり、特に三角形透しは、直線的な沈線文状を呈するものも見受けられる。

当山陽住宅団地開発事業用地となった東高月丘陵群内では、弥生時代集落址として本用木山遺跡

を含めて、惣園・愛宕山・さくら山・新宅山・門前池西方遺跡の計6遺跡を発掘調査したが、本遺跡と同様な土器の出土状況を示すのは、西に隣接する惣園遺跡のみである。そしてその他の遺跡は本遺跡よりも一時期遅った用木山II類の時期から開始され、遺構の集中密度もやや薄い。こうしたことからも本遺跡は、当東高月丘陵群内における弥生時代中期から後期初頭にかけての集落群のなかで、母集団的な位置を占めるものと考えられる。

なお、本遺跡出土の土器類のなかで、上記の器形のもののはか、分銅形土製品、口縁部を折り曲げた土器、およびいわゆる回転台状土器と呼ばれるものが、いずれもかなりの出土例をみることができ注目された。

分銅形土製品は、本遺跡だけでも33個、当東高月遺跡群からの総出土量は実に55個におよぶ。分銅形土製品はもともと岡山県南部を中心に、瀬戸内地方に分布していることが知られ、現在全国で約150個の出土例があるが、そのうち約3分の1を当地域で占めていることになる。分銅形土製品に関する研究は、学友東潮君（現在奈良県立考古博物館勤務）が、学生時代から引き続いで精力的に進められている。本遺跡出土の分銅形土製品についても、発掘調査の過程を通してたびたび来山され、資料化されていた。さいわい今回は東君の協力を得て、当東高月遺跡群出土の分銅形土製品について、その集成ならびに研究成果を「東高月遺跡群出土の分銅形土製品」として寄稿いただいたので、巻末に稿を改めて掲載した。それを参照願いたい。

口縁部を折り返した無文土器については、最近当地方でも、上東遺跡、津島遺跡等でもその出土例があり注目されているが、本遺跡では、第11住居址支群をはじめ約20片が発見され、そのほか当東高月遺跡群内では、便木山遺跡、門前池西方遺跡でも数は少ないが発見されている。いずれも断片的な破片の、それも離散出土のため、年代を明確に比定できないが、胎土・焼成等から推して用木山II～同IV類に伴うと思われるものが多いようである。挿図中に極力実測図示しているので参照願いたい。

またいわゆる回転台状土器と呼ばれる、上面が平らによく磨かれた、円筒状の土器については、第9住居址支群をはじめ計5個体分検出された。このほかにも当東高月遺跡群からは、惣園遺跡第2地点、さくら山遺跡第1地点、門前池西方遺跡第2地点からも出土例が見られ注目された。

#### 4. 石器類

本遺跡の特徴として今一つあげられるのは多量の石器の出土と、その製作址である。出土した石器類の形式別出土数は、磨製刃石斧72、同柱状石斧11、同扁平片刃石斧12、同環状石斧3、打製不定形石斧状刃器16、磨製石庖丁26、打製石庖丁155、同石槍17、打製石鎌1,327、磨製石鎌1、打製石匙5、同石錐20、同盤刃状刃器2、石鍤17、叩石・槌石等83、凹石・台石等6、砥石69など総出土点数1,864におよんだ。なかでも石鎌が1,328点と多数を占め、石槍、環状石斧など武具・狩猟具の多いことが注目された。

打製石器の大半はサヌカイト製であり、中に若干数ではあるが、粘板岩質のものが熱変成を受け硬質化した準黑色珪質頁岩を利用したものと、川原石の小口部を打撃を加えて簡単な石斧状の施刃を施したもののが見受けられる。珪質頁岩製のものは原材料の節理の性質のためか、石庖丁、不定形

刃器、扁平片刃石斧に限定されている。

このサヌカイト製打製石器の製作および再生加工は、本集落址内の各住居址支群単位で行われたものと考えられ、各住居址支群の大形住居址床面を中心に、多量のサヌカイト屑碎片や未製品とか折損品が密集して検出されることは先に述べたとおりであるが、特に第4住居址支群第13号住居址床面に、3個のサヌカイト原石が、重ねて置いた状態で発見され注目された。これらのサヌカイト産出地については、現在京都大学原子炉実験所の東村武信氏を中心に、「石器の原産地推定と西日本文化圏推定」のプロジェクトチームが組織されて研究が進められているが、本遺跡出土のものについても資料提供しているので、今後の研究成果が期待されるのである。

打製石器のはほとんどがサヌカイトで占められ、しかも本遺跡内で製作あるいは再生加工されているのに対して、磨製石器の場合は、例えば太形磨製始刃石斧は砂岩質、石庖丁は粘板岩・泥板岩系と、器形によっては石材は統一されているものの、細かく観察すると、同じ砂岩であっても、色調や硬度さらには構成物質に個体差がある、ほとんどのものが産出地を異にするものが多いようである。このことから磨製石器については、その製法上の技術的な問題も含めて、あるルートを通じて遠隔地で生産された既製品を入手したものと考えられる。

次に個々の石器について二、三特徴的なことを列記しておきたい。

石鉋は総計1,328点と多量に出土し注目された。粘板岩製磨製石鉋1を除いてはすべてサヌカイト製打製石鉋である。形態的には綫長の二等辺三角形を示すものが圧倒的多数を占め、平基石鉋42.5%、凹基石鉋33.7%、凸基石鉋17.4%、有茎石鉋6.4%の比率となる。石鉋の形態および計測値についての若干の統計処理は、すでに前章出土遺物の項で述べているので割愛するが、凸基石鉋の一部と有茎石鉋を除いては、いずれも長さ1.5cm以上3cm未満、重さ0.5g以上2g未満に集中し、佐原真氏の唱える戰闘用石鉋の、長さ3cm以上、重さ2g以上の石鉋の占める割合は、本遺跡の場合、計88本、比率約10.2%と極めて低いことが指摘できる。

本遺跡出土の石庖丁は、磨製石庖丁26に対して打製石庖丁155、その比率は約1:6である。これを山陽町教委発掘調査の東高月遺跡全体でもみても、磨製石庖丁40、打製石庖丁246とほぼ同様の比率を示し、サヌカイト製打製石庖丁の方が圧倒的多数を占めながらも、磨製石庖丁と共に存していることを示している。このことは、粘板岩製磨製石庖丁でありながらサヌカイト製打製石庖丁に類似した短冊形を呈し、両小口部に抉りをもつものや、逆にサヌカイト製打製石庖丁でありながら、紐とおしの小円孔を穿ったものも、数は少ないが若干見受けられたことでもうなづける。

岡山県内における石庖丁の分布は、古くから、県南は打製石庖丁、県北は磨製石庖丁として知られ、その両者が共存する中間地域でも、東部の邑久郡、赤磐郡では打製石庖丁を主、磨製石庖丁を從とし、西部の小田郡では逆に磨製石庖丁を主、打製石庖丁を從としている。当山陽町の場合もまさにその範囲に入る傾向を示しているのである。したがって、当山陽町が当時岡山県南地域の影響を強く受けながらも、一方においては県北の文化的様相をも一部で受けていることを示しているものと思われる。このことは、土器についても同様のことが指摘できる。地理的には岡山平野に近い吉備高原の南縁に位置しながらも、吉井川水系による県北部津山盆地とのつながりもまたもつ地域である。今後こうした地域差をふまえて、南北の交流を究明するうえで大きな手がかりとなるも

のと考えられる。

最後に、錐状の小形鉄製利器を底いだ砥石についてふれてみたい。この砥石については、すでに出土遺物の項でも概述しているが、横断面が半円形を示す、研磨痕を顕著に遺存する砥石が1点発見され注目された。その磨耗痕からみておそらく錐状の小鉄器を底いだものと推察され、発掘調査の結果では鉄器を発見することはできなかつたけれども、すでに基本的な工具として鉄製利器が普及していたことを示し、鉄器や木製品におきかえることのできないものだけが、石器として残存していたと考えられる。このことは、岡山県教育委員会が発掘調査した門前池西方遺跡第2地点において、弥生時代後期に比定される沼鉄による鍛冶炉も検出され、当地方における石器から鉄器への移行期を知る手がかりとなるものである。また本遺跡の南へ小谷水田一つを隔てて隣接立地するさくら山遺跡は、本遺跡より一時期おくれて開始される集落遺跡であるが、緩下降する丘陵尾根上に位置するため、埋積被土や遺物の遺存度が低いとはい、面積約12,000m<sup>2</sup>の発掘調査範囲に、12住居址文群、住居址59棟、ピット状遺構20穴を検出した割には、石器の出土数は石器86を含めて計110点と少なく、本遺跡の1,864点にくらべて約6%に満たないこともそれを暗示しているようである。

### 第3節 結語

このような大規模な用木山遺跡は突然に出現したものではない。当山陽町では、用木山遺跡に先行する弥生時代前期の集落遺跡は、埋積平地の縁辺谷口に立地する南方前池遺跡と、平地のほぼ中央を北から南へ貫流する砂川流域に近い山陽小学校遺跡が知られている。

このような山麓谷口とか埋積平地内の低湿地において、水稻耕作の技術を取り入れ、稻つくりを開始した人々は、後の弥生時代中期前半までの長年月を、度重なる水害と闘いながら營々と耕作を続けたのである。やがて中期中葉になると、新しい耕地と居住区の拡大を求めて谷水田を開拓し、この東高月丘陵群にも住居遷地を求めて、居を構えるようになる。

東高月丘陵群内に最初に入山した人々は、土器片などの伴出遺物の検討から、おそらく數棟程度の、小規模な家族集団=世帯共同体の単位であったろうと考えられる。集落内に貯蔵穴を保有し、かなりの量のドングリや桃の実など炭化した木の実類が検出され、多数の石器が発見されることなどから、採集や狩猟など山の幸への依存度もかなり高かったものと推察される。

ところが、弥生時代中期後半になると、用木山遺跡の様相は一変する。集落は丘陵急斜面を大きく掘り込んだ、階段状の大規模な宅地造成工事を施し、各段ごとに住居支群を構成するというように、まさに爆発的といつてもよいほどに、集落の規模は拡大し、出土遺物の量も増大する。さらに、用木山集落が拡大するのに呼応するかのように、隣接する丘陵尾根支脈上や、小谷水田を隔てた丘陵上などに、愛宕山遺跡やさくら山遺跡など新しい集落が開始され、あたかも用木山集落を母村として、そこから派生した子村的な様相をみせている。また用木山遺跡は、弥生時代後期初頭をもってびたりと終結し、それ以降に引き続く遺物の出土をみない。とはいっても、集落全体が焼き打ちなどに遭って焼滅したというのではない。

集落内には土器とか石器類などに、一部石錐などの石器類を除いては、完形を保つ遺物類はほとんど検出されず、継続的な日常生活の一断面をそのままとどめているものは認められなかった。むしろ、第4住居址支群や第8住居址支群などの土器類では、本遺跡最終時期の破損土器類を、廃棄した竪穴式住居の掘り込み穴内に投棄した形状すら示している。以上のことなどから推察して、用木山集落は弥生時代後期初頭のある時期に、意識的に取り片づけて、集落全体が他地域に移動した感じが強い。

このことは集落のみでなく、当東高月丘陵群内に所在する愛宕山土壤墓群内や四辻土壤墓群などの墓地遺跡においても営まれた期間とか墓構成に、集落址とはほほ同様の傾向をみせる。また本遺跡の眼下にあたる丘陵裾部に所在する大規模な集落址、岩田大池遺跡がちょうど本遺跡を引き継ぐように、弥生時代後期初頭から始まることも興味深い。

用木山遺跡は弥生時代中期中葉から同後期初頭までの、一定期間を限って営まれた集落遺跡である。当初は谷頭の水源を生活用水ならびに灌漑用水として、谷水田を眼下に臨み、山の幸の獲得にも有利な適地として、居住地を求める人々も、その間に鉄器の普及や土木技術の発達もあって耕地は拡大され、さらに水稻栽培技術の進歩と相俟って生産性も高まり、生活の安定とともに労働力としての人口も飛躍的に増大したものと考えられる。

人口の増大は必然的に集落の拡大へつながるが、集落を営むには決して適地とはいえない高所の、しかも急斜面であるこの用木山丘陵に、なぜ固執したのか、その要因が何であるのか問題となる。弥生時代中期後半のある一時期を限ってみても、用木山遺跡だけで60棟～70棟、周辺のさくら山・懸図・愛宕山遺跡の集落を加えると、実に200棟に近い集落が、径約300m程度の範囲内の丘陵上に集中していることになる。それだけの人口を養うだけの谷水田は、この丘陵群内には存在しない。当然周辺集落を結集しての農業共同体が形成され、眼下の丘陵縁辺部から、埋積平地の中央部へ向けて、農地の拡大が押し進められていた時代であったと推察される。それだけに集落の防衛的なことも考慮して、埋積平地のほぼ全体が見渡せるこの地を選んで居を構えたものと考えられるのである。

指揮棒頭といわれる環状石斧3個をはじめ、1,300本を越える石錐や17本の石槍など、石製武具と考えられる多数の石器類の出土も、それを裏付けしているように思われる。こうした立地や石製武具的な遺物の出土などから高地性集落と把握して、戦闘に備えての砦とする説もあるが、本用木山遺跡では、東高月丘陵群内の最高所に立地するとはいえ、埋積平地との比高は約40m～70mで、通常にいわれる生活立地との両面を備えており、今後の検討を要する問題といえる。

ここに推論を試みるならば、弥生時代中期中葉に新しい耕地を求めて、谷水田を開拓した人々は、緩傾斜の丘陵斜面に適地を見出して、小規模な集落を営み始める。それが中期後半になると、生産の増大をはかって耕地は谷口から埋積平地縁辺へと拡大され、労働力としての人口も増大し、集落も膨脹する。住居適地の少ない丘陵地内においては、その防衛的なことも加わって、住居空間の拡大は階段状の宅地造成へと発展する。そして肥沃な埋積平地での生産活動が安定した後期初頭になって、木集落は発展的に廃絶し、より便利な丘陵裾部へと集落をあげて移行したものと考えられる。

## 参考文献

- 近藤義郎「共同体と単位集団」考古学研究26, 1969年
- 近藤義郎・渋谷泰彦編著「津山市弥生住居址群の研究」津山郷土館報告第2集 1967年
- 小林行雄・佐原真「紫雲山」鈔間町文化財保護委員会 1964年
- 小林行雄・杉原莊介編「弥生式土器集成」弥生式土器集成刊行会 1968年
- 正岡睦夫・葛原克人・伊藤晃他「雄町遺跡」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告1. 岡山県教育委員会 1972年
- 伊藤晃・柳瀬昭彦・池畠耕一・藤田憲司「上東遺跡」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告2. 岡山県教育委員会 1974年
- 枝川謙・松本和男・新東晃一・池畠耕一「門前池遺跡」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告9. 岡山県教育委員会 1975年
- 橋本惣司・松本和男・浅倉秀昭「須内遺跡」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告11. 岡山県教育委員会 1976年
- 田中満雄・二宮治夫・福田正継・竹田勝「桃山遺跡」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告12. 岡山県教育委員会 1976年
- 新市谷遺跡については報告未完、中国総販自動車道建設に伴う岡山県教委発掘調査、調査担当者井上弘氏の教示による。
- 神原英朗「物園遺跡」本発掘調査概報第2集 1971年
- 神原英朗「四辻土墳墓遺跡」本発掘調査概報第3集 1973年
- 神原英朗「用木古墳群」本発掘調査概報第1集 1975年
- 神原英朗「岩田古墳群」「岩田土墳墓群」本発掘調査概報第6集 1976年

# 東高月遺跡群出土の分銅形土製品

東 潮

小稿では、用木山・惣園・愛宕山・さくら山遺跡出土の分銅形土製品の諸例について記述し、のちに分銅形土製品一般に関する若干の考察をおこないたい。

## 1

### <用木山遺跡>

用木山① 用木山遺跡山頂部表土層出土。上半部の破片。ヨコ（最大径をとる。以下同様）5.3cm、タテ（最大径をとる）5.3cm、くびれ部幅1.7cmを測る。表面は凸、裏面は凹状を呈し、縁面はなく、くびれ部（0.3mmの厚さ）になるにつれて肥厚する。くりこみ部は両側から横「コ」の字状に抉られている。文様は、表裏面ともかなり磨滅しているため明らかでないが、他例から推定して無文とは考えられない。上縁部から裏面にかけて、約1mm幅の9個の貫孔がみられるが、すべて破損している。色調は表裏面、器壁の内部とも灰褐色を呈する。胎土に細砂をかなり含み、雲母片もわずかに含まれている。

用木山② 第5住居址支群表土下包含層出土。ヨコ4.2cm、タテ3.9cmの破片。厚さ0.4cm～1.0cmで上縁部は丸くなる。文様は不明瞭であるが、上縁部にそって刺突文と櫛描文による重弧文がかすかにみられる。表面から裏面にかけて1個の貫孔が穿たれている。おそらく破損部にも対称的な位置に1個穿たれていたと思われる。表裏面とも灰褐色、粗砂粒を多く含み、焼成は軟質である。

用木山③ 第5住居址支群埋土中出土。下半部の破片。ヨコ3.7cm、タテ3.4cmを測る。表面は凸、裏面は凹状を呈し、厚さは0.7cm～0.8cmである。くびれ部に4点を単位とする刺突文が2帯描かれ、くりこみ部にそってヘラ描きによる沈線3条と、その両側を先端に二岐した施文具による刺突文（途中で施文の方向が変えられた結果1条となる）が施されている。裏面は大半が破損し不明であるが、文様はないと考えられる。貫孔はない。色調は表面が赤褐色、裏面が赤味をおびる灰褐色、器壁は赤褐色を呈する。胎土に1.0mm～2.0mmの砂粒を多く含み、焼成はやや堅緻である。

用木山④ 第5住居址支群埋土中出土。長径10.0cm、短径8.0cm、くびれ部幅5.3cmの破片。表面は凸、裏面は凹状を呈し、厚さは約1.1cmで一定している。文様は上下対称となると考えられる。表面の縁辺部には3.0mm×0.5mmの長方形状列点文が1条施され、中央部には3～4条のヨコナデ痕状のものと、その両側を列点文で飾る連続する二つの円弧文が上下対称に描かれる。2条の列点

文内の文様は不明。穿貫孔のみられないところから、下半部の可能性がつよい。表面は灰褐色でかなり磨滅し、右半分は大きく剥離している。裏面は淡赤褐色、器壁の内部は灰黒色である。胎土に0.4cm～1.9cm大の砂粒、雲母をかなり含む。くりこみ部側面および裏面にていねいなナデ調整痕がみられる。

用木山⑤ 出土地点の詳細不明遊離片。ヨコ10.6cm、タテ7.6cm、くびれ部幅4.8cmの破片。厚さはほぼ1.4cmで一定している。ほぼ中央部に2列の刺突文による連続した二つの円弧文が描かれるが、刺突文内の文様は明らかでない。上縁部にそって同じく1条の刺突文が施されている。上縁部から裏面上縁部にかけて9個の穿孔がみられ、その1個は上縁面からくりこみ側縁に穿たれている。色調は内外面とも灰褐色で、胎土に2mm～4mm大の砂粒を少量含む。

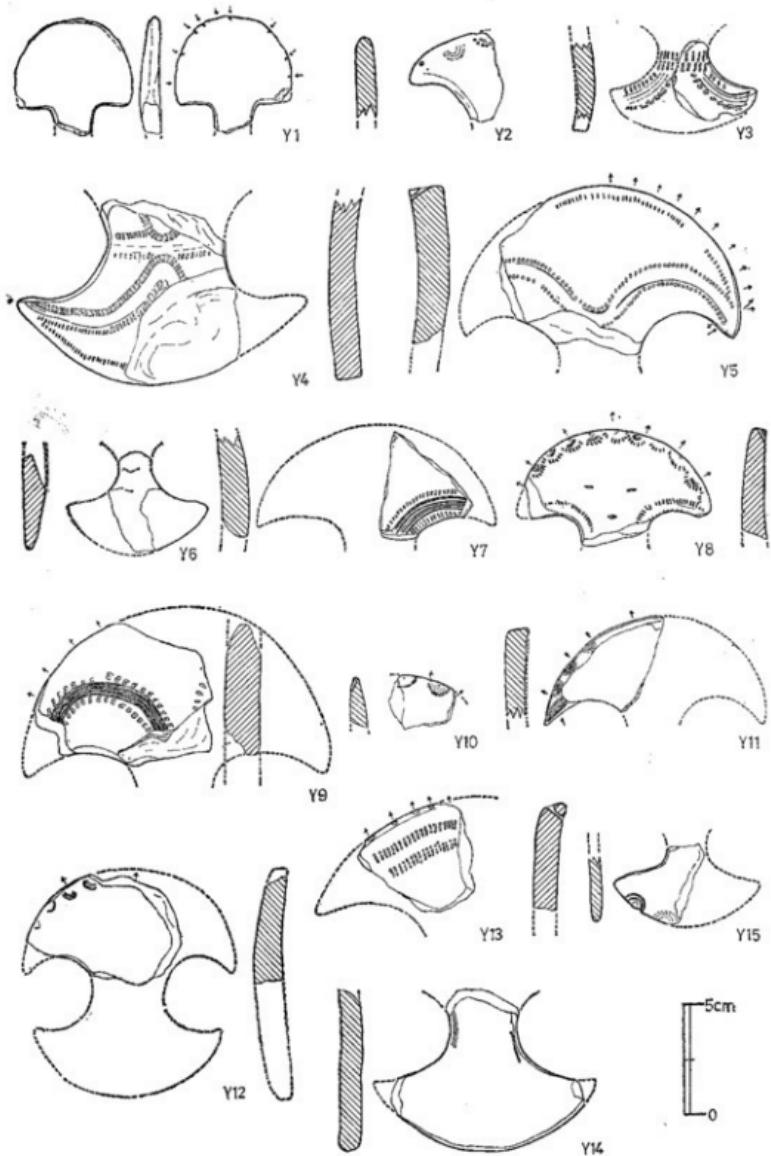
用木山⑥ 第6住居址支群表土包含層出土。ヨコ4.3cm、タテ4.5cm、くびれ部幅1.5cmの破片。厚さは上縁部で0.3cm、くびれ部で約1cmとしだいに肥厚する。裏面は平坦であるが、表面は凸状を呈し、表面にくらべて裏面はそれほど磨滅していない。表裏とも褐色、器壁の内部は暗灰褐色である。細砂を多く含む。

用木山⑦ 第6住居址支群埋土中出土。ヨコ4.0cm、タテ4.8cmの上半部と推定される破片。1.1cm～1.2cmの厚さをもつ。くりこみ部にそって、6条の櫛描文とその両側を先端を二岐した施文具による刺突文で飾った文様で描かれている。上縁部にも重弧文となると考えられる刺突の痕跡がみられる。表裏面、器壁の内部とも明黒褐色、焼成は堅緻で砂粒を多く含む。

用木山⑧ 第7住居址支群埋土中出土。ヨコ8.3cm(復元8.8cm)、タテ4.6cm、くびれ部幅推定約3cmの破片。厚さはくびれ部で1.1cm、上縁部で0.6cmである。表面は凸状を呈する。中央に明瞭に表現された目と口がみられ、上縁部にそって外側を刺突文で飾る重弧文が施されている。また、くりこみ部にそって連続刺突文が右側で2列、左側で1列みられる。刺突文の内側にはおそらく櫛描文が施されたと推定される。上縁部から裏面にかけて、現存では7個の貫孔が穿たれるが、くりこみ部内側にかけてのものは施されていない。表裏面とも赤味を帯びた褐色、器壁の内部は暗灰色を呈する。胎土には1mm～3mm大の砂粒を多く含む。

用木山⑨ 第7住居址支群埋土中出土。ヨコ8.0cm、タテ6.3cm、厚さ1.5cm～1.6cmの破片。文様は、中央部にやや角ばった弧文があり、その両側に先端を二岐した施文具による刺突文列が施される。上縁部にはみられない。また表面には部分的に丹塗り痕がみられる。裏面から上縁面にかけて、2mm大の貫孔がある。表裏面とも赤味をおびた灰褐色を呈する。焼成は堅緻で、細砂を多く含むが、雲母片はみられない。

用木山⑩ 第7住居址支群埋土中出土。ヨコ3.0cm、タテ2.4cmの小破片。0.2cm～0.8cmの厚



第282図 用木山遺跡出土の分鉢形土製品実測図(1)

さがあり、上縁部は丸く仕あげられている。上縁部にそって、刺突文と櫛描文の組み合せ文様による重弧文が2個描かれる。上縁面から裏面にかけて2個の貫孔がみられる。表面とも磨滅し灰黒色を呈する。胎土は繊細で焼成は軟質である。

用木山⑩ 第7住居址支群埋土中出土。ヨコ・タテとも4cmの破片。厚さは約1cmと推定復元される。くりこみ部にそって4条の櫛描文と、その両側を先端を二岐した施文具による刺突文2条で飾る文様が施され、上縁部にも櫛描文と刺突文による重弧文が描かれる。上縁面から裏面にかけての貫孔が3個と、くりこみ部内側から上縁面への貫孔1個がみられる。表面は暗灰褐色、裏面は灰褐色・暗灰褐色である。焼成はやや軟質で胎土に多くの砂粒を含む。

用木山⑪ 第7住居址支群埋土上層部出土。ヨコ7.0cm、タテ4.7cmの破片。厚さはくびれ部がもっとも厚く1.3cmで、上縁部では0.9cmとなる。表面が凸、裏面が凹状を呈する。上縁部にそって4条ほどの角ばった重弧文が描かれる。施文具はきわめて細い。他に文様はみられない。裏面から上縁部にかけて、幅2mm~3mmの貫孔が穿たれている。色調は表面が赤味を帯びた暗灰褐色、裏面は灰褐色である。焼成はやや堅質で、胎土は1mm~3mm大の砂粒を少量含む。

用木山⑫ 第7住居址支群埋土下層部出土。ヨコ5.2cm、タテ4.9cmの破片。厚さはほぼ1cmである。文様は中央部に3条の刺突文列が2帯山形状に描かれる。裏面から上縁面にかけて、2mm~4mm幅の貫孔が5個みられる。表裏面とも褐色、胎土に1mm~2mm大の砂粒を多く含み、焼成はやや堅質である。

用木山⑬ 第9住居址支群埋土中出土。ヨコ9.7cm、タテ7.3cm、くびれ部幅3cmの下半部片。厚さはほぼ1cmである。文様は両くびれ部にそって2~3条の沈線がみられるだけである。表裏面に凸凹があり、全体に丸味のあるつくりを示す。くりこみ部先端の破損部には穿貫はないと推定される。軟質な点も特徴であり、胎土に1mm~2mm大の砂粒をわずかに含むが繊細である。表裏面とも灰褐色を呈する。

用木山⑭ 第9住居址支群埋土中出土。ヨコ3.6cm、タテ3.5cm、くびれ部幅1.7cmの破片。厚さは0.5cmと薄く下縁端は丸味をもつ。下縁にそって二つの重弧文がみられ、くびれ部にも1条の直線文が描かれる。表裏面とも灰褐色で、胎土は繊細であり、焼成は軟質である。表裏面に化粧土の痕跡がある。

用木山⑮ 第9住居址支群埋土中出土。ヨコ5.3cm、タテ4.6cm、厚さ0.9cm~1.2cmの下半部の破片。くびれ部に数条の横線文と2条の刺突文が施され、そこから下方に櫛描文と刺突文による組み合せ文様がハの字状に描かれる。なおこの櫛描文は板の柵目を利用した浅いものである。横線文のうえに刺突痕がみられるが、おそらく下方と対称的な文様構成になると推定される。表面は褐

色、裏面は灰褐色で器壁内部は灰黒色を呈する。焼成は堅緻で雲母片、細砂を多く含む。

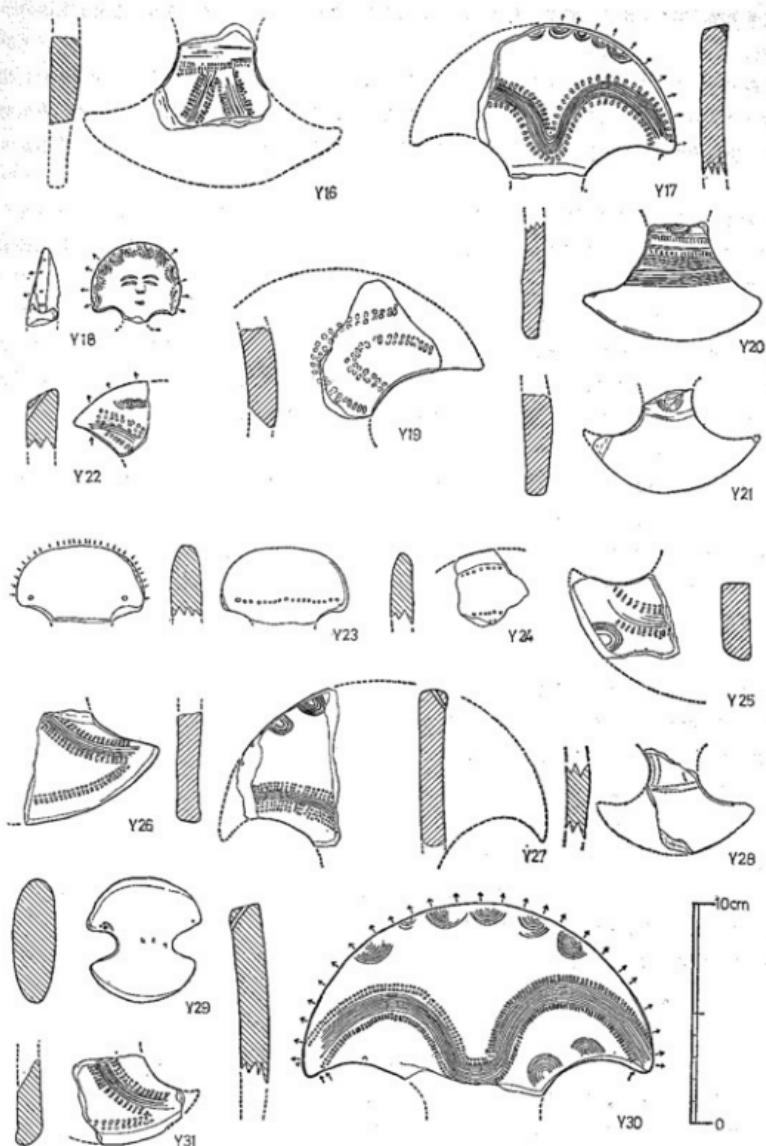
用木山⑪ 第9住居址支群埋土中出土。ヨコ9.0cm、タテ6.9cm、くびれ部幅3.4cmの破片。厚さはくびれ部で1cm、上縁部で1.2cmである。中央部に連続した二つの円弧文が描かれる。両端を二岐した連続刺突文で、その内側には櫛描文が施される。また上縁部にそって2~4条の櫛描重弧文が、現存部分では4個描かれ、くびれ部に1条の直線文がみられる。上縁部から裏面にかけて9個の貫孔、くりこみ部内側から上縁面にかけて1個の貫孔が穿たれている。色調は表裏とも暗黒色で、表面に丹彩（とくに文様部分によくのこる）痕がみられる。焼成も良好であり、胎土に細砂を多く含む。

用木山⑫ 第9住居址支群埋土中出土。ヨコ4.1cm、タテ3.6cm、くびれ部幅1.1cmの破片であるが、上半部は完存する。厚さはくびれ部で1.4cm、上縁部では0.3cm、端部は丸くつくられている。中央部に眉、目、鼻、口が表現されている。いずれも先端の尖った施文具で簡潔に表現されている。用木山⑪例とは異なり、眉の表現のみられること、両眉が連続されないで描かれるなどの特徴を示す。また鼻のぼあい、やや隆起し、鼻孔の形まで表わされているほど写実的である。上縁部にそっては、3~5条の櫛描文と、2条の刺突文による重弧文が描かれる。刺突文は先端が二岐した施文具により、引きするようにして施されている。貫孔はすべて裏面から上縁面にかけてのものであり、くりこみ部内側への孔はない。色調は表面が灰褐色ないしは褐色で、裏面は褐色である。胎土に1mm~3mm大の砂粒をわずかに含む。

用木山⑬ 第9住居址支群埋土中出土。ヨコ5.5cm、タテ3.6cmの小片。厚さはほぼ1.3cm。表面はかなり磨滅しているが、2条の刺突文が2帯弧状に描かれている。2帯の刺突文のあいだには櫛描文が描かれたと想定される。表裏面は褐色で、器壁の内部は暗黒褐色を呈する。焼成は軟質で、少量の砂粒を含む。

用木山⑭ 第9住居址支群埋土中出土。ヨコ8.1cm、タテ5.3cm、くびれ部幅2.7cmの下半部の破片。厚さは0.8cm~0.9cm、下縁面は0.4cmである。くびれ部の上側に円弧文の下底部がみられ、その下方に櫛描横線文と先端を二岐した施文具による2帯の刺突文列が描かれる。表裏面とも褐色で、細砂、雲母片を含む。焼成は堅緻である。

用木山⑮ 第9住居址支群埋土中出土。ヨコ7.4cm、タテ4.6cm、くびれ部幅2.2cmの下半部の破片。厚さは下縁部で0.9cm、くびれ部で1.3cmである。くびれ部に細かい刺突文と曲線文からなるU字状の文様がみられるが、これは復元すると二つの連続した円弧文になると推定される。また2条の刺突文列とそのあいだにわずかの横線文がのこっている。表裏面とも褐色で、焼成は堅緻である。砂粒を含む。



第283図 用木山遺跡出土の分銅形土製品実測図(2)

**用木山②** 第9住居址支群埋土中出土。ヨコ3.4cm, タテ3.2cm, 厚さ1.2cm~1.4cmの小片。上方に三岐した櫛状施文具による扁形弧文を交互に向い合せて一列に描いた文様がみられる。くりこみ部にそっては、3条の刻線とその両側に二岐した施文具による刺突文、3条の刺突文がそれぞれ施されている。くりこみ部の内側から上縁面に1個と、裏面から上縁部に2個の貫孔が穿たれている。表裏面は灰褐色ないし暗灰褐色で、焼成は軟質である。1mm~2mm大の砂粒を多く含む。

**用木山③** 第9住居址支群埋土中出土。ヨコ5.7cm, タテ3.4cm, くびれ部幅2.8cmの破片で、上半部は完存する。厚さはくびれ部で1.8cm, 上縁面は丸く仕上げられている。本例は明瞭な表裏の区別がつかないので凸状をなす面をA面、ほぼ平坦な面をB面と称する。A面は右側の貫孔の部分に引っかいたような線がみられるほか、文様はない。B面には山形状に1条の刺突文が描かれる。A面からB面にかけて二つの貫孔があり、上縁面には29個の貫通しない刺突文が施される。これは通例の貫孔ではなく、B面と同様の刺突文と考えてさしつかえない。表裏面とも褐色で器壁の内部は暗褐色である。焼成は堅敏で1mm~2mm大の砂粒を多く含む。

**用木山④** 第9住居址支群埋土中出土。ヨコ3.2cm, タテ3.4cmの小片。もっとも厚い部分で1cm、縁部は尖る。文様は3条の連続刺突文がみられるだけである。用木山③のように横方向の刺突文になるか、もしくは長方形状に続るものになろう。表裏面とも灰褐色、器壁の内部は灰黒色である。焼成は堅敏で、細砂、雲母片を多く含む。

**用木山⑤** 第10住居址支群埋土中出土。ヨコ4.2cm, タテ3.4cm, 厚さ1.2cm~1.3cmの破片。中央部に櫛描文とその両側が3条の刺突文からなる弧文が描かれ、上縁部に櫛描重弧文1個、べつに刺突文の痕跡がみられる。現存部に穿孔のないところから下半部の可能性もあるが、文様構成からみていちおう上半部としておきたい。表裏面とも褐色、器壁の内部は灰褐色である。1mm~2mm大の砂粒を多く含む。

**用木山⑥** 第10住居址支群埋土中出土。ヨコ5.5cm, タテ4.8cmの下半部と推定される破片。表裏面はほぼ平坦で、裏面はやや凹状を呈し、厚さは1.0cm~1.1cmである。くりこみ部にそって5条の櫛描文が施され、その両側は3条の連続刺突文で飾られる。その一方の刺突文は方向を変え、くりこみ部にそってのびている。表裏面とも暗灰褐色で焼成は堅い。雲母片少量と1mm~2mm大の砂粒を多く含む。

**用木山⑦** 第10住居址支群埋土中出土。ヨコ4.5cm, タテ7.1cm, 厚さ1.0cm~1.2cmの破片。くりこみ部にそって、5条の櫛描文とその両側をそれぞれ3条の刺突文で飾る文様が描かれ、上縁部には櫛描重弧文がみられる。上縁面から裏面にかけて、ほぼ2mm幅の7個の貫孔が穿たれている。表裏面ともていねいな仕上げがなされ、外面には化粧土が部分的にみられる。表裏とも暗灰褐色で焼成は堅敏である。胎土に砂粒を多く含む。

**用木山⑨** 第10住居址支群埋土中出土。ヨコ4.5cm, タテ3.9cm, 厚さ0.8cm~1.0cmの下半部の破片。文様はくりこみ部にそって左側には2条, 右側には1条の細かな連続刺突文が描かれ, その下端に接して横方向の2条の刺突文がみられる。表裏面ともていねいな調整がなされ, 褐色を呈する。焼成はやや堅固で, 粗砂・雲母片を多く含む。

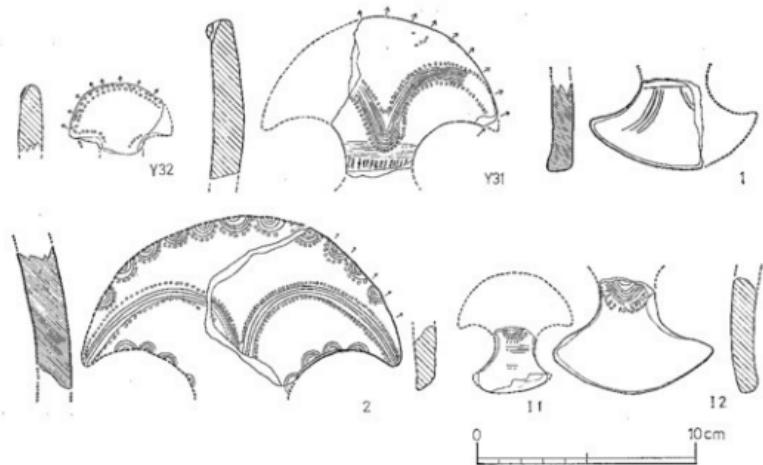
**用木山⑩** 第10住居址支群埋土中出土。ヨコ5.2cm, タテ5.7cm, くびれ部幅2.5cmの完形品, くびれ部の厚さは2.0cmで, 上下端になるにつれてせばまり, 両端は丸くつくなっている。文様はくびれ部から下方より3個の刺突痕がみられるだけで, 裏面には認められない。表面からくりこみ部内側にかけて, 左側には確実に貫孔1個があり, 右側のものはかろうじて痕跡をとどめているだけである。表裏面とも褐色で, 2mm~3mm大の砂粒・雲母片を多く含む。

**用木山⑪** 第10住居址支群第2号住居址柱穴内出土。ヨコ15.9cm, タテ8.2cm, 厚さ1.3cm~1.4cmの大形破片。中央に9~10条の櫛描文と刺突文を組みあわせて, 二つの連続した円弧文を描く。くりこみ部の内側と上縁部にそって櫛描きによるだけの重弧文が施されている。左側のくりこみ部内側の文様は, 磨耗のため明らかでないが, 右側と対照的な重弧文が描かれたことは容易に推定できる。裏面から上縁部にかけて24個の貫孔, くりこみ部から上縁面にかけて, 左側には大小2個, 右側には1個の貫孔が穿たれている。表面は灰褐色ないし暗灰褐色, 裏面は褐色である。胎土は繊細で, 焼成はやや軟質である。

**用木山⑫** 第11住居址支群埋土中出土。ヨコ4.8cm, タテ4.0cmの下半部の破片。厚さはほぼ1cmで, 裏面の下縁部はふくらんでいる。くりこみ部・下縁部にそって, 櫛描文と刺突文による組み合せ文様がみられる。刺突文は先端を三岐した施文具によってなされている。表裏面とも灰褐色ないし暗灰褐色, 焼成は堅固である。

**用木山⑬** 第11住居址支群埋土中出土。ヨコ3.7cm(推定復元4.8cm), タテ3.2cm, くびれ部幅2.0cmの破片。厚さはくびれ部で1.1cm, 上縁部になるにつれて丸くなる。文様は上縁部にそって2条の連続刺突文, くりこみ部にそって1条の刺突文が描かれる。後者の刺突文は, 初期上縁部と同様2条施されるはずのものが, 途中で1条化したとみられる。くりこみ部内側から上縁面にかけて1個, 裏面から上縁面にかけて8個の貫孔が穿たれている。表裏面とも黒褐色で焼成はやや軟質である。2mm~3mm大の砂粒を少量含む。

**用木山⑭** 第11住居址支群埋土中出土。ヨコ7.6cm, タテ7.4cm, くびれ部幅3.1cmの破片。厚さは上縁で1cm, くびれ部で1.3cmである。中央部に連続した二つの櫛描文がみられ, その両端はやや荒い刺突文が施される。この櫛描文は板目板を利用したようである。くびれ部には同じく施文具によって, 横線文と6条の列点文を引きするようにした文様が描かれる。また上縁部には刺突による弧文がみられるが, その内側には櫛描重弧文が施されたと推定される。裏面から上縁部にかけ



第284図 用木山懸図・愛宕山遺跡出土の分銅形土製品実測図

て、8個の2mm～3mm大の貫孔が穿たれ、くりこみ部内側から上縁面にかけて1個の破損孔がみられる。表裏面とも灰褐色・暗灰褐色で、焼成は堅緻である。胎土に細砂・雲母片を含む。

#### <懸図遺跡>

懸図① 第17号住居址周辺埋土中出土。ヨコ5.3cm（推定復元値7.6cm），タテ5.0cmの下半部破片。厚さは0.9cm～1.1cmである。表面および縁面はほぼ平坦で、裏面はやや凹面状を呈する。文様は器表が磨滅していて判然としないが、表面は横方向刷毛目調整のち、くびれ部に横線と、くりこみ部縁辺にそって櫛描文が施されている。裏面には文様は認められない。縁端部の穿孔もない。表裏面および器壁内部とも黒褐色を呈する。胎土は緻密な粘土に細砂が多く含み、焼成は堅い。

懸図② 第9号住居址埋土中出土。ヨコ9.3cm（推定復元値14.5cm），タテ7.2cmの上半部破片。厚さはくびれ部で1.5cmを測るが、縁辺部では1.8cmと肥厚する。表面は凸、裏面は凹面状を呈する。文様はくりこみ部および外縁部にそって、4条一単位の櫛描重弧文を連続させ、その中央に同様の施文具による櫛描円弧文を描き、上縁部に櫛描重弧文を施し、その両側に刺突文を配している。裏面から上縁部にかけて、現存7個の穿孔がみられるが、すべて破損している。表裏面および器壁の内部とも暗灰褐色を呈する。胎土に細砂および雲母片を含み焼成は堅緻である。

#### <愛宕山遺跡>

愛宕山① A15グリット内包含層出土。ヨコ3.2cm，タテ3.0cm，くびれ部幅1.8cm，厚さ0.8

cm～1.0 cmの下半部小破片。文様はくびれ部に4条の櫛描円弧文とその外側を続る列点文がわずかにみられる。孔はない。表裏面とも暗灰褐色。胎土に1 mm大の砂粒を多く含み、焼成は堅緻である。

愛宕山② G16グリット内包含層出土。ヨコ7.3 cm, タテ5.3 cm, くびれ部幅2.5 cm, 厚さ1.0 cm～1.1 cmの下半部の破片。くびれ部に櫛描文とその外側を刺突文で飾るU字状の文様がみられる。これはおそらく上半部のくりこみ部にそってのびるものと思われる。穿孔はない。表裏面とも灰褐色で、焼成は堅緻。雲母片を少量含む。

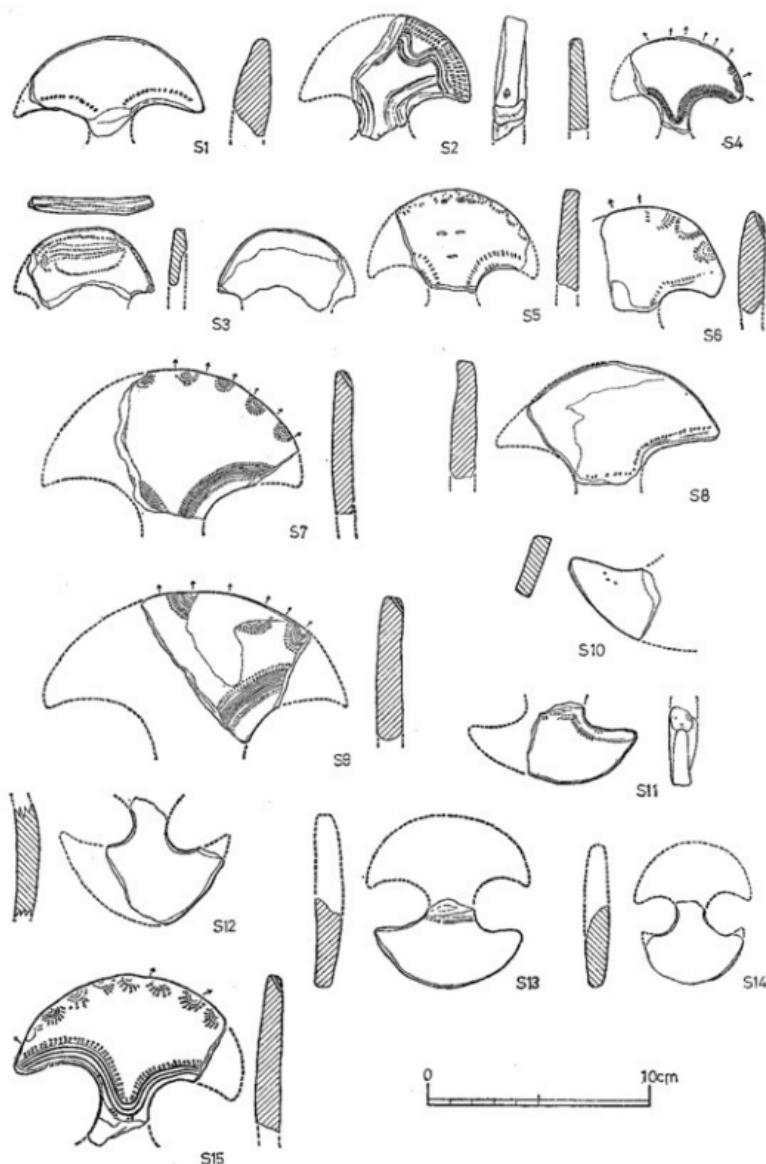
#### <さくら遺跡>

さくら山① 第1地点表探。タテ7.8 cm, ヨコ4.4 cm, くびれ部幅1.8 cmの下半部の破片。下縁部の厚さは0.5 cmで、中央部になるにつれて肥厚し1.7 cmを測る。文様は両くりこみ部にそって各々1条の刺突文が描かれているだけである。表裏面とも磨滅して、灰褐色を呈する。胎土に細砂と雲母片を含み、焼成は軟質である。

さくら山② 第1地点第3号住居址埋土中出土。上半部の破片。タテ5.0 cm, ヨコ6.0 cmである。表面は凸、裏面は上縁部にそって0.8 cmほどからゆるやかに凹状を呈する。厚さは上縁部で0.9 cm、中央部で1.3 cm、くびれ部で1.4 cmを測る。文様は上縁部にそって3条が単位となる列点文が引きするようにして描かれる。その内側と、両くりこみ部縁辺部にそって、ほぼ0.5 cm～1.0 cm幅の波状文が3条施される。くびれ部端の列点とは別の文様との関係は不明。貫孔はくりこみ部側面から縁面にかけて1個穿たれる。その孔も大きい。表裏面とも灰褐色・帶白灰色を呈するが、表面はやや磨滅するも裏面はほとんど磨耗していない。器壁の内部は褐色である。胎土に0.5 mm～1.0 mm大の砂粒、雲母を多く含み、焼成は良好である。

さくら山③ 第2地点第2号住居址支群埋土中出土。ヨコ5.3 cm（推定復元値6.2 cm）タテ2.6 cm、厚さ0.4 cm～0.7 cmの破片。文様は繊維質の管状をした施文原体による刺突文が、横方向あるいはレンズ状に描かれる。同様の刺突文は上縁部にも1条施されているが、これは通常の貫孔にかかるものと推定される。裏面は大半が破損しているが、文様はないといふられる。表裏面とも灰褐色で、やや軟質である。胎土に細砂を多く含む。

さくら山④ 第2地点第2住居址支群第5号住居址埋土中出土。ヨコ4.5 cm（推定復元値6.0 cm）、タテ4.1 cm、くびれ部幅1.3 cm、厚さ0.5 cm～0.8 cmの破片。両くりこみ部からくびれ部にそって、櫛描文と先端を二岐した施文具による刺突文で、二つの連続した円弧文が描かれる。また上縁部にそって同種の組み合せによる重弧文が施される。貫孔は裏面から上縁部にかけて8個みられる。表裏面とも赤味を帯びた灰褐色で、焼成は堅緻である。胎土に1 mm大の砂粒を多く含む。



第285図 さくら山遺跡出土の分銅形土製品実測図

さくら山⑥ 第2地点埋土中出土。ヨコ5.1cm（推定復元値7.6cm），タテ4.5cm，くびれ部幅1.1cmの上半部の破片。文様は中央部に目と口が表出されている。用木山⑥と同様先端の尖った施文具を用いている。両くりこみ部の内側にそって、2条の列点文，上縁部にそって列点による1条の弧文が描かれる。表裏面とも灰褐色。胎土は繊細で、雲母片を少量含む。なお表面に化粧土の塗られた痕跡がみられる。

さくら山⑦ 第2地点第7住居址支群第4号住居址埋土中出土。ヨコ5.3cm，タテ4.7cmの破片。厚さはくびれ部で1.1cm，上縁部は丸くつくられている。くりこみ部にそって円弧文が描かれる。貫孔は裏面から上縁面にかけて2個みられる。表裏面とも褐色。胎土は繊細で焼成も堅緻である。

さくら山⑦ 第2地点第7住居址支群第6号住居址埋土中出土。ヨコ8.1cm（推定復元値11.3cm），タテ6.5cm，厚さ0.8cm～1.0cmの破片。くりこみ部にそって櫛描文とその両側を2条の刺突文で飾る文様があり、上縁部にも同様の文様の組み合せによる重弧文が施される。貫孔は裏面から上縁部にかけて6個みられるが、くりこみ部内側から上縁部のものは破損のため明らかでない。この破片では焼成前に穿孔されたことがわかる。表裏面とも灰黒色を呈し、焼成は堅緻で、胎土に1mm～2mm大の砂粒を多く含む。

さくら山⑧ 第2地点第7住居址支群第6号住居址埋土中出土。ヨコ8.0cm（推定復元値10.0cm），タテ5.5cm，くびれ部幅2.4cm（推定値3.0cm）の下半部の破片。厚さは0.7cm～1.1cmで、器壁の断面にはりつけ面が認められる。文様はくびれ部からくりこみ部内側に連続して、刺突文が繞らされるだけである。穿孔はみられない。表裏面とも灰褐色で、胎土に1mm～4mm大の砂粒を含む。

さくら山⑨ 第2地点第9住居址支群表土包含層出土。ヨコ7.0cm，タテ6.5cm，厚さ1.0cm～1.2cmの破片。文様はくりこみ部にそって7～10条の櫛描文が描かれ、その両側に先端を二岐した施文具による刺突文が施される。上縁部にそって、櫛描重弧文とその外側を上記の施文具による刺突文が繞らされる。貫孔は裏面から上縁部にかけて6個とみられる。表面は暗灰褐色、裏面は灰褐色、器壁の内部は灰黒色である。焼成は堅緻で胎土に細砂、雲母片を含む。

さくら山⑩ 第2地点第10住居址支群埋土中出土。ヨコ4.4cm，タテ3.0cm，厚さ0.8cmの小破片。文様はくりこみ部の内側にわずか3個の刺突文がみられるほか、下縁面に1本の回線が施されているにすぎない。表裏面とも灰褐色で、胎土に1mm～2mm大の砂粒を多く含む。

さくら山⑪ 第2地点第12住居址支群埋土中出土。ヨコ4.7cm，タテ3.7cmの下半部の破片。厚さは下端部で0.8cm，くびれ部で1.3cmを測る。くびれ部に横線文と2条の刺突文、くりこみ部内側にそっても同様の組み合せ文様がみられる。穿孔はない。表裏面とも灰褐色、器壁の内部は灰黒

色である。焼成はやや軟質で、1mm大の砂粒を多く含む。

さくら山@ 第2地点第12号住居址支群埋土中出土。ヨコ5.2cm、タテ5.2cm、くびれ部幅1.5cm、厚さ0.8cm～1.0cmの破片。表裏面ともかなり磨滅し、あきらかでないが、無文と推定される。表裏面とも灰褐色で、胎土に2mm～4mm大の砂粒を多く含み、焼成は普通である。

さくら山@ 第2地点G9調査区包含層出土。ヨコ5.6cm、タテ4.0cm、くびれ部幅2.0cm、厚さ0.8cm～1.2cmの下半分の破片。文様はくびれ部に3条の横線文がみられるだけである。表裏面とも灰褐色、器壁の内部は灰黒色・赤褐色である。焼成は堅緻で、胎土に1mm大の砂粒を多く含む。

さくら山@ 第3地点第5号住居址埋土中出土。ヨコ4.4cm、タテ3.5cm、くびれ部幅1.3cm、厚さ0.6cm～1.0cmの下半部の破片。まったくの無文である。くりこみ部両端は破損しているが、貫孔はないといわれる。表裏面とも灰褐色で、焼成は堅緻である。胎土も精選され、わずかに砂粒を含む程度である。

さくら山@ 第3地点第7号住居址埋土中出土。ヨコ9.5cm、タテ7.2cm、くびれ部幅2.2cm、厚さ0.4cm～1.2cmの上半部の破片。上縁辺部に3～4条の重弧文が描かれ、その外側を2条の爪形の刺突文が施されている。両くりこみ部縁辺には、4条の直線文と刺突文の組みあわせ文様がみられるが、施文原体は上記のものと同種である。裏面から上縁面にかけて斜方向に現存3個の貫孔がみられるが、いずれも幅2mm程度の破損孔である。表裏面とも灰褐色で、ていねいな調整が施されている。焼成はやや軟質で、胎土に雲母片・砂粒を少量含む。

## 2

東高月遺跡群内の弥生時代の遺跡は、そのあり方から7群に大別される。第I群は用木山～惣図遺跡、第II群はさくら山遺跡、第III群は愛宕山遺跡、第IV群は中池～三藏畠遺跡、第V群は門前池西方遺跡（第1・2・3地点およびヤケ池西地点）、第VI群は門前池西方遺跡（第4・5地点）、第VII群は岩田大池遺跡である。これらの遺跡群のなかで分銅形土製品の出土しているのは、現状保存処置がとられ、発掘調査を実施していない岩田大池遺跡を除いては第I・II・III・V・VI群からである。第1群の惣図遺跡で2例、第V群のヤケ池遺跡で1例、第VI群の門前池西方遺跡で2例出土している。

これらの出土遺跡については第286図に示したとおりである。さらに遺跡ごとに出土状況をみるとする。

用木山遺跡では12例が表探および表土下層包含層で、19例が丘陵の急斜面に階段状に造成された平垣面（住居址支群：R区）への二次的埋積土中から検出された。包含層出土のものを設定された

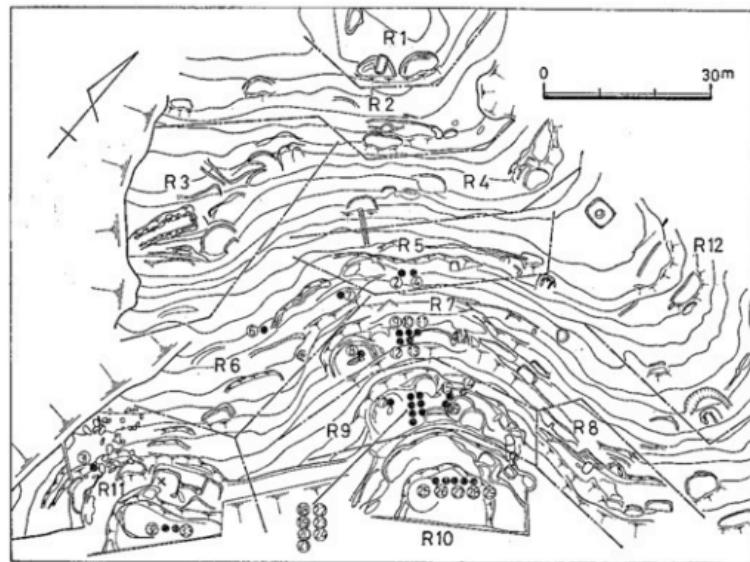


第286図 東高月遺跡群における分銅形土製品の出土状況図

住居址支群（R区）に含めれば、出土地点は第5住居址支群（略記号R5。以下略記号で記述する）（2例）、R6（2例）、R7（6例）、R9（11例）、R10（6例）にわかれれる。段状平坦面よりは包含層出土のものが動かされやすい条件にあったと思われるが、何か所にもわたって散在出土する状況がうかがわれる。各平坦面には10～14棟前後の住居址が存在するが、分銅形土製品はいずれも住居址とは離れた状態で検出された。

さくら山遺跡でも同様、大半が住居の営なまれた段状平坦面から検出されている。たとえば丘陵東斜面のR10付近には、7～8戸以上の住居址があり、それらへの埋土から4例の分銅形土製品が出土している。

またそのほかの門前池・ヤケ池・惣園遺跡では、包含層あるいは土器溜りから検出されている。このように当遺跡群では、居住地・住居址と関連しながらも、具体的な住居址にともなう状態で



第287図 用木山遺跡における分銅形土製品出土状況図

は出土していない。家屋の焼失などの条件が重なり、当時の状態をとどめないかぎり明らかにできないが、分銅形土製品はすくなくとも住居の内部に特別に置かれたようなものではないことがわかる。いっぽう用木山・さくら山遺跡のように、集落内に散在して検出された状況からみれば、分銅形土製品の出土は必ずしも特定の場所に限定されない。55例のうち完形品は1例だけであり、他はいずれも破片となり、同一個体のものもみられない。ただ上半部・下半部に二分された破片が多く、粉碎されていないようである。

### 3

ここでは、他遺跡の出土例も検討したうえで、分銅形土製品のもつ一般的の特徴についてふれておきたい。

#### <器形>

基本的に「分銅形」を呈し、左右・上下が対称的である。しかし完形品から器形自体の変化をみたばあい、(1)上半部が大きく、しかもくりこみ部先端の形状が、下半部にくらべて尖る段階(弥生時代中期中葉・中期後葉)、(2)上半部がわずかに大きいがほぼ下半部と等しくなる段階(後期前半)、(3)下半部が大きく方形状を呈し、「分銅形」という形状そのものが変化する段階(後期後半)<sup>⑨</sup>にわ

けられる。中期から後期にかけての長期間にわたり、ほぼ同一の状況を保ってきたにもかかわらず、器形上に明瞭な変化のあらわれるのが後期後半といえよう。そしてそのことは分銅形土製品の消滅の問題に関連しているのである。

表面は凸状、裏面は凹状を呈するのが大半であるが、ほとんど扁平に近いものもある。

穿孔は、たいてい施されているが、無孔のもの（津島⑩・我孫寺山・上東⑪）もある。雄町⑫例のように上下の両くりこみ部先端に穿たれた唯一の例があるが、一般的に孔の穿たれるのは上部に限られる。また穿孔が、上東⑪・さくら山例のように比較的大きく、堅固で数の少ないものと、新郎例などに比較的細く、しかも多用されているものがある。傾向として前者は新しい時期のものに多い。両耳の部分に相当するところに、表面から裏面にかけて穿たれる孔は、縄文時代の土偶・土版と共に通する（用木山例、雄町⑫・⑬例）が、時期的に古い段階の例品ではなく、かえって時期の新しいものにみられる。この孔を垂飾用の孔とする考え方もあるが、なかには実用にたえないものがあり、いちがいにはいえないようである。

#### 〈文様〉

中期中葉の段階では、眉・目・鼻・口の顔面各部あるいは頭髪が、具象的にせよ、抽象的にせよ表現され、とりわけ眉・目が強調されて描かれる。眉・鼻は土偶・土版にみられるように、連続して表わされるのが常であり、突帯・刻線などによる具象的なものと、刻線・櫛描文・刺突文・凸帯などによる抽象的なものがある。また中期中葉の段階でも、土偶・土版のような身体各部の具象的な表出はみられない。要するに分銅形土製品の初現段階では、顔面が極度に強調されたといえよう。この点土偶・土版では、とくに乳部・脇部・腹部が誇張されたことと異なる。中期後葉以降になると、顔面表現がより形式化するとともに、文様自体が多種多様化する。その過程でまったく新しい文様構成もみられるようになる。つまり器面全体に列点文も施されたもの（雄町⑭・⑮）、裏面あるいは側面に刺突文が施されたもの（雄町⑯・⑰、用木山⑱・⑲、さくら山⑳）などである。一部には無文のものもある。

#### 〈出土状況〉

前述したように、東高月遺跡群の55例は、いずれも包含層・土器層・住居址への埋土中からの出土であった。このほか各地での状況をみると、ピット内・溝状遺構内・住居址の周辺といった事例が知られる。南方遺跡では、「灰穴」と呼ばれ、祭祀関係の遺構と推定されているピット内から、岡山遺跡では「貯蔵穴」と考えられた遺構からである。南方や雄町遺跡では溝状遺構で出土しているが、これは多くの土器片とともに検出されているので廃棄壙のようなものであろう。包含層中のものについては、遺構は明らかでない。最近では発掘調査が進むにつれて、丘陵上もしくは丘陵斜面、沖積平野に営なまれた遺跡とわず、住居址への埋土中からの出土例が増加してきている。これらは、分銅形土製品が集落関係の遺跡でも、居住空間に出土することを如実に物語っている。

ところで分銅形土製品の大部分は破片となって出土する。地名表にあげた149例のうち、完形品は14例で、おおよそ10%にしかすぎない。製作の当初は完形品であったことが容易に推定できるの

で、人為的に壊されたとしか考えられない。そしてそれらの破片が集落内の各所に散在することから、破壊の行為のあと棄てるという行為がともなっていたと推察される。ただ製作されて、破棄されるまでの期間は推測のすべがない。

さて第54表は、東高月遺跡群出土の分銅形土製品を、文様構成・器形上の特徴をふまえて、時期別・遺跡別に分類したものである。

用木山遺跡の場合、各住居址支群（R区）での出土量は、時期別にみればそれほど差異のないことがわかる。中期後葉のR 9の6個に、仮にR 6・R 7などの高いところから流入したものを含むと想定すれば、各段状平坦面ではほぼ均等に出土するといえよう。これらの各平坦面には10~14棟前後の住居が構築されている。これらは分銅形土製品の編年観によって、ほぼ三時期にわけられるので、各平坦面には一時期4~6棟単位の住居群が営なされたことになる。したがって分銅形土製品の保有量・使用量のおおよそを知ることができる。すなわち4~6棟に、多くてせいぜい数個となろう。もちろん当時使用されたすべてが残るわけではないが、遺跡範囲の大半が発掘されたことや、他遺跡でのあり方を考慮して、いちおう上記のように推定しておきたい。さらに出土量からみても、住居群の各構成員が保持していたものではないだろう。なお遺跡の存続期間を考えれば、すくなくとも分銅形土製品は、日常的につくられたものでないことがわかる。

一方、門前池第2地点（中期後半の住居址18棟、後期前半の住居址5棟、後期後半の住居址2棟を発掘）には、ヤケ池例を、また同じ第4地点（中期後半～後期初頭の住居址群を発掘）には、かって同地点で表採された門前池A・Bの2例がともなうものと考えてさしつかえない。ところが第2地点と第4地点の丘陵のあいだにある谷間（第3A地点）では、後期の住居址10棟・土塹13・柵列が検出されているにたいし、分銅形土製品の出土をみない。これを用木山・さくら山遺跡の出土量と比較するならば、すくないことが指摘される。分銅形土製品が発見されないだけのことか、集団間で差異が生じているのかどうか問題になるところであるが、用木山・さくら山遺跡が大規模であり、とりわけ前者はこの遺跡群のなかでも、母集団としての位置を占めていたことに関連すると思われる。後述するように、備前南部で小地域ごとに核となる遺跡が存在するのと同様のあり方を示し、分銅形土製品もこうしたあり方に応じるように出土するのである。

他方、東高月遺跡群では、弥生時代中期中葉以降に集落が発達する。これは分銅形土製品の従来の編年観からみても矛盾するものではない。すなわち当遺跡群では集落の発達当初から、分銅形土製品がともなっているわけである。中期中葉に比定されるのは懸図1例、用木山9例の2遺跡に限られ、中期後葉になるとこれら2遺跡のほかに、さくら山・愛宕山・門前池・ヤケ池というように出土遺跡が増加する。これは丘陵上・丘陵斜面・谷間・低地へと集落が拡大されることと軌を一にする現象である。具体的には懸図・用木山遺跡から、さくら山遺跡・愛宕山遺跡へという集落の拡大・分散状況をうかがうことができる。

ついで、当遺跡群での分銅形土製品の製作の問題について若干ふれておきたい。まず胎土に雲母

表54

## 東高月遺跡群における分銅形土製品

遺跡	時 期	中 期		後 期	
		中 葉	後 葉	前 半	後 半
門 前 池			④ ⑤		
ヤ ケ 池			○		
惣 図	③		①		
用 木 山	R 5	④	② ③		
	R 6		⑥ ⑦		
	R 7	⑨	④ ⑩ ⑪ ⑫	⑫	
	R 9	⑯ ⑰ ⑱	⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑯ ⑰	⑯ ⑰	
	R 10	⑯ ⑰	⑯ ⑰ ⑱	⑯	
	R 11	⑯	⑯	⑯	
	不 明	⑤	①		
愛 宮 山			① ②		
さ く ら 山	R 2		④ ⑤	⑧	
	R 7		⑥ ⑦	⑧	
	R 9		⑨		
	R 10		⑩		
	R 12		⑪	⑫	
	その他の		⑬ ⑭ ⑮	① ②	

片を多く含むことは一つの特色である。この点さらに検討を要すると思われる。文様構成・施文原体において、用木山⑯(R11)一⑯(R10)、用木山⑤(R5)一さくら山⑤、愛宕山①-②など相似するものがある。しかしこれらを同一製作者の手によるといった積極的な証拠を提示することはできない。文様表現が基本的に土器製作の場合と同種の施文具によってなされ、各時期の土器製作技法が分銅形土製品に反映されていることから、むしろ土器製作と同一の集団を想定すべきであろう。おそらく当遺跡群内のいずれかでつくられたであろうと考えられる。当遺跡群内の分銅形土製品には、おのずと文様構成・施文原体にパターンのあることはうたがいない。ところが個々には差異があり、それは個人差以上のものであって、たとえば同一製作者によって、複数以上同時製作されるような性格のものではなかったことを示しているのである。

一方當遺跡群において、中期中葉以降、四辻土墳墓群のように居住区域と隔離されたかたちで墓域が存在している。愛宕山土墳墓群の場合には、同一丘陵上に住居と隣接して営なまれているが、両者の区域は画されている。そして愛宕山では住居群内で2個の分銅形土製品が出土している。他

方雄町遺跡でも居住区域から隔ったところに墓がつくられ、居住区に限って分銅形土製品の出土が知られているのである。こうした事実は、分銅形土製品が居住空間における出土遺物であり、埋葬にかかわるものではないことを示唆している。

ところで東高月遺跡群で出土した祭祀関係の遺物として、銅鐸形土製品・鳥形土製品・男根状石製品があげられる。

銅鐸形土製品は、前述の門前池西方遺跡第3A地点の出土である。<sup>⑨</sup>これは現在11例知られており、その分布地域は畿内を中心に、東は神奈川県から西は岡山県までひろがっている。銅鐸形土製品は明らかに銅鐸のミニチュアであり、銅鐸と密接不可分の関係にあることはうたがいない。銅鐸形土製品が集落遺跡で出土するのにたいして、銅鐸の大部分がいわば集落外の山腹・山麓・丘陵傾斜地から出土することも周知の事実となっている。そして銅鐸が共同体的祭祀に用いられたことも認められている。こうしたことふまえれば、銅鐸を模倣した土製品を用いる祭祀が日常的な生活の場で(=集落)実修されることによって、銅鐸祭祀が共同体祭祀として存続したと考えられる。銅鐸が土中に埋蔵されていたとすればなおさらであろう。

分銅形土製品の分布地域では、銅鐸形土製品は、津島(上伊福)と門前池西方の二遺跡で知られており、いずれも分銅形土製品を伴出する。中期末から後期の時点で両者が共存していたことは推測にがたくない。

鳥形土製品は、さくら山遺跡第3地点(Y93)の住居址への埋土中から出土している。大阪池上・京都深草遺跡出土の鳥形土製品については、金闇忽氏によって「葬送の具として用いられたのではなく、弥生時代中期ごろからおこなわれだした、部族シャーマンによる農耕祭儀」との解釈がだされている。さきにふれたとおり、さくら山遺跡は居住区であり、墓域は別の地点が想定される。したがってこの鳥形土製品も、材質・形態こそしがえ葬送の祭具ではなく、農耕祭祀にかかわるものとしてさしつかえないであろう。

男根状石製品は、用木山遺跡(Y82-R11)の段状平坦面から分銅形土製品とともに出土している。<sup>⑩</sup>その性格については議論のわかれるところであり、ここではいちおう生産にかかわる祭具と推定しておきたい。上東遺跡では、男根状木製品と分銅形土製品が同一箇所で出土している。

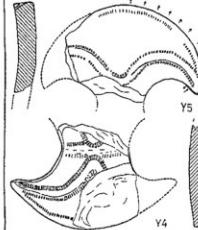
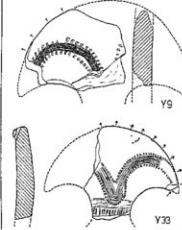
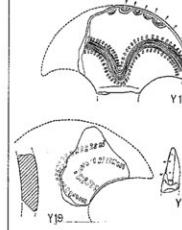
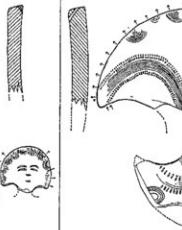
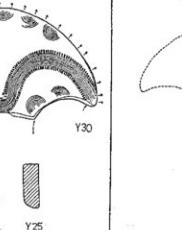
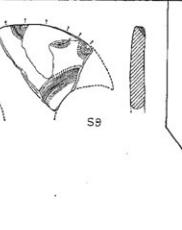
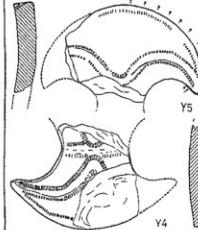
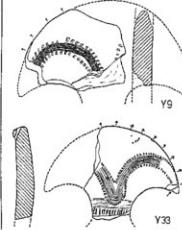
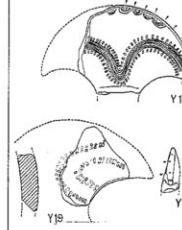
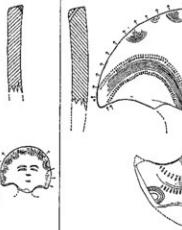
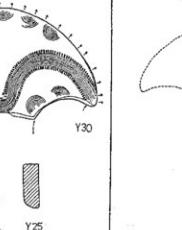
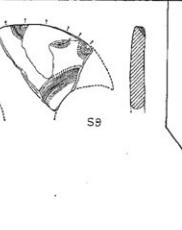
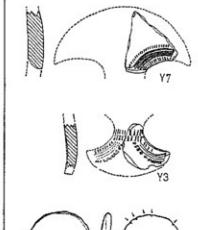
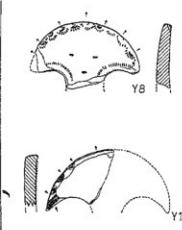
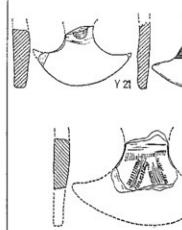
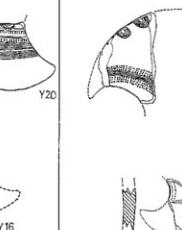
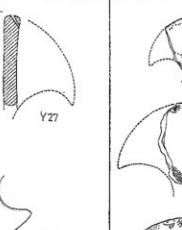
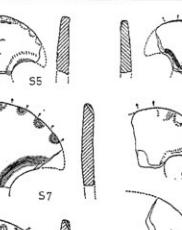
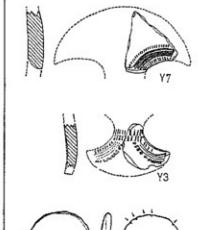
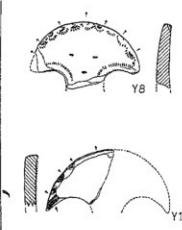
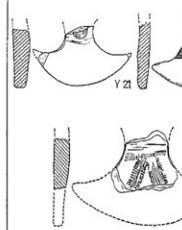
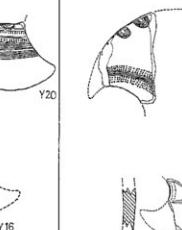
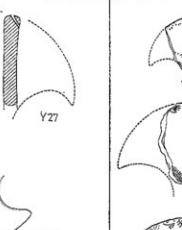
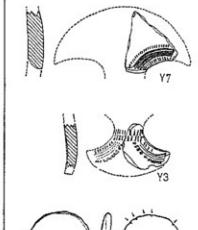
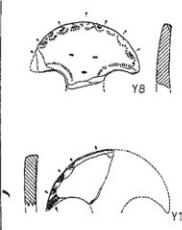
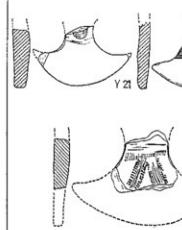
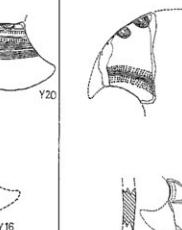
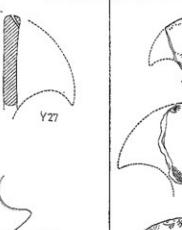
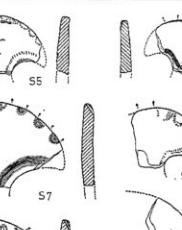
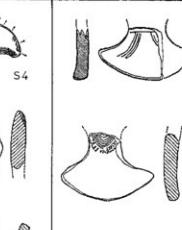
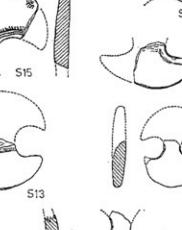
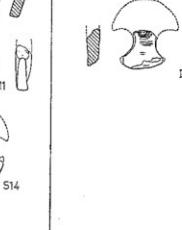
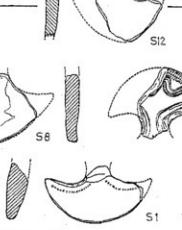
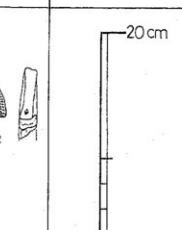
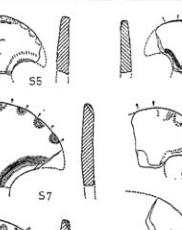
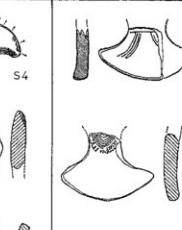
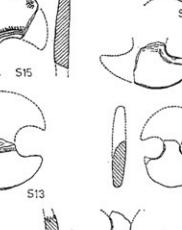
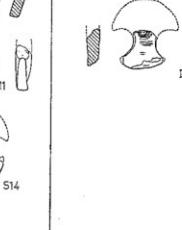
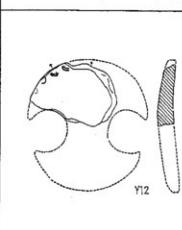
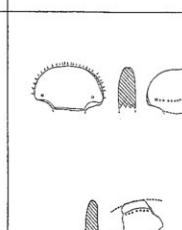
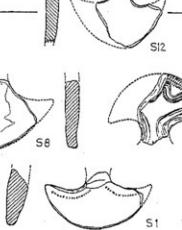
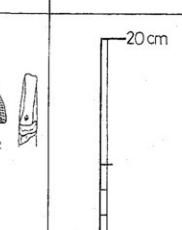
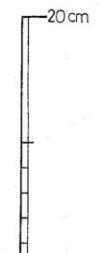
以上のように、同一遺跡もしくは同一地点において、分銅形土製品は銅鐸形土製品・鳥形土製品・男根状石製品と併存したことになる。これらの形態的特徴からみても、各々の祭祀対象が異なっていたと想定されるのである。それぞれの祭具の性格については、逐一検討されなければならないだろうが、同一集落内においてもさまざまな祭祀(祭具・祭祀関係遺構も含めて)が存在することをあえて指摘しておきたい。

ついで備前南部での分銅形土製品の分布状況、その出土遺跡のあり方を一瞥しておきたい。

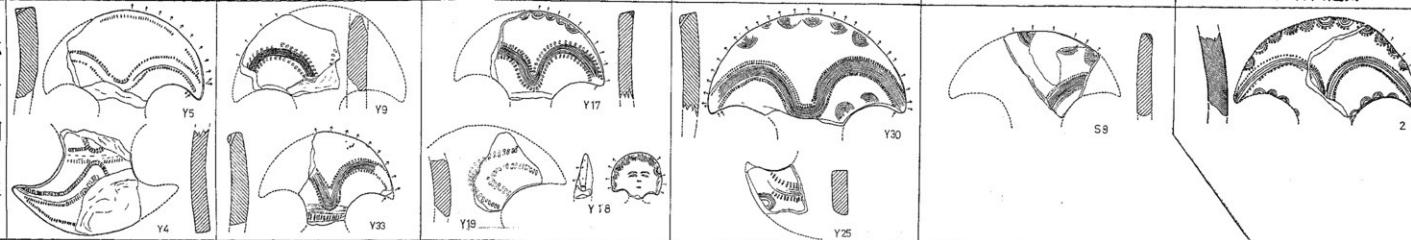
現在の岡山市街地を中心とした狭義の岡山平野は、旭川によって二分される。その右岸一帯にひろがる沖積平野には、縄文晩期からはじまる津島遺跡、弥生時代前期後葉からの南方遺跡をはじめ

表55

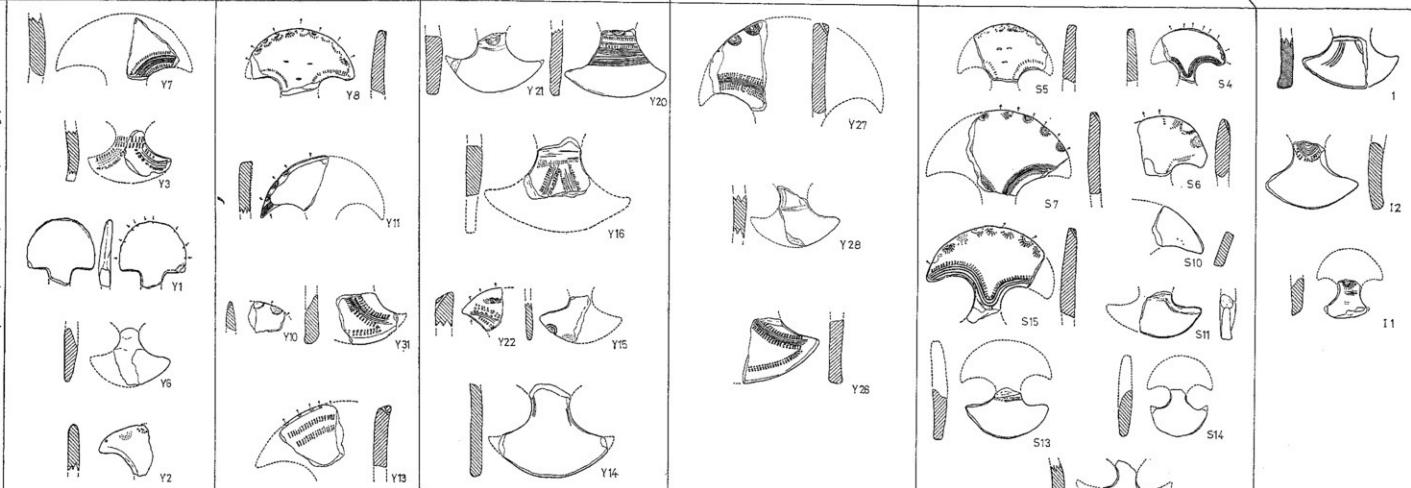
## 東高月遺跡群出土の分鏡形土製品編年表

	用木山R5.6、その他表採	用木山R7・11	用木山R9	用木山R10	さくら山遺跡	惣園・愛宕山遺跡
弥生中期中葉	     	 	 			
弥生中期後葉	     	    	   		     	   
弥生後期前半		  			   	

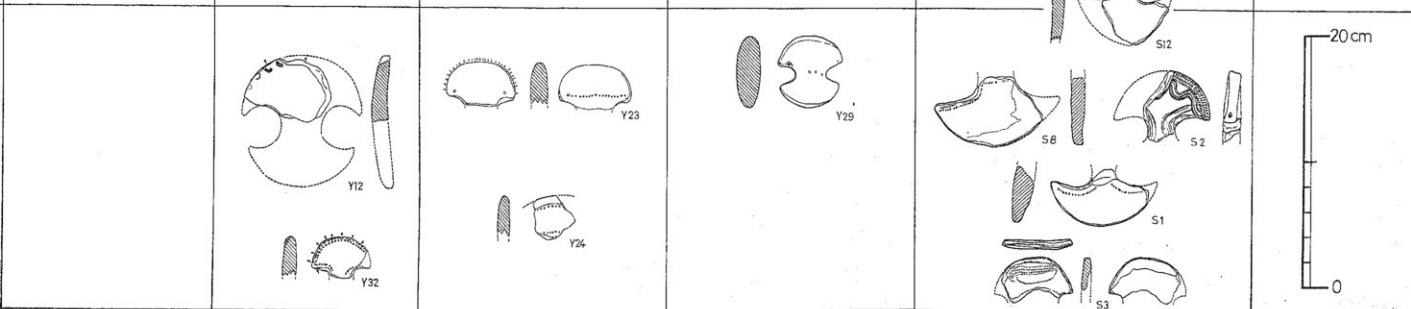
弥生中期中葉

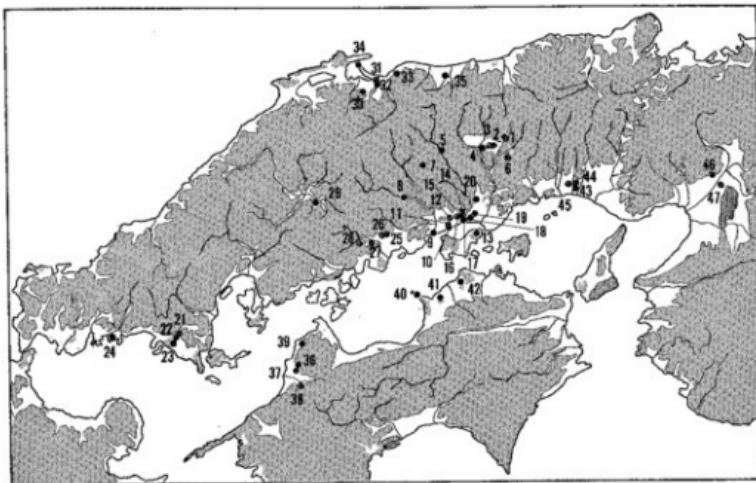


弥生中期後葉



弥生後期前半





第288図 分銅形土製品出土遺跡分布図

として、大小の弥生時代中・後期の遺跡が分布している。つまり弥生時代の遺跡は、大規模な遺跡（津島・南方）を中心に、中小の遺跡（上伊福・新京橋・大供など）が周辺に点在して立地する様相を呈している。これらのなかで、分銅形土製品は津島遺跡7（絵図地点2例を含む）、上伊福遺跡1（児童会館地点1）、南方遺跡9（蓮田地点1を含む）例が出土している。これを時期的にみれば、中期中葉の段階では南方7例、津島1例、上伊福1例をかぞえ、中期後葉では南方1例と津島6例である。後期のものは未発見である。いまのところ津島・南方遺跡といった大遺跡いがいでは、上伊福遺跡で知られているにすぎない。これはたぶん未調査のためであろう。南方遺跡では発掘調査面積が遺跡推定範囲の一部にもかかわらず8個出土し、津島では遺跡の一画で5個出土しているように、発掘調査がおこなわれるならば、今後とも出土例が増加するものと思われる。ともかく中期中葉段階の文様構成・器形は、それぞれ多少の差異を示しながらも共通しており、各集落で分銅形土製品が用いられていたことがわかる。

いっぽう旭川以東の上道平野にも数々の遺跡が知られている。それらの核に考えられる雄町遺跡・百間川遺跡は、縄文晩期から弥生時代まで存続している。弥生時代中・後期になると、小平野全体に赤田・乙多見・高島新屋敷・兼高などの遺跡が展開する。これまでのところ分銅形土製品は、雄町（14個）、赤田（2個）にだけ知られている。雄町遺跡の場合、発掘調査の範囲に限っていえば、遺跡におけるまとめりは、小河川に区切られた微高地によって、仮称第I区（第1調査区）、第II区（第2・3調査区）、第III区（第4調査区）に分けられる。分銅形土製品は、第I区で2個、第II区で11個、第III区で3個出土している。さらに時期的に分類すれば、第I区では中期中葉・後葉各1、第II区では中期後葉6、後期前半4、第III区では中期後葉2個となる。このうち第II区での出土状況は注目される。そこでは中期後葉の住居址1棟（第5号住居址）、後期前半の

住居址3棟（第2・3・8号住居址）が検出され、分銅形土製品は包含層から4個、第5号住居址の埋土中から3個、第8号住居址の埋土中から1個、第3号住居址の埋土中から2個出土している。第2号住居址に関しては、保存のため完掘されておらず、出土する可能性が残されている。これら3棟の住居址はそれぞれ約20m以内に近接し、ほぼ同時期の一群と想定されている。ただ同一時期の住居数としては、さらに何棟かが加わるであろうが、3棟の住居群にすくなくとも4個の分銅形土製品がともなうことは示唆的である。後期前葉の段階での分銅形土製品の住居群（3棟）に対する量を示す資料として評価したい。冲積平野における遺跡での出土量も、高地の用木山遺跡でのあり方と軌を一にしているわけである。

また文様構成上、雄町⑩と①は酷似するが、出土地点は100m余り離れ、雄町⑩—⑥のように數100m離れた地点で出土しながら、同一個体と考えられるほど類似しているものがある。なお⑦のように同一住居址（第9号住居址）の埋土、⑥のように溝と包含層で検出された破片が接合できた例がある。これらがいつの時点で破損したものか明らかでないが、前者のばあい住居が火災を蒙っているので、その際に破損したものかもしれない。後者のばあい意識的に壊されたその破片が、住居址周辺に散らばられた可能性もある。なお雄町遺跡でも、同一遺跡範囲での分銅形土製品は互いに類似することが知られている。そして住居群と密接に関連した状態で出土することが明らかとなつた。

ところで、かって中期中葉段階の第1グループに分類したもの<sup>4</sup>（新邸型と称する）が、南方・津島・雄町・赤田・惣國・用木山それに新邸遺跡というように、備前南部の各遺跡で一貫的に出土している事実がある。他地域ではいまのところ伯耆の中曾根遺跡にみられるだけである。新邸型は、上半部中央に連続した二つの櫛描円弧文により、目が表現され、縁辺部に櫛描重弧文が施されたものである。とくにこの櫛描重弧文は文様構成の基本的なモチーフであり、新邸型の指標とできる。中期中葉の時期を含めて、重弧文（類似文様も含む）が多く用いられるのが備前・備中・美作・伯耆の諸地域であり、とりわけ備前では後期まで継続して用いられている。上記の地域はまた抽象的な顔面表現のみられる地域とされてきたのであるが、重弧文の多用という点では備前が卓越していることを示す。換言するならば、以上の四地域いがいでは、他の文様が主として用いられたということであり、地域差をみるばあいの指標となろう。

新邸型の評価は、またべつの問題を内包している。つまり今後その系譜をたどることによって、分銅形土製品そのものの出現の契機をつかがい、さらに伝播あるいは分布の拡大過程をも追求できることにあろう。

## 6

ところで、從来分銅形土製品分布の中心地域では、具体的な顔面表現をもつ例が知られていないかった。ところが用木山・さくら山遺跡のように、きわめて出土量の多い地域で発見されるようになった。これらは時期的にどのように位置づけられるであろうか。他地域の具象的な顔面表現のものを次にあげ、あわせて検討したい。

表56 分銅形土製品一覧表

遺跡番号	遺物番号	県名	通 跡	中 期 後 期				文 獻	保 管 者
				中葉	後葉	前半	後半		
1	1	岡山	勝田郡奈義町 野田A 野田B	○				近藤1952	
	2				○			近藤1951	江坂 道
2	3		勝田郡勝央町植月(金鶴塚A)		○			東 1971	岡山大学考古学研究室
3	4		勝田郡勝央町鳥羽野舞台裏		?			東1971	岡山大学考古学研究室
4	5	津山市山北	中ノ坊A 中ノ坊B	○				河本清氏御教示	津市教育委員会
	6				○			タ	タ
5	7		真庭郡落合町 西原		○			橋本・栗野1973	岡山県教育委員会
6	8		英田郡作東町 江見・高本		○			井上・山崎・岡田1975	岡山県教育委員会
7	9		上房郡北房町 告部桃山A 桃山B 桃山C 桃山D		○			田仲・二宮・福田・竹田1976	岡山県教育委員会
	10				○			タ	タ
	11				○			タ	タ
	12				○			タ	タ
8	13		川上郡成羽町 古町			○		近藤1952	
9	14		倉敷市酒津		○			間壁貞子1973	倉敷考古館
10	15		都窪郡庄村中島 (上東A) 上東B 上東C 上東D 上東E 上東F 上東G 上東H	○				近藤1952	板谷重郎治
	16			○				サントリー美術館「69'春の特別展」パンフ 東 1971	村上正名
	17			○					板谷重郎治
	18			○				タ	倉敷歴史館
	19			○				伊藤・池田・柳瀬・藤田1974	岡山県教育委員会
	20			○				タ	タ
	21			○				タ	タ
	22			○				タ	タ
11	23		都窪郡庄村 岩倉		○			東 1971	
12	24		吉備郡真金町 新郷		○			近藤1952	
13	25		岡山市宮舎金上 貝殻山					近藤1974	岡山大学考古学研究室
14	26		岡山市津島 津島A 津島B 津島C 津島D 津島E	○				間壁1970 東1971	倉敷考古館
	27			○				東 1971	タ
	28			○				タ	タ
	29			○				タ	タ
	30			○				タ	タ
15	31		岡山市絵図 絵図A 絵図B	○				タ	
	32			○					

遺跡番号	遺物番号	県名	遺 跡	中 期		後 期		文 獣	保 管 者
				中 古	後 葉	前 半	後 半		
16	33	岡山	岡山上伊福・児童会館	○				東 1971	岡山大学考古学研究室
17	34	岡山市蓮田	(南方A)	○				小林1951・1959	
	35		南方B	○				出宮・伊藤1970	岡山市教育委員会
	36		南方C	○				◆	◆
	37		南方D	○				◆	◆
	38		南方E	○				◆	◆
	39		南方F	?				◆	◆
	40		南方G	○				◆	◆
	41		南方H	○				◆	◆
	42		南方I	○				◆	◆
18	43	岡山市赤田	赤田A	○				出宮1969	岡山市教育委員会
	44		赤田B	○				出宮・根木1975	◆
19	45	岡山市雄町	雄町A(1)	○				高橋・葛原・中村・梶本・正岡・栗野1972	岡山県教育委員会
	46		雄町B(2)	○				◆	
	47		雄町C(3)	○				◆	
	48		雄町D(4)	○				◆	
	49		雄町E(5)	○				◆	
	50		雄町F(6)	○				◆	
	51		雄町G(7・8)	○				◆	
	52		雄町H(8)	○				◆	
	53		雄町I(9)	○				◆	
	54		雄町J(11)	○				◆	
	55		雄町K(12)	○				◆	
	56		雄町L(13)	○				◆	
	57		雄町M(14)	○				◆	
	58		雄町N(15)	○				◆	
	59		雄町O(16)	○				◆	
20	60		門前池A	○				東 1971	岡山大学考古学研究室
	61		門前池B	○				◆	佐倉淳夫
	62		焼 池	○				東 1971	山陽町教育委員会
	63		總 圖 1	○				本 書	山陽町教育委員会
	64		總 圖 2	○				◆	◆
	65		用木山1	○				本 書	山陽町教育委員会

遺跡番号	遺物番号	県名	遺 跡	中 期		後 期		文 獣 献	保 管 者
				中 寒	後 寒	前 半	後 半		
20	66	岡山	赤磐郡山陽町 用木山12		○			本 書	山陽町教育委員会
	67		用木山3		○			夕	
	68		用木山4	○				夕	
	69		用木山5	○				夕	
	70		用木山6		○			夕	
	71		用木山7		○			夕	
	72		用木山8		○			夕	
	73		用木山9	○				夕	
	74		用木山10		○			夕	
	75		用木山11		○			夕	
	76		用木山12			○		夕	
	77		用木山13		○			夕	
	78		用木山14		○			夕	
	79		用木山15		○			夕	
	80		用木山16		○			夕	
	81		用木山17	○				夕	
	82		用木山18	○				夕	
	83		用木山19	○				夕	
	84		用木山20		○			夕	
	85		用木山21		○			夕	
	86		用木山22		○			夕	
	87		用木山23			○		夕	
	88		用木山24			○		夕	
	89		用木山25	○				夕	
	90		用木山26		○			夕	
	91		用木山27		○			夕	
	92		用木山28		○			夕	
	93		用木山29			○		夕	
	94		用木山30	○				夕	
	95		用木山31		○			夕	
	96		用木山32			○		夕	
	97		用木山33	○				夕	
	98		赤磐郡山陽町 愛宕山1		○			本 書	山陽町教育委員会

遺跡番号	遺物番号	県名	遺 跡	中 期		後 期		文 献	保 管 者
				中葉	後葉	前半	後半		
20	99	岡山	赤磐郡山陽町 愛宕山 2	○				本書	山陽町教育委員会
100			さくら山1		○			本書	山陽町教育委員会
101			さくら山2		○			タ	タ
102			さくら山3		○			タ	タ
103			さくら山4	○				タ	タ
104			さくら山5	○				タ	タ
105			さくら山6	○				タ	タ
106			さくら山7	○				タ	タ
107			さくら山8		○			タ	タ
108			さくら山9	○				タ	タ
109			さくら山10	○				タ	タ
110			さくら山11	○				タ	タ
111			さくら山12		○			タ	タ
112			さくら山13	○				タ	タ
113			さくら山14	○				タ	タ
114			さくら山15	○				タ	タ
21	115	山口	熊毛郡三丘村安田 天王	○				小野1953	
22	116		タ 岡山	○				タ	
23	117		光市岡原					小野1960	
24	118		防府市桑山 井上山A	○				脇1961 岩根1967	
	119		タ 井上山B					脇1961	
25	120	広島	深安郡神辺町 郡領	○				村上1938	
26	121		タ 国分寺		○			河瀬・鷹見・検査1974	
27	122		芦品郡新市相方	○				佐原1976	
28	123		府中市篠根町 法全坊		○			田能資料館1975	府中高校
29	124		三次市 堀町A	○				松崎・潮見1961	広島大学考古学研究室
	125		堀町B	○				タ	タ
	126		堀町C	○				タ	タ
	127		堀町D						
	128		堀町E						
30	129	島根	安本郡島木町 十善	?				山本1969	
31	130	鳥取	米子市目久美	○				近藤1952	清水安藏
32	131		タ 青木		○			青木遺跡発掘調査団1976	

遺跡番号	遺物番号	県名	通 路	中 期		後 期		文 獣	保 管 者
				中葉	後葉	前半	後半		
33	132	鳥取	西伯郡大山町庄田 大道原	○				近藤1952	倉光清六
34	133		境港市北難 東伯郡社村里見 中曾根	○				タ	佐々木謙
35	134			○				タ	
36	135	愛媛	松山市御幸寺山東麓 祝谷	○				近藤・柴村1957	愛媛県美術館
37	136		松山市文京町 文京	○				西田・森・大山1976	
38	137		松山市黒雲崎合浦港公園内海丘 谷田前 北条市萩原女夫池					タ	
39	138							西田1962	得居義治
40	139	香川	三豊郡託間町紫雲出A	○				小林・佐原1964	紫雲出山資料館
	140		紫雲出B	○				タ	タ
41	141		善通寺市吉原我原寺山	?				六車1956	護國神社
42	142		坂出市福の宮 (=城山)	○					安藤文良
43	143	兵庫	姫路市延末字小山A	○				今里1960・1969	今里幾次
	144		タ 小山B	○				タ	タ
44	145		姫路市千代田町	○				タ	姫路西高等学校
45	146		揖保郡太子町山田字小丸山	○				タ	浅田芳郎
46	147	大阪	高槻市天神山	○				喜谷1957	
47	148		枚方市鷹塚山			?		江谷・瀬川1968	枚方市教育委員会

(1)周防・天王, (2)周防・岡山, (3)周防・井上山A, (4)備後・御領, (5)備後・相方, (6)讃岐・紫雲出A, (7)伊予・祝谷, (8)伊予・文京, (9)伊予・谷田III(南丘), (10)備前・用木山, (11)備前・用木山②, (12)備前・さくら山⑥, (13)出雲・十善, (14)美作・福田池尻(土偶)

各例には表現上の差異がみられるが、ほぼ次の四つのタイプにわかれる。I 天王・岡山・井上山A・祝谷・文京例のように、眉・鼻を連続した突帯文、目を刻線文で表わしたもの、II 紫雲出山A例のように、2条の刻線で菱形の目を描いたもの、III 御領・相方・用木山・さくら山例のように眉・目・口をいずれも刻線で表現したもの、IV 十善のように列点文で目をあらわしたものである。

天王・岡山・井上山Aの各例は、文様・器形とも類似する。方形状の形態は周防での特徴である。また突帯で表現された眉・目は、天王遺跡出土の皮袋形土器の腹部に施された文様に似ている。同地域の同遺跡出土であるとはいえ、その表現方法の類似性は注目される。皮袋形土器文様と伝山陸出土の木幡氏蔵銅鐸に表出された顔面が類似する<sup>9</sup>いっぽう、伊予・祝谷の分鏡形土製品の文様との関連も指摘されている。

伊予地域での祝谷・文京例もまた互いに類似する。両者はとうてい無関係にはつくりえないであろう。両遺跡がわずかに500m離れた地にあることからもうなづける。ただ文京遺跡の報告書では、文京(「中期中葉後半」)→祝谷(「中期後半」)の変遷が考えられている。しかし文京遺跡の場合、出土した第5号住居址の土器にかなりの年代幅があり、さらに文京例の器形が横長であ

り、文様がくびれ部にかけて描かれている点を考慮して、祝谷から文京例への変化を想定したい。なお谷田Ⅲも同様の文様構成をもっているらしい。ところで、上記の三例は、器形上の差を無視すれば大同小異で、周防天王・岡山例に類似する。これは讀岐それに瀬戸内をはさんだ備後のものと異なることから、共通した分布地域とすることができます。

備後から備前にかけての御頭・相方・用木山⑧・さくら山⑤は、遠く隔った地にありながら、共通した一面をもつ。しかしながら御頭・相方例では、縁辺部に列点文・竹管文が施されるのに対し、用木山・さくら山例では重弧文が描かれている。このちがいは、さきにふれたように、備前地域の分銅形土製品に重弧文が多用されることによる。

このように具象的なものであっても、地域によって表現方法が異なり、同一地域にあっては互いに類似するという二面性がみられる。このことはすくなくとも、上記の分銅形土製品が各地・各遺跡群内でつくられたものであることを示す。同時に製作のさい、伝統的なものを継承したことでものがたるのである。

さて、用木山⑨の出土によって、これまで唯一であった弥生時代土偶である福田池尻例が改めて注目される。表現のうえで後者は眉・鼻が隆起して表わされ、前者は眉・目・口が刻線文で、鼻もやや隆起するように描かれている。器形も特に断面の形状にみられるように、顔面中央部がふくらみ、丸味をおびている点で共通する。前者が後出的であるが、福田池尻例をもって分銅形土製品の先行形態とするまでにはいたっていない。ところが、同じ顔面が表わされたものでも、用木山⑩・さくら山⑥は器形的により扁平化している。したがって用木山⑨とのあいだにわずかにせよ時期差をみいだせるであろう。文様の変遷上、後者のようにくりこみ部縁辺にそって施された曲線文が、中期後葉に一般的であることからも肯首される。つまり後者の二例は、中期後葉ごろに位置づけられるのである。

用木山⑩については、中期中ごろに比定できるが、この場合、同遺跡の同時期に具象的な顔面表現のものと抽象的なものとが共存していたことになろう。しかしこれらの二種の文様構成をみると、具象的なものから抽象的なものへの変遷はたどりがたい。備前の地域では、抽象的な文様のものが主流であることを想起するならば、用木山⑩・さくら山⑥は、変種として理解されるのである。中期後葉の時期になっても、分銅形土製品がほんらい顔面を表出するものであることが伝えられたことを示すだろう。

分銅形土製品は、その出土状態・文様・形態の特異性、出土量の稀少性などを考えあわせるならば、祭具であることは明らかである。

分銅形土製品が集落関係の遺跡で出土することは確実であり、その祭祀の場が具体的に居住空間であることが知られる。さらに出土状態からみると破棄されたこともうかがえる。東高月遺跡群・雄町遺跡などで検討したように、分銅形土製品は各棟に対応するのではなく、おおよそ数棟の住居が結合する小集団（ここでは家族集団と称する）によって、保有・使用されたと考えられる。した

がって分銅形土製品祭祀の主体は、そうした集団にあったことが想定され、祭祀の対象も家族集団の共同利害にかかわる範囲におのずと限定できるであろう。銅鐸のように、より大きな集団によって祭られたと考えられる青銅祭祀の性格と異なることも明らかである。

分銅形土製品が、弥生時代中期～後期の一一定時期、中国・四国・近畿という一定の地域に分布することは、その期間、その地域にとりもなおさず分銅形土製品というかたちに表象される祭祀が存続したからにはかならない。もちろんその変遷過程で文様・器形の変化がみられるが、意義が失なわれるほどのものではない。それゆえに分銅形土製品の消滅という事実は、それに表象された祭祀が終焉したことを意味する。分銅形土製品が集落内で出土することについては、再三述べてきたとおりである。これは分銅形土製品が集落内祭祀として成立し、終結することをしめすのである。

さきにふれたように東高月遺跡群では、銅鐸形土製品・男根状石製品・鳥形土製品というような、かたちの異なる祭具が出土している。このうち弥生時代中・後期に特有なのは銅鐸形土製品であり、また一方では分銅形土製品がある。しかしながら前者が銅鐸分布圏にはば重なると推定されるのにたいし、後者は独自の分布圏を形成している。この点からも両者の性格のちがいもうかがわれる。要するに、弥生時代にはさまざまな祭具に表象される祭祀が存在したのであり、これらの性格の解明には、いわば祭祀の構造的把握が必要であろう。分銅形土製品の意義についてもそうした視点で今後追求していきたいと思う。

小稿をまとめるにあたって、多くの方々の指導をうけ、援助をいただいた。資料提供ならびに小稿の発表の機会を与えてくださった山陽町教育委員会とともに、深く感謝の意を表したい。

#### (註)

- (1) 用木山⑩～⑪(R7), ⑫～⑬(R9), ⑭～⑯(R10), ⑰～⑲(R11)が、段状平坦面から検出された。
- (2) 分銅形土製品編年の基準は、東1971によっている。なお「地名表」に推定期を記しておいた。旧稿でとりあげた類例のうち、赤田・野田⑩は中期中葉に、古町は後期に修正している。
- (3) 分銅形土製品の下限が、後期後半までくだることが明らかになった。この点については、川越哲志氏の御教示を得た。
- (4) 美作・野田遺跡(近藤義郎1951)では、弥生時代中期の竪穴式住居5棟・高床式住居1棟が検出され、分銅形土製品は遺跡の範囲にふくまれる地点から表面採集された。
- (5) 美作・西原遺跡(樋木・栗原1973)では、3棟以上の竪穴式住居にともなって、1個の分銅形土製品がビット内から出土している。
- (6) 分銅形土製品の文様の緻密さ、顔面の表情、ていねいな調整などから、女性の手による製作の可能性がつよい。分銅形土製品の分布圖のなかに小地域差があり、同時に地域間において類似性がみられるところから、女性製作者の移動(一つには姫媛)が想定されてよいかも知れない。
- (7) (枝川勝・池畠耕一・新東晃一・松本和男 1975)
- (8) 山陽町教育委員会調査、報告書未完、木調査報告書第5集に収録予定。
- (9) (金関鶴 1976)
- (10) (神原英朗、本書P399)
- (11) (伊藤・池畠・柳瀬・藤田 1974)

- 11) 〔出宮・伊藤 1970〕所載の遺跡分布図参照。また〔根本 1976〕第4図には、水田獲得=遺跡の拡大状況が示されている。分銅形土製品の分布状況もそうした過程を反映している。
- 12) 〔東 1971〕
- 13) 〔田辺・田中・佐原・植上 1969〕
- 14) 〔間壁 1969〕
- 15) 〔西田・森・大山 1976〕
- 16) 伊予地域の土器が第II様式土器(阿方式土器)以降「安芸灘・豊予海峡を隔てて、広島県・山口県・大分県地方の様式がそれぞれまじりあっている」(松岡 1966) という指摘と無関係ではないであろう。
- 17) 〔近藤・高村 1967〕
- 18) 分銅形土製品以外の弥生時代の遺物で、顔面が表出されたものに、土偶(熊本県・歌訪の原), 木偶(滋賀県・大中の瀬), 土器絵画(奈良県・唐古, 山口県・天王), 人面土器(神奈川県・ひる畑遺跡ほか), 広形銅才(福岡県・白塔), 銅扉(広島県・福田, 伝岡山県・足守, 木幡氏眞, 伝鳥取), 銅扉絵画(兵庫県・桜ヶ丘ほか)がある。

広形銅戈茎部に鉛出された顔面は、ほんらい柄が装着されればみえないはずであり、何の意味があつて表現されたのか興味深い。

銅扉のうち、福田扉・伝足守扉の「菱形」状の文様は、分銅形土製品紫雲出Aとの表現の類似性からみて、「目」であることはうたがいない。いっぽう木幡蔵門には目とあわせて眉・鼻がより具象的に表現されている。その表現はたしかに周防の各分銅形土製品、天王遺跡の皮袋形注口土器に類似する。「顔面」表象の呪の性格については、いぜん不明である。しかし事実として「怪奇文様」「邪視文」と呼ばれる特異な顔面表現の銅扉、広形銅戈、そして分銅形土製品に顔面表象がみられるのである。

#### (引用文献)

- 青木遺跡発掘調査団 1976 「青木遺跡発掘調査報告書I」
- 東潮 1971 「分銅形土製品の研究(1)」(『古代吉備』7)
- 出宮徳尚 1969 「岡山市赤田遺跡発掘調査概要」
- 出宮徳尚・伊藤晃 1970 「南方遺跡発掘調査概報」
- 山宮徳尚・根木修 1975 「幡多庵寺発掘調査報告」
- 枝川陽・池畠耕一・新東晃・松本和男 1975 「門前池遺跡」(『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』9)
- 江谷寛・瀬川芳則 1968 「鷹取山弥生遺跡」
- 橋本憲司・栗野克己 1973 「西原遺跡」(『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』6)
- 井上弘・山磨康平・岡田博 1975 「高木遺跡」(『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』8)
- 伊藤晃・池畠耕一・柳瀬昭彦・藤田恵司 1974 「上東遺跡の調査」(『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』2)
- 岩根保重 1967 「古代」(『山口県の歴史』)
- 金闇恕 1976 「弥生時代の宗教」(『宗教研究』226)
- 河瀬正利・鹿見喜太郎・桧垣栄次 1974 「畿後園分寺跡第2次発掘調査概報」
- 喜谷美宣 1967 「高槻市天神山遺跡の発掘」(『私たちの考古学』13)
- 小林行雄 1961 「日本考古学概説」
- 小林行雄・佐原真 1964 「紫雲出」
- 近藤義郎 1951 「岡山県勝田郡野田遺跡」(『日本考古学年報』4)

- 近藤義郎 1952 「分銅形土製品」（『古代学研究』6）
- 近藤義郎 1963 「備中新邱具塚」（『古代学研究』8）
- 近藤義郎・高村継夫 1957 「弥生土偶について」（『私たちの考古学』12）
- 近藤義郎・柴村敬次郎 1967 「分銅形土製品の新資料」（『私たちの考古学』14）
- 近藤義郎 1974 「岡山県貝殻山遺跡」（『考古学研究』）
- 間壁忠彦 1969 「弥生文化各説一四国・中国」（『新版考古学講座』4）
- 間壁忠彦 1970 「高地性集落の謎」（『古代の日本』4）
- 間壁忠彦 1973 「倉敷市酒津一水江遺跡」（『倉敷考古館研究集報』8）
- 松崎寿和・潮見浩 1961 「先史時代の広島地方」（『新修広島市史』）
- 六車寛一 1966 「鐵被弥生式土器聚或図録」（『香川県文化財協会報』）
- 村上正名 1940 「備前国深安郡御野村御巣発見の石器時代土偶について」（『備後史談』15—12）
- 根本修 1976 「木製農耕具の意義」（『考古学研究』88）
- 西田栄 1962 「風早の先史文化」（『北条市史』）
- 西田栄・泰光晴・大山正風 1976 「文京遺跡」（『松山市文化財調査報告書』11）
- 小野忠徳 1953 『島田川』
- 小野忠徳 1960 「墨塚遺跡を有する—古代村落址の研究」（『山口大学教育学部記念論文集』）
- 佐原真 1976 「弥生土器」（『日本の美術』125）
- 高橋謙・葛原克人・中力昭・泉木和秀・正岡睦夫・栗野克己 1972 「雄町遺跡」（『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』1）
- 田辺昭三・田中琢・佐原真・植上重光 1968 『日本の鉄鍊』
- 田仲満雄・二宮治失・福田正継・竹田勝 1976 「桃山遺跡」（『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』12）
- 田能資料館 1975 『瀬戸内海をめぐる弥生文化』
- 山本清 1969 「弥生文化各説一四国・中国」（『新版考古学講座』4）
- 脇運雄 1961 「防府における弥生文化遺物」（『防府市史』上巻）

## 新宅山・中池・大久保遺跡

新宅山遺跡 .....	519
中池遺跡 .....	536
大久保遺跡 .....	543

# 新宅山遺跡

## 第1節 序説

新宅山遺跡（略記号Y10）は、岡山県赤磐郡山陽町河本字三藏畠104番地に所在する弥生時代集落址である。本遺跡は、岡山県営山陽新住宅市街地開発事業用地となった、東高月丘陵群内の丘陵尾根支脈末端部稜線上に位置するが、事前の分布調査の段階ではその存在を確認できなかった。

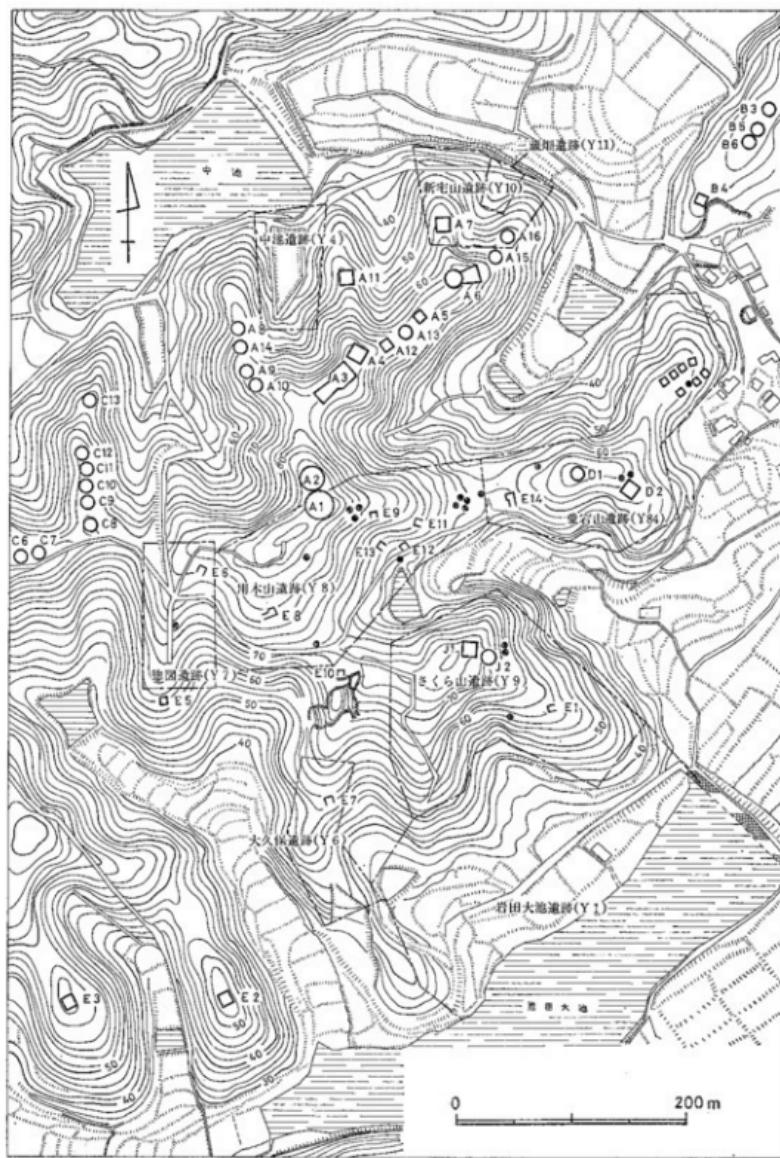
山陽町教育委員会では、昭和49年4月1日付で岡山県と山陽町間に締結された、山陽町地埋蔵文化財発掘調査第11次委託契約に基づき、その一環として昭和49年7月1日から、用木古墳群第7・15・16号墳3基の発掘調査を開始したが、それに伴って古墳と一部で複合し、周辺の丘陵上に所在する本遺跡を発見、さらに念のため谷部に向けて設営した試掘溝調査によって、平安時代から鎌倉時代にかけての古窯址を発見した。

山陽町教育委員会は、新発見遺跡について集落址を新宅山遺跡、古窯址を三藏畠遺跡として遺跡発見届を提出し、岡山県教育委員会および岡山県土木部等の関係機関と、その取り扱いを協議したが、結局は両遺跡とも緊急発掘調査対象とされた。両遺跡の発掘調査は、前記委託契約を追加変更契約して、山陽町教育委員会が用木古墳群3基の調査に引き続いて実施した。すなわち本遺跡の発掘調査は、用木古墳群3基の調査と併行して、昭和49年7月22日から同年8月21日までをかけて実施し、三藏畠遺跡の発掘調査は、途中工期の急ぐ愛宕山遺跡第2地点の調査を挟んで、昭和49年11月21日から同年12月27日までをかけて実施した。なお用木古墳群3基については本発掘調査概報第1集中に「用木古墳群」、三藏畠遺跡については同第6集中に「三藏畠遺跡」として、それぞれ稿を改めて報告しているので参照願いたい。

引き続いて発掘調査を実施した3遺跡とも、発掘調査終了後の昭和50年2月15日、住宅団地造成工事の犠牲となって、その基盤である丘陵もろとも削平されて消滅した。現在は幾何学的な階段状の住宅団地として造成され、行政区画も山陽団地3丁目と改められて、昔日の面影はどこにも見ることはできない。

## 第2節 立地と調査時の概況

東高月丘陵群の外縁部が、埋積平地と接する北東部谷口を塞ぐ形で築成された門前池から、南西の中池に向けては、かなりの規模の谷水田が深く丘陵群内に入りこんでいる。この谷水田の南縁に沿うようにして、当丘陵群のほぼ中央部に位置し最高位をも占める標高92mの用木山丘陵頂から、なだらかな起伏をみせながら下降してのびる、尾根幅の狭い丘陵尾根支脈が形成されている。この丘陵尾根支脈上には、丘陵頂を第1号墳として用木古墳群16基が直列状に立地しているが、第6号墳の位置する標高67.6m付近を尾根支脈として、北と北東に向けて下降しながら谷水田に至る小支脈を分出して終っている。本遺跡は、その用木第6号墳立地部から分岐した、2本の尾根小



第289図 東高月丘陵群南東部遺跡分布状況図



第290図 新宅山遺跡周辺地形図

支脈上に所在する小規模な集落址である（図289・290、図版125）。

当該地は今次開発事業が計画立案された時点では、北東に分出する小支脈端部の舌状部が、一部開墾されて桃畠となり、その後再び荒れて雜木林化しているのを除いては、周辺丘陵上を含めて大半が自生の松林であった。したがって事前の分布調査時の外観観察では、用木6・7・15号墳3基の確認はできたものの、その他の丘陵尾根部は自然地形に近い形状を呈し、土器片等の遺物も検出されないこともあって、用木第16号墳も含めて、この地に本遺跡の遺構が存在することを全く認知することができなかった。

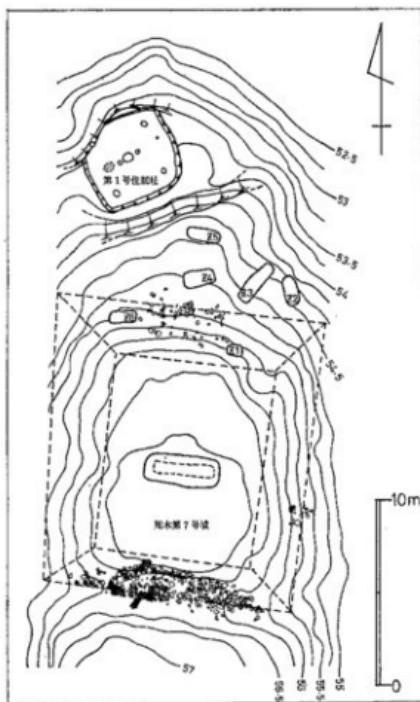
その後、用木古墳群3基の発掘調査を契機に木遺跡の存在がわかり、尾根小支脈上の全面削土調査によって、第6号墳から北に分出する尾根小支脈上に第1号住居址1棟と、北東に分出する尾根小支脈上の約15m×30mの範囲内にピット状遺構6遺構を発見した。遺構の所在する両尾根小支脈は、三蔵畠遺跡の位置する小支谷を隔てた約80mの距離があり、近接する用木古墳群3基や三蔵畠遺跡との関係および丘陵表土層の風化流動の影響もあり、現状での遺跡範囲は狭く限定されていた。地形的にみても木遺跡の規模はさして大きくないと推察されるが、もともと現在確認される程度の小規模なものなのか、2条の尾根小支脈に検出された住居址とピット群とは、同一住居群あるいは別の住居群であるのかなどについて、明確にすることはできなかった。

両地点とも、谷水田に向って張り出した丘陵尾根支脈の端部に近い、標高約45m～55mの稜線部に所在し、眼下の谷水田との比高は約15m～25mの高さに位置し、谷水田側から見れば、後背地の小高い丘の上といった立地を占めている。

### 第3節 遺構の出土状況

#### 1. 第1号住居址（図292・293、図版129）

用木第6号墳の立地部から北の谷水田へ向けて分出する小支脈稜線上の、標高約54mの地点を削平整地して位置する隅丸方形の堅穴式住居址である。この尾根小支脈上には、分出点から北へ水平



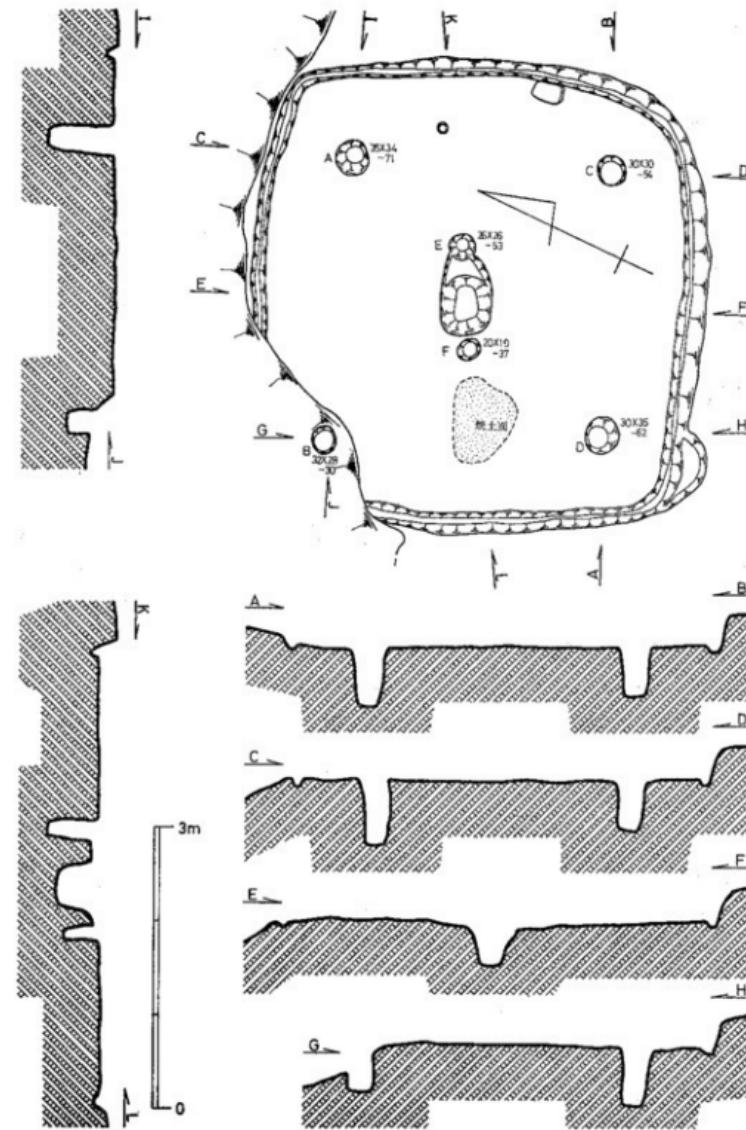


第292図 新宅山遺跡第1号住居址炭化木材出土状況図

距離で約30m、比高で約10m降った標高57.5mを墳頂中心部とする用木第7号墳が所在するが、本住居址は用木第7号墳北側墳端部から、さらに北方へ約9m、比高約3m降った標高53.75mに住居址床面を置いている。したがって眼下の谷水田との比高は約25mの高さに位置している。

本住居址は、用木第7号墳の北側墳斜面から、その北方尾根小支脈上にかけて所在する6基の土積墓群のすぐ北側に、用木第7号墳あるいは土積墓群に伴うと考えられる石積み遺構とともに、同一立地に複合していた（本発掘調査概報第1集「用木古墳群」P181～P197参照）。

丘陵尾根小支脈の稜線を尾根走向に直交して、現存丘陵地山生き土層を、ほぼ東西に長さ約10m、深さ約0.35mを直線状に掘り込み、地形の低い北側を約8m×6mのテラス状平坦面に削平整地して、そこに本住居址を建てている。現況ではその後の丘陵表土層の風化流失によって、堅穴式住居址の掘り込み壁面も浅くなり、埋めだして整地されたと推察される地形の低い側の北西隅部で



第293図 新宅山遺跡第1号住居址実測図

は、住居址床面も一部分がすでに風化流失しているなど、平均して現地表下約20cm～30cmに床面を置き、丘陵表土層の風化土によって埋没しているが、現存部床面の保存状態はおむね良好で、その大要を知ることができた。

本住居址の規模は、現在掘り込み壁面の上端がわかる現存地山生き土上面で510cm×492cm、床面長487cm×468cm、床面積22.8m<sup>2</sup>、長軸中心線方位は尾根小支脈走向にほぼ直交する北64度東を示す。壁高は最もよく遺存する地形の高い南壁部では現存38cmを測るが、地形の低くなる北側になるにつれて漸次浅くなり、北壁部では床面の一部も含めてすでに風化流失した形状を呈している。しかし現存部の保存状態は比較的良好で、掘り込み壁面の角度も垂直に近く、床面はほぼ水平な面を保っている。

本住居址は、火災に遭って焼け落ちたらしく、掘り込み壁面内から床面全体にかけて、炭化木材と灰層で覆われていた。これらの炭化木材や灰層を取り除いた床面には、柱穴痕7本のほか、壁溝、中央ピット状遺構、焼土面などの付帯施設が比較的よく遺存し、そのほか東壁に接して作業台を想起させる形状の扁平な花崗岩割り石1個をはじめ、細形管玉1点、サヌカイト製打製石鐵9本、かなりの量のサヌカイト屑碎片および若干の弥生式土器片を発見した。

柱穴痕は計7本分を検出したが、基本的には四隅各1本と、中央柱2本の6本柱で構成される屋根構造と推定される。四隅の柱穴はいずれも径30cm～35cm、深さ54cm～71cmではば垂直に整然と掘り込まれているが、各柱穴中心間の距離は、AB間275cm、BD間285cm、AC間305cm、CD間300cmとかなりのばらつきをみせる。中央柱は本住居址長軸中心線上のほぼ中央部に、柱穴中心間距離110cmの間隔で位置するが、ともに径20cm～26cm、深さ37cm～53cmと、まわりの4本柱とくらべて規模が小さい。また今1本の柱穴は東壁近くの、長軸中心線からやや北寄りに位置するが、径10cm、深さ17cmと小さく、柱穴としても補助的な機能をもつものと考えられる。

壁溝は、掘り込み壁面に沿って床面のまわりを、幅約10cm～15cm、平均の深さ約6cmのU字溝状に比較的整然と築り、中央ピット状遺構は、2本の中心柱の間に挟まれた形で位置し、やや不整規円形プランを呈している。径65cm×55cm、深さ42cmを測り、内部は住居址床面上と同様、炭化木材や灰の混った当丘陵風化土で埋没していた。焼土面はピット状遺構の南西部床面上に、約93cm×67cmの不定形な広がりを示して検出された。

なお本住居址外周部は精査を試みたが、すでに風化流失しているためか、屋根材の接地痕跡とか、屋外施設については何も認められなかった。また当丘陵小支脈上一帯は、用木第7号墳の発掘調査と併せて、現状保存となった用木第6号墳北側墳端部から本住居址へかけて、約60m×15mの範囲にわたって全面剥土調査したにもかかわらず、本住居址に伴う時代の遺構は何も検出されなかった。しかし、数は極めて少量であったが、本住居址よりも地形の高い用木第6・7号墳周辺部にかけて、磨製太形蛤刃石斧1本をはじめ、若干の弥生式土器片を遊離発見したことから、あるいは本住居址のほかにも、現状ではすでに風化消滅または用木第6・7号墳の築造等によって、消滅した住居址等の遺構が存在していた可能性も充分考えられるのである。

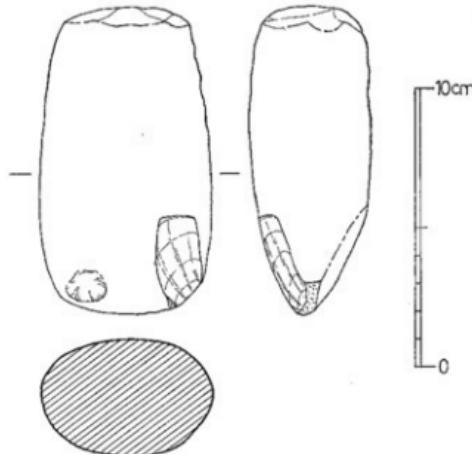


第294図 新宅山遺跡第1号住居址出土の石鎚・菅玉実測図

第1号住居址内出土のサヌカイト製打製石鎚9本、細形菅玉1本と若干の弥生式土器片、および用木第7号墳周辺部遺出土の磨製太形始刃石斧1本と若干の弥生式土器片である。遺物の出土量も少なく、土器片に年代差もみられないで、ここでは一括して取り扱うこととする。なお住居址用材と推察される炭化木材については、当東高月遺跡群出土の他遺跡例と併せて、本発掘調査概報第5集に稿を改めて報告するので、ここでの記述は省略する。

石鎚9本ともサヌカイト製打製石鎚である。基部の形状を厳密に分類すると平基式3、凹基式3、凸基式3に分けられるが、いずれも間凸はさほどなく、基本的には二等辺三角形状の平基式といってよいほどである。いずれも左右の側縁部がやや外彎したつくりで、平部に大削離面を残し、まわりを細かい敲打の繰り返しによって整形している。長さ2.1cm～3.85cm、基部幅1.3cm～2.3cm、器高0.2cm～0.5cm、重さ0.6g～3.2gの範囲を示し、比較的小さく薄手の同種の機能を有する石鎚と思われる。なお木住居址の床面上にはかなりの量のサヌカイト小断片が散っていて先の用木山遺跡例の場合と同じく、本住居址内において、サヌカイト製打製石器の製作または再生加工を行っていることを物語っていた。

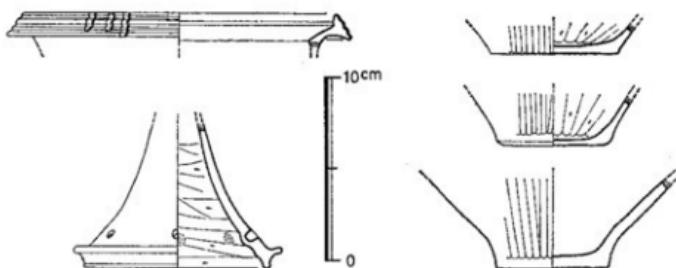
菅玉は住居址中央付近の床面密着出土の碧玉製細形1点である。本住居址直上に複合する石積み遺構に滑石製有孔円板1、勾玉2、菅玉1を伴出し、それとの比高も約20cmであるため、あるいはその石積み遺構に伴う可能性もあるが、床面に密着出土した関係上、一応実測図示しておく。色調は青白色を呈し、長さ1.2cm、径0.25cm、縦とおし孔径0.1cmを測る。全体に純い光沢を有し、両小口部および紐とおし孔



第295図 第1号住居址周辺出土の始刃石斧実測図

縁部は磨耗  
痕が顕著で  
ある。

太形蛤刃  
石斧は、用  
木第6号墳  
東墳外丘陵  
斜面からの  
遊離出土で  
ある。折損



第296図 新宅山遺跡第1号住居址および周辺部出土の土器片実測図

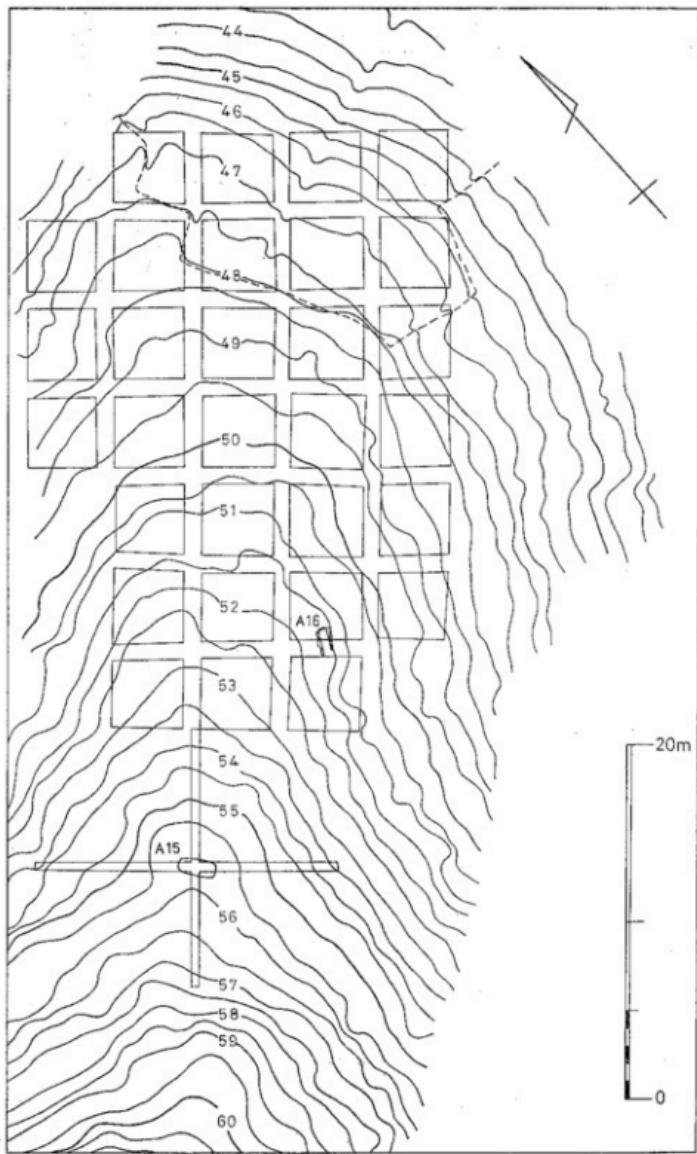
した刃部片であるが、砂岩製でよく研磨されている。現存長7.9cm、幅6.5cm、器厚3.7cmを測り、太形蛤刃石斧としてはやや扁平なつくりである。刃部は両面から両刃状に丸味をもって砥ぎだされ、大きく外彫しているが、使用によると思われる擦痕と打痕を顕著に残す。刃部に近い両側面部には弱い稜線をもっている。

弥生式土器片は全体で約20片を検出したが、いずれも断片的な小破片で、器表の磨滅も著しくて、実測図示できるのは5点のみである。(1)菱形土器口縁部はくの字形に外反した端部を大きく上下に拡張させ、端面に3条の回線文を練らせたのち、単位はよくわからないが、少くとも3本以上で組となる棒状浮文を回線文の上に貼りつけている。(2)高環形土器脚部は、脚裾端部を拡張して、端面外表を指頭圧なにより凹面状とし、脚裾部に小円孔を練らすが、円孔はいずれも内面までは貫通せず、内腹部が押されて凸レンズ状にふくらんでいる。脚部現存部外面はへら磨き、同内面は横方向へら削り調整が施されている。(3)～(5)の壺形土器または菱形土器底部片はいずれも平底である。底面外表はなで、底部外表は縱方向へら磨き、同内面はへら削り調整が施されている。以上各土器片の特徴を当地域の編年観からみると、いずれも弥生時代中期終末に比定されるものである。

## 2. ピット (図297～299、図版126)

用木第6号墳の立地部を丘陵尾根尖端肩部として、北東の谷水田をY字状に2分する形で張りだした尾根小支脈は、裾部が崖状の急斜面となっているものの、小規模なテラス状の緩斜面を形成している。この尾根末端支脈上に、用木第6号墳に連続立地する用木第15号墳(A15)、同第16号墳(A16)の2基を発掘調査したが、その際断片的な小破片ながら弥生式土器片数点を発見し、関連遺構確認のため、当該丘陵上に図示したごとく4m×4mグリッドを30区画設営して剝土調査を実施した。

その結果、当該丘陵はその後の風化流失も著しいうえに、端部に近い北東半はすでに開墾されて果樹園となり、苗木移植の深掘り穴などもあって、遺構の遺存度はあまり良好とはいえないが、図示したように稜線部から北西半にかけての尾根上約30m×15mの範囲に、ピット状遺構6遺構を発見した。地形の高い側の南西から順に第1～6ピットとして、順次その概況を記すことにする。なお第298図の遺構配置図中に、遺構番号を付してない方形状のピットは、果樹園耕作者が掘ったも



第297図 新宅山遺跡ピット群所在地調査前地形図

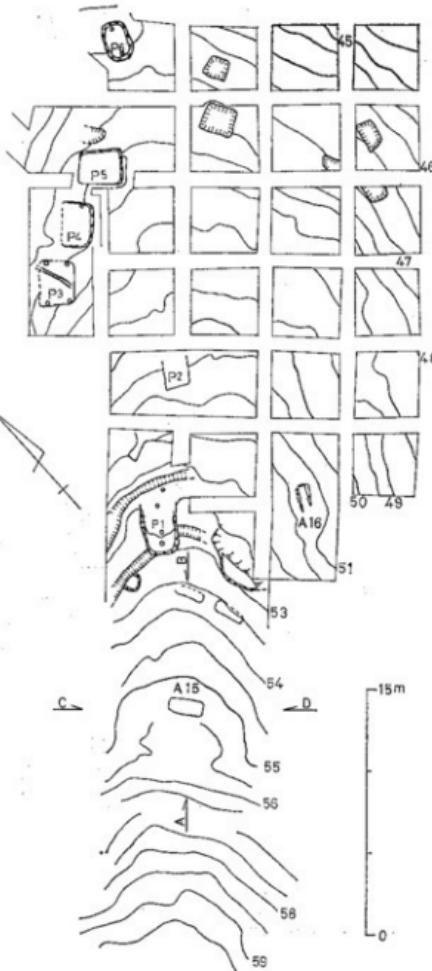
のであることを付記しておく。

第1ピットは、用木第15号墳の北東約10m、標高約53mの尾根稜線上に位置する、隅丸長方形ピット状遺構である。丘陵表土層の風化流失が著しくて遺構面も浅くなり、地形の低い北東部では床面も含めてすでに消滅していて、全貌は明確ではないがほぼその大要を知ることができた。

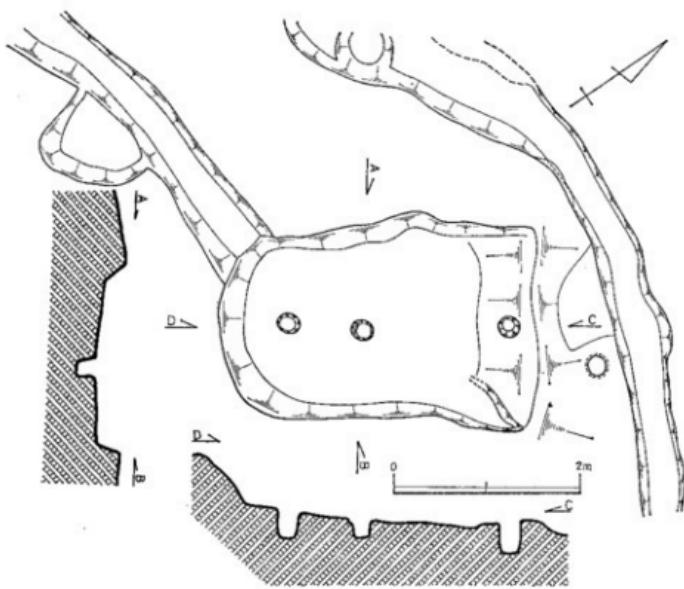
本遺構は長軸中心線を尾根走向に沿って北35度東において掘り込まれているが、現状で掘り込み上端のわかる現存地山生き土上面での現存長320cm、同幅207cm、現存床面長310cm、同幅172cm、掘り込みの深さは最もよく遺存する地形の高い側の南西小口部で35cmを測るが、北東部になるにつれて漸次低まり消滅している。床面は地形の低い北東部に全体が下傾を示し、両小口部での比高約20cmを測る。横断面はカーブの緩い円弧状を呈し、中央がやや凹んだ形となっている。床面長軸中心線上に3本の柱穴が直列状に並び、さらにその北東部約1mのややずれた位置に、もう1本の柱穴が検出された。本遺構長軸中心線部に数本の棟柱を直列状に立てた屋根構造が想起されるものの、その詳細は明らかでない。その他壁帶溝などの付帯施設とか伴出遺物は何も検出されなかった。

なお本遺構と一部切り合う形状で、等高線走向に沿って円弧状に掘り込まれた

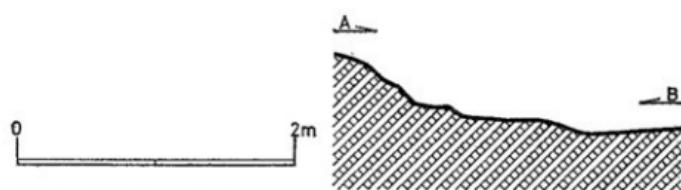
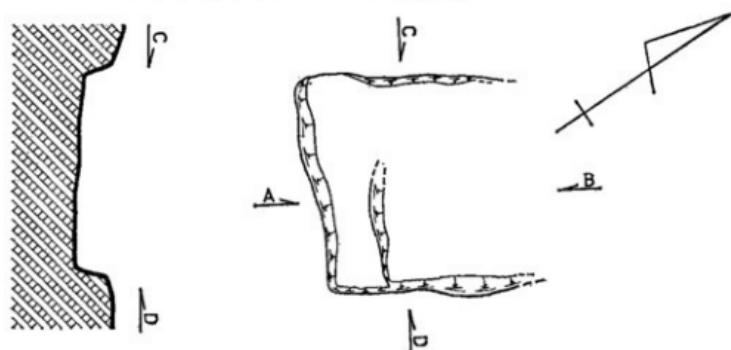
現存上端幅45cm~70cm、深さ12cm~18cm、横断面形がカーブの緩い円弧状を呈する2本の溝遺構が、約3mの間隔で平行して存在するが、用木第15号墳等との関係もあって、本遺構との直接的なかかわりは明らかにできなかった。また本遺構の周辺部には、本遺構のほかにも第298図に示したように、丘陵地山生き土面上に、ピット状遺構の存在を想起させる形状の掘り込み痕跡を3~4か所検出したが、いずれも遺存度が低く確定性に乏しいため、ここに付記しておくことにとどめたい。



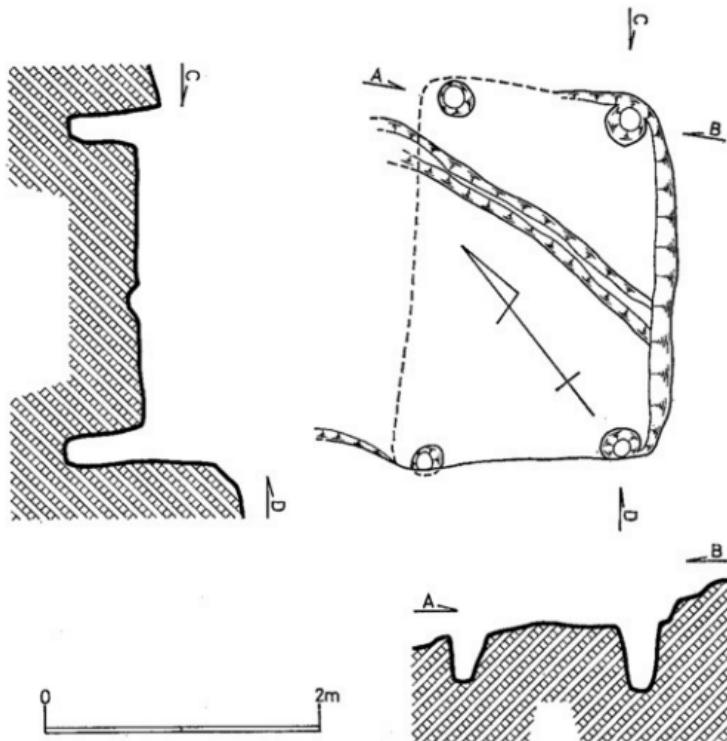
第298図 新宅山遺跡ピット群出土状況図



第299図 新宅山遺跡第1ピット実測図



第300図 新宅山遺跡第2ピット実測図



第301図 新宅山遺跡第3ピット実測図

### 3. 第2ピット(図300、図版128)

第1ピットの北東約10m, 標高約50.5mの稜線上に位置する長方形の素掘りピット状遺構である。長軸中心線を等高線走向にはほぼ直交する北32度東に向けて掘り込まれているが、現状では地形の低い北東半部をすでに床面も含めて流失して浅くなり、僅かにその痕跡をとどめている程度の遺存である。

現存する掘り込み上端幅155cm, 同床面幅140cm, 床面長は現存部で約160cmを測るもの、もとは約180cm程度の規模と推定される。掘り込みの深さは最もよく遺存する地形の高い南西小口部で約25cmを測るが、2段掘り込みの形状を示し、床面も地形の低い北東へかなりの下傾をみせるため定かではない。床面には柱穴痕をはじめ何らの付帯施設や伴出遺物も認められず、原形も、やや不整な長方形プランを呈する素掘りの土壇であったと考えられる。使用目的および時期等について明瞭でない。

#### 4. 第3ピット（図301、図版127）

尾根稜線から北西側斜面に臨もうとする肩部の標高約48mの等高線に沿って、ほぼ同規模の隅丸長方形の第3～第5ピットの3遺構が並列状に連なって隣接立地している。本遺構はその西端に位置し、地形の低い側の北西端ではすでに床面も含めて風化流失しているものの、床面の約80%程度を遺存している。

本遺構は等高線走行に沿う北40度東に長辺を置き、現存掘り込み上端長220cm、床面長213cm、現存床面長177cm、推定復元床面幅約185cm、深さは最もよく遺存する南隅で現在52cmを測るが、地形の低い北西部になるにつれて漸次浅くなり、北西端部では床面も含めて消滅している。遺構内は当丘陵風化土で埋没し、伴出遺物は認められない。現存する壁面はほぼ垂直に近く比較的整然と掘り込まれ、特に南西壁ではやや内傾を示している。床面は現存する限りではほぼ水平な面を保ち、四隅部にそれぞれ壁面に接して各1本、計4本分の柱穴痕と、南東壁部のほぼ中央付近から北隅部にかけて、床面を斜方向に横切る形の幅約20cm、深さ約10cmの溝遺構1条が検出された。各柱穴とともにほぼ垂直に掘り込まれているが、柱穴の中心点を結ぶ平面プランは合形状を呈する。本遺構の規模や形状、さらに柱穴の配置状況などから推察して、4本柱で構成された屋根をもつ、食糧等の貯蔵庫的な性格を有する遺構と考えられる。

#### 5. 第4ピット（図302、図版127）

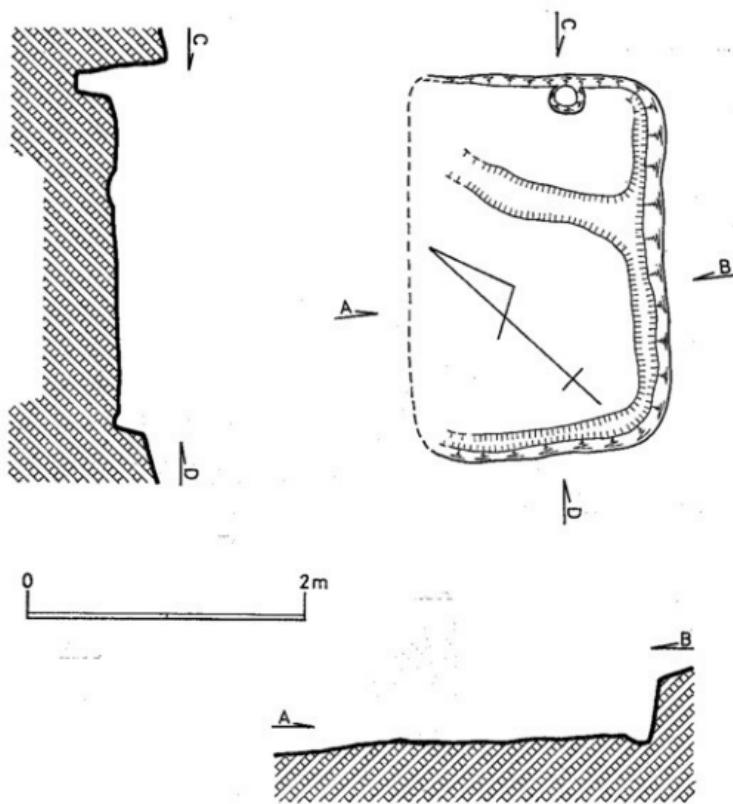
第3ピットのすぐ北東部に隣接して位置する隅丸長方形のピット状遺構である。第3ピットと同様、すでに地形の低い側の北西部は床面も含めて風化流失していて、現状では原形の約50%程度の遺存と思われる。

等高線走向に沿う北46度東に一辺をおき、現存掘り込み上端幅271cm、床面幅251cm、現存床面長170cm、深さは最もよく遺存する地形の高い側の南東壁面で50cmを測る。推定復元床面長については、第3ピットは等高線に沿って長辺をおき、北東に隣接する第3ピットは逆に等高線に直交して長辺をおいている関係もあって明らかでない。遺構内は当丘陵風化土で埋没し伴出遺物は何も認められない。現存部壁面はほぼ垂直に近い角度で掘り込まれ、床面も現存する限りではほぼ水平な面を保つ。

現存部床面には、南東壁から南西壁にかけて壁面に沿う健形の溝遺構と、南東部溝遺構から北隅部に向けて、床面を斜方向に横切る浅い溝遺構1条、それに北東壁に接する柱穴痕1本分を検出した。壁帶溝は床面幅10cm～17cm、深さ平均4cm、床面を横切る溝は幅22cm～25cm、深さ平均4cmで、ともに横断面は上向きの円弧状を呈し、柱穴痕は床面部径24cm、深さ24cmを測る。柱穴痕1本のみの検出では、本遺構に伴う柱穴とは考えられるものの、屋根の存在や構造については明らかでない。

#### 6. 第5ピット（図303、図版127）

第4ピットの北東部に隣接する隅丸長方形のピット状遺構である。丘陵表土層の風化流失に伴い、遺構面も浅くなっているものの、床面はほぼその全形を遺存している。等高線走向に沿って



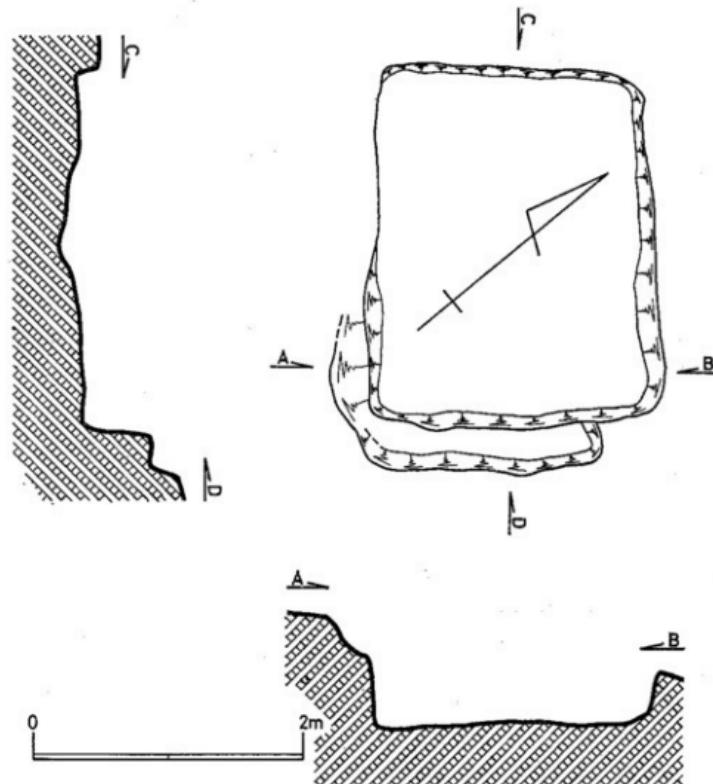
第302図 新宅山遺跡第4ピット実測図

一边を置くが、長軸中心線方位は等高線走向に直交する北50度西を示している。地形の高い側の南東部の掘り込みが2段掘り込み状を呈しているが、これはほぼ同一立地で前後2回にわたって設けられた、床面比高48cmの2遺構の複合と考えられる。

現存掘り込み上端長268cm、同幅217cm、床面長249cm、同幅195cm、掘り込みの深さは最もよく遺存する北東隅部壁面で72cm、地形の低い北西小口壁面で16cmを測る。掘り込みの角度は現存する限りではほぼ垂直に近く、床面もほぼ水平な面を保つが、一部で深さ約15cm程度のくぼみをみせるところがある。床面には何らの付帯施設も認められず、また遺構内部は当丘陵風化土で埋没していたが、伴出遺物は何も発見されなかった。

#### 7. 第5ピット(図304、図版127)

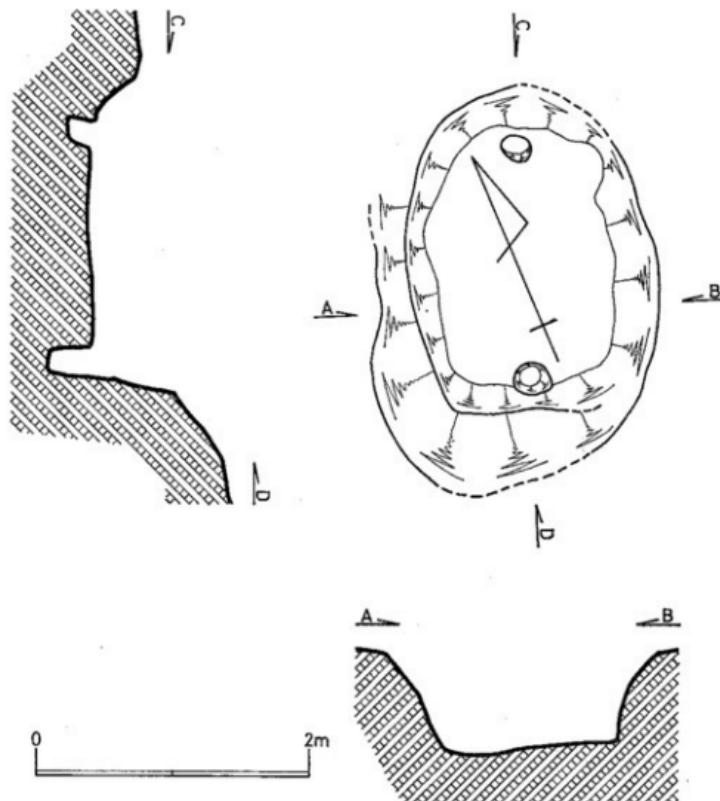
第5ピットの北東約8mの、標高約46.5mの尾根稜線部に位置する楕円形プランの小形ピット状



第303図 新宅山遺跡第5ピット実測図

遺構である。等高線走向にはほぼ直交する北20度東に長軸中心線をおいて掘り込まれている。丘陵表土層の風化流失および畠地耕作によってかなり浅くなり、遺構内も当丘陵風化土によって埋没しているが、壁面下半部および床面はほぼ原況を保っていた。

現存掘り込み上端長290cm、同幅207cm、床面長195cm、同幅132cm、掘り込みの深さは最もよく遺存する地形の高い側の南西小口部で61cm、地形の低い側の北東小口部では33cmを測る。掘り込み壁面はやや乱れをみせる法面状に外傾し、床面はほぼ水平な面をみせるものの、上端部が楕円形プランを示すにくらべて、隅丸長方形に近いプランを示す。床面の長軸中心線上の両小口部に掘り込み壁に接して各1本分の柱穴痕が検出され、もとこの遺構は長軸中心線上の2本柱によって構成された屋根を有していたことを示している。遺構内に伴出遺物は何も認められず、時期を明らかにできないが、その形状および規模から推察して、貯蔵穴と考えられる。



第304図 新宅山遺跡第6ピット実測図

#### 第4節 まとめ

本遺跡は、丘陵群内の谷水田に向けて張りだした丘陵尾根支脈の裾部に近い、谷水田から見れば比高約15m～30mの小規模で小高い立地を占める、尾根支脈上に所在する小生活址である。小支谷を挟んで水平距離約80mを隔てた平行する小尾根支脈上に分れて立地し、一方の尾根上に隅丸方形の竪穴式住居址1棟、他方の尾根上に貯蔵穴状のピット状遺構6基を発見したが、地形的にみてこの両者は同一遺跡と推察される。

これらの各遺構の年代については、竪穴式住居址は土器片および石鐵の伴出遺物の特徴から、弥生時代中期終末期と比定できるものの、ピット状遺構については直接的な伴出遺物が発見されないため明確でない。当該地には用木古墳群第15・16号墳が一部で複合して立地し、眼下の小支谷部には約10mの距離に近接して、平安時代から鎌倉時代にかけての古窯址が所在するなど、一応それら

の遺構との関連も考えられるが、周辺部に若干数ではあるけれども、竪穴式住居址出土と同形式の弥生式土器片が散見され、また遺構の形状や規模を、近在のさくら山遺跡や愛宕山遺跡検出の類例と対比検討すると、竪穴式住居址とはほぼ同時期の所産と考えた方がより妥当と思われる。

竪穴式住居址は1棟のみの検出であり、集落としての規模とか性格について知る由もないが、計9本のサヌカイト製打製石器とともに、その屑碎片が床面上に多数散っていて、先の用木山遺跡例とともに、本住居址内においてサヌカイトを原材料とする打製石器の製作あるいは再生加工したことと示し注目された。

ピット状遺構は、細部の構造面については差異を示すものの、一辺または長径が2m前後の規模の、隅丸長方形または楕円形プランを示し、長軸中心線上に棟柱とか、四隅各1本の4本柱などで構成される屋根をもつものが多いなど、食糧等の貯蔵的な性格を示すものと考えられる。

## 中 池 遺 跡

### 1. 序 説

中池遺跡（略記号Y4）は、岡山県赤磐郡山陽町河本字野山65番地の、東高月丘陵群内に形成された小支谷底に所在する、弥生式土器片の散布地である。

岡山県営山陽新住宅市街地開発事業の施工に先立つ、用地内の埋蔵文化財包蔵地分布調査の際に、当該小支谷の谷口にあたる中池と呼ばれる農業用灌漑貯水池の波打際に、弥生式土器片を含む包含層と、さらに上方の谷部開墾痕表面に若干の同土器片の散布が検出され、集落遺跡の存在する可能性が強いとして確認調査の対象となった地区である。本遺跡の調査は当初岡山県教育委員会が直當で担当することとなり、昭和46年度に中池波打際に露呈していた包含層部分の予備調査を実施したが、その後都合で山陽町教育委員会が肩替りして引き継いだのである。山陽町教育委員会は、岡山県と山陽町との間に昭和47年4月1日付で締結された、山陽団地埋蔵文化財発掘調査第9次委託契約に先行して、昭和47年3月24日から同年4月12日までをかけて、当該地の遺跡確認調査を実施した。

調査の結果、後章で述べるごとく当該地内には遺構は何も検出されず、また伴出遺物も断片的で極めて少量であるため、当該地を集落遺跡等として、現状保存処置遺跡とか発掘対象遺跡の対象にならないと判断した。したがって、当該地は確認調査終了後の昭和48年1月23日、住宅団地造成工事により中池とともに埋没され、現在は住宅団地内に新設された、山陽西小学校用地となっている。

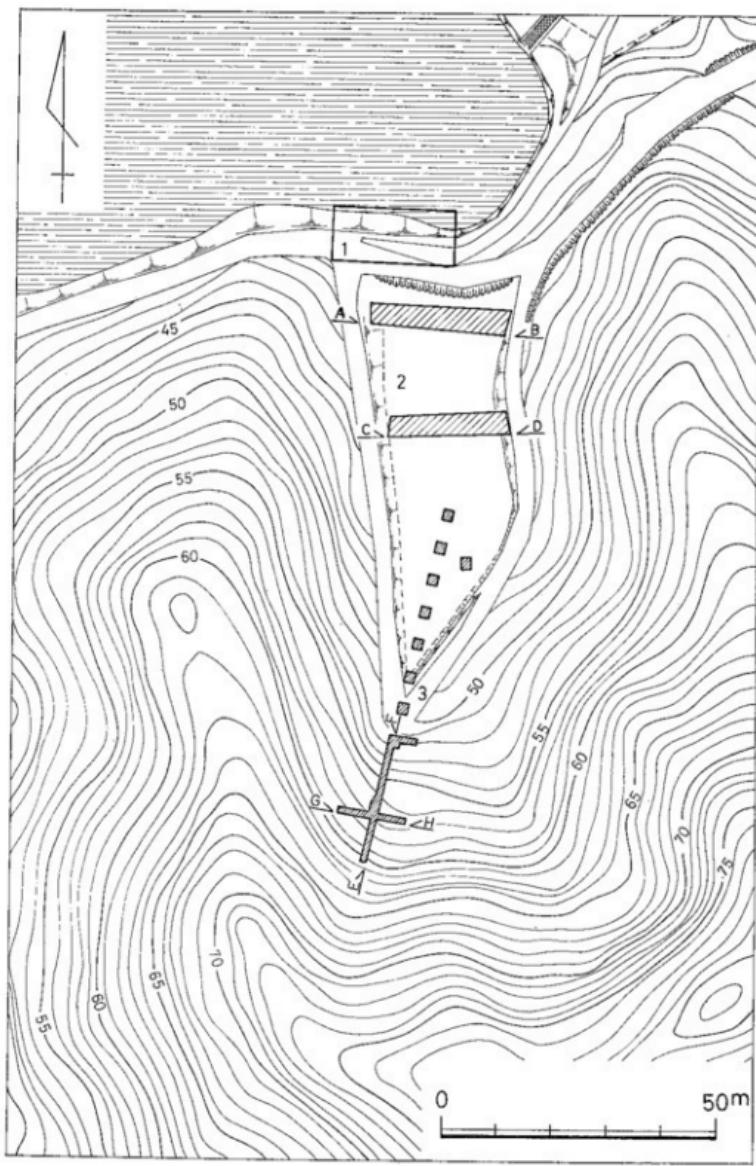
なお本調査報告に、岡山県教育委員会が実施した予備調査の記録を掲載すべく、資料提供を依頼していたが、手違い等もあって間に合わなかった。お詫びするとともに御了承願いたい。

### 2. 立地と調査概要

東高月丘陵群のほぼ中央部にあって、主丘ともいるべき標高92mと最高位を占める用木山から、



第305図 中池遺跡周辺地形図



第306図 中池遺跡試掘区設営図

北東に向けて分岐する丘陵尾根主脈は、門前池および中池を含む谷水田の南縁に沿って、途中で北に向けて下降する尾根小支脈3条を分出しながら、なだらかな起伏をみせて下降しておびている。この丘陵尾根主脈および分出する尾根小支脈稜線上には、丘陵頂に立地する古墳を第1号墳として、用木古墳群16基が築造されている。本遺跡はこの用木山から北東にのびる丘陵尾根主脈から派生する3条の尾根小支脈のうち、西より2条の尾根小支脈間に形成された北面した小文谷に所在する。

この用木山丘陵尾根主脈および尾根小支脈とも、稜線部は比較的なだらかな起伏をみせて下降しているものの、稜線の幅員は極めて狭い馬の背尾根で、その側斜面は概して急傾斜面となっている。したがって本遺跡の位置する支谷部も谷幅が狭く、まわりの側斜面も急勾配のV字谷となり、谷口幅約40m、奥行長約80mの小規模な谷である。そして谷頭稜線にあたる南の丘陵尾根主脈上には用木第3・4号墳、西の尾根小支脈稜線上には用木第8・9・10号墳、東の尾根小支脈稜線上には用木第11号墳が、本遺跡のまわりを取り囲むように立地しているのである(図289)。

当該地は、今次住宅団地開発事業が計画立案された時点では、谷部および谷口に近い東斜面部は開墾されて果樹園(桃畠)となっていたほかは、自生の松林であった。また谷口部は合流する谷水田部を塞ぎとめた中池と呼ばれる農業灌漑池に面し、池の外縁に沿って東西に敷設された幅2mの林道が設けられていた。当初の分布調査およびその後の表面観察の結果、谷口にあたる中池の波打ち際に長さ約10m、厚さ約0.6m程度の弥生式土器片を僅かに含む、暗灰黒色の有機土層の露頭が検出され、さらに谷部桃畠の表面採集によって若干数ではあるが、弥生式土器片が散見されることから、遺構確認調査の対象となったのである。(図305・306、図版121)。

遺構確認調査は図306にも示したように3区に分けて実施した。第1区は先に岡山県教育委員会が予備調査を実施した、中池波打ち際にあたる北谷口部に露呈する有機土層の全面剥土調査。第2区の谷部果樹園内は、谷筋に直交する東西方向に15mの間隔をおいて、20m×4m、22m×4mの2本の試掘溝を設営、第3区の谷頭部は、谷奥部の墳丘状隆起部に24m×1mと13m×1mの十文字試掘溝と、谷筋に沿った谷口に向けて3m間隔で、2m×2mのグリット8区を設営して、発掘調査を実施した(図版122・123)。

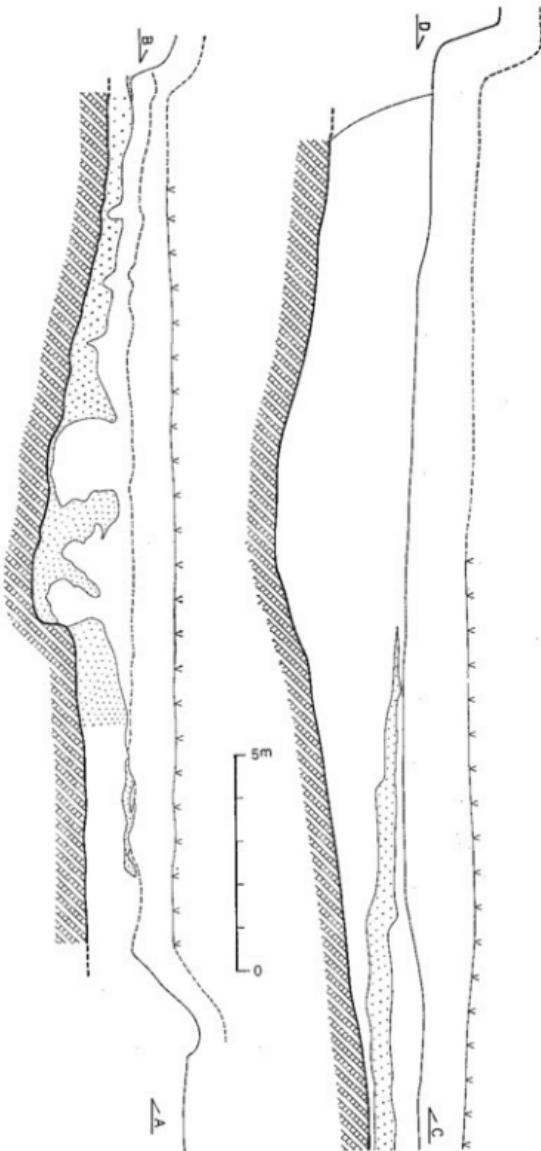
### 3. 調査結果

各試掘区ごとの調査結果は、次のとおりである。

第1区の北谷口の有機土層は、中池内の波打ち際の崖面状急斜面に、長さ約10mにわたり現地表下約1.2m～1.5mの埋積土の下に、最も厚い中央部で0.6m、両端部になるにつれて薄くなる凸レンズ状に堆積し、その下層は当該地の地山生き土層に接していた。この有機土層の広がりは、現状での奥行約3.2mで消滅し、平面プランも不定形で、ブロック状の二次埋積の形状を呈している(図版132)。有機土層を除去した後の現存地山生き土上面は、自然地形に近い傾斜面を示し、柱穴痕とか溝痕などの遺構と思われるものは何も認められず、また私たちが調査した限りでは、この有機土内から土器片などの遺物類は何も発見されなかった。したがって、この有機土は上方斜面からの流水埋積と判断され、たとえ生活址等の遺跡が存在していたとしても、すでに風化あるいは流水等の影響により消滅しているものと考えられた。

第2区の果樹園内のトレンチ  
 調査の結果は、当該地が風化侵蝕されやすい花崗岩地質で形成された丘陵内のV字谷にあたるため、奥行が深い割には風化流土による埋積が深く、最も深い第2トレンチ中央部では現地表下約5.5mも埋没していた。この埋積土をトレンチ断面で観察すると、ほとんどが当丘陵風化土で、きめの粗密等による水位の綺目となった堆積層序をみせるものの、谷筋では流水により押し切られたと推定される谷溝状の乱れなどのほかには、埋積土中や底部の現存地山生き土上面に、生活面としての痕跡とか形状は何も認められなかつた。また出土遺物もトレンチ内埋土中から避難発見した。約60片の断片的な弥生式土器片を検出したに過ぎなかつた。当該地の南上方の尾根稜線に近い用木山丘陵頂一帯には、先に報告した弥生時代の集落址・用木山遺跡が所在し、それに伴う土器片等の転落流入も充分考えられる地形でもあり、第2地区とした当果樹園部を集落遺跡として認定することは困難であると判断した（図版124）。

第3区とした谷頭部は、谷奥部に径約10m×12m、高さ約1.2mの墳丘状の陥没部が存在し、そのほかは谷幅も狭く谷筋の傾斜もかなり急であるため、

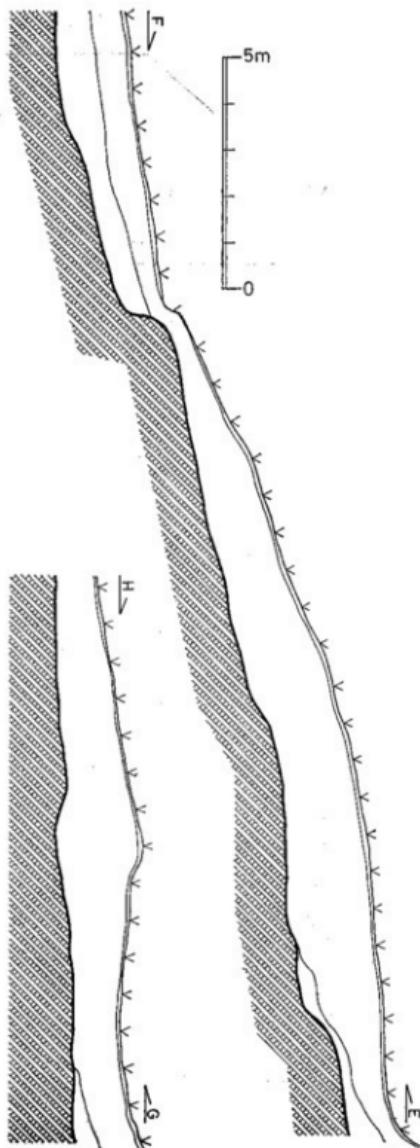


第307図 中池遺跡第2区トレンチ断面実測図

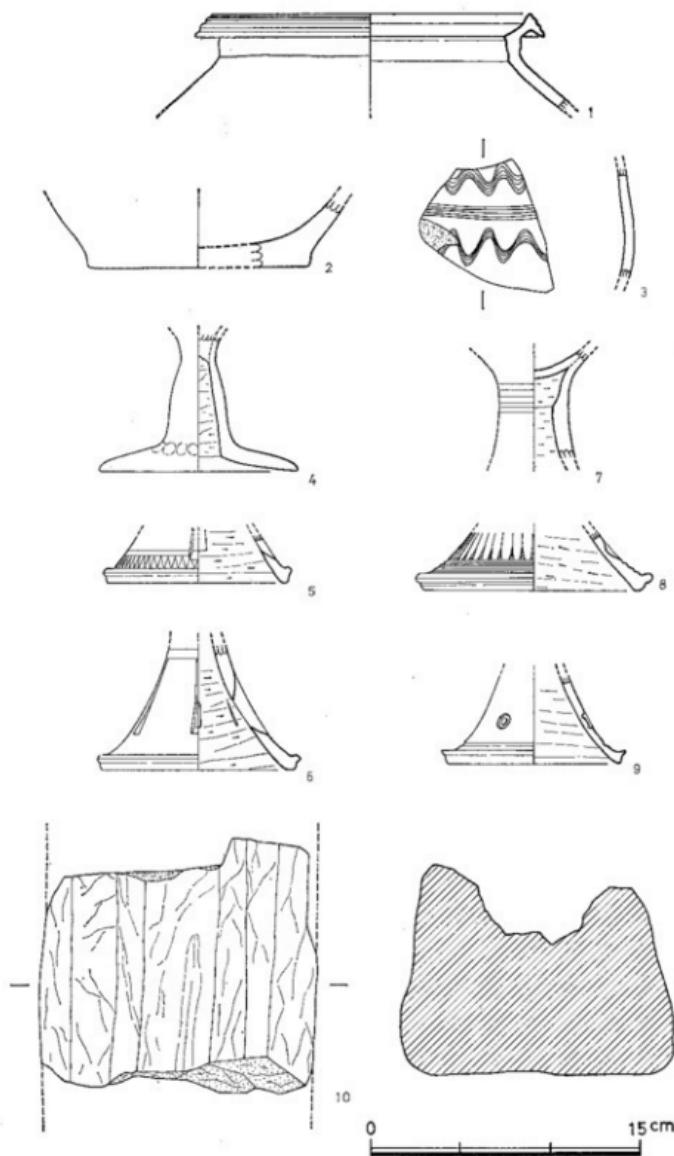
隆起部には幅1mの十文字トレンチと、谷筋部に3m間隔で2m×2mグリット8区画を設けて試掘調査を実施した。その結果、古墳状の隆起部は単なる砂溜り状の流土堆積により自然に生じたことがわかり、南直上の尾根稜線に立地する用木第3号墳の後方部北半の墳丘が、崖崩れ状に崩落しているとの併せて考えて、それらに伴う流土埋積の可能性も強い。また2m×2mグリットも、各グリットとも現表土下約0.9m～1.6mで現存地山生き土上面に達し、当丘陵風化土により自然埋積されていて、埋積土層序内および現存地山生き土上面とも、生活面などの痕跡は何も認められず、埋積土中に遺留する弥生式土器片数片を発見した程度である(図版122)。

今次の試掘調査によって発見した遺物は、弥生式土器片約60片と、時期不明の楕円形土塊1片である(図309、図版133)。

弥生式土器片は、いずれも断片的な小破片となっているうえに、器表の磨耗しているものが多く、実測図示できるものが少なかった。(1)の壺形土器口縁部片は、くの字形に外反した口縁端面を上下に拡張させ、端面に3条の凹線文が継ぎ、(3)の壺形土器肩部外表面には、5条1単位の横状施文具による横方向沈線文の上下に、同施文具による波状文を繰らせている。(4～9)の高環形土器脚部片は、(4)だけがやや後出の形態を示すものの、そのほかは脚部端部を拡張して、端面は指頭圧などでによる凹面状を呈している。(5)は脚部三角形透かしの下段に縦刻による鋸歯文を継らせているが、三角形透かしは(6)とともに内面まで貫通しているにくらべ、(8)の三角形透かしと(9)の小円孔はともに内面まで貫孔されていない。(8)は据部に4条、(9)は同1条の凹線文が継る。検出した土器片は、いずれも先に述



第308図 中池遺跡第3区トレンチ断面実測図



第309図 中池遺跡出土の土器片実測図

べた用木山遺跡出土の用木山Ⅱ類および同Ⅲ類に類似し、弥生時代中期後半から中期終末の時期に比定できるものである。

仰の桶状の焼土塊は第2区第1トレンチ内の、現地表に近い埋積土中からの遺物出土である。図示したとおり、底面幅15cm、高さ11.8cm、上面幅11.6cm、現存長13.5cmの横断面が台形状を呈する焼土塊で、上面縦方向に不整形ではあるが幅約5.5cm、深さ約4cmの溝状部を有している。現状では内外面とも二次的な火力を受けて赤褐色を呈し、胎上には3mm～5mmの大砂粒とラスサを含んでいる。用途および時期については明らかでないが、トレンチ内出土遺物であるため、一応ここに付記した次第である。

以上3地区の試掘調査の結果から、当該池遺跡として登記した地域は、堅穴式住居址等の遺構を伴う集落址とか生活址としての遺跡とは認定できなかった。しかしそれに数は少ないながらも弥生式土器片の散布が見られ、立地的にもそうした遺跡が存在してもおかしくない地形でもあるため、弥生式土器片散布地として登記し、当該地が埋土造成地でもあるところから、住宅団地造成工事の施行を了承することとした。

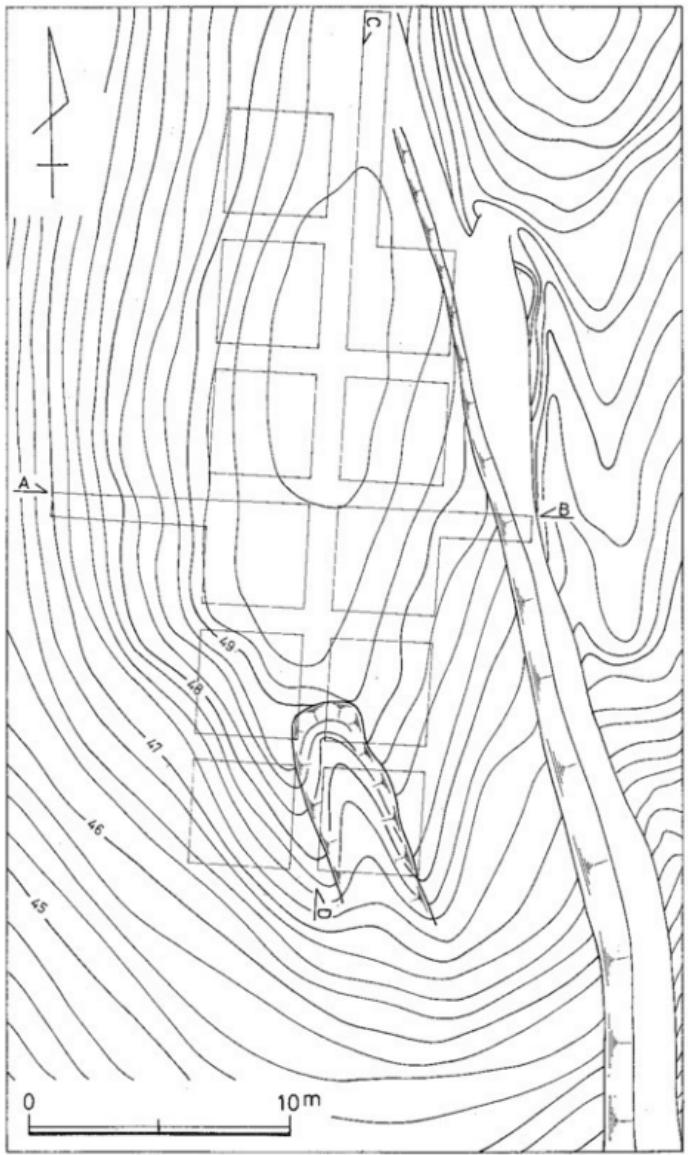
## 大久保遺跡

### 1. 序説

大久保遺跡（略記号Y6）は、岡山県赤磐郡山陽町河本字古大久保111番地の、東高月丘陵群内に形成された丘陵尾根支脈の、末端部に近い舌状部稜線上に所在する、弥生式土器片等の散布地である。

今次の岡山県営山陽新住宅市街地開発事業施行に先駆け、用地内の埋蔵文化財包蔵地分布調査の際に、用木山丘陵頂から南の岩田大池の所在する谷水田に向けて、緩やかに下降してのびる丘陵尾根支脈の末端に近い小規模な舌状台地上に、1辺の長さが約16m×24mの長方形プランで、高さ約2.5m程の墳丘状隆起部が検出された。この隆起部は地形の低い南側から盃掘溝状の掘り込み溝とともに、周辺部に細片となった土器片若干が散見され、方形台状墓または土壙墓遺跡の可能性があるとして、遺構確認調査の対象となった地域である。

本遺跡の発掘調査は、昭和46年10月1日付で岡山県と山陽町の間に締結された、山陽団地埋蔵文化財発掘調査第8次委託契約に基づき、山陽町教育委員会が昭和46年11月12日から同年12月12日までの1か月をかけて実施した。調査の結果、後章で述べるごとく当該地内においては、第1区から横穴式石室を内部主体とする岩田第7号墳の残骸1基を発見、併行して発掘調査を実施したほかには、当初予想した土壙墓とか集落の遺構は何も検出されなかった。若干の弥生式土器片と磨製蛤刃石斧1点を発見採取したことから、一応弥生式遺物散布地として登記をしたが、試掘調査終了後の昭和47年7月15日、住宅団地の造成工事によって、その基盤である丘陵もろとも削平され、今は行



第310図 大久保遺跡第1調査区地形および試掘区設営図

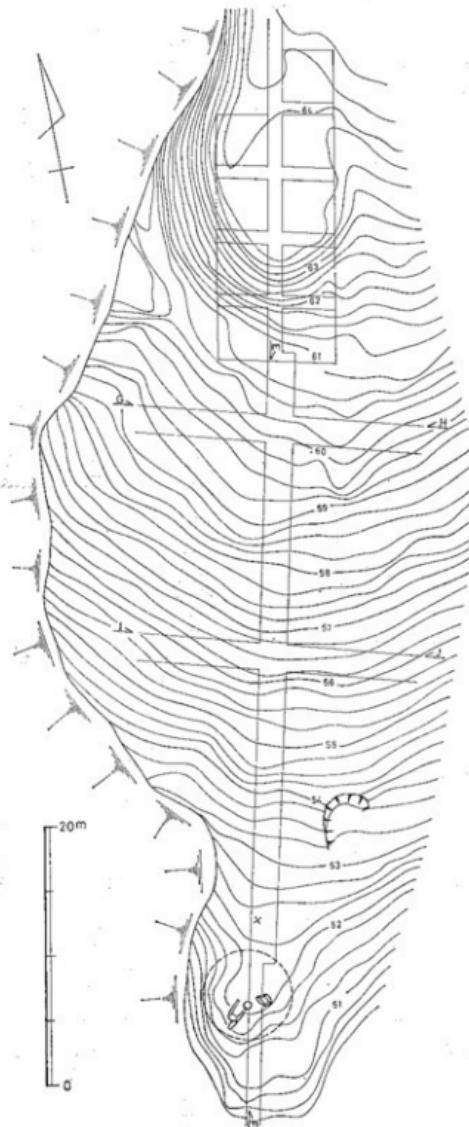
政区画も山陽団地3丁目と変更され  
て、昔日の面影は再び目にすること  
はできない。

なお当該地において新しく発見さ  
れ、併行調査した岩田古墳群第7号  
墳については、当丘陵群内所在の類  
似古墳を岩田古墳群として取りまと  
め、すでに本発掘調査概報第6集に  
稿を改めて報告しているので、ここ  
での記述は省略した。了承を乞うと  
ともに、第6集「岩田古墳群」を参  
照願いたい。

## 2. 立地と調査概要

東高月丘陵群のほぼ中央部に位置  
する用木山丘陵頂から、南の岩田大  
池が所在する谷水田部に向けて分出  
する丘陵尾根支脈は、途中で幾つか  
の平行する尾根小支脈を分岐しなが  
ら、緩やかな起伏をみせて細長い帯  
状に下降して伸びている。本道跡は  
こうした南下する丘陵尾根小支脈の  
一つの、末端部に近い尾根上に立地  
している。そこは稜線幅の狭い馬の  
背尾根ながら、緩やかに下降する舌  
状にのびる丘陵尾根上にあたり、標  
高約50m、眼下の谷水田との比高約  
23mとさして高くはないが、谷水田  
に面して張りだしているため、東か  
ら南にかけての眺望はかなり開けて  
いる。

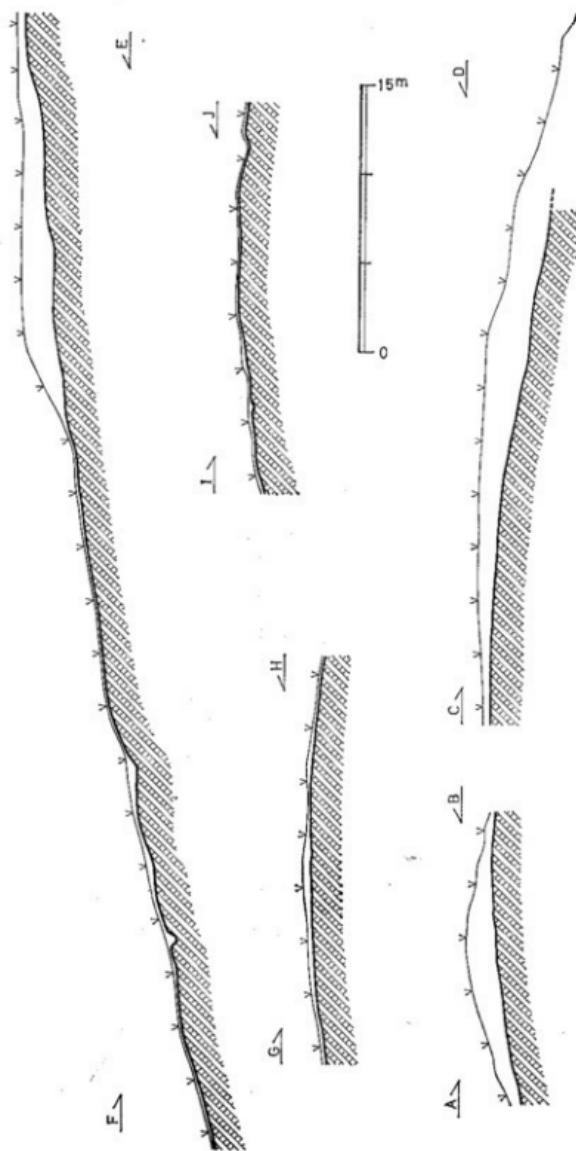
当初遺跡確認調査の対象地となっ  
ていた墳丘状の隆起部の位置する舌  
状部は、約20m×35mほどの規模で  
開墾された桃畑となり、そこから南  
の尾根末端部までの約70mは、同じ



第311図 大久保遺跡第2調査区地形および試掘区設営図

く開墾されてぶどう畑、地形の高くなる北側の丘陵尾根部は自生の松林であった。しかし私たちが発掘調査を実施する時点では、今次住宅団地造成工事によつて、調査予定地ぎりぎりまで南側から削平され、南側に所在していたぶどう畑はすでに消滅していた。またこの丘陵尾根支脈には、当該地の北約80mのところに、かって花崗岩を切りだした採石場址があり、崖状の大きく深い掘り込み跡があり、当該地付近がその二次加工場あるいは集石場となっていたらしく、尾根部に小テラス状の削平整地面址や搬出道路が設けられ、残存石材や碎石屑が散在していて、原地形はかなり乱されていた(図289、図版130)。

本遺跡の発掘調査は、当初墳丘状の隆起部のみを調査対象としていたが、その後当丘陵群内所在の



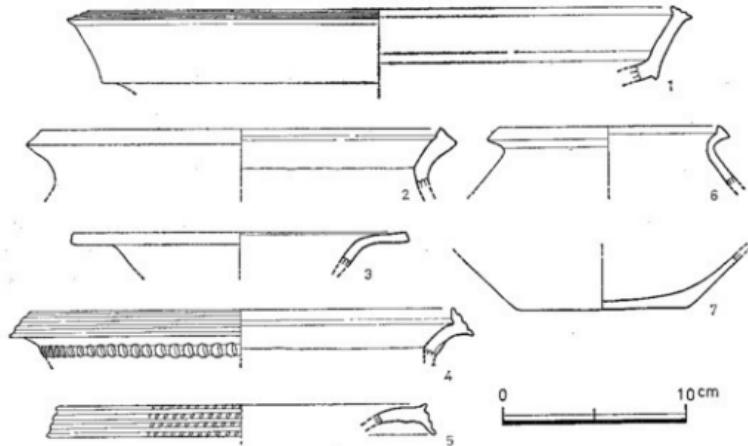
第312図 大久保遺跡各トレンチ断面実測図

周辺遺跡の発掘調査や、住宅団地造成工事の進行について、丘陵頂一帯の用木山遺跡をはじめ、西隣りの尾根支脈上に惣園遺跡、東隣りの尾根支脈上に東山遺跡など、近隣の丘陵尾根部に次々と弥生時代の集落址が発見され、本遺跡も調査範囲を拡大して、尾根小支脈全域について試掘調査を実施することとした。そして当初予定していた墳丘状隆起部を第1調査区、そこから北方の花崗岩採石場址までの約85mの尾根上を第2調査区として、第310・311図に示したように、試掘区を設営して調査した。

### 3. 調査結果

墳丘状の隆起を示す第1調査区は、第310図に示したように、隆起部の長軸中心線を基準として、後に十文字の墳丘断面が観察できるよう配慮した、 $4\text{m} \times 4\text{m}$ グリッドに1m幅の堤を残す試掘区を、縦2列計11区画設営して発掘調査を実施した。

調査の結果は、各グリッドとも墓壙などの遺構は何も発見されなかった。墳丘状の高まりは当丘陵風化土で最高部約2mの高さ堆積しているが、堆積土中にはかなりの量の花崗岩割り石が混在していて、後の採石作業に併行してか、それ以後に何らかの事由によって生じたものと考えられる。また各グリッドとも、下層の地山生き土上面にも遺構は何も認められず、埋土中に遊離した弥生式土器片若干を発見したのみである。当該地の上方丘陵上には用木山遺跡やさくら山遺跡が立地し、周辺部にも惣園遺跡、東山遺跡、岩田大池遺跡などが所在している関係から、この程度の土器片採集では、当該地を集落址とか墓地址とその性格を判定できない（図版131・132）。出土遺物については後の第2調査区出土品と併せて述べるとして、ここでは十文字トレンチ断面図を図示するにとどめたい（図312）。



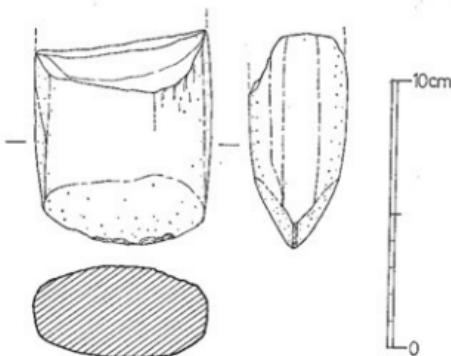
第313図 大久保遺跡出土の土器片実測図

第2調査区の南へ緩下降する尾根上は、すでに西半部を造成工事によりかなり削平されていたが、図示したように尾根走向に沿う稜線部に幅2m、長さ85mのトレンチ1本と、それに直交する長さ約20mのトレンチ2本、それに上方隆起部に4m×4mグリット9区を設営して発掘調査した。

その結果、上方隆起部では、第1調査区の場合と同様に花崗岩割り石を含む当丘陵風化土で、最高約1.7mの厚さで堆積していて、採石場のすぐ下に位置することから、それに伴う耕土または作業場等としての整地と推察された。そのほかの尾根稜線部は表土層の風化流失が著しく、現地表下約数cmで地山生き土面に達し、標高約52m地点に前述の岩田古墳群第7号墳が大破残骸となって発見されたほかは、集落址などとしての遺構は何も検出されず、古墳残骸に近い標高52.4mの表土層から磨製始刃石斧1点と、その周辺部から弥生式土器片約10片を遡離発見したのみである。

本遺跡の試掘調査に伴う出土遺物は、両調査区を併せて弥生式土器片約30片と、磨製始刃石斧1点である。土器片はいずれも断片的な小破片となり、器表の磨滅も著しくて、実測図示できるものは少ないが、当地域の縄年輪から弥生時代中期中葉から後期前半と推定される土器片で占められ、当丘陵群内所在の集落遺跡出土の土器片とはほぼ共通した特徴を示している。磨製始刃石斧は砂岩製の完形品である。長さ10.95cm、最大幅6.15cm、最大器厚4.30cmと太形始刃石斧としてはやや小形品である。全面よく研磨整形されているが、頭部に近い体側面に横方向の擦痕帶が認められる。刃部は両面からほぼ均等に砥ぎだされ、刃は外彎しているが、現状では敲打またはすりにより著しく磨滅して幅約0.5cmの面部をみせ、頭頂部は角部に稜をもち、梢円形状の平坦面を呈している。

以上の調査結果から、当該地は偶然発見され併行発掘調査を実施した岩田古墳群第7号墳のほかには、弥生式土器片若干と始刃石斧1点を遡離発見したのみで、それに伴う遺構は何も認められなかった。したがって、当該地を集落址とか墓地遺跡など具体的な性格を明確にすることはできず、岩田古墳群第7号墳および、弥生式土器片等散布地として登記して、本遺跡の発掘調査を終結し、関係機関で協議のうえ、住宅団地造成工事の施行を了承したのである。



第314図 大久保遺跡出土の始刃石斧実測図

---

岡山県當山陽新住宅市街地開発事業  
用地内埋蔵文化財発掘調査概報

第4集（本文編）

昭和52年2月20日発行

発行 山陽団地埋蔵文化財調査事務所  
岡山県赤磐郡山陽町西中222

印刷 西尾総合印刷株式会社  
岡山県岡山市津高651

---

